ネギま！　～イリア・スプリングフィールド～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！　～イリア・スプリングフィールド～

【Ｎコード】
Ｎ６５２４Ｖ

【作者名】
桜楼月華

【あらすじ】
ネギの妹として産まれたイリア・スプリングフィールド。なるべく原作崩壊しない程度に！　キャラ崩壊は不可抗力！
そんな作者だけど、どうか見てくれると嬉しいです

始まり

「あ～、だる～」

ボクは今、湖の近くに生えてる木の上でうたた寝をうってたりする。

それと言うのも、ネギのせいだ。ネギというのは、ネギ・スプリングフィールド。ボク様ちゃんのお兄ちゃんってところだね。

お兄ちゃんって言っても双子なんだけどぉ……まぁ、全っ然似てないね！

ていうか、もうネギはすっっっごく嫌い！　だし！　だって服脱がすんだもん！

まぁ、それは良いとして。ボクは白に近い銀髪に紅～い目をしてたりするけど、ネギはボク等のお父さんである戦争の英雄『千の呪文の男（サウザントマスター）』と瓜二つ。というか、おかしいのはボクの方かな？　親に似てる所が一つもないなんて、ボク様ちゃんの遺伝子すっげ～！

んで、何があったかと言うと……まぁ、そのネギが父親は正義の味方だ～って言って聞かなかったんだよね～。ボクから見た父親はただの殺人者だって言ったら怒っちゃって……。

それで、そのまま口喧嘩。

そしてその喧嘩の途中に、ネギのくしゃみと言う名の武装解除で村の大衆の前で裸体を晒されて……。そのまま羞恥に負けてここで不貞腐れてたというわけなんだよ～。

う～ん、でもさすがにそろそろ戻ろうかな～。ネカネちゃんも心配するだろうし。

それに……な～んか、嫌な予感がビンッビンするんだよね～。

～イリアＳｉｄｅＯｕｔ～

～三人称～

イリアが村に着いた時、そこは火の海だった。
なんお比喩でもなく、火の海だった。
家は焼け落ち、木々は燃え盛り、人々は石と化していた。

悪魔の仕業だというのは、すぐに検討が付いた。

「ボク様ちゃん、久しぶりに怒りが天頂に達したかも」

イリアの目にはさっきまでののんびりした空気はなく、村人を石化させた悪魔への怒りに満ちていた。
イリアの力を村人は知らない。
隠していたからだ。頭がよく回るイリアは自分の力は人を殺めるものでしかないと悟っていた。

その力とは「投影魔術」。※能力の参照はＦａｔｅを見てね☆

イリアの知っている武具はほぼ完璧に複製させる。例え、それが神話の物であろうと、だ。
見なくても想像で全てを作り出してしまう。ある意味、頭の中にもう一つの世界があるのだ。想像力、記憶力を競えば、イリアの右に出るものはいない。

そんな訳で、イリアは丈夫な細い剣を両手の指の間に三本ずつ投影。それを身体をバネにして矢のように撃ちだした。純粋な投擲攻撃。それでも、その破壊力はとてつもないものだった。
目に見える悪魔を殲滅していく。
そして、そんな中で見つけた石像があった。
それはイリアと仲良くしていた四十代のおじさん。さっきまで村で笑っていた人の一人だ。

（さっきまで、ボク様ちゃんの醜態見てて呆れ笑いしてたのに……。一緒に笑って楽しんでたのに……。なんで、こんなことに……。もう怒ったもん！）

投影。投影。投影。投影。
頭の中でイメージを膨らませる。
そして只々撃ちだしていく。

それは、剣を撃ち出す要塞にも見える。だがそこにいるのは間違いなく子供の姿。
ある意味、不気味な光景だった。

しかし、物事には限界がある。
投影は一応魔力を使った能力。いつまでも使っていられるはずもない。
怒りで頭に血が上っていたとしても、これはイリアのいつもの判断とは言えなかった。
性格はちょっとアレだが、一応冷静に場を見る事ができるイリアとは、とても思えなかった。

思わず、両膝をついた。息は途切れ途切れ。酸素を求めようと肺が必死になっている。

「もう、そこまでみたいだね？　お嬢ちゃん。悪いけど、石になってもらおう」

イリアの前には、一体の悪魔がいた。

（もう、ダメ……。投影する魔力も体力も残ってない……）

イリアが諦めた、その時。

――ドガァァッァァアアン！

何かが吹き飛ぶような大きな音。

見ると、そこには何も残っていなかった。ただ、攻撃だと思われる傷跡を地面に残して。

しかし、こんな大きな魔法を使える魔法使いはこの村にはいない。

「……誰？」

「よっ。お前がイリアか？　……ッハハ！　ネギと同じで、あんまり俺と似てねえな。……いや、全然似てねえか？　なんにしろ、大きく育ったみたいだな」

イリアの頭をローブを被った男は、ぐしゃぐしゃと撫でた。

（……嫌な感じは、しないかな）

嫌どころか、もっとしてほしいとイリアは思った。

「おし、じゃあネギの所まで戻ろう。ネカネもそこにいるからな」

そう言うと、ローブを被った男はイリアを抱いてどこかへと向かい飛び出した。

始まり（後書き）

どうだったでしょうか。

まぁ、感想とか頂けると嬉しいです。

先生

～イリアＳｉｄｅ～

やっほ～！

みんなのアイドル、イリアちゃんも遂に魔法学校を卒業することになりました～！　はい拍手～！

いや～、時の流れとは速いもので……。ボクももう数えで十歳だよ～。歳を感じるネ！

それで立派な魔法使いなんていう自分勝手な正義語っちゃってる奴等になるための修行なんだけど～……。なんとネギと一緒に日本で先生をやることになっちゃいました！

……思わず突っ込みたくなる修行内容ですな～……。

そんな訳で、もう日本にいたりします。

ネカネちゃんにお別れ言ってネギと一緒に来たんだけど……ネギったら、早速電車内でくしゃみをぶちかましてくれやがりましたよ～。全く、妹として恥ずかしいですな！　ボクも服が脱げそうになって危なかったけど。

しかも、この薬味。もうすぐ職員室に着くって時にもやらかしてくれちゃいました！

なんとツインテールのお姉さんに「失恋の相が出てますよ」なんて言ったり、そのお姉さんの服を脱がしたりしちゃってます……。

その際、ボクの服も脱げそうになった。本日二回目である。

ちなみに、ですけど。ここ数年でボク様ちゃん最強になっちゃっ

たよ～～！！
まず投影魔術！　あれを完璧に使いこなせるまでの魔力を手に入れました！
更に、魔法も結構扱えるようになりましたよ～……。
得意なのは氷系と闇系。なんか、噂に聞く悪の大魔法使いに似てるね。
まぁ、強くなれるならそれでいいけど～。
他にもいろいろ、うん、結構いろいろ頑張った！

そんな訳で今は学園長室にいます。それと言うのもネギの所為。
ネギがお姉さんに余計なこと言わなければ良かったのに……。
思わずため息が漏れちゃうよっ。ホントにも～……。

「そうじゃ、アスナ君と木乃香。ネギ君とイリア君を君達の部屋に住ませてくれんかのう？」
「い、いやですよ！　こっちの女の子ならまだしも……こんなガキ！」
「そ、そんな～……」
「わ～い！　アスナちゃんやさすぃ～！」
「わわ!?　だ、抱きつかないでよ！」
「ほぅほぅ……意外と大きいですな」
「わひゃぁあ!?　ど、どこ触ってんのよ！」
「いいではないかいいではないか～！　女の子ど～し、仲良くしようよ～！」
「あはは、かわええな～、ネギ君もイリアちゃんも」
「木乃香ちゃんも十分可愛いよ！　大和撫子だね！」
「いややわ～。煽てても何も出ぇへんよ？」
「ボク様ちゃんは嘘をつけないから、安心しなよ～」
「てかアンタはいつまで揉んでんのよ！」

「いたっ！　な、殴ったね？　親父にも殴られたことないのに～～！」
「だ、だから抱きつくなあ！」
と、アスナに抱きついて、モミモミ～してるとネギが顔を赤くしながら学園長に提案をした。
「ぼ、ぼくはタカミチの部屋に住ませてもらうっていうのはどうでしょう」
あ、タカミチって言うのはボク様たちの父親の友達なんだってさ！ボクは親交は無かったけど、ネギはいつの間にか友人関係を築いていたらしいよ。
薬味のくせに。
更に言うと、先程のアスナの服を脱がした時にタカミチがいたのは悲しい事故。うん、ボクは脱げなくて良かった……切実に。
「え～、でもタカミチにすっっっごく迷惑掛かるよ～？　いいの、アスナちゃん？」
「うっ……わ、分かったわよ！」
この数十分で気付いたことは、アスナがタカミチのことを好きだってこと。
外見もう五十近いけど……あれで三十代らしいよ？　凄いね！
そんな人を好きになるアスナも凄いね！

「それじゃ、ネギ先生、イリア先生。ここがあなた達が担任するクラスよ」

しずな先生っていう優しい女性教員に連れられやってきたのは２－Ａのクラス。

渡されたクラス名簿を見る限りじゃあ、アスナちゃんと木乃香ちゃんもこのクラスにいるみたいだね！

楽しくなりそうだ～。……薬味は緊張しまくりって感じだけど。

ていうか、なに？　この罠の量。

まず第一に黒板消しトラップ。次にワイヤーを使った大量の罠が……。

仕方がないなぁ。

「お兄ちゃん、先に入って」

「え？」

「いいから！」

お兄ちゃんは犠牲になったのだ！　という感じで。

うん、見事に引っ掛かりましたよこの薬味。

ていうか！　魔法障壁くらい消してよ！　ホントに一般常識が欠けてるんだからぁ……。

まぁ、ワイヤートラップは見事に全部ハマったけどね。

「え、ええと。２－Ａの担任になることになりました。ネギ・スプリングフィールドといいます。よ、よろしくお願いします！」

相変わらずネギは硬いなぁ……。

「やっほーい！　君達の副担任になったイリア・スプリングフィールドだよっ！　楽しく過ごせればいいなーって思ってますっ！　これからよろしく！」

う～ん、ちょっとテンション上げすぎたかな？

「「「か」」」

「ん？　か？」

「「「かわいいいいいいいいいい！！！」」」

「わわわ？！」

「うひゃ～！　おしくらまんじゅうみたい！」

正におしくらまんじゅう。寄って集ってボクとネギに抱きついてくる。

ふぉぉぉ……。この感じはくせになるかも。

多くの女性に抱きついてきたボクだけど、ここまで大きな胸に囲まれたのは人生初だよ！

あ、イケナイ！　思わず涎が！

でもその後の質問タイムは本当に大変だった……。

早い。何が早いかと言えば時間が早い！

もう放課後だよ！　ボク様ちゃん、ちゃんとこの時間に生きてるよね？　なんか次元が歪んでる気がしてならないよ！

更になんかパーティーやるんだってさ！

いいよ～！　ボク様、こういう楽しいこと大っ好きだもん！！

「ほほぅ……那波ちゃん、あなたどこかで覚醒しました？」
「あら、どういうことかしら？」

いや、だってほら。胸。絶対それ中学生の胸じゃないよ！
ボクにも頂戴よ！　その胸を！
毎日毎日牛乳を飲んで頑張ってたらおじちゃんに「それは太るだけ」と言われた時の悔しさは忘れてませんよ、ええ。
そんなことを経験したボクだから分かる。この胸は異常だと！
と、いうわけで。

「揉んでやる～～～！！！」
「きゃっ！？」

あ、そうそう。このクラスいろいろおかしいよ？
なんか真祖の吸血鬼、噂の悪の大魔法使い。闇の福音なんて言われて魔法世界じゃナマハゲ扱いの人がいます。これだけでも十分失神ものなんだけど～……。
なんと幽霊までいますよ。更にロボットまでいる！
おかしいでしょこれ！

まったく……まるで分からないよ。あの後頭部が長い学園長の考えてること。

パーティーも終わって、寮へ帰ってきました。
帰ってきた、という表現でいいのか、なんていう細かいことは気にスンナ！

「イリア。ちょっといいかな？」
「ん？　なに？　遂にえっちぃことする気になった？」
「ち、ちが！　何言ってるんだよイリア！」

もう、ネギは冗談と言うものが分かってないな～。
あれ？　なんで木乃香とアスナも固まってるの？

あ、そうそう。木乃香とアスナっていうか、クラスの皆からなんだけど、ちゃん付けは恥ずかしいから呼び捨てにしてくれって頼まれちゃった。
う～ん、なんで恥ずかしいんだろう。謎だなぁ。

「それで？　なに？　お兄ちゃん」
「うん、あのさ。ごめん」
「ん？　何に対してのごめん？」
「いや、その……ほら。何回か服を……」
「あー……って今更謝られてもなぁ……」
「あう……」

思わず苦笑する。
改まって何を言うのかと思ったら。

「そんなの、もう慣れちゃったよ。お兄ちゃんとは昔一緒にお風呂入ってたくらいだし」
「そ、それだってもう数年前の話だよ？！」
「え～、なに～？　数年前のボクより今のボク様ちゃんお体に興味あったりするの～？」
「そんなこと言ってな……ハ、ハ……」

あ、ヤバイ。嫌な予感が……「ハックショッン！」

「お兄ちゃん……えっち！」
「ぶぎゃ！？」

服が！　また服が！　本日三回目の脱げそうかと思ったら脱げた！　もうお嫁にいけない！
とりあえずビンタ。ビンタビンタビンタ！　只管ビンタァァァア！

「い、イリヤちゃん。そろそろ止めんと、ネギ君死んでまうえ？」
「え？　あ、お兄ちゃ～～～ん！　死んだらダメ～～！！」
「なんだか一気に騒がしくなったわ……」

ん？　どしたの、アスナ？
なんか今にもキレそうな雰囲気だけど……。

「まぁまぁアスナ。楽しいことはいいことやえ？」
「……ふん、別にいいけど」

その際、木乃香と密かにグッドサインを交わしてたりする。

……今日から楽しい日々になりそうです。

仮契約

ネカネちゃん。事件です。今日の朝から事件です。
ネギがボクを抱いて寝てます。ネカネちゃんの代わりですか、ボクは。

「お兄ちゃん、起きてよー……」

ここソファだから二人で寝てるとかなりキツイんだよね。息苦しいくらい。
う～。この薬味。どうにかして退かさないと……。

「あ……あ……あんたら」
「ん？」

なにやら声が……と思って二段ベッドの上を見ると……。

「あんたら兄妹でなにやってんのよ～～～！！！」

アスナの怒声が響き渡りましたとさ。
いや～、そんなことボク様ちゃんに言われてもなぁ。

「そんなこと言ってないでお兄ちゃんを退かすの手伝ってよ～……」
「あ、お、起きてたの？　ご、ごめん。……ほらネギ！　さっさと起きなさいよ！」
「んー……。あれ？　お姉ちゃん？」

「ぶっぶー！　ボク様ちゃんは妹ちゃんだよ。ネカネちゃんと間違うなんて……ぷんぷんだよ！」
「え？！　あ、イリア！？　ごめ！」
「まったくも～。やっぱボク様ちゃんの身体目当てなの？」
「ち、違うよ！　ここ来る前までお姉ちゃんと一緒に寝てたから……その……」
「やっぱりガキ！」
「ア、アスナさ～ん……」
「って、もう五時じゃない！　もう、行かなくちゃ！　木乃香、その二人よろしく！　行ってきまーす！」

うん？　アスナ、どこに行くんだろ？

ていうか何時の間に起きてたの？　木乃香。
まぁいいけど。

「ああ、ネギ君もイリアちゃんも知らんかったな。アスナはバイトしてるんよ。新聞配達のバイト」
「へ～……」

「それよりご飯作ろうよ～、木乃香！」
「うん、ええよ。ほな、今日は目玉焼きでも作ろうか？」
「うん！」

実はボク、木乃香に料理教わってたりします。
昨日の夜ご飯のときすっごく美味しかったからさ、教えてもらおうと言うわけでっす！

「イリア・スプリングフィールド先生。ちょっと相談があるのでよろしいでしょうか？」
「んー？　いいよー」

教室に入ってすぐに話しかけてきたのはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。闇の福音と言う名のナマハゲですね、分かります。

そのまま屋上へ連れて行かれ、「うわっと！」魔法の射手を撃たれました。いや、なんで？

「うー、いきなり何するの～……。貴女の様な吸血鬼相手に戦えっていう相談なら、その答えはＮＯだよ～？」
「ふん、なに。貴様がどれだけ“できる”のかを見ただけだ。三年になったら、あのぼーやも試すしな」
「へぇ～……。ねぇ、エヴァンジェリンさん？　知ってます？　ボク様ちゃんが得意とすること」
「む？」
「ラスト・マイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　闇の精集い来たりて敵を貫け『魔法の剣　闇の十七振り』」
「なっ……！？」

ボク様が得意とすること。ボク様はオリジナル魔法を作ることが何よりも得意。それと言うのも、この頭脳ちゃんのおかげなんだけど……。
これは魔法の射手を改良させたものなんだよね～。まだ完璧じゃないし、十七振りまでが限界。
でも完成すれば、そこらの魔法使いが放つ魔法の射手を軽く凌駕

する速度と攻撃性を兼ね揃える究極の基本的攻撃魔法になっちゃったりするんだよね～。

「ふふん、さすがにエヴァちゃんも、これには驚きみたいだね～」
「っは、面白い。では、戦いへと「それは嫌だよ～」……なに？」
「これはボク様ちゃんの実力の一端を見せただけ。これで驚いたなら、闇の福音も大したことないんでしょ？」

う～ん、ボクって意外と悪役得意？
こんなに簡単に挑発できるなんて思いもしなかったよ～。

「貴様……良かろう。明日私のログハウスに来い」
「ボク様ちゃんに拒否権は？」
「あるわけないだろう。もし来なかったら、生徒全員に貴様が魔法使いだとバラすからな」
「闇の福音がそんな陰湿な嫌がらせめいた脅迫していいの？」
「うるさいわっ！　とりあえず明日来いよ。ほら、教室に戻れ。教師がサボタージュという訳にもいくまい？」
「う～ん、それもそうだね。エヴァにゃんも偶には授業に顔出してね～」
「誰がエヴァにゃんだ！」

そう言って、ボクは教室に戻った。

～エヴァＳｉｄｅ～

「アイツ……ふん、さすがあのバカの娘と言うことか」
「どうされました？　マスター」
「いやなに。あの飄々とした態度……。あれは何らかのフェイクだ。

あの本性は……」

全く、とんでもない奴がここに来てしまったものだな……。
あのオリジナル魔法。攻撃にだけ特化させてあったな……。
何を企んでいる？　イリア・スプリングフィールド。

～イリアＳｉｄｅ～

「お兄ちゃん？　なにしてるのかな？」

ボクが戻った教室では笑いが起きていた。
入ってすぐにいた千雨に聞いたら、どうもネギがアスナを笑い物にしたって言うじゃ～ありませんか。

「え、えっと、イリア？　ど、どうしたの？」
「どうしたの？　じゃないよ。お兄ちゃん」

ボク、今きっと笑ってるよ。
それも冷たい笑みだと思うけど。

「アスナ？　アスナはちゃんと答えようとしたんだよね？　英文」
「う、うん……」
「答えようと努力した人を侮辱するほど愚かな行為はないと思うな～。ね、お兄ちゃん？」
「イ、イリア……顔が怖いよ」
「うるさいな～。今のお兄ちゃんの立場を考えなよ～。先生でしょ？　そしてここはどこ？　学校だよ～？　学校は学ぶ所。だから分からないことがあって当たり前、だよ～？　ねぇ、お兄ちゃん？　分かった？」

「う、うん。分かった」

ぶんぶん、頭を縦に振るネギ。まぁ、いっか。
このまま怒ってたらボク様ちゃん怖い教師ランキングナンバーワンになっちゃうからね。

「じゃ、授業続けていいよっ」
「うん……じ、じゃあ。いいですか？　ここの英文は……」

うむうむ、始めからそうやって教えてれば文句も何もなかったんだよ？
帰ったら、お仕置きしなくちゃね。うん、お仕置き……。ふふ。

ネギのお仕置き（内容は秘密、だよ？）を終えて次の日。
学校は休みの土曜日だけど……。

「なんというか、すっごーい」
「なんだ、その棒読みな驚き方は」

いやー、思わず棒読みになっちゃいました。
だって見てこれ！　南国！　海！　日差し！　お肌がーっ！

「ここでの一日は外での一時間。ああ、これを付けておけ。成長を止める魔法具だ」

そう言って渡してきたのは綺麗なブレスレット。

「おー！　エヴァさんって意外と優しい？」
「同じ女性としてだな……私は良いが、お前は成長するわけだし。老いるのは嫌だろう？」
「胸がボンってなるなら嬉しいですけど……」

そんな会話をしていると、ドンッドンッドンッと言う妙に大きな音が私の足元に……。

「エヴァさーん。急に攻撃しないでよ～！」
「ここに来た意味を忘れたか？　ほら、動かないと当たるぞ？　『魔法の射手・連弾氷の五十四矢』！」
「多っ！！　う～、仕方ない。怒りの鉄槌　怒涛の吹雪　闇より来たる断罪の刀身　生えろ！『氷剣』！」

詠唱を済ませると、砂浜から幾十の氷の剣が突き出る。
これを盾にするのは、あまり好きな戦いじゃないんだけどね……。

「今度はこっちから仕掛けるよ～～！　う～！『顕現　氷の女王』！！」
「ほぅ……魔力で氷の巨人を作ったか」
「ふふ。ただの巨人じゃないけどね～」

エヴァはその巨人を叩き斬ろうと『断罪の剣』を振りかざす。

「っふ、『爆砕』！」
「なっ？！」

おや？　何を驚いてるの、エヴァちゃん。
それはボク様ちゃんが作り上げた魔力物体。それを爆砕させることができるのだって、当たり前のことだよ？

「くっ！　……！？」
「『氷結』」

そしてそれを再び凍らすのも、ボク様の自由だよ。エヴァにゃん♪
氷の中に閉じ込めるのも、容易いものさ。
と言っても、これくらいで何とかなる相手じゃないけどね……。
すぐに氷の女王を砕いて出てくるエヴァ。
どうも喜んでるように見えるけど……。

「ふはは……素晴らしいぞイリア！　まさかこれ程とは……。正直恐れ入ったよ！」
「いや～、それ程でもないよ～」

そう言いつつも、笑みを絶やさない。
笑みを崩したらボク様の本当の姿が映っちゃうからね～。

「ふふ、まだまだ～！　『魔法の剣　連弾・氷の十七振り』！」

氷で出来てる剣をエヴァに向かって放つ。
スピード、パワー。共に文句なしだよ～ん。

「ふん、『氷盾』！」

あややや……普通に防がれちゃったか～……。
……ん？

「くっ……まさか、一本だけでも私の腹に突き刺すとはな……」
「へへ、これでボク様の実力は分かったでしょ～？　そ・れ・で？
まさか本当に戦うためだけに来たわけじゃあないよね？」

「ほぅ、真意には気付いていたか。いやなに、私はお前を初めて見たときから結構気に入っていてね。これで実力があれば、私の従者の一人にしようと思っていた訳さ」
「なるほろ～」
「で？　従者になってくれるか？」
「う～ん、どうしよっかな～」

はっきり言って、エヴァさんがマスターになるのは好ましい。
でも、このことを自称正義の魔法使い達が知ったら面倒事になりそうだし～……。
ま、いっか。
適当なこと言って誤魔化せばっ。

「よし、いいよ～。従者になってあげる！　それで？　仮契約でも結んじゃう？」
「積極的だな……。まぁ、そうだな。一番簡単なやつでいいか」

一番簡単なヤツ……。
ああ、キスか。

「それじゃ、さっさと済ませよう」

エヴァさんがそう言うと、地面に小さめの魔法陣が……。
ボクは初めて見るなぁ。仮契約の為の魔法陣。

「ファーストキスが同性とはねぇ。うん、まぁ、いいよ！　エヴァちゃん大好きだからー！」
「ええい！！　だ、抱きつかんでもふむぐっ！」

とやかく言われる前に唇を塞いじゃおう！　ということで仮契約

！！

……。

……。

……。

……。

「ぷはっ！　長いわ！！」

「いった！　叩かなくてもいいじゃーん！」

ということで、ボク様ちゃんはエヴァちゃんの従者になった。

どっちかと言うと、ボク様がマスターになりたかったんだけどねぇ。

糾弾

それから、数日が過ぎた。
かなり過ぎたね。うん、もう期末試験だよ。
この数日が大変だった。
ネギがホレ薬作ったり、ネギが高等部の人達を脱がしたり。
これまでに私も何回か脱がされました。
いい加減魔力の制御できるようになってよ～と思う今日この頃です。

そして、新たな面倒が舞い込んだりしてるんだよね～……。

「この妖怪！　白状しなさ～い！」
「ふぉ！　何事じゃ！？」

学園長室に殴りこみする勢いで入りこむ。

「何事じゃ！　じゃありません！　さすがのボク様ももう見てられないよ！　お兄ちゃんと数名の生徒をどこにやったんですか？！」
「そ、それなら安心せい。ネギ君たちは図書館島で勉強会を開いておるんじゃよ。ほら、最終課題、知っておるじゃろ？」

確かに、ボクはボクとネギに課せられた最終課題を知っている。
期末試験。最下位を脱出。
ボクが知ってる限りの皆の成績からしてかなりの難題。
でも、だからって……。

「もう、分かったよ……。じゃあ、交渉しよう！」
「む……？　交渉、じゃと？」
「うん、交渉。お兄ちゃんやボク様は好きにしていい。けど、エヴァちゃんの呪いを解除してくれないかな？」
「な……なんじゃと？」
「今すぐがダメなら、ボク等の修行が終わってからでもいい。でも、呪いを解除した後の彼女には一切の干渉を許さないから」
「……イリア君、まさか……解けるのか？　あの呪いを」
「うん、ボクはそういう魔法が大の得意なんだよ～」

嘘だけど。
でも、あの呪いを解けると言うのは本当だよ～？

「……分かった。良かろう。君達の修行が優先じゃ」
「よし、じゃ、これで『交渉成立だね』」
「……今のは」
「言霊を使った強制文みたいなものだよ～。これでこの交渉は絶対守られる。何があろうと、どんな運命が待っていようと、ね。それじゃあ、失礼するよ、おじいちゃん」
「むぅ……」

何やら難しい顔をしてたけど……ま、いっか。

そしてテスト。
あり得ないことが起きましたよ。
なんと、あの２－Ａが学年トップの成績を出しちゃったよ。
人為的で作為的な物を感じてならないんだけど……。

そんなこんなで、春休みも終わりを迎え、三年。
教育実習生ということになっていたボクとネギは正式な教員になって、３－Ａの担任と副担任になった。

「「「三年！」」」
「「「Ａ組！！！」」」
「「「ネギ先生ーっ！イリア先生ーっ！」」」

え、なにこのノリ。
人という字の成り立ちを教えればいいんですか？　そうなんですか！？

「テンションが高いな」
「うん？　そだね～」

ボク様は今エヴァにゃんの隣に立ってたりする。
ていうか、エヴァにゃんに「従者なら私の近くにいるのが自然の摂理というものだろう？」なんて言われたからなんだけどね。
まぁ、副担任としては黒板の近くにいたいんだけどぉ……。
こっからでも生徒の雰囲気とかは分かるからね。分からない所がある時は教えに言ってもいい、というエヴァさんからの許可も得てますから。仕事に支障はなし、です！

それにしても……

「エヴァさん？　なんでお兄ちゃんをそんなに睨んで……？」
「んー？　この前言っただろう？　三年になったらぼーや も試すっ

て」
「ああ、その味付けみたいなもの……？」
「そうだ。さっさと力の程を試したいからな」
「あんま過度な期待はしないことをおススメするよ～？　ボクとしては」
「そんなの分かってるさ。お前と違って魔法の秘匿もできてないしな」
「ボクなんか気配とかも誤魔化せるからね～」
「ああ、まったく……私はお前が怖いよ。歩き方まで一般のそれに似せているところなんか、特にな」
「雰囲気を隠すのは最も大事なことで最も基本的なことでしょ。有名になっちゃったエヴァにゃんには関係ない話、だけどね」
「……雰囲気を隠すことは、最も大事なことで最も基本的なこと……それに加えて言うならば、最も難しいことでもあるんだがな……」

そんな話をしていると、ネギが「脱いでください！」って言ってたり……。
いやいや、いつからそんな変態になったの？

「あわわ間違ったー！」

顔を赤くしながら出て行っちゃった……。
間違ったって、何を間違ったら「脱げ」なんて言えるのかな？
後で聞いてみよう。

「身体測定……？　ああ、そういえば職員室で言ってたっけ。ボクもクラスの皆と受けちゃってくださいって言われてたの忘れてた……」

ということで、脱がなくっちゃだね～。

あ、ヤバ。
クラスの皆の胸を今すぐ揉んでやりたい衝動が……。

いえいえ、そんなことしませんよ？
ボク様ちゃんは先生ですからね！
う～……でもやっぱり胸が……。

そう気にしながら服を脱いでいると、クラスの皆が獲物を見つけた様な目でこちら……。

「あ、あまり見ないでよ～……む、胸とか気にしてるんだから～……」もじもじ。

「「「か……」」」

……なんだろう。
デジャブを感じる。

「「「かわっいぃっいいい！！」」」

「なにその肌の色！？　白！！」
「や～ん！　羨ましい～！！」
「どうすればこうなるの～！！」

いや、離れて。落ち着いて。
ボクを人形みたいに軽く持ち上げないで。
ていうか肌をぺたぺた触らないで。くすぐったいよ……。

「う～、ボクだけじゃなくてエヴァちゃんも肌真っ白だよ！！」

そう言うと、ボクの身体に触れていた人達は皆エヴァちゃんの方を見て、目をキラーンとさせた。

「うっ……？　き、貴様！　私に押し付けるなぁぁあ！！」

へっへっへ。

エヴァにゃんは犠牲になったのだ！

ということで、さっさと身体測定して服を着てしまおう。うん、それがいい。

身体測定の時、まき絵が桜通りで倒れていたと報告があった。

ネギもボクも、先生としては見逃せない。

いや、なんとなく分かってるんだけどさ。どうせ、エヴァちゃんの仕業だってことは。

だって保健室に寝てるまき絵ちゃんからエヴァちゃんの魔力感じれたし。

どうもネギはそこら辺分かってないみたいだけど……。

「エーヴァにゃーん！　ダメだよ～？　生徒に手ぇ出しちゃあ」

「ふん、なに。少し利用させてもらうだけさ」

「もう、そんなこと言って～……。自分のクラスメイト、大事にしなよ？」

エヴァは顔を背けてしまった。

あ～……アレかな？　もしかしたら登校地獄のことを気にしてるのかな？

う～ん、どうしよう。あの交渉の内容。エヴァちゃんに話した方がいいのかな？

「十歳の子供がパートナーになるなんて、嫌ですよね」
「はいはい、お兄ちゃん。なに言ってるの。さっさと授業！」
「あ、ご、ごめん……」

桜通りの一件から数日後。
エヴァちゃんになにをされたか知らないけど、お兄ちゃんは授業に身が入っていない。

「はぁ……」

サボタージュ中のエヴァちゃんに念話でもしておこうかな～。
お兄ちゃんが重症です、って。

そんなある日。挙動不審に物陰に隠れながら何かを見張っている様なお兄ちゃんとアスナを発見。
あれ？　お兄ちゃんの肩の上に何か乗ってる……？
あの白くて長いのは……。
いつの日かの淫獣……！？

「ふ……ふふ……良くもまぁボク様ちゃんの目の前に堂々と姿を現せたね……。ふふ……ふふふふ」

今のボクは多分、外から見れば薬をやってる子供に見えるのでしょうか。
それでもこの笑みは止められない。
ふふふふふ。
あ、そうそう。最近はエヴァちゃんのログハウスに泊ることが多いから、お兄ちゃんに脱がされることがなくなりました。外で脱げるのは仕方ないと割り切るしかなさそうだけど……。
そんな訳だから、お兄ちゃんの身の回りでなにが起きてるかが分からないんだよね～。
まぁ、茶々丸とかエヴァちゃんに膝枕させて貰ったりして至福の時間を過ごしてるから別にいいんだけど。チャチャゼロは逆に膝に乗せたり頭に乗せたりすることが多いけどね～。人形だし。

「あれ……あれって、ヤバくない？」

いつの間にか、お兄ちゃんとアスナが茶々丸の前に立ちふさがってる。
しかもアスナとお兄ちゃんは仮契約を結んだ御様子。
アスナを身体強化させてお兄ちゃんは後ろで詠唱を唱えている。
アレは……魔法の射手？
あの近距離でそれはないよ……ちょっと、お仕置きが必要だね。

～茶々丸Ｓｉｄｅ～

速い……。
一般人だと思って侮っていました。
身体強化をしたとは言え、これは素人の動きではありません。

それに攻撃（でこぴん）もなかなかの威力。
普通の人なら、頭が？げてもおかしくないでしょう。

「『魔法の射手　連弾・光の十一矢』！」

至近距離での追尾型魔法。回避不可能。
防御行動。間に合いません。

「すいませんマスター。私が動かなくなったらどうかこの子たちのお世話を……。そして、イリアさん。どうかマスターをよろしくお願いします」

諦めてそう呟いた時だった。
私の目の前に銀色に煌めく仔猫の様に小さなナニカが立ち塞がった。

「ダメだよ～茶々丸？　諦めたら試合終了、だよ♪」

～イリアＳｉｄｅ～

「ラスト・マイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　『顕現　氷の女王』」

ちょっと小さめの氷の女王を顕現。
十一矢全てを叩き落とす。

「い、イリア？　どうしてここに……」
「な……！？　イリアの姐さん！？　まさか真祖の仲間入り……！

？」
「う～ん、質問としてはボク様からしたいな～。で？　な～にしてんのさ」
「なにって……真祖と戦うには従者は邪魔だろ？　それを叩き潰しにかかってんだよ！」
「それはホントなのかな？　お兄ちゃん」
「う、うん……」

「ふぅ、ん。そうなんだ」

空気が一気に冷え、凍る音がした。

「で？　お兄ちゃんはその淫獣に乗せられてヒトゴロシをするつもりだったの？」
「そ、そんな人殺しだなんて……！」
「あ～、そうだね。茶々丸、ロボトミーだから体なら替えが効くかもね。でもさ、もしさっきの攻撃が茶々丸の記憶と人格を構成する部分に当たって破壊されてたらどうなんのかな？」
「え……？」
「そうなると、もう茶々丸は茶々丸じゃなくなるんだよ？　ああ、これはヒトゴロシじゃないね。人格破壊者。ヒトゴロシよりも性質が悪いね～」

ネギの顔が蒼ざめていく。
それを確かめながら、ボクは続ける。

「ふふ、英雄の息子と期待されてきたからかな？　お兄ちゃん、いやネギ。間違ってるよ？　魔法がなんなのか。どういうものなのか」
「どういう意味……」
「すぐ誰かに頼らないでよ。甘えないで。もうちょっと自分の頭で

考えて。そして思い付け、天才」
「魔法がどういうものなのか……。誰かを助けることができる便利なもの……。それ以外に答えがあるの!?　僕は無いと思う」
「じゃあ、さ。魔法をこう使ったら、魔法はどんなものになるのかな？　（茶々丸、ちょっと手荒な真似になるけど、いい？」
「（はい、構いません。その代わり、後で膝枕をしてください）」
「（んー？　なんで？）」
「（イリアさんを膝枕していると何故か癒されるのです）」
「（そっか。分かった、いいよ）ラスト・マイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　氷の精来たりて敵を斬り伏せろ　『魔法の剣　氷の一振り』」

ボクの手に、氷の剣が一振り握られる。
冷た……。
いや、そんなの気にしてられない。
今はお仕置きしてあげなくっちゃいけないんだから。

「ほら、ネギ。これを茶々丸の頭に突き刺したらどうなるかな？」

そう言いながら剣を茶々丸に向けて振りかざす。

「な、なにしてんだよイリア！　そんなことしたらダメだよ!」
「あれ？　ボク様ちゃんはネギのやろうとしたことを違う魔法で再現しただけだよ～？　へ～。自分のやったことは棚に上げて、誰かが人を殺そうとすると『悪だ』って叫ぶんだ？　ああ、そだね～。それが典型的な『立派な魔法使い』だったね。ごめ～ん、そしてありがと。立派な魔法使いのあるべき姿を思い出せたよ」
「あ……ああ……」
「イ、イリアちゃん。なにもそんなに言うことないでしょ!?」
「そうだそうだ！　兄貴は命を狙われてんだ！」

「アスナはネギを庇う資格はないよ。それどころか、ネギと共に糾弾されるべきだと思うよ」
「え……」
「それと淫獣。知ってる？　真祖の吸血鬼。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルのこと。ちゃ～んと理解できてる？」
「り、理解できてるとも！　アレは何百年にも渡って人殺しをしてきた悪の大魔法使いじゃねえか！」
「それだけ？」
「え……？」
「それだけしか知らないのにエヴァちゃんを理解してるって言ったの？　アハ、ごめん。思わず笑っちゃうよ。はは。エヴァが人を殺してきた理由も知らないで良く理解したなんて言えるね？」
「……」
「う～ん。そうだねぇ。例えばだけどさ。密室殺人事件の話の小説があったとするでしょ？　その密室殺人事件の内容を理解するには最後の『誰が犯人なのか』を読めば簡単だね。でもね、それは完全な理解じゃないよ。その密室殺人のトリック。動機。その事件を起こすための伏線や下拵え。それらを理解して初めて『完璧に理解した』ことになる。カモミール。君はただの理解だよ。結果だけを求めた自称正義の魔法使いと同じ考え方。偽悪を悪と決め付け偽善を善と決め付け、時には善すらも悪と決め付ける傲慢な奴らさ」

今度はネギの顔が赤くなっていくのが分かる。
自分が目指してるものをバカにされればこうなるのも普通、かな。
でも目指すからにはその目指すものをきちんと理解する必要があるんだよ。妹であるボクがちゃんと教えなきゃ、だね。
周りの大人は元老院とかの忠犬みたいなものだし、なにより、英雄の息子として目指す道を一つにしてしまった。そんな大人の言葉遊びに踊らされてたらお兄ちゃんはお兄ちゃんじゃなくなっちゃう。
ただの、道具に成り下がっちゃう……。

「いい？　お兄ちゃん。立派な魔法使いのあるべき姿。……ちゃんと理解した方がいいよ。あ、それとね。エヴァちゃんだけど、あれは周りの種別に対する差別からエヴァちゃんを殺そうとしてきた人達を返り討ちにあわせてきただけだから。死んだ人たちはそれまで。ただの自業自得なんだよ。更に言っちゃうけど、お兄ちゃんに命の危険は無いと思うよ？」

「な、なんでそんなことが言えるんでい！」

「だから～、カモミール。エヴァちゃんのことちゃんと調べなよ～……。ま、いっか。特別に教えてあげる。エヴァちゃんはこれまでに女子供を殺したことがないんだよ」

「え」

「ね？　これだけで理由は十分。それじゃ、ボク様ちゃんは仕事があるから。帰ろ、茶々丸」

「はい、イリアさん」

「あ……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

後ろから聞こえたネギ……いや、お兄ちゃんの声。胸が苦しい。妹に糾弾される程悲しいことはないと思うから。

泣きたくなる。

何もかもあのアルベール・カモミールのせいだ……。

後は周りの大人たち。

「？　イリアさん。どうされましたか？」

ん？　ああ、いろいろ顔に出ちゃってたみたいだね……。

「ううん、なんでもない。さ、早く帰ろっ。エヴァにゃんがぷんぷ

んしちゃうよ」
「……ええ、そうですね。帰りましょう。帰ったら仕事があるのですか？」
「うん、そうだね。あーあ、面倒だな～」
「では、おんぶしてあげます。家に帰る間くらいお眠りになってください」
「……ありがと、茶々丸」
「いえ……マスターの従者であるイリアさんは、私の妹の様なものですから」

茶々丸の背中は意外と癖になりそうだ～。
安心できる。茶々丸はロボ。だけど、まるで人の様な温もりがあった。
目を閉じてから意識が飛ぶまで、そう時間はかからなかった。

糾弾（後書き）

随分と更新してなかった気がする。ストックはあるのに投稿する時間がないとはこれいかに。

というのも別の二次小説書いてるからなんだけどね。

キャラ紹介

イリア・スプリングフィールド

《容姿・性格等》

銀髪に紅い目。外見的にはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン？
性格ははっちゃけ娘な感じにしようと思ったんだけど……どうですかね？
兄であるネギは嫌いであり好き。吸血鬼事件の時点ではネギが好きな方ですかね。
身長はエヴァとほぼ同じ。
エヴァの従者兼弟子？
イリアの目的はまだまだ秘密、ということで。

《投影魔術》

詳細はＦａｔｅのｗｉｋｉとかを見てください。作中ではあまり使われませんね。

《魔法の剣》「唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　闇の精集い来たりて敵を貫け　『魔法の剣　闇の十七振り』」
「唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　氷の精集い来たりて敵を貫け　『魔法の剣　氷の十七振り』」

魔法の射手を、剣の形にしたもの。
パワーとスピードを特化させたものとも言う。
最も基本的な魔法を改良させただけ。つまり、使う魔力量もあまり変わらない。
筈なんだけど、今は完成していないので魔法の射手よりも魔力を消費する。

《氷の女王》「氷を統べる全ての精霊　我が手中に集いて敵を叩き潰せ　『氷の女王』」

魔力で大気中の水分を氷に替え、氷結させて巨人を作り出す。
巨人の動かし方や利用の仕方は従者次第なので、応用の効く使いやすい魔法でもある。
形的には杖を持った女王様。

《氷剣》「怒りの鉄槌　怒涛の吹雪　闇より来たる断罪の刀身　生えろ（穿て）『氷剣』」

はっきり言うと、氷の《魔法の剣》の応用でもある様にも見えるけど全くの別物。
地面から生やすこともできるし、空中から大量の剣を降り注ぐこともできる。
魔法の剣との違いは、形と大きさ。更にとある効果を付与させることも可能。

エヴァちゃん宅に帰ると、エヴァちゃんに心配された。ボクの顔色が悪いとか何とか。

まぁ、意外と言えば意外だよね～。エヴァちゃんが人の心を機敏に感じ取るなんて。しかもその時の顔と来たら……。

茶々丸が「録画中……」とか言ってたから、後で見せてもらおうかな～。

問題は翌日だったね。

学園長に呼び出されちゃったよ。

学園長室に入ると、高等部の女生徒とタカミチ、当たり前だけど、学園長がいた。

「で？　何か用かな？　学園長」

「……まぁ、なんじゃ。昨日のことで注意しておこうと思ってな？」

「注意？」

「うむ、昨日ネギ君を糾弾したことは、知っておる。あの公園を通りがかった魔法生徒がおってな」

「それで、どう注意するの？」

「まぁ、一言でいってしまえば……『あそこまで言わなくてもいいだろう』ということじゃ」

「うん、僕もそう思うよ。十歳のネギ君にしては、かなり重すぎる言葉だったと思うし」

学園長の隣に立つタカミチが言う。
顔は苦笑い。けど、お兄ちゃんを糾弾したボクに対していい印象は無いみたい。
でも、それはボクも同じ。
ボクはどうしてもタカミチをいい人だと思えない。

「注意って……。じゃあ、あの時はどうすればよかったのさ？　茶々丸を見捨てろって？」
「そうは言っておらん。ただ、ネギ君に対して言い過「ふざけないでくれる？」……なんじゃと？」
「ネギはボクのお兄ちゃんだ。ボクは犯罪者の妹になりたくないし、お兄ちゃんを犯罪者になんかしたくない。その気持ちも分からない様な自称正義の魔法使いがなに言ってんのさ」
「……昨日も言っておったが自称、とはどういうことじゃ？」
「そのまんまの意味だよ～？」
「では、貴女は私たち『立派な魔法使い』を目指す者や『立派な魔法使い・偉大なる魔法使い』をどう思っているのですか！」

声を荒げるのはボクを学園長にチクッってくれちゃった女生徒。
名前は……高音ちゃんだっけ？

「そんなの聞くまでも無いと思うけど～？　まぁ、一言でいえば本物の無自覚偽善者、かな」
「『立派な魔法使い』は世界の困っている人達を助ける人達のことを言うのですよ！？　何故その様な人達が偽善者だと……！！」
「それは君達の自己満足だよ。それにさ、なんで君達はボクの父親『ナギ・スプリングフィールド』を崇めているの？」
「え？」
「ナギ・スプリングフィールドは虐殺者だよ。それも残酷で残虐な大量虐殺者。とびっきりの悪だね。それをなんでそんなに特別な物

を見る様な目で見れるの？」
「あ、貴女こそ！　なんで自分の父親をそんな目で見られるのですか！！」

学園長の机を両掌で思いっ切り叩きながら声を荒げる。
正直、ウザい。

「ナギは……父さんはボク達を放っておいたんだよ……。産んでおいて……捨てたんだよ？　それをどうやって特別視しろっていうのさ！！」
「お、落ち着くんだイリアちゃん」
「うるさい！　タカミチだって……ナギとネギしか見てない……！」
「そ、それは……」
「お兄ちゃんをナギと重ねないでよ！！　英雄の息子じゃなくて、友人の息子として見てあげてよ……。ナギはナギでネギはネギなんだよ！　なんで、それを分からないのさ……！！」

最早感情は爆発寸前。
いや、もう爆発しちゃってるのかな……。

「落ち着くんだ、イリアちゃん！　ネギ君をナギと重ねない様にする。うん、分かった。分かったから」
「それに！！！」

困り顔になりながらもボクの肩に触れようとしたタカミチの手を振り払いながら声を荒げる。
荒げる。
荒げる。
まるで赤子の様に。

「それに……タカミチはネギやナギは見てくれてもボクは見てくれなかった……！」
「……っ！」
「ボクだって、父親の温もりが欲しいよ……。父親の温もりを……ネギは知ってる。タカミチがいたから……。でも、ボクは……父親の温もりなんて、知らない。おじちゃんも、抱いてくれたりはしなかった。……タカミチ……教えてよ。父さんの温もり……。お願い、だよ……！」

「ごめんね……本当に、すまなかった」
「っ……う、うぅ……！」

タカミチが、優しく包んでくれた。
自分でも分かってる。傲慢だと。
兄が知ってるからボクも知りたい、なんて我儘だと。立派な魔法使いの修行をしている者の言うことじゃないって。分かってる。でも、泣いた。
タカミチが、慣れきった手つきでボクの背中を擦ってくれる。
きっと、僕以外にもこんな感じの子を何度も見てきたんだろう。
戦争によって両親を亡くして。それでいて親の温もりを欲してきた子供。そんなの、戦地には幾らでもいるのだろう。

「本当にごめん。でも、ナギのことを悪く言わないであげておくれ」
「……」
「ナギさんは、とても凄い人だったんだ。少しでも自分より他人を優先できる、素晴らしい人だった。我儘でバカで突っ走りすぎなところもあった。だけど、とてもいい人だった。もしかしたら、今もどこかで君達二人の事を話してるかもしれないよ。大きく育ったかなぁ、って」

あまりにも、現実味がありすぎて、ちょっと吹きそうになったのは秘密だ。

「でも、きっと父さんは死んじゃったよ……」
「どうして、そう思うんだい？」
「そんな優しい人だったら、戦争が終わった今、ボク達のところに帰ってきてるはずだもん……」
「……あの人は優しすぎるんだよ。帰る道中、きっといろんな人の助けになっているんだよ。そして、君達が今ここにいる間に帰ってきちゃって『俺の子供はどこ行ったぁああ！』って焦るんだよ」
「は……はは……現実感ありすぎ」
「うん、僕も言ってて本当にありそうだなぁと思った」

ああ、温かい。
ナギに……父さんに抱かれたら、もっと温かいのかな。
そんなことを思いながら、ボクは意識を手放した。

～近衛Ｓｉｄｅ～

「……寝てしまったようじゃの」
「ええ、そうですね」
「……」

わし等は正直、見誤っていた様じゃ。
この子の飄々とした態度が子供に思えないで、どうも十歳だと言うことを忘れてしまっていたのかもしれないのう……。

「寝顔は可愛いもんですけどね。ホント、僕は馬鹿だった……」
「……」

後悔の念に押されてるような顔で、腕に力を込めるタカミチ君。
本当に後悔しておるのじゃろう。
それにしても、なんで高音君はさっきからバツが悪そうな目でイリア君を見ておるのじゃ？

～高音Ｓｉｄｅ～

なんなのでしょう。このふざけた子供は。
父親の温もりだなんて。
立派な魔法使いたる者、自分の幸を願うだなんてあってはいけません。
すぐ郷国に帰らせて親代わりの人に愛情を貰うべきです。
そんなことを学園長に言っても、どうせ聞いてくれやしませんでしょうけど。
とにかく、私は認めません。
イリア先生よりネギ先生の方がよっぽど大人ではありませんか。

～学園長Ｓｉｄｅ～

はて、今高音君の心の中の様なものが見えた気がするが……まぁ気のせいじゃろう。
タカミチ君の胸の中でスヤスヤ眠るイリア君の顔は正に子供のそれ。
安心しきって無防備。可愛いものじゃ。
イリア君の寝顔に癒されとる、正にその時じゃった。どたどたと

忙しい足音と共に扉が勢いよく開いた。

「おいジジィー！　イリアはまだかー！　……タカミチ、貴様なにをしているのだ？　よもや私のものを……」

「エ、エヴァ？　どうして君がここに……？」

「ええい！　どうでもいいからイリアを返さんか！」

そう言いながら眠っているイリア君をタカミチ君から剥ぎ取る。

む？　私のもの？

「エヴァ、まさか……？」

「ん？　ああ、言ってなかったか。こいつは私の従者（パートナー）だよ。ほら、証拠」

そう言って見せてくるのは、イリア君が黒いコートを着て黒い刀を持っている姿が描かれている仮契約カード。

「どういうことですか学園長！　立派な魔法使いを目指す者が、悪の大魔法使いの従者だなんて……！！」

先程と変わらぬ勢いで声を荒げる高音君。

だがエヴァはそれを人睨みし、鬱陶しそうに言う。

「黙れガキ。残念だが、イリアは元より立派な魔法使いを目指していなくてね……」

「なっ……！？」

確かに、イリア君は立派な魔法使いを馬鹿にしていた。

自らの目標を馬鹿にするなんて行為をする人はまずいないだろう。

「イリアは私が育てる。貴様等にはもう触れさせん」
「むぅ……そうは言ってものぅ……。イリア君はまだ修行中の身じゃし、わし等が関わらない訳にはいかんよ」
「ふん、知ったことか」

そう言ってさっさと部屋から出ていってしまった。
はぁ……どうしたものか。
思わず、頭を抱えてしまう。

～イリアＳｉｄｅ～

あれ……？　なんか、いつものいい匂いがする……？
あの木々の匂いがする家の主。
金髪のお姫様の匂い……。

「起きたか？」
「……エヴァちゃん？　あれ、ボク……」

ボクは確か学園長室で……。

「あまりにあのジジイの話が長かったのでな。お前が寝てる間に強制的に返させてもらったんだよ」
「そうなんだ。あ～、ヤバイ。恥ずかしいことしちゃったかも……」

タカミチに抱かれた記憶が最後に残っている。
うわ～、誰かに記憶改竄してほしいわ～……。

「ところでところでエヴァにゃんにゃん」

「なんだ、その妙な言い方は……」
「ノンノン、気にするとこそこじゃない。……なんでボク様ちゃんの目には天井より先にエヴァにゃんの顔が見えてるのかな～？」
「ん～、そりゃあ、私がお前を膝枕してやってるからに他ならないだろう」
「あ～、そっか～。そだよね～」

首だけで辺りを見回すと、悔しそうでありながらボクとエヴァちゃんのこの光景を微笑ましそうに見て「録画中……」否、録画している茶々丸が見えた。
しかし、録画中か～……。ふふ。

「えいっ！」
「ひょわぁ！？　な、なにをしておるのだ貴様は！！」

気の抜ける悲鳴と共に頬を真っ赤に染めるエヴァちゃん。う～ん、かわゆいですな～。
あ、ボクがなにをしたのかと言うとだね。
まぁ、簡単に言うと『エヴァちゃんの股の間を頭で弄（まさぐ）った』だね。
こういうのを美少女にできるのは、同性の特権だよね～。

「くんかくんか、あ～良い匂い」
「止めんか！！　変態かお前は！」
「あれ？　今更？」
「ええい！　離れんか！」
「でも」
「……？」
「強ち嫌じゃあないでしょ～？」

「なっ！？」とエヴァちゃんの顔がフリーズ。

「い、嫌じゃない訳ないだろう！」
「え！？　嫌、だった？」

上目遣いでなるべく甘えるような感じで！
ふふ、おじちゃんは意外とこれで落ちてくれたけど、エヴァにゃんはどうかな～……。

「……嫌じゃ、ない」
「あーもう！　可愛いなぁあ！　茶々丸！！」「なあっ！？」
「御安心を。無論、録画中です」「ぇえ！？」
「オーケイ！　良くやった！」「バ、バカにしおって……」

これ以上エヴァちゃんを無視してると本当にヤバそうかな？
よし、話を一八〇度回転しちゃおっか。

「ねぇねぇエヴァにゃーん」
「ん、なんだ」
「怒んないでよ～、今から真剣な話なんだから～」
「あーもう分かった。怒らないから抱きつくな。熱い」
「はいはい。えーっとね、それで改めて聞くけどさ？」
「うん？」
「ボク様ちゃんのカード、どういうのが出たんだろ？」
「……」
「……」

それからすっかり数分間。
ヤケに近くから小鳥の囀りが聞こえてきた。
エヴァちゃんもボク様ちゃんも、カードの内容が何か、なんてことなんで今まで調べなかったんだろうね？

アーティファクト

そんなこんなで、別荘。
どれだけ大きな力が出るか分からないから、一〇〇パーセント安心の別荘でカードを使用することにした。

「『来れ（アデアット）』」

そう、呟くように一言。
言ってみたのはいいんだけどぉ……。

「な～んだ。ただの刀じゃん」

そう、なんの変哲もない。いや、刀全体的に黒い。柄から鍔、刀身までどす黒い。
それでも見た感じはなにもないただの刀だった。
後は、なにか意味があるのか真っ黒なコートが体に覆い被さった。

「うむ……とりあえず、カードの説明とでも行くか」
「ん？」
「名は『斬魄刀』。能力は……なんだ？　これは。名を呼べば応える、力を解放せよ……？」
「名前？」
「ふむ……どうやら『始解』というものがあるらしいな。名を呼べばその名の刀になる、という意味で良いんじゃないか？」
「へぇ～……じゃあ、あまり意味ないな～」
「ん？　何故だ？」

一瞬、躊躇った。
だって投影って反則染みてるし……ねぇ。
でもまぁ、説明しない訳にはいかないか～。

「……出鱈目だな」
「でしょ～。だからこれも解析しちゃえば投影が簡単にできちゃう……筈なんだけど」
「ん？　どうした？」
「それがさっきから解析しようとしてるんだけど、できないんだよね～……」
「では投影できないのか？」
「う～ん。どうだろう。ボクの頭の中で勝手にイメージ構築しちゃえばいいだけの話だし……。まぁ、とりあえずその『始解』っていうのをやってみよっか」

エヴァちゃんに説明された通り。この刀には幾つもの名前がある様だ。
それぞれの名前は『斬月』『蛇尾丸』『千本桜』『双魚理』『天譴』『氷輪丸』『侘助』『流刃若火』等々……。

「あれ、エヴァちゃん？　始解の他にも卍解っていうのがあるみたいだけど……。ていうか、『斬月』に始解の言葉ないじゃん」
「む？　おかしいな……ま、いいじゃないか。とりあえず適当に始解してみれば」
「うーん、まぁ、そうだね。そんじゃ、行きますか～。咆えろ『蛇尾丸』……うわぁ？！」
「ほぅ……変な形だな。それが刀として機能するのかも不安なくら

いだ」

ホントに変な刀になった……。

なんか斧みたいな形の刃が幾つも連なって、無理矢理に刀の形になってるみたいな？

……。

……。

……とりあえず、振ってみよっか♪

「とりゃあああ！」

「うぉお！？　なにをするのだ、貴様はー！　私を殺す気かー！？」

「いやー、ごめんごめん。でもこの刀……」

「ああ、まさか、伸びる　とはな」

そう、伸びた。確かに刀には切れ目の様なものがあったけど……。

まさか伸縮自在とは思わないでそ？

「いや～……怖いねぇ、このアーティファクト」

「ああ、まったくだ……」

あれから別荘で丸二日掛けてアーティファクトの知識は完璧に覚えた。ホントは一日で済ませたかったんだけどぉ……ほら、玩具（エヴァちゃん）がいたからさ。つい遊んじゃった、てへっ。

さぁて、斬魄刀の力は理解した。理解したからこそ、扱いが難し

いことも分かった。
まず卍解。あれはもう恐ろしいよ？
下手すれば、下手しなくても地形が変わっちゃう可能性があるもん。動きの制御はそれ程難しくもなかったけれど、あくまでそれは動きを制御しただけで力の制御ができた訳ではない。
千本桜なんて、あれ普通の人間には扱えないよ。
刀身が桜の花弁みたいになっちゃったからね。多分千はあると思うよ？　あの花弁。その全てが刃。
千、或いはそれ以上もある刃を自分の魔力だけで制御する。結構難しいのよ、これ。
でも使い道は結構あるよね。相手を閉じ込めることもできるだろうし。言っちゃえば、千の刃で圧倒できるということなんだから。
んで、斬月。あれはまぁ、なんとも説明し難いよね。
技と言う技が存在しない。柄も鍔もない。持つ場所に包帯グルグルしてあるだけの無骨な大きい刀になっちゃっただけ。まぁ、大きさはボク様ちゃんの身長より少し低いくらい。できる技は一つだけ。
『月牙天衝』
刃に魔力を乗せて放つ技、で解釈は合ってるのかな？
卍解『天鎖斬月』になると刀身が細くなって真っ黒になるね。柄に鎖がついていること以外は、始解してない時の『斬魄刀』に似てるね。

とまぁ、全部説明して行くとキリがないなぁ。

あ、そうそう。もうすぐあの日みたいですよ？
ネギを試すにもってこいの学園メンテナンスの日。

説明しますとですねぇ、学園の全体的なメンテナンスをするんだ

ってさ。その時、学園は全体的に停電になる。停電になると学園結界は解かれ、エヴァちゃんの魔力が回復。呪いを解くにはネギの血が必要だと言う方便を使い、力を試すんだとか。なんで力を試すのかはボクには分からない。

まぁ、予想できることとすれば、呪いの解呪かな？

それほどの力を持っていれば、ナギの息子、ネギならば解けるはず。

あ、ちなみにボクも聞かれたよ？　解呪できないか、って。

でも学園長との契約もあるからねぇ……。とりあえず答えは「今はできない」にしておいた。

さぁて、一体どんな傑作になることやら……。

アーティファクト（後書き）

ストックにしてたの忘れてた。てことで割り込み投稿。

決着と無限の剣製

ネギって弱いなぁ。
そんな事実に気付かされる日。麻帆良で停電セールとして蝋燭が沢山売られた日。日本がいつも通りの夜を迎えた日。大西洋がいつもの陽に照らされた日。幾つもの星が、いつも通りに回って廻って周ってしまっている日。
『イリア・スプリングフィールドは、一人の吸血姫の従者として一生の服従を誓うことになる』
そんな日。

――さぁ、物語の始まり始まり。

停電になり真っ暗になった大浴場。
そこに複数の人影と単数の人影が向かい合う。

「エヴァンジェリンさん、まき絵さん達を返してください！」
「ああ、いいよ。でも、返してほしければ力尽くでこい」
「そうそう、お兄ちゃん。この世は力尽くで全てが解決できちゃうんだよ？」
「イリアもどうして悪い魔法使いと手を組んじゃったんだよ！　もう意味分かんないよ！！」

銀髪と金髪が煌めく、いっそのこと幻想的だと言える光景。二人は全く同じ身長であり全く同じ服装の為、双子に見えてもおかしくない。違いと言えば笑みと髪色か。

金は不敵。銀は喜色。
口の端を持ち上げた笑みと、顔全体で隠す気がないと言っている様な笑み。
その一種の幻想的な光景と無様な武装をしている少年を隔てている存在が四人いる。
明石祐奈。佐々木まき絵。和泉亜子。大河内アキラ。
皆一様にミニスカメイド服。エヴァの趣味の一つだ。無論、エヴァとイリアが着ているゴスロリファッションも。
最初、イリアも結構その服を楽しんでいたが野外に出るとなるとさすがに恥ずかしい……。と、今はパクティオーカード『漆黒の死神』の付属品、真っ黒なコートに身を包んでいる。

「さぁ、お兄ちゃん。遊ぼう？」
「くっ……イリア……」
「まぁ待てイリア。まずはそこの四人だ。さぁぼーや。自分の生徒を倒して私を捕らえられるか？」
「ひ、卑怯です！　先生が生徒を倒すなんて……！」
「甘いよお兄ちゃん。ここは戦場。そこに立ち場は関係ないよ？」
「その通りだ。貴様の父もそうだった筈だぞ？　戦場では敵と見なされればそれは《倒すべき相手（敵）》であり《やっつけるべき相手（敵）》であり《殺すべき相手（敵）》でしかないのだからな。敵は、倒すべきだから敵と言う」

しかしそんなことネギは理解出来ない。
ネギにとっての父親は英雄であり憧れ。
戦争の英雄という事実を自分の頭（なか）で消している。
都合のいい現実わるい現実。
ネギにとっての父親『ナギ・スプリングフィールド』は、『立派な魔法使い』の代表格。
だから、倒すべき相手を殺すなんてことはしていない、という勝

手な妄想が頭を支配している。
何故ここまで歪んでしまったのだろう。
理由は、周りの大人たち。イリアは村で仲が良い人は少なかった。それのおかげで、歪みが小さかったのかもしれない。更に言えば、性格だろう。親に似てないそのはっちゃけた性格。強いて言えばナギに似ているのだろうか……。
対してネギは真面目すぎる性格。真面目故に、本当は分かっている。けど、分かりたくない。
だから、こう言う。

「父さんは人殺しなんかしてない！　全部人を助ける為の行動だ！！」

なにも見てない癖に、
なにも聞いてない癖に、
そんなことが言える。

だからイリアはそれを糾弾する。敵として、妹として。

「父さんは人殺しだよ。戦争で人を殺せば英雄になれるんだよ。お兄ちゃんは何を聞いてきたの？　父さんは英雄だよ。でも、それは戦争の英雄なんだよ。ボク等は、その戦争の英雄の――」
「違う！！！」
「……」
「イリア、もういい。下がれ」
「らじゃ～。お兄ちゃん、良く考えて。都合の良い様に現実を曲解しないでね」

そう言って、イリアは戦線から離脱した。

～イリアＳｉｄｅ～

ボク様ちゃんが戦線離脱した理由。
を、言う前にまずボクがエヴァちゃんと一緒にネギの前に現れた理由を話そうか。
エヴァちゃんが知りたいのはお兄ちゃんの戦力と知力。
で、ボクがエヴァちゃん側についたとなればお兄ちゃんもショックを受けながらも怒りを覚える筈。
怒りは人の力を大きくさせる。まぁ、代わりに判断力とかを狂わせちゃうけどね～。

で、次にボクがお兄ちゃんの前から離脱した目的。それは、目の前にいる白いスーツを着ている男。

「イリアちゃん……」
「ごめんね、タカミチ。これでもボク、エヴァちゃんの従者だから」

エヴァちゃんが暴れる理由は学園長にもあった。
お兄ちゃんの修行の為だ。
だけど学園長が思った以上にエヴァちゃんは暴れちゃった。例を挙げれば、生徒に手を出したこととか？
腕が立つ魔法先生をお兄ちゃん側に立たせようとする筈。って、エヴァちゃんが言ってた。
その魔法先生を足止め、束縛させることがボク様ちゃんの目的。
でもまさか、タカミチが相手とはな～……。

「そこを退いてくれ、イリアちゃん」
「無理だよ。マスターの命令は絶対。それに、お兄ちゃんの為でもあるんだもん」

「ネギ君の為……？」
「そっ。あの都合が良い様に現実を曲げるお兄ちゃんの性格を叩き直す為」
強ち間違いではないから、いいよね？
「だから、退いてくれない？　ボクとしてはタカミチを傷つけたくないんだよね」
「……」
タカミチが僅かに動揺した。
うんうん、まぁ、そりゃそうだよね。
子供のボク様ちゃんに『傷つけたくない』なんて言われれば、何か大きな切り札があると思うのは当たり前。エヴァちゃんの話によるとタカミチはボクが仮契約したことをしってる。
だからアーティファクトを警戒するはず……。でも、
いや、だからこそ。
ボクはアーティファクトを使わない。
「退いてくれないんだね、タカミチ。いいよ。相手してあげる。ボク様ちゃんがナギの戦友にどれだけダメージを与えられるか、知ってみたいし。――さ、鬼ごっこを始めよ？　鬼はボク様、人間は貴方」
～タカミチＳｉｄｅ～
今僕は明らかに戦慄している。
この数えで十歳の女の子を相手に。まるでミニガンを相手にしている様な威圧感。

額から、背中から、胸部から、腋から、足から……ありとあらゆる箇所から嫌な汗がべったりと溢れて出てくる。
加減……なんてして勝てるのだろうか。
勝てるとは思えない。けれど、こんな子供相手に手加減なしでやったら……。
僕は……どうすればいい！？

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

二人が対峙してるところを第三者が見れば、明らかにおかしいと思うだろう。
十歳の子供がニヒルに笑い、三十代の大人が汗を掻いている。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　氷の精集い来たりて敵を貫け『魔法の剣　魔弾・氷の十七振り』！」

先に動いたのはイリアだった。
瞬間的に氷の刃を空中に固定。それを撃ち出す。
魔弾。それは自動追尾という意味を表している。タカミチは瞬時にそれを理解。次に迎撃に備え、ポケットに手を入れて構えをとった。
そして、剣を次々を砕いていく。
不思議な光景だった。
一見タカミチは何もしていないのに砕かれていく。

（……無音拳……？）

イリアはすぐに判断した。イリアの頭（なか）にあった知識が、自動的に検索される。

無音拳。居合い拳とも呼ばれている。タカミチが、師匠であるガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグから教えてもらった見えない拳。

近すぎれば使えず、遠すぎれば届かない。それの使い手。

究極技法、咸卦法を使えばその限りでもないだろう。だが、あんなモノを使えばイリアの身体は全身骨折するだろう。そんなもの使えない。

（まずは様子見。イリアちゃんの魔法を悉く砕こう）

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　怒りの鉄槌　怒涛の吹雪　闇より来たる断罪の刀身　穿て！『氷剣』」

空中より無数の剣群がタカミチを襲う。

先程の魔法の剣など比ではない数。

しかし今回は追尾機能はない。なら避けるしかない。

「くっ……。な……！？」

剣がアスファルトを穿つ。破片が飛び散る。

そして、氷の花が咲いた。

イリアが作った魔法はそれぞれに連鎖的攻撃がある。

そしてその全てがタカミチにとって未知の魔法。ここまで多くの自作魔法（オリジナル）を持っている者も少ないだろう。

「……閉じ込められた……か」

氷剣がタカミチの周りを囲い、花を咲かす。
だが、氷だ。
それは無音拳によって簡単に砕かれる。

そしてそぐそこにイリアが、真っ赤な槍をタカミチの心臓に突き立てた。

「終わり、だね」
「……敵わないな。一体、どんなことを魔法学校で学んできたんだい？　それに、その槍は……？」
「ボク様ちゃん、魔法学校ではあまり成績良くなかったよ？　いろいろ加減しながらきたからさ。自慢じゃないけどカメレオンみたいな生き方なんだよね。で、ボクが学校でなにを学んだ？　なにも学んでないよ。強いて言うなら、立派な魔法使いが成してきた正義（あく）の数々、かな？　で、この槍はね。ボク様ご自慢の宝具『刺し穿つ死棘（ゲイ・ボルク）の槍』って言うんだよ」

タカミチはその宝具の名を知っている。
伝説の武器だ。
心の臓を穿つ魔の槍。

「……あの伝説上に出てくる槍が、それだって言うのかい？」
「うん、これは偽物（レプリカ）だけどね？」

タカミチは驚愕した。
先程の戦闘能力。戦闘知識。そして、伝説の槍。
そのどれもが子供が持つには不相応な代物だった。

正直、タカミチは戸惑っている。

あの時父親の温もりを欲していた子が、今はこうして自分を圧倒する力を持っていたのだから、戸惑うのも無理はあるまい。

その頃、エヴァはネギを追い込んでいた。
同種の魔法同士のぶつかり合い。
エヴァとネギの魔力量は圧倒的。
の筈なのだが、ネギのくしゃみがそこで発動した。魔力は暴走。
武装解除を孕んだ『雷の暴風』はエヴァの魔法を押し返した。

「……貴様……ふ、ふふ……さすが奴の息子と言うことか……くく」

～イリアＳｉｄｅ～

「うわあ！？」
「うわあ……」

こっからでも見える大橋の上には、素っ裸になっちゃったエヴァちゃんが見えた。
いや、なんで？
どうせお兄ちゃんの魔力暴走なんだろうなぁ。
タカミチを見ると、同情してるかの様な目でエヴァちゃんを見ていた。

「……どうする、タカミチ？」
「……助けに行ってあげていいよ。僕は負けちゃったからね」
「ん、ありがと」

できる限りの笑みでタカミチに応える。
それからなんとかエヴァちゃんのところまで駆ける。

建物の屋根の上を飛んでショートカット。
大橋が見えた頃、エヴァにゃんが魔法を使用としてるのが見えた。
それと同時、茶々丸の叫ぶような声が聞こえた。

「……！　いけないマスター！　戻って！！」
「なに？！」

何事……？
と、思っていると建物の電気が次々と点いていく。
まさか……。

「そんな……停電終了まで七分三十秒も早い……！？」
「ちっ……！　ええい！　いい加減な仕事をしおって……！！
きゃんっ！」

そんなこと言ってないで逃げようよ！
と思ってる間にも学園結界は発動。結界より外にいたエヴァちゃんは電撃を浴びせられ、川に落ちていった。

間に合う。
とにかく助けなきゃ……。
エヴァちゃんは確か泳げないはず。落ちれば溺れるのは決定事項。
なら、落ちる前に助ければいい！

「《来れ》　散れ！　『千本桜』」

千の桜の花弁がエヴァちゃんを捕らえる。
見た目的には桜色の空飛ぶ絨毯が敷かれたと言えばお分かり頂けると思う。
まぁ、とりあえずエヴァちゃんの元に行こっか。

「エッヴぁにゃーん！」
「なぁ！？　イ、イリアか……？」
「うん、ボク様ちゃんだよ。まったくぅ……虚空瞬動でもすれば回避できただろうに、なんで逃げなかったのさ？」
「いや、いきなりのことだったから遂……」

目を逸らしながらそんなこと言われても……。

「はぁ……下手すればエヴァちゃん溺れてたんだよ？　ちゃんと分かってるの？」
「わ、分かってるさ……」
「もう、取り敢えずお説教は後でだね。ほら、コート貸してあげるから着て！　レディが外ですっぽんぽんになっちゃダメでしょ！」
「すっぽんぽん言うな！」

というわけで、大橋の上に着陸。
ネギは杖を回収済み。そこにはタカミチの姿もあって、それに大層驚いているアスナの姿があった。

「にゃはは～、これはエヴァにゃんの負けかな？」
「なっ！？　負けてなどいない！　あのまま停電が続いていれば勝ててたに決まってる！」

「アクシデントやイレギュラーにも対応してこそ、誇り高き悪の魔法使いだよ、エヴァにゃん」
「くっ……ふん！」
「よーし、生徒名簿に僕が勝ったって書いとこーっと」
「な、止めんか！！」
「エヴァちゃんっていつもこんななの？」
「はい、イリアさんがこちらに来てからは……」
「へぇ～」

「みんな、気を付けろ」と、タカミチが真剣な表情で口を開けた。
「へ？」

……ああ、囲まれてるね。まったく、折角楽しかったのに、邪魔されちゃったなぁ……。
多分、鬼……だよね。だけど、ただの鬼じゃないかも……。それぞれが持つ気の量が半端じゃない。

「仕方ないなぁ、《来れ》『霜天に座せ　氷輪丸！』」

剣を振るうと同時に、大気の水分が凍っていき竜の形となる。
その竜が、鬼の大軍を襲う。

「ゲ……う、うそ……」

防がれた。普通に、棍棒みたいな武器一つで。
氷輪丸の力はどんな魔法の中でも恐らく最強クラス。エヴァにゃんが使う魔法にも匹敵する力を持ってるはず……なんだけど。
しかもそんな鬼がまだまだ召喚されてくる。
タカミチとネギが攻撃するけど、それも大したダメージを与えて

いない。アスナはもう怯えて攻撃なんてものができない。いや、そもそもアスナはただの女子中学生。ここにいること自体がおかしなこと。

「仕方ない、かな」

氷輪丸が効かないならそれ以上の力で潰すしかない。でも、あんなの使えばここら一帯が跡形もなく灰燼に帰すことになる……。

なら、空間を取りかえるのが一番。

やるしかない。あの力を――。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

《体は剣で出来ている――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ――》

イリアから紡がれたその言葉に、その場にいた者は何を感じたのだろうか。

全員がイリアを注目する。

《血潮は鉄で心は硝子　――Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ――》

その紡がれる言葉にはどこか悲しみが滲んでいて、

《幾たびの戦場を越えて不敗　――Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ――》

しかし、それでいて強さが滲みでていた。

《ただの一度も敗走はなく　――Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ――》
《ただの一度も理解されない　――Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ――》

声が反響する。
ただ、なにもない言葉なのに、反響する。
そこでタカミチとエヴァは疑問を浮かべる。
魔力が、練られていない。

普通、詠唱をしていく中で魔力はだんだん膨らんでいく。精霊の力を借りるのだから、当たり前だ。
だがイリアの周りではなにも変わらない。
いや、鬼たちが攻撃してこないことが疑問だ。なにかに怯えているように、武器を構えたまま動かない。それはタカミチ達も同じだ。
今のうちに鬼に少しでもダメージを負わせればいいのに、動くことができない。

《彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う　――Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ――》

そして新たに言葉が紡がれた。
何かが鼓動する様に空気が波打つ。

《故に、生涯に意味はなく　――Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ　ｈａｎｄｓ　ｗｉｌｌ　ｎｅｖｅｒ　ｈｏｌｄ　ａｎｙｔｈｉｎｇ――》

そして、

《その体はきっと剣で出来ていた　――Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ――》

最後の言葉が紡がれた。

瞬間、遂に変化が現れた。イリアの周りに炎が……そしてその炎はどんどん広がっていく。

それは鬼達を……タカミチ達までも呑みこみ、膨張していく。

熱くない炎に呑みこまれ、目を開けてその瞬間。

その場にいたものは皆、戦慄した。

壁の様に揺れ立つ陽炎と炎。

空にある、歯車と黒い太陽。

そして、

墓標のように突き刺さった無限の剣が並ぶ荒野。

その全てから、異様なまでの魔力が流れ出していた。

「なに――――これ」

ネギはただ、驚愕に表情を染めた。

タカミチも目を見開き、ただ、その光景を眺めた。

「――ハッ！　イリア、貴様、こんなものを隠していたとはな……」

「にゃはは、麻帆良なんかで使うことも無いと思ってたから黙ってたんだけどねぇ……」

そう言って、イリアは一歩踏み出し、刀の名を解放した。

「ここなら、なにも壊さないで済むからね。本気で行くよ～。『万象一切灰燼と為せ　流刃若火』！」

瞬間、業火が、猛火が、鬼達を呑みこんだ。

そこにあった、剣諸共に。そこに残ったのは、削られた地面だけだった。

「ふいーん。なんか疲れたー」

固有結界『無限の剣製』を解いた。その直後だった。

「!?　イリア！」「イリアちゃん!?」

タカミチとエヴァが叫ぶ。だって、そこに映った光景は――。

「え……ぁ、がっ？」

イリアに激痛が走った。腹を見ると、そこから岩が突き出ている。

「かはっ」

吐血。

内蔵が幾つか潰れ、並の術者では直せない大怪我。

そんな判断を、イリアの頭は勝手に詳細を調べていく。

胃は潰れ、岩によって肺も傷つけられた。心臓は辛うじて活動中。

生命の危険有り。

「くそ！　くそ！　おいイリア！　大丈夫か!?　おいタカミチ！　すぐに治癒術師を！」
「で、でもこの怪我じゃあ、麻帆良にいる術者じゃ直せない！」
「くっ……何故不老不死だからって治癒呪文を携わらなかった……私は馬鹿か！」

「エヴァ、ちゃ……ごめ、油断、した」
「喋るな！　タカミチ、本国から治癒術師は……」
「無理だ、間に合わない！」

「吸血鬼化、すればいいじゃないか」

そこに響いた声は、誰にも聞き覚えのない声だった。だが、タカミチにはそのどこかで聴いたことがある様な声に疑問を抱いた。

そこにいたのは、三人目のアーウェルンクス。フェイト。
後の、ネギのライバルになるはずの少年だった。

決着と無限の剣製（後書き）

御都合主義？　急展開？　そんなもん俺にとっては褒め言葉だ。どんときやがれ。

さて、ストックを出しきったー！
というわけで当分更新なしだと思います。

現実

「すまん！！」

目を覚ました途端にエヴァにゃんに謝られた。何故？

「お前を、その……なんと、いうかだな……」

「マスター……。ここは私が伝えておきます。マスターは少しお休みになられてはどうですか？　ここ数日間寝ないで看病していたのですから……」

「……いや、だが……。……すまん、茶々丸、頼む……」

「はい、任せてください」

茶々丸に聞かされたことは正直言って信じられないものだった。ボクは先程（と言っても数日前）の戦闘で致命傷を負った。それも、ここの治癒術師では手に負えない程の。タカミチやエヴァちゃんは必死にどうすればいいか考えたそうだが、出来ることが何もない。諦めかけたその時に、一人の少年が吸血鬼化をすればいいと、そう言ったそうだ。

その時の状況からすればそれが最もボクを生かす可能性が高かったらしい……。吸血鬼、か……。

「だけど、吸血鬼化なんてそんな簡単にできるものなの？」

その現実をまだ受け入れたくなくて、思わず聞いた。

「はい。いえ、実際のところ、簡単なのかどうか以前の問題です。吸血鬼化なんて知ってる人はそういません。しかしその少年は吸血

鬼化のやり方だけ伝えそのまま水を使った転移（ゲート）でどこかへ消えてしまって……高畑先生が追おうとしたのですが、足取りは掴めず。マスターは仕方なく、貴女を吸血鬼化することを決断しました」

吸血鬼……。実感がない。なんせ、自分の魔力量が僅かに増えてること以外になにも変わっていない。

「ごめん、茶々丸。少し、一人にしてくれるかな……」

「……はい。ですが、これだけは教えておきます。マスターやネギ先生は、泣いていましたよ。どうか、マスターだけでも責めないであげてください」

「……うん、ありがと、茶々丸」

「では、ゆっくり休んでください」

茶々丸はそれだけ言って部屋を後にした。

正直、これは夢なんじゃないかと思っている。だって、吸血鬼って……。つまり、魔法使いから、迫害されるってこと、なんじゃ……。

～エヴァＳｉｄｅ～

私は愚かだった。幾らイリアを生かすためとはいえ、本人の了承もなく吸血鬼化という禁忌を犯したのだ。強制的に吸血鬼にされる苦しみを、私は知っている。なのに……イリアを……。

「では、ゆっくり休んでください」

茶々丸がイリアの部屋から出てきた。

つまり話し終わった。事実が全てイリアに伝わったと言うことだ……。

「……マスター。どうかお休みになってください。このままでは何かしらの病に……」

「寝れないんだ……。イリアに、嫌われたと思うと、胸が苦しくなるんだ。なぁ茶々丸、私はどうすればいい……。私は、あの時どうすれば良かったんだ……！？」

いつの間にか縋る様に、声を荒げていた。

私にとって最良の選択肢とはなんだった？　イリアを化け物にしてまで生かして、本人は喜ぶのか？　そんなはずない。逆だ。イリアに嫌われた。これは決定事項だ。私は、嫌われたんだ……。

「マスター……。イリアさんがマスターを嫌うなんてことはないと思われます。ただ、今はちょっと気持ちの整理がついていないだけなのではないでしょうか。ですから、今は待ちましょう」

待つ？　何を待つのだ？　イリアに嫌いだと宣言されることをか……？

「エヴァンジェリンさん……」

「エヴァちゃん……」

「……ぼーやと神楽坂、か？」

「はい」

「不法侵入は勘弁してくれ」

「はぅ！？　い、いえそんな！　ただ、その……イリアの様子を見たくて……」

「ネギ先生、イリアさんは目が覚めましたが、少し気持ちの整理がついていないようです。なので、少しお茶を飲んでいきませんか？」

「あ、は、はい」

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

ネギとエヴァ、アスナと茶々丸は一階のリビングでお茶を啜っていた。

いや、お茶を啜っているのはネギと茶々丸とアスナだけでエヴァは飲んでいないが。

「……僕達は、選択肢を間違ったのでしょうか」

「言うな。今更後戻りはできん。イリアには無理矢理にでも現実を受け入れてもらう必要がある」

エヴァは不貞腐れたかのようにテーブルに突っ伏しながら言った。

「でも……」

アスナは暗い表情でコップを両手で持ちながら呟く。

「でも、なんだ？」

「やっぱりあのままイリアちゃんは……」

「死んでいれば良かったと言うのか？」

「そ、そうじゃないけど……」

「……」

なんとも言えない空気だけが流れる。

イリアの吸血鬼化を知ってるのは今いるメンバーとタカミチ以外にいない。だが、いずればれるだろう。そうなると、周りの魔法関係者はどう行動してくるのか……。

ここにいる魔法使いたちは『立派な魔法使い』や、『立派な魔法使い』を目指す者たちだ。吸血鬼となったイリアを恐らく追い回すだろう。

特に高音。彼女はイリアを快く思っていない。そして、イリアが吸血鬼になったと知れば学園長にイリアを殺すべきだと言うのだろう。

殺すまではいかなくとも、村へは帰されるかもしれない。

イリアが現実を受け入れる受け入れない以前の問題なのだ。

「あれ、お兄ちゃん……？」

その声が聞こえた瞬間、全員が全員驚いた。

その声は良く知る声。

「イリア……もう、大丈夫なの？」

「うにー、ボク様ちゃんはもう元気元気だよ？」

「そ、そっか。良かった」

この場にいた全員が分かった。いろいろ鈍感なネギにも、分かった。

――空元気だ。

それは誰が見たってそう思うに決まってる表情だった。元気そうに笑ってはいるが、悲痛に歪んでいるのが分かる。自分たちに心配を掛けさせまいと頑張っているのが丸分かりだった。

「ん？　あ、これってボク様ちゃんが買ったお茶！？　茶々丸～、ダメだよ勝手に使っちゃ～」

「あ、すいません。美味しそうなお茶がこれしかなかったので……」
「む～。ま、いいよ。許してあげる。なんて言ったって、ボク様ちゃんの心は宇宙よりも広いから」
両手を広げて大袈裟なことを言うイリア。
その姿も、どこか悲痛だった。
エヴァはその姿に胸を締めつけられる。

「エーヴァにゃん♪　どうしたの？　テーブルに突っ伏してるとおでこが赤くなっちゃうよ？」
「……っ」

何の躊躇いもなく、いつも通りにエヴァに抱きつく動作。エヴァには耐えられなかった。

「なんで、お前はそんな風にしていられるんだっ！　私は、お前を、化け物にしてしまったんだぞ！？」

抱きつくイリアを振り払い、エヴァが涙目になりながらも声を荒げた。
それを、意外なものを見る様な目でイリアは見る。

「化け物なんて、言わないでよ。エヴァにゃん……」
「……すまな「エヴァにゃんは化け物なんかじゃないよ」……ぇ？」

エヴァはなにか幻聴を聞いたのかと思った。
だがイリアの顔を見ると、イリアはまるで怒ってますと主張してるかのように頬を膨らませてそこにいた。

「エヴァは化け物じゃないし、私も化け物じゃないよ。例え化け物

って呼ばれる者になったのだとしても、私は私だよ。はい、万事解決！　茶々丸～、ボク様ちゃんにもお茶ちょーだい」
「御安心を。既に用意してあります」
「はや！　でもそれって冷めてない……？」
「大丈夫です、先程淹れたばかりなので」
「そっか、ならいいかな～。ありがと、茶々丸」
「いえ」

エヴァは固まっていた。
イリアが真剣な声を出したことに対して、イリアが早くも吸血鬼になったという事実を無理矢理にでも受け入れようとしていることに対して、なにより、自分に化け物じゃないと言ってくれたことに対して。それはネギもアスナも同じだった。
エヴァを化け物だと思っていた訳ではないが、自分が吸血鬼になったという事実をこんなあっさり受け入れられるものなのか、と。
だが、それでもイリアが空元気な事に変わりはなかった。
恐怖があるのだろう。不安があるのだろう。それでも、自分たちに心配させまいと頑張っている様な姿は、あまりに儚いものに見えた。少し触れれば、壊れる様な……。そんな危い存在になってしまったのだ。

その晩、エヴァの部屋に一人の小さな影が侵入した。腰にまで届く銀に光る髪は暗闇でも、いや、暗闇だからこそ良く映えていた。
無論、イリアである。
枕を両手で抱え、エヴァのいる部屋に入ったのだ。
エヴァはと言えば、未だに寝れず、ずっと悩んでいた。これから、イリアをどうするべきなのかと。

ここに置いておけば必ず迫害される。これは決定事項だと、理解していたから。

「エヴァにゃん……」

「……？！　イ、イリア……？」

だから、そんな悩み事をしてるところに話しかけられたエヴァは焦った。今考えていたことを見透かされれば、ここから出ていけといってるも同然のことだったから。

「エヴァにゃん、今日だけでもいいから一緒に寝ても良い？」

「……どうしたんだ？」

「ちょっと、怖くって……」

「怖い？」

「吸血衝動に駆られて、ボク様ちゃんがボク様ちゃんじゃなくなっちゃうことが……。エヴァにゃんなら、ボクのこと抑えてくれるよね？」

エヴァはまた少しだけ胸を締め付けられるような気持ちになる。

「ああ、いいぞ」

断れるわけがなかった。

自分が吸血鬼にしてしまった。そんな強迫観念が、彼女を支配していく。

もぞもぞと、ベッドに入ろうとするイリアは怯える仔猫の様にも見えた。前までなら豪快にジャンピングベッドインを決めてくれたであろうイリアは、もうそこにいなかった。

エヴァはイリアの方を見ることができず、背中を向けた。

「ねぇエヴァにゃん」
「……なんだ？」
「エヴァにゃんが考えてること、当ててあげよっか」
ぴくり、とエヴァは体を震わせる。
「ボク様ちゃんのことを吸血鬼にしてしまったのは自分。そう言って、後悔してるんでしょ？」
エヴァは無反応。何も言い返せない。
ただ、呼吸が不安定になっていく。鼓動が速くなる。
嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。聞きたくない。
あるかもしれない真実。可能性。私ハ嫌ワレタ？
「もしかしたら、エヴァにゃんはボクに嫌われたって思ってるかもしれないね」
どきん、と。
今度は心臓が鳴る。
エヴァは、自分が聞きたいくない言葉が紡がれる気がして、眼を閉じた。
「そんなこと、あるわけないじゃん」
「……ぇ」
エヴァは小さく声を漏らす。イリアの顔を、思わず見る。そこには、喜色に溺れた笑顔があった。
「やっとこっち見てくれたね、エヴァにゃん♪」

「なっ……」
「私は、吸血鬼になったけど、怖くないよ。エヴァがいてくれるって、エヴァが抑えてくれるって言ってくれたから。だから、怖くない」

まただ、とエヴァは思う。口調が妙に大人しくなる。一人称が「ボク」から「私」になる。ここにいるイリアがイリアじゃない様な違和感に襲われる。

「エヴァにゃん、ちょっと起きて」
「私は起きてるぞ」
「そうじゃなくて……、体を起してって言ってるんだよ」
「……」

イリアの言うとおり、エヴァは体を起こす。既に体を起こしていたイリアはエヴァの背中に手を回し、体重を預ける。必然、抱きつく形になる。

「イ、イリア……、なにを……」
「私は貴女の従者。そう言ったのを覚えていますか？」
「なっ……？」

イリアが、敬語！？
そんな場違いな衝撃がエヴァに走る。

「いや、言ってなかったかも……？　まぁいっか。とりあえず、もう一度契約しましょう。私は貴女の従者です。一生の服従を誓いましょう。私は貴女を護ります。だからどうか貴女も私を護ってください。貴女の敵は私の敵、私の敵は貴女の敵であると誓いましょう」

囁くように、呟くように、紡がれていく。

「……とまぁ、こんなことなんて実問題どうでもいいんだろうけど」

さっきまでの真剣さはどこへやら。そこにはいつものイリアがいた。

「私はエヴァにゃんを許すよ。いや、実際許す許さないとかいう問題以前に怒ってないし」

エヴァは信じられないものを見る目でイリアを見る。

「許して、くれるのか？」

思い出すのは自分が吸血鬼になった日。

自分を吸血鬼にした人間が憎かった。殺した。自分は殺したのだ。

イリアは違うのか？　殺さないのか？　憎くないのか？

エヴァの思考は疑問で埋め尽くされた。

「言ったでしょ、許す以前に怒ってないって。さっき言った通り、ボク様ちゃんの心は宇宙よりも広いんだよ」

両手を広げ、大袈裟にふるまう今の姿に先程までの危うさは無かった。

――いつもの自然な笑顔だ。

「それに、吸血鬼になったってことはエヴァにゃんと一緒の存在になれたってことでしょ？　ボクは嬉しいくらいだけどな～」

そう言いながら、イリアはまた一段と明るい笑みをエヴァに晒す。

「……」

あり得ないと思った。自分だったら、きっとこんな笑顔になれないと。

「さ、エヴァにゃん、寝よ。茶々丸に聞いたよ。ずっとボクの看病してくれてたんでしょ。寝ないと体に毒だよ。ほら、寝て！」

無理矢理イリアに押し倒される。そのまま掛け布団を掛けられた。

懐かしい感覚だと思った。

まるで母親に寝かしつけられる様な、そんな感覚だとエヴァは思った。いつも通りのベッドなのに、いつもよりも温かくて暖かい。

ああ、イリアがいるからか。

イリアの顔を見ると、既に眠りについていた。

エヴァはその顔を見ながら思った。これからだ、と。吸血鬼となった者には避けられない道。吸血衝動。破壊衝動。殺人衝動。

その時は自分の血を分けてやろう。

その時は自分がイリアを抑えてやろう。

そう思った刹那、これまた懐かしい感覚がエヴァを襲った。

眠気だ。

瞼が自然と落ちていく。思えば、この数日本当に寝ていなかった。イリアの寝顔を見るたびに胸が締め付けられた。時折見せる苦しそうな表情には、何度も苦しめられた。それが脳裏に焼き付いて、寝ようとしても寝れなかった。苦しかった。本当に。

このまま起きなくても良いと思ったこともあった。そうすればイリアに嫌われることはないと思ったから。でも逆に、起きてほしいとも強く思った。答えが欲しかったのだろう。

イリアは私を嫌ってしまうのか、と勝手に結論付けるより、嫌いだと言ってくれてしまった方が楽なんじゃないかと。

だがイリアは嫌いだなんて言わなかった。イリアが一階に下りて顔を見せた時、エヴァは何故だと思った。嫌いだと言ってくれ、と。勿体ぶるな。嫌いなら嫌いと言ってくれ。

しかし、イリアは言わなかった。嫌いだなんて、一言も。逆に、抱きついたりもしてきた。それが、余計に悲しかった。いや、悔しかった。

気遣っているのだと、思っていた。いや、違う意味で気遣ってはいたのだろうけど。

ああ、もう寝てしまおう。考えるのも疲れた。イリアが嫌わないでいてくれた。その事実だけでいいじゃないか。寝て、また明日。イリアと戯れて、茶々丸と共に和んで、チャチャゼロはそれを見ている。そんな近い未来に、心を躍らせながら。

エヴァは眠気に抗うのを止めて、今度こそ瞳を閉じた。イリアを優しく抱きしめながら、夢の世界へと落ちていった。

現実（後書き）

今回はシリアス、ですかね？

その後

朝起きると、エヴァにゃんは既にいなくなっていた。それが少し寂しいと思いながらも、一階のリビングへ下りる。

「あ、イリア。おはよう。本当にもう大丈夫なの？」

「おはよー、イリア。まだ辛いようなら今日も無理しないで寝ててもいいと思うけど……」

いや、それ以前になんで二人がここにいるのさ。アスナ、お兄ちゃん。

「うにー、大丈夫だよ。それに数日の間体動かしてなかったんだから、ちょっとくらい動かないと」

とりあえず心配して来てくれたんだろうし、これくらいは言わないとね。

「エヴァにゃんは？」

「マスターは学園長室におられます。呼びもどしますか？」

「茶々丸、どこから出てきたのさ……」

「ロボですから」

便利だね、ロボ。

「別に呼びもどさなくても良いけどぉ……っていうかなんで学園長室？」

ボクのことを報告に？

いや、エヴァにゃんはそんなことしないか。そんなこと報告すればボクはここの魔法使いに追い出されるだろうし、なにより『めんどくさい』の一言を言って報告なんてしないだろうから。
それじゃあなんだろ。数日間ずっと休んでたから学園長が怒ったとか？　あの学園長が怒るところなんて想像できないけど……。

「とりあえず、学校行く準備しなきゃ……。茶々丸、朝ごはんある？」
「はい、勿論です」

茶々丸がキッチンからご飯を運んで来てくれる。本当にいい子だ……。

「ありがと、茶々丸」
「いえ、イリアさんのためですから」

微笑みながら言う茶々丸はやっぱりロボには見えないよね～。

学校に行くと同時にタカミチが真剣な顔をしながら学園長が呼んでいると言った。
嫌な予感を引きずりながら学園長室に入る。

「失礼するよ、おじいちゃん。何かボク様に用？」

できるだけいつもを装いながら学園長に問う。
ボクと一緒に来ていたタカミチは、すぐに学園長の隣に立つ。
エヴァにゃんもいると思ったんだけど……いないみたいだね。

「うむ……数日前のことじゃ。多くの鬼が召喚されたのをご存知かのう？」
「うん、エヴァにゃんから聞いたよ。その時は少し気分が悪かったから現場には行けなかったんだけど……、それがなにか？」無論嘘だけど。
「いや、その鬼の方には何も問題はないんじゃ。問題なのは、その鬼が現れた後。突然現れた驚異的な魔力のことについてじゃ」
やっぱり固有結界の話かな？
てかあの鬼を『なにも問題ない』で片づけちゃうんだね……。
「ふいーん……ボク様ちゃんそういうの鈍感だからなぁ……。残念だけど、そんな魔力知らないよ」
「まぁ結論を急ぐでない。高音君……この前いた魔法生徒がな、その現場を目撃していたそうじゃ」
「……」
「そこに、イリア・スプリングフィールド……。君がおったと言っておるのじゃ。はて、おかしいのう……。イリア君、何も責めているわけじゃない。正直に答えてくれんかのう？」
どうしたらいいんだろ……。
はぐらかす？　それとも正直に言う？
ううむ、悩みどころ。しかし悩めば悩む程相手には怪しまれる。
「……残念だけど、やっぱりボク様ちゃんなにも知らないよ」
「じゃあ、この高音君の報告は嘘と？」
「別に嘘だなんて言ってないよ。幻覚、幻視。人違いに誤認、見間違えに錯覚。他にも幻影。可能性は無限大って言うでしょ。高音ちゃんが見たのはボクだったけどボクじゃなかった。ボクに見えたけ

ど、ボクじゃなかった。ただそれだけのことだよ」
「ふむ……」
「でも、嘘の報告って言うのも強ち間違いじゃないかもよ？」
「なに？」
「この前タカミチに抱かれた時、高音ちゃんボクのことをきっと『立派な魔法使いになる気が無い』って思った筈だよ。そして何よりボクは立派な魔法使いの事を馬鹿にした。きっと高音ちゃんはボクを嫌ってる。だから、嘘を言った。ボクがタカミチを殺そうとした風を装ってね」

強ち間違いでもないだろう嘘を言う。
タカミチは心の中では動揺してるみたいだね。そりゃそっか。こんなペラペラと嘘を述べていくんだから。

「なるほどのぅ……、分かったわい」
「じゃ、話はこれだけ？　早く教室行きたいんだけど……」
「ガンドルフィーニ君の報告によると、タカミチ君を圧倒しているイリア君がいるはずだったのじゃがなぁ……」

……。
しまった。動揺してしまった……。

「ガンドルフィーニ先生が？」
「うむ、言い忘れておったな……。高音君の他にも其処にはガンドルフィーニ君がいたんじゃよ」
「……チッ」
「む……イリア君？」
「ああ、なるほどなるほど。分かった分かった。ボク様ちゃん分かっちゃった。おじいちゃんもボクをここから追い出したいんだ？　それともボク様ちゃんに監視を付ける良い口実探しかな？　それと

もそれともボクをここの操り人形にするための仕掛けかな？　ガンドルフィーニ先生みたいな人ならやりかねないね」

あ、これ演技だよ？
これがボクの本性とかそういうわけじゃないからね？

「イリア君？　……なにを勘繰ったかは知らんが、安心せい。追い出そうなんて考えていないし監視もする必要がない。操り人形なんてもっての外じゃ」
「じゃあなにが言いたいのさ」
「……わしは、君に本当のことを言ってほしい」
「どうして？」
「ふぉ？　どうして、とは？」
「ボクは本当のことを言ってるよ？　本当も嘘も無い……。おじいちゃんは高音ちゃん達の言うことしか信じてくれないの？」
「む、むぅ……そういうわけではないのじゃが……」

涙目になって学園長を見る。
偽りの涙じゃないよ？　正直意外だった。ここまでボクが信用されてないとは……。

「……すまなかった。では、教室に戻ってよいぞい。数日顔を見せていなかったのだ、生徒たちも寂しいじゃろうしな」
「はい……。失礼します」

はぁ……疲れた。

「あ、イリア先生や。久しぶりやな～。風邪はもう治ったんですか？」

教室に入る前の廊下で会ったのは意外なことに亜子ちゃんだった。
まぁ、会ったことが意外というより話しかけたことが意外かな？
亜子ちゃんとはあまりお話とかしてなかったからね。

「うん、もう大丈夫だよ。でもそっか……風邪ってことで伝わってたんだね」
「珍しくエヴァンジェリンさんが話しかけてきたと思ったら『イリアは風邪をひいたから数日の間出れん』ってね？　実際は風邪とちゃうんですか？」
「ううん、風邪だけど熱が酷くてね～……。もうやんなっちゃうよ」
「はは、イリア先生仕事頑張ってはりますからね。ちゃんと健康面気をつけんからそうなるんよ？　ネギ君もおるんやから、効率的にやらなあかんよ」
「そだね～」

あのお兄ちゃん仕事と言う仕事をあまりしてなかったし。
デスクワークは殆どボクの仕事だよ。まぁ、授業の方は殆どお兄ちゃんが仕切ってるから、ある意味お相子なのかな。

「それじゃ亜子ちゃん。ボクちょっと高等部に用があるから、皆にボクが復活したって言っといてくれるかな？」
「うん、ええよ。でも亜子ちゃん言うの止めてや、なんや気恥かしいわ」

苦笑いで亜子ちゃんがそう言う。
あ、そうだった。前にも言われてたなぁ、ちゃん付けは止めてっ

て。

「まぁ、善処はしとくよ～。んじゃ、また後で」
「はい、体に気を付けて仕事するんやで～」

んで、高等部になんの用があるのかと言うと……。まぁ、皆さん既に感づいてると思うけど高音ちゃんのことだね。

「あ、瀬流彦先生？」
「お、イリアちゃん。おはよう、もう風邪は大丈夫なのかい？　……って、聞きたいところだったんだけどね……。タカミチさんから聞いたよ。本当に大丈夫なのかい？」

あれ、タカミチが？　何故？　ホワイ？
いや、いいんだけどね。瀬流彦先生、種別的差別はしないだろうし。

「うん、実のところまだ実感が湧いてないんだ……。もし吸血衝動が来たら、先生の血を飲ませて貰おうかな～」
「はは、善処しとくよ。でも気を付けてね。吸血鬼ってだけで快く思わない人、多いから」
「ん、分かってる。ありがと、ところで高等部の高音ちゃんがいる教室って……」

瀬流彦先生から情報収集完了。
ということで高等部にも侵入完了。

高音ちゃんがいる教室も見つけた。と言うわけで、呼びだし。

教室のドアを開ける。と、同時に教室内の喧騒がどこかへ逃げてしまったように静まった。

「あれ？　アレって噂の……」

「ああ、子供先生の妹の……」

「可愛いよねぇ。ああいう妹欲しかったなぁ」

なにやら聞こえるけど気にしない方向で行こう。

「高音ちゃん、ちょっと来てもらえるかな？」

「……はい」

階段の踊り場、そこで高音ちゃんに話を切り出す。

「高音ちゃん、ボクのこと、殺したいって思わない？」

「なにを突然……」

「殺したいと思っていないとしても、ここから出ていってほしいとは思ってるかな」

「……」

「ガンドルフィーニ先生をわざわざ味方につけてまで追い出したい？」

ここで少し、高音ちゃんから動揺が見えた。

タカミチを圧倒していたところを見たのだから、ボクと敵対することが何を意味するのかは理解してるはずだからね。

固有結界内に彼女たちの気配は無かった。かなり遠くから見ていたのだろう。

それでもあの朱槍の魔力は知ってるはず。

「学園長に相談したのが間違いだったのでしょうか。……ですが、情報（カード）的には私の方が優勢ですよ。イリア・スプリングフィールド先生」

「へぇ……、是非とも聞かせてほしいかな」

「貴女、なにをされたんです？」

「……なにをって？」

「貴女は一度大怪我を負った。だと言うのに《闇の福音》が何かしらの儀式だと思われるものをした瞬間にその大怪我は治った……。その儀式が治癒系術式でないのは確かです。こちらでそれは把握済み。ここで私とガンドルフィーニ先生はこう考えました。真祖の吸血鬼にするための儀式なのではないかと」

かなり飛躍した思考の持ち主だね。吸血鬼化の儀式だなんて、普通考えないよ。

忘れ去られた儀式な訳だし……。エヴァにゃんが言ってた白髪の少年。彼が何者なのか、結構気になる。

「なにか言ってはどうです？　もしかして、図星でしたか？　その場合、貴女は凶悪で下種な吸血鬼……死ぬ覚悟はおありですよね」

高音ちゃんが言うのと同時、数人の魔法生徒が転移してきた。ありえねー。魔法秘匿はどうしたのよ。

ていうかタイミング良すぎ。念話でもしてたんかね？

「高音ちゃん、血迷っちゃったかな？　君達がボクに手を出しさえすればその後はボクの正当防衛が成立すると思うけど？」

「……貴女を魔法使いの敵、吸血鬼と見なし、討伐させていただきます」

最早聞く耳持たないか……。
……あは、こっちも凄いタイミングだなぁ……。

「ねぇ、高音ちゃん。私の主が誰か知ってる？」
「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル……ですね」
「その通り。ボク様ちゃんのご主人様はエヴァちゃん。ここで質問だよ。エヴァちゃんって実は優しい人だったりするんだよね。その優しい人が、従者を見捨てると思う？」
「……っ！　皆さん、用心を！　《闇の福音》がきます！」

そう言いながら高音ちゃんは私の肩を掴もうとする。人質にでもする気なんかね？

「もう遅い。……それにしても、私のモノに触れようとしたな。貴様等の方こそ、死ぬ覚悟はあるんだろうな？」

うは、まったく、ボク様の御主人は場の雰囲気作りが上手いこと。

響く様な声の主は勿論このボクの御主人（マスター）、エヴァにゃん。魔力も殆ど封印されてる状態ながらも瞬動を行使。ボクと高音ちゃんの間に壁を隔てる様に立ちふさがる。
更にボクに触れようとした高音ちゃんの手を鉄扇で凪払う。

「くっ……」
「《来れ》」
「……アーティファクト……？」
「裂き狂え　『瑠璃色孔雀』」
「！？　な、なんですかこれは！」

黒から鉄色になった刃は、更に形を変え瑠璃色の蔦となる。瑠璃色の蔦は、高音ちゃんと他の魔法生徒をに絡みつく。狭い踊り場は、綺麗な瑠璃色に染まった。

「あ、貴女、分かっているんですか！？　私たちに手を出したのがばれれば、学園長は貴女を――」

「うるさいなぁ～。そんな心配されなくたって大丈夫だよ。これは立派な正当防衛。だよね、タカミチ」

「！？」

一つ上の階からタカミチが高音ちゃん達を見下ろす。

「ああ、そうだね。この件は、きちんと学園長に報告させてもらうよ、高音君」

「くっ……！」

「ねぇ皆？　この瑠璃色孔雀の蔦についてる蕾……なにか分かるかな？」

「……」

「魔力を喰らう化け物だよ。蔦に捕まったら最後、あなた達の魔力を喰らい尽す。この蕾が咲いた瞬間に、君達の敗北が決まる。何か言い残すことはあるかな？」

「……」

「い、いやぁ……！　離して！」

魔法生徒の一人が騒ぐ。

ううむ、なかなかかわゆい声で鳴くではありませんか。

そんな声で鳴かれるとイリアたんぞくぞくしちゃう。

「残念だけど、その申し出は拒否するんだよ。安心してよ。魔力を完全に失ったところで死ぬわけじゃないんだからさ」

こんなことを笑顔で言うボクに恐れを感じたのか、魔法生徒は顔を強張らせる。
そして――

――、一つの蕾が咲いた。

「ぁ……ぐ……」

一人の生徒がぐったりと項垂れ、気を失った。

また一つ、百合が咲く。

また一人、倒れる。

ボクはその百合の花を回収、口に銜え、魔力を吸収する。
味は無いけど、魔力が体の中に満たされていく感覚に癒されていく。

最後に残ったのは、さすがと言うべきか高音ちゃんだった。
高音ちゃんは疲れ切った様な顔で、既にこちらを睨む気力すら無い。
それもそうだ。魔力は精神力。精神を一気に削られて疲れない人間などいるはずないもん。

「タカミチ、この件についてはどう報告するのかな？」
「高音君を含む複数人の自分勝手な行動。邪推による殺人未遂というところかな。それにしても凄いアーティファクトだね……。僕でも勝てる気がしないよ」

「だってタカミチ、この前アーティファクト使ってないボクにコテンパンにされたじゃない。当たり前だよ」
「何気に酷いこと言うな、お前は……」
エヴァにゃんにそんなこと言われたくないけどね？
「まぁ、確かに手厳しいと言えば手厳しいけど、それが現実だね。僕も、もっと鍛錬を積まないと」
「なんならエヴァにゃんの別荘使えば？」
「昔は使ってたんだけどね……」
「どうしたの？」
「……エヴァとの修行は地獄の様な日々でした」
「エヴァにゃんなにしたのさ！？」
タカミチの顔が突然暗くなり、しかも口調が変わった！
「……大量の殺人人形を居合い拳による一斉掃討。その後すぐに咸卦法を一週間維持。更にその後私と直接模擬戦。それを、何十回と繰り返した様な……？」
だからこんなに老けちゃったのね……。
ボクにくれたブレスレットをあげれば良かったのに……。
「ん、高音ちゃんも気失ったかな。……さて、ゲートでも使ってこの子たちを保健室に運ぼっか」
いつまでもこの話をしていたらタカミチが極限鬱状態になりかねないからね。

それから数日が過ぎた。お兄ちゃんはなにやらはしゃいでいる。
エヴァにゃんに訊いたら、京都に父さんの隠れ家があると言ったらああなったそうだ。
う～ん、こういう時ほど、厄介なモノが付き纏うんだよなぁ。
とりあえずボクは修学旅行を休んでエヴァにゃんと過ごそうと思うんだよ。いいよね？

その後（後書き）

瑠璃色孔雀の能力ってこんな感じであってんのかな……？
エヴァの登場シーン、ホントは影のゲートからってしたかったんだけど、魔力封印されててできんのか？という疑問があった。しかし普通に登場するのも何かとな～、というわけで瞬動！　これでオッケイかね？ｗ

あ、それと感想でご指摘いただいたことですが、一応ここにも書いておきます。
投影魔術はあまり使いません。固有結界は、周囲に甚大な規模の被害が出るであろう技等を使う際に使わせていただきます。
更にイリアは一応転生者という設定です。前世の記憶、転生した記憶が無いと言うことで転生シーンは一切書いておりませんが……書いた方がいいでしょうか……？

修学旅行？

「失礼するよ、おじいちゃん」

修学旅行を来週に控えたボクに呼びだしが掛かった。
何事？　と思いながらも大体の予想はついている。
ちなみにあの時の魔法生徒はボクを見た瞬間逃げるようになっちゃいました。
ううむ、ボク様恐怖症？
更に言うと高音ちゃんは謹慎食らってたりする。
え？　計算通り？　なに言ってんのさ。ボクが高音ちゃんを謹慎させるために仕掛けたわけないじゃない。はは。

「うむ、イリア君。君に頼みたいことがあるんじゃ。お願いできるかのう？」
「ん？　うーん……内容による、かな」
「……まぁ、予想通りの返答じゃの。まずひとつ目。今年の修学旅行は京都ということは知っておるな？」
「うん」
「その京都なんじゃが……関西呪術協会の本拠地なんじゃよ」

ああ、そういうこと……。
ちなみにここ麻帆良は関東魔法協会とか言う場所なんだってさ。
一般人もいるのにね。
更に言うと関西呪術協会と関東魔法協会は仲が悪いらしい。

「それでな？　こちらに西洋魔術師の子供先生がいると言ったら、見事拒否されてしまったんじゃよ」

「じゃあハワイに行くの？　いいね～、ハワイなら皆の水着姿見られるかもだし！　更に那波ちゃんの胸を……」
「結論を急ぐでない……。向こうの長は一応「来て良い」と言っておるんじゃよ。ただ、向こうの過激派が修学旅行の邪魔をするかもしれん。だから生徒にその被害が出ない様にしてほしいということじゃ」
「ちぇー……、つまんないの」
「そんなこと言われてものぅ……。それでふたつ目じゃが……これをネギ君と共に西の長に渡してほしいんじゃ」

そう言って渡してきたのは一つの封筒。親書とか書かれてる。
……いやいや、いやいやいやいや、ダメでしょコレ。

「ボク達みたいな子供が親書を渡しに行くなんて、向こうから見れば馬鹿にしてるようにしか見えないと思うよ？」
「その際は君の実力を見せてやれば良いじゃろ」

うわ、投げやり。てかボクの実力って……。
このおじいちゃん、どこまでボクのこと知ってるんだろう……。

「とにかく、ネギ君にも言っておくが……わしはイリア君を頼りにしとるぞ」
「おじいちゃん……。そんなこと言っても好感度は上がらないよ……？」
「ふぉっふぉっふぉ、それは残念じゃ。まぁ、頼んだぞい。イリア君」
「……まぁ、分かったよ。確かに受け取った。期待に応えられるくらいには頑張るよ。……エヴァにゃんにはなんて言おうかなー……」
「まぁ、向こうでナニカ大きな事が起これればエヴァをそちらに寄こす。呪いを一時的に騙すくらいなら、わしでもできるじゃろうしな」

それはいいんだけど……なんでおじいちゃんは立ちあがってボクの頭を撫でてるのかな？
何かアレだよね、茶々丸とかエヴァにゃんにも頭を撫でられるけど、おじいちゃんに撫でられるって言うのはレアな体験だよね。

「そっか。ありがと、おじいちゃん♪」

やっぱり誰かに頭を撫でられるのは気持ちいい。

そんな流れでボクも修学旅行に行くことになった。
うは、マジか。
教室入ると木乃香が一番に話しかけてきた。

「あ、おはよーイリアちゃん。どうしたん？　なんか疲れた顔しとるけど……」

う～ん、そんなに顔に出てるかな？

「いや、なにも無いよ。強いて言うならお兄ちゃんがデスクワークを全然やってくれないことに疲れてるかな……」

それでもこの前よりはマシだけどね？
ボクが数日寝てる間は全部仕事をしてたって言うから、ボクから強く言えないんだよねぇ……。

「あ、せっちゃん……」

「ぁ……」ぺこり。
「ん？　刹那ちゃん？」
木乃香はナニカ言いたそうな顔で刹那ちゃんを呼びとめたけど…
…頭を下げてすぐに教室から消えちゃった……。
……。
「刹那ちゃんとナニカあったの？」
「うん……昔は良く遊んでくれたんやけど……」
木乃香の話を纏めるとこうだ。
刹那は木乃香のお父さんの拾い子。最初の頃は良く遊んでくれていたらしいけど……。
川で遊んでた時、木乃香が誤って川に落ち溺れてしまったらしい。その時刹那ちゃんが木乃香を助けようとしたけど、結果的に刹那ちゃんも溺れてしまって二人を助けたのは木乃香のお父さんだったらしい。
その時から刹那ちゃんは何かと理由をつけて木乃香との接触を拒絶。
現在に至るらしい。
てか木乃香と刹那ちゃんって幼馴染だったの？　初耳だよ……。
「う～ん、見た感じ無視とかじゃないからな～。嫌いってわけでもないんじゃないかな？」
「そうかな？　そうだとええんやけど……」
こんな木乃香見るのは初めてかな～……。いつも笑顔だしね。
「ほな、朝のＨＲ始まるからまた後でな」

いつも通りの、しかし違和感が残る笑顔で木乃香は自分の席についた。

その日の放課後。茶々丸はメンテ。ログハウスの冷蔵庫の中には茶々丸が買い溜めしておいた食材を使ってボク様が料理中。茶々丸用に台所が高くなってるから作りにくい……。

「おい、どうしたんだ、イリア。表情が優れない様だが……」
「お、エヴァにゃんじゃあーりませんかー。なに、手伝いに来てくれたの？」
「……それで、なにかあったのか？」

うわ、口調とか手伝いとかの部分スルー！？
まぁいいけどさ……。

「ちょっと友人関係のお悩み相談されてね？　ボク様ちゃんも一緒に悩んであげてるのですよ～。あ、そうだ。エヴァにゃん、ちょっと言っておくことがあるんだけど……」
「ん、なんだ？」
「ボク、修学旅行に行くことになっちゃったから」
「……なん……だと……！？」
「文句ならおじいちゃんに言ってね☆」
「あんのクソジジィ――！」

叫びながらログハウスから出て行くエヴァちゃん。
……まさか今から文句を言いに行くつもりですかエヴァちゃん……。

そうそう、すっかりお忘れだったけど、ボク様が吸血鬼にされたと知った翌日の朝。エヴァにゃんがなんのために学園長室に行ったのかというとですね。

どうやらボク様に手を出した魔法関係者は誰であろうと八つ裂きにするって言ったらしいね。

『何故今頃そんなことを言いに来たのか』と疑問をもったおじいちゃんは、高音ちゃんに報告されていた『数日前』になにかがあったと踏んだんだろうね。それでボクに詰問しようとした。

ってところかな。

「さて、そろそろいいかな？」

そう言いながらコンロの火を消す。

今日の献立はキムチ炒飯にレタスのサラダ。デザートに今日帰る途中に買ってきた期間限定イチゴスウィーツセット。茶々丸がいればもっと作ってくれるんだろうけど、ボクが知ってる料理少ないからね……。

「ううむ、それにしてもエヴァにゃん行っちゃったし……どうしよっか……」

……家にはボク様一人だけ。これは、アレをやるチャンスかな～……。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

「あんっ……うっ……ぁっ……」

ログハウスの一室。一人の少女の喘ぎ声が、反響する。

「んっ！　……あふっ……んん！　はぁ……さすがっ、超さんお手製マッサージ器。っ……癒される～……」

まぁ、実際そんなオチなのだが。

しかし、その声だけを聞けばそれは完璧にＲ－１８指定されてもおかしくない。故に、これを聞いてしまった人は、勘違いすること間違いなしだった。

時は数分遡る。

「（おい茶々丸！　なんとかしろ、家に入れん！）」

「（マスターが勢い余って家を出ていきさえしなければイリアさんはこんな不純なことを……）」

「なっ！？　（……私か？　私のせいなのか？　これは！）」

エヴァは大声を出してしまい、口を押さえながら言う。

メンテから返ってきた茶々丸と学園からの帰り道に偶然会った。それはいい。だが帰ってきて何やら声が聞こえることに気付いたエヴァと茶々丸は耳を澄ませて……。

ログハウスの外。なんということだろう。イリアの声は外にまで漏れていた。

（それにしてもイリア……、まさか欲求不満か？　だがこの家に男はおらん……。イリアのためになにかできることは……なにもないのか！？）

真剣に考える。

現在進行形系で癒されてるイリアは、エヴァがこんなことを考えてるだなんて思いもしない。

（私で良ければ相手になってやらんでもないのだが……）

そんなことまで考えだす始末だった。

イリアが十歳だということを完全に忘れている。

いや、実問題年齢は関係ないのだろうけれど。たかが十歳されど十歳。小学三年生で体と言うものに興味を持つ者もいると聞く。

時に外国では十歳にして子を孕んだ人もいるらしい。

「（ええい茶々丸！　取り敢えずお前から入れ！）」

「（いえ、イリアさんの穢れた姿なんて私は見たくありません。ここはマスターが……）」

そんな時だった。イリアの、喘ぎ声以外の声が聞こえたのは。

「んっ！　……あふっ……んん！　はぁ……さすがっ、超さんお手製マッサージ器。っ……癒される～……」

「（……）」

「（……）」

茶々丸、エヴァ。共に沈黙。

頭の中は既に真っ白。自ら考えていたことを、削除できるもんならしたいと思った。茶々丸ならそんなことも容易いのだろうな～とも思った。

～イリアＳｉｄｅ～

「お～、おかえり、んっ、エヴァにゃーん。あんっ、……茶々丸も帰ってきたんだね～」
「……」
「……」
「え、なに……？」

帰って来たと思ったら突然脱力しちゃったよエヴァちゃん。茶々丸も心なしか安心しきってる顔をしている。なにかあったんかね？

「まぁ、とりあえず晩ご飯食べよっか。ちょっと冷めちゃったかな？」

マッサージ器の電源をｏｆｆにして足を床に着ける。
それにしても超ちゃんは良い仕事をしてくれたよ、うん。

そして時間は過ぎて修学旅行。朝は六時に出勤。集合時間より五分早い八時五十五分に到着。
そういえば朝に学園長室に訪れたら頭を包帯グルグルしてたね。エヴァちゃんにやられたんかね？

「お、イリア先生。やっと来ましたな」
「あ、おはようございます。新田先生、瀬流彦先生、しずな先生」
営業スマーイル。

「む……」
「ん、おはよ、イリアちゃん」「おはようございます、イリア先生」
そういえば新田先生は娘さんがいるそうです。最近は夜遅くに帰ってくることも多いらしく、ボクみたいな娘がもう一人欲しいってぼやいてたのを聞いたことがある。
……それを利用しようだなんて考えてないけどね？
「あ、おはよーイリア先生」
「おはようございますです」
「お、おはよーございます」
「ちょっと先生聞いてよー。この三人、枕が変わると寝れないからってマイ枕持ってきてるんだよー」
「むむ、お仲間ですな！　ボク様もマイ枕持ってきてるよー！」
「ええ!?　先生まで!?」
そんなに驚くこと無いでしょ祐奈ちゃん。
常識だよ！
「せんせーのはカピバラさんですかー？」
「そういうのどかちゃんのはカバさん……？」
「クマですー……」
「そうなんだ、可愛いね！」
そんな談笑をしてる間にも、電車にのる時間の九時五十分になった。
「あの、イリア先生。エヴァンジェリンさん他二名が欠席なので六班が私とザジさんだけになってしまったのですが……」

む？　これは……チャンスかな？

「じゃあ、アスナー！　五班に刹那ちゃん入れてほしいんだけどいいよね？」

「うん、オッケーよイリア」

「あやかちゃんはザジちゃんをよろしくできるかな？」

「ええ、構いませんわよ」

よし、これで刹那ちゃんと木乃香が一緒の班になるね。ザジちゃんは責任感が強いあやかちゃん。

「あ、せっちゃん。一緒の班やね……」

「ぁ……」ぺこ。

……むぅ。これはなかなか……。

ちなみに修学旅行の班員はこんな感じ。

一班。鳴滝風香・史伽、柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子。

二班。四葉五月、春日美空、長瀬楓、超鈴音、葉加瀬聡美、古菲。

三班。朝倉和美、村上夏美、長谷川千雨、那波千鶴、雪広あやか、ザジ。

四班。大河内アキラ、龍宮真名、和泉亜子、明石祐奈、佐々木まき絵。

五班。宮崎のどか、早乙女ハルナ、綾瀬夕映、神楽坂明日菜、近衛木乃香、桜咲刹那。

欠席者。エヴァンジェリン、絡操茶々丸、相川さよ。

……疲れた。こうして全員の名前を挙げるとかなり疲れるね？

電車内、お兄ちゃんが見回りしてる時にそれは起こった。ボクが

瀬流彦先生の膝の上に乗ってはしゃいだりしてる時にそれは起こった。

カエル騒動。

お菓子とか水筒の中身がカエルでいっぱい♪

「?!　い、いやぁ……服ん中にカエルが――――!!!!!　お兄ちゃん!　助けてー!」

実はカエル、意外と苦手だったりします、はい。

「だ、大丈夫、イリア?」

「うにゅ～……、大丈夫なんかじゃないよ～……」

まさかこれが西からの妨害……!?

なんということ……ボク様にとっては凄い大変なことじゃないか……。

「はっ!　そういえば親書は!?」

今服の中に入った際に盗られたかも!?

と思ったが心配ご無用だったらしい。ちゃんと服の中に入っていた。

……む。式……。しかも燕ですか。

軽く潰しておいてあげよっか。

「《来れ》　射殺せ、『神槍』」

黒い刀から、鉄色の小刀になる。

始解をした瞬間、本当に瞬間。一瞬で伸びて一瞬で元に戻った。

数秒遅れて燕の形をした式は無残に真っ二つの紙に成り果てた。

瀬流彦先生と新田先生に手を繋いで貰いながら京都探索。
え？　なんか幼児化してないかって？　なにを言ってるんですか、こっちのボクが素のボクですよ。
なんせ、これまでに修学旅行どころか動物園にすら行けなかったんだから。
こういう場所ではしゃいじゃうのは、ボクがまだ十歳だから仕方のないことなのですよ。

「あれ、新田先生？　なんかお酒の臭いがしませんか？」
「む？　確かに……甘酒かね？」

いや、どうやら西の妨害の様です。とは言えないよな～……。
とりあえずネギ達が何らかの騒動にあってるのは目に見えている。ここから離れよう。先生たちに見つかったら厄介だろうし。

「新田先生、ボクあっちの清水の舞台ってところ行きたいんだけど、いいかな？」
「うむ、確かにここに来たのなら、あそこは見ておかなくてはいけませんね……。じゃあ、行きましょうか、イリア先生」
「うん！」
「（……新田先生、キャラ変わってない？）」

細かいこと気にしたら負けだよ、瀬流彦先生！

やっぱりと言うべきか。お酒の匂いの正体は西からの妨害だった。

そのせいで半数の生徒が酔い潰れると言う結果になり果て、予定よりも早く旅館「ホテル嵐山」に到着。
その旅館の休憩所で、あのオコジョとネギが話しているのを見つけた。

「あ、イリアの姐さん。真祖の力を貸してくれやせんか！？」

オコジョ黙れ。

「それで？　なにかあったの、お兄ちゃん？」
「う、うん……それが……」

お兄ちゃんの話を纏めるとこうだ。
西からの妨害・罠。オコジョはそれらを成功させる為のスパイがいると踏んだらしい。
そしてこちらに視線を送る人物。それが『桜咲刹那』だと言うらしい。

「オコジョ、この前言ったよね？　そういう結果だけを求める理解は理解じゃないって」
「た、確かにあの時いわれやしたけど……、けどほら！　兄貴の生徒名簿に京都って記されて……！」
「それは京都神鳴流だね」
「しんめいりゅう？」
「流派の一つだよ。魔を討つ剣技。刹那ちゃんがいつも刀を持ってるのは気付かなかった？」
「あれは竹刀じゃないの？」
「カモフラージュだよ。そんなのも分からないの？　お兄ちゃん」
「ううっ……」
「刹那ちゃんはスパイなんかじゃないよ。どちらかと言うとこちら

の味方。確か木乃香の警護をしてるっておじいちゃんに聞いたことあるよ？」

うん、間違いないよ。今日の朝聞いたんだもの。

「てかオコジョ、ボクの下着返せ」

「と、ところで兄貴。風呂には入らないでいいのか？！」

逃げた……。

まぁいいや。後でしっかり返してもらうから……ふふ。

「確かに、教員は早めにお風呂に入るよう言われてたし、久しぶりに一緒に入ろっか。お兄ちゃん」

「ええ！？　で、でも……」

「いいじゃない、兄妹なんだし！」

というわけで入浴。

ボク様十歳だから男湯でも大丈夫かなーとか思ったけどその心配は要らなかった。だって混浴なんだもの。

「おにいちゃーん」

「うわ！？　ちょ、い、イリア。なに抱きてついて！？」

タオル？　要らない要らない。兄妹だし。

今現在ここは貸し切り状態。だから思いっ切り甘えモードで行きたいと思っていたりいなかったり。

そんな時、

――ガラガラガラガラ。

と、戸の開く音がした。

「ん？　他の先生かな？」
「ううん、どうやら刹那ちゃんみたいだよ？」
「わわ？！　で、でもなんで？」

今の時間は教員がお風呂に入る時間。の筈だけど、刹那ちゃんからすれば皆と仲良くお風呂という訳にもいかないのかな。性格的に。

「（わー、背は低いけど、綺麗だなー……）」
「（ああいうのをヤマトナデシコって言うんだぜ、兄貴）」
「むー、ボクだって肌は白いもん……」
「（ちょ！？）」
「（なに普通に声出してんすか姐さん！？）」

お兄ちゃんこそ何を焦ってるのさ……。

「む……気配……」

あ、刹那ちゃん？　なんで点灯を消しちゃったのかな？
なんで刀構えてるの？　え？　ちょ、待っ！

「斬岩剣！！」

ちょ――――！　なに岩斬ってんのさ！？
弁償代とか払えんの、刹那ちゃん？

「うわ！？　くっ……『風花・武装解除』！」

お兄ちゃんはお兄ちゃんでなに応戦してんのさ！？
というかその初心者用杖、いつの間に持ってたの……？

いやそんなことは今はどうでもいい。
確かに刀を飛ばしたのは得策だろうけど、でも、神鳴流は武器を選ばな――。
「っ!?」
「何者だ、吐かねば捻り潰すぞ!」
刹那ちゃん……どこ掴んでるのさ……。
「あのー刹那ちゃん? 離してあげても……」
「え、あれ? イリア先生……って、ネギ先生!? あっ……いえ、これは違! 相手の弱点を潰すのが戦闘の基本故……」
「まぁまぁ刹那ちゃん、今のは見なかったことにしてあげるから、ね?」
「は、はあ……」
「きゃあああああ!!」
「今のって……木乃香?」
「お嬢様!!」
「あ、待って!」
「待つのはお兄ちゃんだよ」
「ぐえええ!?」
服が無いから無理矢理首の皮膚を引っ張って止める。
「い、痛いよイリア! なにするのさ……」
「お兄ちゃんこそなにしてるのさ……。木乃香がいるのは女子更衣室だよ。覗きなんてお兄ちゃんにはまだ早いよ!」

そんなこんなで、刹那ちゃんは木乃香を助け、しかしすぐに露天風呂を後にした。
木乃香と刹那ちゃんの関係を知ったアスナとお兄ちゃんもナニカ協力できないかと思案しているらしい。

旅館の入り口。札を貼ってる刹那ちゃんを見つけた。

「御苦労さま～刹那ちゃん。人払いかなにか？」
「あ、はい。式神返しです。これを貼れば、式神を持った者はここを開けることができません」

ほえ～、便利なものもあるもんだね。
その後、ロビーのソファに座ってお話タイムになった。

「……木乃香とは、どうして疎遠に？」
「……お嬢様を、私は護れなかったことがあるんです。剣の鍛錬もあったし……それに、私の様な者がお嬢様の隣にいるなど、以ての外で……」
「護衛ってさ、難しいでしょ」
「え？」
「特に刹那は厳しいかもね。ごめんね、刹那ちゃんの都合も知らずに、おじいちゃんに聞いちゃったんだよ。刹那ちゃんの立ち場と、その正体」
「……っ！？」

刹那ちゃんは烏族と人間のハーフ。烏族とも人間とも交じれなかった彼女を拾ったのが、西の長であり木乃香の父親である近衛詠春。
ナギの戦友。

「なら、分かっているでしょう。私は化け物です。お嬢様のお傍にいることなど、許されない」
「でも木乃香は傷ついてるよ」
「え……」
「木乃香のこと、ちゃんと見てきた？　刹那と話をしようとしたけど、ダメだったときの表情とか、ちゃんと見てる？」
「……」
「とっても悲しそうな顔してた。寂しそうでもあった。親友のアスナが傍にいても、寂しそうな表情は変わらなかった。その時点で、刹那は木乃香にとって掛け替えのない存在なんじゃないかな」
「……でも、やはり私は化物です」

ううむ、なかなか手強いなぁ、刹那ちゃん。
奥の手でも使ってみようかな……。

「もし刹那ちゃんが化け物なら、ボクも化け物だね」
「へ？」
「ボクね、吸血鬼になっちゃったんだよ。遂この間ね。麻帆良の治癒術師じゃ直せない大怪我を負って、仕方なく吸血鬼に、ね。でも、それでもお兄ちゃんやアスナはいつも通りに接してくれてるよ」
「それは、少しでも裏に携わっているからなんじゃないでしょうか……」
「そうだね……それもあるかもしれない。けどさ、刹那。化け物になっても、ボクの心は前と変わってないよ。何も変わらない。クラスの皆は大好きだし、お兄ちゃんだって好きだよ。それに、ボクにとって刹那やボクは化け物じゃないんだよ」

そのセリフに刹那は怪訝そうな顔でボクを見る。

「だって、化け物っていうのは、理性を持って人を殺して愉悦に浸る者のことを指す言葉だと思ってるもん。ボクは人を殺して愉悦になんて浸れない。それは、刹那ちゃんも一緒なんじゃないかな」
「は、はい。それは勿論……」
「なら、刹那ちゃんは化け物じゃない。だから、木乃香ともなるべく接してあげてね。心身共に護ってこその護衛だよ、刹那ちゃん」
「……そう、ですね。あと、できればちゃん付けは……」
「むー、刹那ちゃんもか……。分かった。じゃあ刹那、ボクはそろそろ部屋に戻るよ。瀬流彦先生に心配かけちゃうからね」
「はい、おやすみなさい」
「ん、おやすみ」

部屋に戻ると、露骨に心配された。
普通に散歩してただけということにしたけれど。
そんな訳で夜。既に就寝時間を過ぎた時間。先生として見回りしなくてはいけないのだが、新田先生と瀬流彦先生、まさかのしずな先生にまで止められた。
旅館内とはいえ不審者がいるかもしれないからだそうだ。不審者なんかいてもボク様大丈夫なんだけどなぁ……。
ちなみに何故か新田先生と瀬流彦先生の取り合いになった。なんの取り合いかと言うとボクの取り合いだね。なんでやねん。

最終的に瀬流彦先生の部屋で寝ることになったんだけどね。

修学旅行？（後書き）

イリア・スプリングフィールドで脳内メーカーを調べてみたら「愛」が大半を占めていて吃驚した。

さて、そんな訳で修学旅行編スタートですね。
誤字脱字等ありましたらご指摘ください。
感想などもお待ちしております。

修学旅行？

目が覚めた。なにか嫌な予感がしたから。
瀬流彦先生は寝てる。一応見回りに行こうかなとして部屋を出る。
廊下に出るとアスナと刹那がいた。

「どーしたの？」
「木乃香が攫われたの。イリアも手伝って！」
「ふぇ？　うにゃあぁぁああ！？」

そんな訳でアスナに強制的に連れ出されたボク様ちゃんなのであった。

「あれ、お兄ちゃん？」
「ネギ！？」

木乃香をさらったと言う猿女を追いかける途中、猿の式に襲われてるお兄ちゃんの姿があった。
なにしてるのさ……。

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　『武装解除』」

加減をした武装解除でお兄ちゃんの体に群がる猿を吹き飛ばす。

「大丈夫？　お兄ちゃん」
「う、うん……。でもごめん、木乃香さん助けられなかった……」

「後悔は後だよ。ほら、すぐ追おう」

追いかけて数分、猿女の背中は見えてるけど、なかなか追いつかない。

風の魔法の射手で取り押さえることもできるかもしれないけれど、呪文を始めようとすると式の猿がどこからともなく現れ邪魔をしてくる。

そのせいでなかなか捉えることができない。焦りだけが先行く。

「や、やばいぜ兄貴！　駅の中に逃げ込まれる！」

「……ううん、魔法秘匿とかの方は大丈夫」

「え？」

「人がいないよ。終電間際にも関わらず、ね」

「あ……確かに……」

恐らく、人払い。

用意周到な計画的犯行ということだね。

まったく、厄介なことこの上ないよ……。

「魔法使ってでも追いつくよ！　電車に乗り込まれたら厄介だから！」

「う、うん！」

アスナと刹那は元より体力馬鹿だし、走りの速度は大丈夫。だけどボクとネギは魔法を使わなかったら歳相応の子供……。身体強化くらい、お兄ちゃんでもできるよね？

電車に逃げ込まれながらもギリギリで乗り込む。
しかし、安心するのも束の間。猿女がお札を取り出す。

「っ！　なんか来るよ、注意して！」

「ふふ……。ここまで追ってこれたのは褒めたる。けどこれは避けられへんよ……。《お札さんお札さん　ウチを逃がしておくれやす》」

そういうのと同時、札から流水が溢れだす。

「……っ？！　《来れ》　水天逆巻け……『捩花』！」

あぶなー……。浴衣の中にアーティファクト常備しといて良かった……。

始解と共に刀は三ツ又の矛になる。それを振るうと同時、水はボクの味方になる。

「な！？　なんやその矛は！　魔法具か……？」

「やあ！」

捩花をもう一振りさせる。流水はその動きに伴い、猿女に向かう。

「きゃあ！？」

「あ！」

ダメだ、方向転換！

……すっかり忘れてた……。

「い、イリア？」
「なんで水を戻したんだイリアの姐さん！！」
「今の状況じゃ木乃香を巻き込んじゃう……」
「あ……」

拮抗状態。相手はきっと、ボクの魔法具は『操る力』だと思っているんだと思う。
水だけじゃなく、炎も、風も……向こうが札を使っても、意味が無いと思ってる。
だからこその拮抗状態。
しかし、その拮抗状態が解かれるのは意外にも早かった。

電車が停まった。

扉が開いた瞬間に猿女は木乃香を抱いて逃げ出す。
……出遅れた……。

刹那やお兄ちゃんも同じく。アスナは何故か反応してたけど……。

駅内にも人払いの札を発見。ホントに計画性高いな～これ。

「な、なんで木乃香がこんな目に……」
「それはお嬢様の力にあります。お嬢様の力はかの英雄、ナギ・スプリングフィールドよりも多い。しかしお嬢様はそれにお気づきになられていない……。西の過激派にとって、都合のいい人材なんです」
「どういうことよ！？」
「つまり、利用ということです。簡潔に言えば、木乃香お嬢様のお力を使い、関西呪術協会を牛耳ろうとしてるんです」

……今回のこれは、おじいちゃんから聞いてたけど、ホントにこんなことになるとは思ってなかったボクの落ち度かな……。

「よーここまで追って来れましたな」

猿女は式である猿を脱いだ。つまり、ただの女になった。

「誰がただの女や！　なんならもう一回猿鬼を着てやりまひょか！？　ま、まぁええ。三枚目のお札さん、行きますえ」

「っ！　おのれ、させるか！」

刀を構え、突っ込む刹那。

……ダメだ。間に合わない。

「《お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす》　喰らいなはれ！　『三枚符術　京都大門字焼き』！！」

札から炎が生まれる。とてつもなく大きい炎。

それは大の字に広がり、突っ込んだ刹那を――

「うあっ！」

「桜咲さん！？」

ギリギリでアスナが助けた。

「アスナ、ナイス！　お兄ちゃん！」

「う、うん！」

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル……」
「ラス・テル　マ・スキル　マギステル……」
「「吹け　一陣の風　『風化（フランス）　風塵乱舞（サルタテオ・ウエレア）』」」

風が巻き起こり、大の字の炎を消す。

「な……!?　並の術者じゃビクともせん炎を……!」
「逃がしませんよ!」
「木乃香はボク達の生徒で、ボク達の友達なんだから!　それに、木乃香と刹那の仲の修復も、まだだしね」
「イリア先生……」

何感動してますみたいな目でボクを見てるのさ、刹那。
さて、と……。

「アスナは一応一般人。怪我はさせたくないから観戦ね」
「え!?　わ、私だってちょっとくらい……」
「ダメダメ。幾らお兄ちゃんと仮契約して身体強化とかできるからって……。そもそも、アスナが怪我して責任とるのはボク様なんだよ?」
「う〜っ……」
「だからここは任せて、ね?」
「分かったわよ……」
「じゃあ、刹那!　お兄ちゃん!　行くよ」
「うん!」「はい!」

捩花を元の姿に戻し、黒い刀身の刀で突っ込む。
その後ろに刹那とお兄ちゃんが続く。

「っ!　猿鬼、熊鬼!」

猿女が着ていた猿と、もう一つ、クマの式が女を護る様に立ちふさがる。

「『斬月』！」

鍔も掴もない、大きな刀に形を変える。
それを振りかざし……

「月牙……天衝！」

青い魔力の刃が猿鬼と熊鬼を両断する。

「なっ！？」

あともう少しで女に近づける、というところで邪魔が入った。

――ダンッ。
ビルの壁を蹴る音がしたかと思えば、そこには小柄な人影が――

「っ……」

――――ガキンッ。

一瞬、鉄と鉄が交わる。
反動でボクの体は階段のギリギリまで滑ることになる。痛……。

「先生！？」
「イリア！？」

「いったたた……。すんまへん、千草はん。遅れましたー……」

ボクと真逆。ビルのギリギリまで滑った……というか転がった相手がむくりと立ち上がりながら言う。

おっとりとした口調。

エヴァちゃんとは違う方向でフリフリした服装。

そして握られる二振りの刀。

「えーと、どうも、神鳴流です。それで、どちらがお相手してくれはるんです？」

「……？」

「どういう意味だ」

神鳴流と聞いて表情を変える刹那が問う。

「そのまんまの意味どすえ。どっちの剣士さんがウチと戦ってくれはりますの？」

「……刹那、ボクが行くよ」

「！？　で、ですが相手は神鳴流。ここは私が行った方が……」

「刹那はお兄ちゃんと一緒に木乃香をお願い」

「……はい、分かりました」

刹那がお兄ちゃんの方に言ったのを見てから、二刀使いの方を見据える。

「なんや、子供の方が相手どすか……」

「ごめんね、でも退屈はさせないよ。……ううん、戦う暇もなくしてあげる」

「……ほぅ、面白いどすなぁ。やれるもんならやってみい！」

神鳴流剣士がこちらに突っ込んでくるのを確認。
始解の言葉を言う。

「面を上げろ……『侘助』」

7の様な……鉤状の刀に変化する。

「なんや面妖な形の刀ですなぁ。そんなんで斬れるんどすか？」
「勿論、斬れるよ。刀は斬るためにあるんだもん。斬れない刀は刀じゃないよ」

討ち合う。
相手は二刀。一瞬二刀一対の刀を使おうかとも思ったけど、こっちの方が今は都合がいい。

「えい、やぁ、と～ぅ」

気の抜ける声とは裏腹に早くて重い斬撃が嵐の様に迫る。
だけど、こうして『侘助』に相手の刀がぶつかっている時点で既に相手の刀は使いものにならなくなる。

「どうしたんどす？　防ぐばかりじゃ勝てやしまへんよ？」
「大丈夫だよ。防御こそ最大の攻撃って言う刀だから」
「……？」
「ふふ」

――ガキィンッ。
また一つ高い音を立てて鉄と鉄がぶつかる。
と思ったら、ギィィンという鉄と鉄が擦れる音が鳴る。体が軽

いボクは簡単に吹き飛ばされた。
でもこれでいい。

「……どうかな？　そろそろ変化に気付くんじゃないかな？」
「なにを言うてはりますの？　小細工は神鳴流に効きまへんで」
「そうかな？　まぁいいや。この刀はね、特殊なんだよ。この刀にぶつかると、ぶつかった対象の重量が倍になっていくの」
「……？」
「一回討ち合ったら倍。二回討ち合ったらそのまた倍。三回討ち合ったらそのまた倍。君の刀は少なくとも十回、この刀に触れたよね？　じゃあ、どうなると思う？」
「っ！？！？」

突然、二振りの刀を離した。その二刀は重力に抗うこともできずに地面にめり込まれる。

「ついでに言うと、斬り合ってる中で君の服にもこの刀は触れてるから、気をつけてね？」
「っ！　ぎゃふ！？」

変な悲鳴を上げながら神鳴流は地に倒れ伏した。
首を上げてこちらを見る。
瞬動で地に倒れ伏した神鳴流剣士の近くに移動。そのまま神鳴流剣士に跨り、

その鉤状の刀を、首に引っ掛けた。

「重さに耐えかね、詫びるように自らの頭（こうべ）を差し出す、ゆえに侘助……。……これで、この刀を引き上げれば君の頭は体にさよならを言うことになるんだけど……どうかな？　名前くらいなら聞いてあ

げてもいいよ」
「ふっ。そうどすなぁ。ここに、あの子がいなければ勝負はここでついとったな」
「『障壁突破・石の槍』」
「っ！？」

空中から石の槍が一本。
斬魄刀を普通の形に戻し横っ跳び。ギリギリで槍を避ける。
刀を普通に戻したことで佗助の効果は無効。神鳴流剣士が地面にめり込まれた二刀を拾いながら立ちあがる。

石の槍が降ってきた方を見ると。
――心臓が一つだけ、大きく高鳴った。

「白髪の……少年？」

エヴァにゃんや茶々丸が言ってた、ボクを吸血鬼化すれば良いと提案した、張本人。

「……久しぶりだね、イリア・スプリングフィールド。いや、君は覚えていないか……」
「ううん、エヴァにゃんから聞いてるよ。石の槍を使ってきたってことは……あの時ボクのお腹に岩で穴を空けてくれたのは君ってことでいいのかな？」
「そうだよ」

案外あっさり認めちゃうのね……。

「ついでに言うとあの鬼達を呼んだのも僕だ。君と君のお兄さんの力を測るためにいったんだけどね……」

「あの時、なんでボクを助けたの？」
「まずは謝るよ。君のお腹に似合わない穴を空けてしまったことを、ね。本当ならあの場で君と君のお兄さん……ネギ君を殺すはずだったんだけど。君を見た瞬間、殺すのは惜しいと思ってね。だから吸血鬼化を提案したんだ」

意外と喋ってくれるのね……。
なんか調子狂っちゃうな～。
いや、だって、ねえ？　意外と美形じゃん？

「あはっ。本当は殺してやろうとか思ってたんだけど……その気も失せちゃったかな」
「……その理由を訊いても？」
「いや、だってさ。簡単に謝ってくれちゃったから拍子抜けって言うのかな？」
「ああ、そういうこと」
「そっ、そういうこと」
「僕はてっきり、殺す価値もないとか、興味もないとか思われたのかと思ったよ……」
「どっちかと言うと興味津津かな」
「っ……」

瞬動で白髪の少年の近くまで近づく。浮遊術も既に習得済み。
どれくらい近くに行ったかと言うと鼻と鼻がぶつかりそうなくらい近く。

「お名前、教えてくれるかな♪」
「……フェイト・アーウェルンクス」
「フェイト、か……。意味は運命だっけ？　良い名前だね」
「君の名前は教えてくれないのかな？」

「え、だってもう知ってるでしょ」
「……」
「なに残念そうな顔してるのさ……」

無表情だけど、しゅん、となったのがなんとなく分かった。
雰囲気ってヤツかな？

「ところで、こんな近くに来ちゃっていいの？　今度は胸に穴が空くかもしれないよ」
「いや、だってもう吸血鬼だし……。まぁ、それ以上にフェイトのことを信じてなんだけど」
「へぇ、信じてもらえてるのか。嬉しいね」

そう言うことはもうちょっと嬉しそうに言ってほしいけど……。

「ところでフェイト？　なんでこんなところに？」
「あそこにいる女性……天ヶ崎千草に雇われてね。ついでにこの前できなかったネギ君の観察かな」
「ふぅ、ん。そっか。ボクに会いに来たからって言ってくれたら少しサービスしてあげたんだけどなぁ」
「へぇ、どんなサービスなのかな？」
「イリアたんの喘ぎ声無料視聴権？」
「……」
「ちょっとした冗談じゃん、そんな呆れた目で見ないでよ……」
「いや、聞かせてもらいたいなって思っただけだよ」

ちょっとした悪戯を思い付いた子供の様に、少しだけ笑いながら。
フェイトは手を伸ばす。
ボクに、触れようとして――――。

「てやっ！」

その手をボクが叩いた。

「っ……。なんのつもりかな？」

「さっき言ったでしょ。ボクに会いに来たからって言ってくれたらサービスって」

「君に会いに来たから」

「ボクのセリフを言っただけじゃん。それじゃあ最低だよ」

「君に会いたかったから来た」

「無感情すぎて最悪だよ……」

「イリアの顔を見たかったから」

「名前を呼んだのは良いけどやっぱり無表情すぎて何とも言えない。もう少し」

「イリアと一緒に月を見たかったから」

「もうめんどうだからそれでいいや」

てかなんのコントですかこれは。

あれ、今思ったけどそれでいいやって言っちゃったけど……なに、喘ぎ声聞かせないとダメな感じですか？

「……あっちはもう終わりそうだね。近衛木乃香の誘拐は失敗。残念だけど、一回お別れだ」

「じゃ携帯番号教えてよ」

「……携帯番号？　教えてどうするの」

その前に携帯持ってるのね……。

「突然フェイトの声を聞きたくなった時のため、かな」

「そう。それならいいや。はい、メモ」

「……準備がいいね。ボクはメモ用紙持ってないんだけど」
「はい、これに書くと良いよ」
何枚メモ用紙持ってんのさ。
「ん～、はい。これ番号ね。修学旅行中には掛けてきちゃダメだよ。平日の昼間とかもダメ。昼休み中ならいいけど……。夜は大丈夫かな」
「分かった。それじゃ、僕は千草さんを止めてくるよ」
「いってら～」

……あれ？　フェイトが向こう側にいるってことは、もしかして戦うってことは避けられないんじゃ？
……勝てる気しないんですけど……。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

ネギは優勢だった。刹那と共に符を使う千草を追いつめていた。
刹那の手により木乃香の奪還は成功。
それで尚戦おうとする千草を止める者が現れた。

「千草さん。もう帰るよ。こちらの部が悪い。犬上小太郎を連れて再戦しよう」
「新入り……。ちっ、分かった。そうしよう」
ネギの心臓が一つだけ高鳴る。
その白髪の少年は、イリアを吸血鬼化をした本人と言っても過言

ではないのだから。

「あぁあああっ！」

ネギは突っ込んだ。

相手を殴ろうと、そればかりを考えて。

「……はぁ。呆れるね。その程度の力量で僕に拳を入れようと？《石の槍》」

「……！！　くっ……がぁ！」

ギリギリで体を捻り、石の槍を避けるが、無理な体勢だった。故に地面に転んでも不思議ではなかった。

（今の魔法。やっぱり、アイツがイリアを刺した本人……。だけど、ならどうしてイリアを助けようと？　殺すのは都合が悪かった？　そもそもなんで殺そうとしたんだ？）

思考ばかりが優先され、ネギは立ちあがることを忘れていた。

「兄貴！」

カモミールの声で意識が思考から浮き上がるも、さっきまでいたはずのフェイトと千草はいなかった。

水のゲートで逃げたのだ。

ネギのすぐ近くではいつの間にかアスナが来て心配していた。寝ている木乃香を抱いた刹那もそれは同じ。

だが、イリアだけは違った。

ネギの方を見ず、月だけを見ていた。

「イリア……？」

思わず名前を呼んだ。

何故かネギは恐怖した。ネギの知らない所へイリアは行ってしまう気がして、落ち着かない。

「ん、お兄ちゃん。大丈夫？　ダメだよ、なんの策も無しに突っ込んじゃ」

やっとこちらを見たイリアはしかし、どこか遠くを見ている様に見えた。本当に怖かった。

「……イリア」

「ふえ？　お、お兄ちゃん？」

「ちょ、ネギ、なにして！？」

「ネギ先生！？」

無自覚の内に、イリアを抱きしめていた。

しかし周りから見ればそれは突然の行動。困惑するのも無理はなかった。

「どこにも、行かないでよ」

「お兄ちゃん……？」

そのセリフにイリアは疑問を持った。

何故そんなことを言うのか、と。

「あ、ごめんイリア！　今のはその……」

自分がなにをしたのかということを自覚すると同時に、ネギはイ

リアを解放する。
穴があるなら穴に入りたい。いや、実の妹を突然抱きしめ、更に意味不明なことを言ったと言う事実を無かったことにしてほしいと思った。

「うん、どこにもいかないよ」

僅げにそう言ったイリアの声は、どこか響くようだった。
そしてイリアは腕を伸ばし、ネギに抱きついた。
イリアの行動に、少し戸惑いを見せながらも、ネギはイリアを包み込むように抱き返した。

「こ、これが日本と外国の違いなのかしら、桜咲さん……」
「さ、さぁ……？」

恋人同士ならいざ知らず、兄妹同士で抱き合う光景なんて見たことが無いアスナは呆然と言った。
刹那なんかはその光景を見ると言うだけで顔を赤くしている。アスナよりも酷い有様だった。

そんな時、

「んっ……あれ、せっちゃん？」

木乃香が目を覚ました。

修学旅行？（後書き）

ストックが貯まらない内の投稿。
こっちの話を考えすぎてもう一つの二次創作を怠ってしまう……。

そしてなにやらイリアとフェイトが親密に……。

「んっ……あれ、せっちゃん？」

およ、目が覚めたかな、木乃香。

「お嬢様、お怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫や。でも良かったぁ……」

「え？」

「ウチ、せっちゃんに嫌われてたと思ってたんやけど、そんなことなかったんやね」

「ウチかてこのちゃんと一緒にお話したかっ……はっ！？」

なにこの百合百合な雰囲気は……。

そう思い始めた頃、刹那は木乃香を置いて後ずさる。

そりゃもうザザザーって感じに。

「す、すいませんでした！　え、えっと、その……ご免！」

逃げた！？

「桜咲さん！　明日は同じ班なんだし、一緒に京都廻ろうね！」

「……は、はい」

さすがアスナ。ほぼ強制的に刹那と約束したよ……。

「それじゃ、帰ろっか。お兄ちゃんもそろそろ、離してくれないか

な？」
「ぁ、ご、ごめ……」
なんでそんな名残惜しそうに離れるのさ……。
「むふふ」
……なにこのオコジョ。顔ＫＩＭＯＩＹＯ。
「なんでぃ、イリアの姐さん。兄貴のこと何とも思ってないふりしといて、ホントはホレてんじゃねえですか？」
「そうかそうか。オコジョ、そんなに千切られたいのか。あはは、いいよ。ほら、（体を）捻って（臓物を）潰して（四肢を）解して（頭蓋を）砕いて、埋めてあげるよ？」
「ヒィィィ！　姐さん。（）の中が怖い！　怖いです！」
まったく、このオコジョは……。
旅館に帰った後、お兄ちゃんからオコジョを拝借。
小さな抱き枕になってもらい、眠りに就いた。
……瀬流彦先生、本当は起きてたんだろうな～。
朝起きると、オコジョが汗をだらだら流しながら目を見開いてた。
ヤダ、なにこれ怖い。
「どしたの？」

「いや！　え～と、その……いつ捻られるのかとか潰されるのかとか思うと寝れなくてこんな状態です……」
「そりゃ災難だったね」

アンタの所為だよ、とか呟いてたけど気にしない気にしない。
時計を探そうとして、ここがいつものログハウスでないことに気づく。時計がどこにあるのか分からない……。
隣を見ると瀬流彦先生が寝ているはずの布団は既に片付けられていた。

「あれ～、瀬流彦先生は？」
「ああ、あの魔法先生なら朝の見回りじゃないっすか？」
「そっか。ところで今何時？」
「朝の六時丁度っす。朝ごはんまでまだ三十分ありますぜ」
「なんでそんな詳しいのさ……」
「修学旅行前日にネギの兄貴がずっとしおりを読んでて、オレっちもそれに巻きこまれて……」

なるほど……。そういうことか。
お兄ちゃんもまだまだ子供だな～。修学旅行ではしゃいじゃうだなんて。
え、ボクが言うなって？
はは、どういう意味さ。オコジョみたいに捻ってあげよっか？

「姐さん？　なにをそんな黒いオーラを……？」
「んー、なんでもないよ。とりあえずオコジョ、少し寝れば？」
「寝た瞬間が命散る瞬間（とき）だと思ってます」
「そか～、じゃ、ボク様もう少し寝てよ～。オコジョって意外と暖かいし」

これで大きければ毎晩抱き枕として使用してあげるのに。
あれ、なんか冷たい。

「やだ汗汚い」
「ぎゃー！」

思わず投げた。
部屋の襖に突き刺さっちゃったけど……まぁおじいちゃんが弁償代とか出してくれるだろうし、いっか。
見れば、オコジョの汗で浴衣は濡れ、ところどころ肌が透けているご様子。際どい所で大事なところは見えてないので良いと言えば良いのだけれど……。

「お風呂入ってこよ……」

三十分もあれば大丈夫だろうし。

～変態オコジョＳｉｄｅ～

危なかった。いや、襖に突き刺さってる時点で終わってるか……。
しかし、咄嗟の言い訳にしては良い方だったと思う。
実のところ、姐さんの匂いが結構良かったとか。十歳だけども、発育というか、まぁ二つの膨らみが柔らかかったとか。そう言う意外な部分を堪能してた所為で寝れなかったとばれればオレっちに命はない……。
さて、そろそろ襖から抜けだそう。イリアの姐さんは風呂に行くと言っていた。
オレっちは巨乳好きだが、昔からイリアの姐さんだけは別だった。それが何故なのかは分からないが……、とりあえず、覗きに行かない理由が無い！

ということで行くぜぃ。

～イリアＳｉｄｅ～

露天風呂に着く前に瀬流彦先生とエンカウント。運のないボク様ちゃん涙目。

「ど、どうしてそんなに浴衣が濡れてるんだい？」
「悪夢に襲われて寝汗びっしょり～、てところかな」
「そうか……。温泉行くのかい？　どうせなら着いていくけど……」
「うにゅ？　瀬流彦先生ってロリコン？」
「ええ！？　ちがっ！　そう言う意味じゃなくて、時間とかの問題だよ。僕は腕時計持ってるけど、イリアちゃん持ってないでしょ？」

ああ、そうか。
確かに、的確な時間を示す道具があるのは丁度良い。

「じゃ、早く行こっか。時間は有限。さぁ瀬流彦先生、出発だ～！」
「はいはい」

なに呆れた顔してるのさ……。
端から見れば親子かな？
いや、親子と言うほど似てないから伯父と姪？
まぁどれでもいっか。

ということで露天風呂に到着。さすがにお兄ちゃん以外の異性の前ですっぽんぽんを晒す訳にはいかないからタオル装着。

脱衣所で舌打ちが聞こえた気がするけど……。瀬流彦先生はその時男性側の脱衣所にいた。つまり、誰かが覗いていた。

瀬流彦先生とは舌打ちした時の声質的なものが違うから……アレは多分オコジョ。

まだ懲りてないんだね……。

まぁ、昔からオコジョには裸見られてるし（お兄ちゃんとオコジョと一緒にお風呂とかなんて良くあった話しだよ）。別に気にしないんだけどね。

村でお兄ちゃんがオコジョを罠から外した上、家に匿うって言った時は少し殺意が湧いたね。下着ドロだったし。ボクの下着も盗まれたし。

露天風呂では瀬流彦先生との世間話。更に、小さな気配を探し出し自然な動きで小石を投擲。「ぎゃふん!?」とか聞こえたのは言うまでもない。

十分くらい温泉に入って、着替えを済ます。脱衣所の前で瀬流彦先生と合流し、そのまま朝ごはんを食べるための部屋へ向かった。

「昨日の清水寺からの記憶がありませんわ……」

「折角の初日の夜だったのにー。悔しー！」

昨日お酒を飲んで寝てしまった人達が騒ぐ。

ボク的にはお酒に大助かりだけどね。なんとなく予想してたけど、祐奈ちゃんの発言からするに夜に騒ぐ予定だったんだろうし。新田

先生に怒られるのはボク様だからね～。

「あれ、アスナー。あれはどうしたの？」

見ると、木乃香に追いかけられる刹那がいる。

いつもの刹那からは想像もつかない行動と表情だった。

「あー、あれね。木乃香が桜咲さんの隣でご飯を食べようとして、あんな感じに……」

「なんというか、険しい道だね。うん」

「こら！　なにをしとるか、桜咲に近衛！」

「「す、すいません……」」

あーあ。新田先生に捕まっちゃったよ。

アレは刹那の所為だからね。ボクには関係ないなーい。

……なに見てるのさ、アスナ。

「……」ジー。

「……はぁ、分かったよ。行ってくるよ」

新田先生から生徒を庇うのって意外と骨が折れるんだから……。

新田先生の袖を引っ張って、話を止める。

「む、イリア先生」

「あの、新田先生。ボクの生徒がすいません。ですが、二人の仲の修正のためなんです。どうか見逃してくれませんか？」

「む？　仲の修正、ですか？」

「はい、二人とも疎遠だったので……。昔の様な仲に戻りたいと木乃香は思ってるんだよ。だから、お願い。ね？」

「むぅ……分かりました。ですが、程度をわきまえる様に！」
「「はい……」」

ふぅ……。まったく、この二人は……。

その後、朝ごはんを食べ終えたネギはほぼ全部の班から勧誘を受けていた。
あれ？　なんでボクの所には誰ひとりとして来ないのさ。
ふん、いいもんいいもん。一人の方が動きやすいし？　誰の目も気にすることもできないし？　そうなればフェイトに会えるかもだし？
はぁ……、今頃エヴァちゃん、なにしてんだろ。こんなことならおじいちゃんのお使いなんて断れば良かったかも……。

「イ、イリア先生……？　なにそんなところでキノコ生やしとるんや？」
「亜子……」

いつの間にやらロビーの隅で暗くなっていたボクに優しく話しかけてきたのは亜子。

「うう、亜子～～～！」だきっ！
「うわわ？　どうしたんや、イリア先生？」
「こんな優しくしてくれるのは亜子だけだよ～～！」すりすり。
「どうしたの、亜子？」
「あ、アキラ。それがな、イリア先生が急に……」
「うう～、アキラー！」だきっ！
「わ？　イリア先生……？」

～事情説明中～

「なんや、そんなことならウチらと一緒に行動せえへん？」
「亜子ちゃん……」

女神様！　女神様がおるよ！

「それじゃ、決まりだね」
「ありがとう、亜子、アキラ。……キノコ、いる？」
「「いらない」」

意外なくらいに即答だった。
これ食べれるのかな？

「あ、あの！　ネギセンセー！　よ、よろしければ今日の自由行動、私たちと一緒に回りませんか！？」

む？　のどかちゃんがお兄ちゃんを……。あの顔は恋する乙女ってところかな。
でもあのお兄ちゃん相手に恋だなんて……ねぇ？

自由行動は特筆する様な場面も無く終わった。
強いて言うなら、始めて見る鹿は意外にも大きかったとか狂暴だったとか……。エヴァちゃんと茶々丸のお土産に八つ橋を買ったとか、それくらいじゃないかな。
亜子には感謝しても仕切れないよ、うん。

「ううー……」

……？

「あー、でも……」

なにやら不審者がいるよ。ロビーでゴロゴロ転がって、迷惑な……。

って、あれ。あれってお兄ちゃん？

ていうか皆も皆で、なに壁に隠れてネギの奇行を眺めてるのさ？

「どしたの？　あれ」

「あ、イリア先生。それが、自由行動から帰って来てからずっとあれで……」

「ふいーん……」あやかちゃんも理由は分からないのか……。

頭を抱えてなにやら呟いているお兄ちゃんは完璧に危ない子。新田先生に見つかる前に止めさせないと……。

「お兄ちゃん。なにしてんの？」

「（（ええ！？　なに普通に話しかけてんのイリア先生！？））」

なにやら皆の心の中が聞こえた気がする。気のせいかな？

「ぇ、あ、イリア！？　いやいや、なんでもないよ！」

「ホント？」アレが何でもないって言うならお兄ちゃんは本当におかしな人だよ……。

「ほ、ホントホント！　誰にも告白されてないよ！」

「こくはく？」

「あああ！　しまった！」

……はっはーん。ボク様ちゃん分かっちゃった。のどかちゃんが原因だね。

朝の流れからするに、修学旅行と言う特別イベントで告白をしようとしていたんだね。……でものどかちゃんが個人でそんなことをするとは思えない。

のどかちゃんを囃し立てた人がいるのかな？

なんとなく予想はついてるけど……。

「「「こ、告白ぅぅぅう！？」」」

あーあ。皆出てきちゃったよ……。

「うわ！？」

「ん？　酷薄アルか？」

「違う！　告白だよクーちゃん！」

「いえあのその！　告ったじゃなくて、ココ……コックさんがコクのあるこっくりさんのスープを……！」

……大丈夫？　この人。

「僕しずな先生と打ち合わせがあるんでコレで――――――！！」

あ、逃げた。

「まってぇぇえええ！！」

「誰が誰に告ったんですのぉぉおお！？」

みんなも行っちゃったよ……。こんなに騒いで……。
うーん、新田先生に怒られそうで怖いなぁ……。まぁ、新田先生がボクを怒るなんてこともそうそうないけど。

「なにやってんだか、あのガキ」
「はは、もう何もかも一杯一杯という感じですね……」
「およ、刹那にアスナ？」
「や、イリア。今日鹿に襲われてたの見たけど大丈夫だったの？」

あーアレね……。重かったね……。熱かったね……。なんか腰振られてたね……。犬ですかこの野郎って言ったら余計に狂暴化したね……。

「あの、神楽坂さん。イリア先生が……」
「どうやら言ってはいけなかったことなのかもしれないわね……」
「ううん、鹿があんなだとは思わなかったよぅ……子供の夢ぶち壊しだよぅ……」
「あーもうごめんごめん。大丈夫？」撫で撫で。
「アスナに後光が射してる……」
「ええ！？」

ちなみに鹿の件（くだり）をセリフだけで説明するとこんな感じ。

「おー！　これが鹿かー！」
「そやで～。かわええな～」
「大きいー！」なでなで
「■■■■■――！！！」
「ええ！？」
「ああ、イリアちゃん！？」

「んっ……いやあ！　痛いよ！　やめっ！　重い～～！」
「イリアちゃんがなんかエロイ感じに！？」
「そんなこと言ってないで助けてよ亜子～～～！」
「う、うん、今助ける！　ほら鹿さん、鹿煎餅やで！」
「■■■■■――――――！！！！」
「ああんっ！？　ちょ、だめ！　髪の毛食べないでよぅ！！」
「なんで鹿煎餅じゃなくてイリアちゃんの髪の毛食べるんねん！」
「ひゃっ！？　舐めないでよぅ……！！　腰振るな！　この犬野郎！　駄犬！　いや、駄鹿！」
「■■■■■■■■■■■■■■■――――――■■■――――――！！！！」
「いぃやぁあああぁああ！！　ら、だ、らめぇぇえええぇえええぇ！」

はい、終わり。
そういえば、いつの間にか「イリア先生」って呼び方から「イリアちゃん」になってたね。気付かなかったよ……。まぁ、新密度が高まったのかな。

「なんか、大変だったみたいね……」
「ううん、アスナの馬鹿力なら退かせただろうに……」
「馬鹿力で悪かったわね」
「やーん、怒らないでよアスナー！　ちょっとした冗談じゃあん！」

アスナの力でヘッドロックなんかしたらボクの首が？げちゃう！

「あの、それよりこちらの結界の強化を……」
「ん？　ああ、それなら大丈夫だよ。瀬流彦先生に事情を話して結界張ってもらってるから。もうすぐで終わるんじゃないかな？」

うにゃ、丁度良いタイミングで結界が出来上がったらしい。

瀬流彦先生は戦闘よりもサポート系だからねぇ。結界とかはエキスパートなんだそうで……。
ま、ボク様の方がもっと強力な結界張れるけどね！
……維持するのに魔力が足りないから一瞬なんだけど……。

ふいーん。
なんか疲れたなー。初めての修学旅行は恐怖で沢山でしたとさ……。

「うわあああああああああああああああん！！！！」

そんな感じでロビーでコーヒーを飲んでる時、大きな魔力と一緒に大きな泣き声が聞こえた。
今のはお兄ちゃん？
なにかあったのかな……。今のは露天風呂からっぽいし、一応見にいっておくか～。

「お兄ちゃんと……朝倉ちゃん？」
「あ、い、イリア……」
「お、イリアちゃん……」

え、なにこれ。
朝倉ちゃんがお兄ちゃんの肩を掴んでバスタオル一丁で気まずそうにしてて……。
って、ええ！？

「お、お兄ちゃん……」
「い、イリア？」

「ネカネちゃんに言われてたよね……？　生徒と教師はそんな仲になっちゃいけませんって……」ゆらーり。
「い、イリア……どうしたのさ。なんか、勘違いしてない？」
「問答無用――――！」
「うわ――――！？」

お兄ちゃんへのお仕置きは三十分くらいで終わったとさ。
言い訳を聞いてくれと言うので、とりあえず解放したけどね。

修学旅行？（後書き）

鹿がバーサーカーみたいになっちゃったな。
だって鹿ってどう鳴くんだ?メ～～、じゃないだろう?　ヒヒーンでもないだろう?　んじゃなんなのさ……。
てことで必殺「■■■――」が炸裂したわけですね～。

誤字脱字、タイピングミス等ありましたらご感想にお知らせください。
勿論普通の感想もお待ちしてますよ～。

修学旅行？　前篇

「え～～～～！？　魔法がバレた！？！？　それも、ああ、あの朝倉に――――！？」
「は、はぃ……」

はぁ……。

露天風呂の件から数分。お兄ちゃんが言い訳を聞いてくれというから聞いてあげたらこれだよ……。

「もうお兄ちゃんオコジョ決定だね……。ありがとうお兄ちゃん、この九年間、一時期は喧嘩もしてたけど楽しかったよ」
「ええ！？　そんな～～！　イリアも一緒に弁護してよ～～！！」

えー、だって……ね？

朝倉ちゃんと言えば報道部。パルにも劣らない情報伝染能力を持つんだよ？

そんな人に魔法を知られたら、どうなるかなんて言うまでもないじゃん。

「おーいネギ君」
「ここにいたか兄貴ー！」

噂をすればなんとやら。

朝倉ちゃんとオコジョがやってきた。

「ちょっと朝倉、あんま子供いじめんじゃないわよ……」
「えー、いじめてないよ？　てかアスナの方こそ子供とか嫌いじゃなかった？　ま、いいけどさ」

「それより朝倉ちゃん、お兄ちゃんを探してたみたいだけど？」

するとオコジョがなんかいつものテンションで言ってきた。

「このブン屋の姐さんは兄貴の味方だぜ！」

「「え？」」

いや、どういうことさ。

「ふふーん。なに、私もネギ君の秘密を守るエージェントになろうと思ってね」

「え？　ホントですか！？」

「今まで集めた証拠写真も渡しておくよ」

「わー！　ありがとうございます！」

「さて、と。んじゃ、お兄ちゃんの問題が一つ減ったと言うことで今日はお開き。もう就寝時間だから、さっさと班部屋に戻りなさ～い」

少し眠くて、思わず間延びする様な口調になっちゃった……。まぁ、いいか。

「んじゃ、おやすみ～。（……やっぱりイリアちゃんも魔法関係者なんだね、カモ君）」

「（ああ、そうだぜ。……まさかアンタ、《あの作戦》にイリアの姐さんまで巻き込むつもりか！？）」

「（ふふ……。まぁ見てなって。私は上手くやるよ）」

「うん、おやすみ朝倉。さて、それじゃあ私たちは見回りでもしよっか？　桜咲さん」

「ええ、そうですね」

「ダメダメ。ダメだよ～二人とも」
「「へ？」」
「二人もさっさと寝て明日に備える！　ボク、明日はお兄ちゃんと一緒に親書を渡しに行く予定だし……ついてくるんでしょ？」
「親書？」
あ、そういえばアスナは知らなかったね。
「そっ、親書。おじいちゃんに頼まれてね。お使いだね。これを西の長に渡すことになってるんだよ」
面倒極まりないよね～、と付け足す。
それにしても眠い。鹿に襲われお兄ちゃんは告白されて朝倉ちゃんに魔法がばれて……。一日でこれだけのことがあれば、眠くならないはずがないよ……。
一度は皆寝てくれたと思った。うん、信じてた。けど、ねぇ？
今思えば３－Ａが修学旅行の夜ときて、騒がない筈がなかったんだよね。
ボクは少々、皆のことを過大評価していたのかもしれない。
「これから部屋から出たり、騒いだりした者は朝までロビーで正座！！」
「「「ええええええ～～～～～！！！」」」
いや当たり前だよ。ここ公共施設なんだからさぁ……。

「……ううっ？　なんか身震いが……」

なんだろう。嫌な予感がしてならないな……。まぁ、３－Ａだし。何が起こっても驚かないよ、うん。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

《くちびる争奪！！　修学旅行でネギ先生とらぶらぶキッス大作戦？》

委員長である雪広あやかさえも「許可する」と言ってしまったこの《ゲーム》。

表はただのイベント。だが裏は違う。

カモミールが旅館を囲むように仮契約の陣を描いたのだ。キスをすれば漏れなく食券と豪華賞品が貰える。無論、その豪華賞品とは仮契約カードのことである。

主催者は勿論、朝倉とカモミールである。

ルールは至って簡単（シンプル）。

イベント名そのままに、ネギの唇を奪えば良いのである。武器として許されるのは枕。

班それぞれ二名ずつの代表者で行われる。

また、キスをするためなら手段は問わない。

だが新田に見つかれば即アウト。皆で楽しくロビーで正座地獄だ。

ちなみに、ネギ限定ではなく、イリアとキスでも可。というか同性愛を見せつけろ、と朝倉は言った。

出場者
一班：鳴滝姉妹。
二班：古菲・長瀬楓。
三班：雪広あやか・長谷川千雨。
四班：和泉亜子・大河内アキラ。
五班：綾瀬夕映・宮崎のどか。

以上が出場者である。

～一班代表～

「（あぶぶぶ、正座いやですー！）」
「（大丈夫だって、ボクらには楓姉直伝の《忍術》があるじゃないか！）」

コンビネーションは恐らく抜群だろう。だがしかし、その《忍術》と言うものに少し難が……。

～二班代表～

「（一位になってしまったらどうするアルかね～。ネギ坊主とは言え、キスは初めてアルよ）」
「（んー？）」

ある意味一番最強？　中国拳法の使い手と忍者。反則的な組み合わせである。

～三班代表～

「（ネギ先生の唇は必ず死守ですわ！）」

「（やってらんねー……）」

チームワークに不安が残る……。そこはあやかの《愛》でカバー！？

～四班代表～

「（アキラー、ウチどないしよう……。イリアちゃんの唇奪うとかなんや興奮してきたえ！）」

「（亜子……？　そんなキャラだった？）」

敵無しと言えばこの班。なんせ狙いはイリアだ。他の班と殺り合うこともないだろう。

～五班代表～

「（ゆえゆえ～、見つかったら正座だって～……）」

「（大丈夫です。見つからないルートを元から探ってありますです）」

「（いつの間に……）」

ネギの唇に一番近い頭脳派！？　夕映の普段使われない頭がフル回転するかが問題だ。

そして、ネギとイリアの唇を賭けた戦いが、今始まった――。

～イリアＳｉｄｅ～

この二人は何してるのさ……。

「うわーん！」
「早速……」

アキラと亜子が泣きながらロビーで正座していた。
無論新田先生の監視付きで。

「すいません、新田先生……。もう！　ダメでしょ二人とも！」
「ううん、すみません……」
「ごめんね、イリアちゃん……」
「まったく～……。新田先生、ここはボクが見とくので見回りをお願いします。ボクのクラスのことです。なんかイベントとかゲームとかを始めてるはずですから」
「はい、分かりました。……二人とも、きちんと反省するんだぞ！」
「「はい……」」

はぁ～～、嫌な予感って大抵当たるもんだけどさ、ここまで当たるともう恐くなってくるよね。
新田先生が行ったのを確認してから、自動販売機でカルピスを二本買って二人に渡す。

「ありがとや、イリアちゃん」
「ありがと」
「で？　これはなんのゲームなの？」
「えっと、それはー……」

～説明中～

はぁ……呆れたとしか言えないよね～これ。

ボク等にキスして豪華賞品？　どう聞いたって仮契約関連でしょ……。あのオコジョとブン屋は……。オコジョにはもう一度抱き枕になってもらおう。そしてオコジョのお金で服を買おう。盗んだ下着分だけしか使わなければ大丈夫だろうし。

「それよかイリアちゃん。ウチとキスせーへん？」

「……亜子、ごめんね、セカンドキスは男の子って決めてるんだ……」

「え……イリアちゃん、もうファーストキス済ませとるん！？」

「初耳……」

「そりゃあ、誰にも言ってなかったし……」

てかエヴァちゃんとキスしたなんて言ったって信じてくれる人いないだろうし。

いや、信じるか……。あの学園の人なら誰だって信じると思う。うん、何故かそんな気がする。

「イリアちゃん大人やなぁ……」

「私もまだファーストキスはまだなのに……」

「ふふ、それが男の子だったら良かったんだろうけどね」

いや、エヴァにゃんとキスするのが嫌だって訳じゃないけどね？

そうこう話をしてるとまたロビーに正座する人が増えた。

今度は千雨ちゃんだ。

「千雨ちゃんもいる？　カルピス」

「あ、いえ。良いです」

「そか。それにしても、珍しいね。千雨ちゃんがこんなイベントに参加するなんて……」

「ええ、無理矢理……」

ああ、納得。

ネギとキスってことで頭に血が上ったあやかちゃんに強制的な参加を命じられたんだろうなぁ。

「ふ、ふわあ～～」

「イリアちゃん眠そうやな？　どうや？　膝枕したろか？」

「ん～、お願～い」

「あわ？　ホントに寝てもおた……」

だって眠いんだもん……。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

「むりゃむりゃ……」

「ホンマにかわええなぁ……」

亜子の膝枕で本当に寝てしまったイリア。その頭を撫でる亜子。二人とも色素の薄い髪の毛の所為か、血の繋がった姉妹の様に見える。

アキラはそれを眺めて「羨ま……いや、新田先生が来たらなんて言おう……」と思ってたりする。その隣にいる千雨は「なんでこんな子供が教師になんか……。ていうかこの二人を写真に収めてブログに載せたい……！」なんて思っている。前者に質問に関しては、完全に今更である。

しかし、それも束の間だった。

イリアは突然目を覚まし、ゆらゆらと危い足取りで旅館を出た。

「イリアちゃん……？」

亜子は突然のことに目を丸くする。呼び止めようとしたが、仕事でも思い出したのだろうと思い、ならそれを邪魔するのは可愛そうだと結論を出した。

何故イリアが旅館を出たのか。理由は一つである。

「昨日ぶりだね。お姫様」
「……フェイト」

フェイト・アーウェルンクス。旅館の結界のすぐそばで大きな魔力を放出。ネギや刹那に見つかるのもお構いなしに。ただイリアを飛びだすためだけに、それだけのリスクを冒した。

「どうしたの？　こんなところに来るなんて……。魔法先生が少ないからって、敵地に足を運ぶのは自殺行為だと思うな」
「ごめん。少し君に会いたくなった。携帯や念話を使おうとも思ったんだけどね、君が気付いてくれるかどうか、少し試してみたくなった」

内心でイリアはため息を漏らす。そして思った。
試す為に危険を冒すな、と。

「ボク様ちゃん、意外とフェイトのこと気に入ってるんだよね。だから携帯電話の番号も教えた」
「うん、知ってるよ。僕も君を気に入っているしね」
「そんな人が危険を冒すと、内心ハラハラなんだよね。分かるかな？」

「……まぁ、分からなくはないよ。でも、会いたくなってしまったのだから、仕方ないでしょう？」

もう一度、今度は普通にため息を漏らす。

「で？　ボクに会いたくなっちゃったのは分かったけどさ……。ボクも先生なんだよね。だから仕事とかもあるのよ。だからそんなに時間は取れないよ？」

「それは残念……。まぁ、いいよ。もう一つの目的なら達成できそうだから」

もう一つの目的？

イリアは小首を傾げる。それをフェイトが無感情な目で見てくる。

「そう、もう一つの目的。勧誘に来たんだ。誘いにね」

「なんの勧誘かな？」

「《完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）》に、来ないかい？」

「……残念だけど、さっきも言った通り、ボクは今先生をやってるんだよ。その《完全なる世界》って言うのがなんなのかは分からないけど、せめて来年の三月くらいまで待ってくれないと……」

「それじゃあ遅いんだ。どうだい？　あんな者になる修行なんて、放ったらかしても君は困らないと思うけど？」

確かに。

イリアは立派な魔法使いを嫌っている。そんな者になる修行などする必要もない。

「確かにそうかもしれない。……でもお兄ちゃんは目指してる。お兄ちゃんが危なっかしいのは、フェイトも知ってるでしょ？　……この妹心、分かってくれるかな～？」

「そう……。君にそんな風に思われてるネギ君は幸せ者だね」
「妬いちゃった？」
「……正直言うと、少しだけ。いや、結構妬いてるかな」
そう言うと、フェイトはいきなり。本当に突然、イリアを抱きしめた。
兄とは違う異性に抱かれることなど無かったイリアは当然、赤面する。
「フェ、フェイト……？　突然なにをするのさ……？」
「紅く染まった顔が可愛いよ、イリア」
「……卑怯だよ。……っ！？」
イリアの視界がフェイトで埋まった。なにが起こったのか、最初は理解ができなかった。
（苦しい……）
口から息ができない。思わず、目を閉じる。何かが怖かった。只管怖かった。
「んんっ！！」
白い少年が白い少女を穢していく。口内を蹂躙する。
白い月をバックにしたその光景は、いっそのこと芸術的だと言えるだろう。
一秒一秒、刻まれる時間が遅かった。唾液と唾液が交じる。頭の中が段々白くなっていく。もうなにも考えられない。
――ああ、キスされたんだ。

今になってやっと理解が追いつく。理解すると、先程まであった苦しさなどどこへやら。普段刺激されない口内を柔らかな異物に刺激される気持ちよさに、より一層、頬を染める。

フェイトもいつの間にか目を閉じ、蹂躙する側の気持ちよさに打ちひしがれる。

フェイトは人間じゃない。人間ではあるのかもしれないが、人形と言う方が正しい。

それでも、人間の三大欲求には抗えないのかもしれない。

一体どれだけ間、キスしていたのだろうか。フェイトはさすがに苦しくなってきたと口を離す。唾液と唾液が繋がっているのが色気を誘う。

瞬間、イリアがきゅ～と力が抜けたかの様にへたり込んだ。

「大丈夫かい？」

「う、うん……ただ、その……」

イリアは顔を朱に染め、フェイトの顔を見た。それにはどこか、艶やかという言葉が見え隠れした。

息も荒く、肩が上下に動いている。フェイトを見る眼はどこか虚ろ。

「なんか、分かんないけど……」

浴衣を強く握りしめた。それにどんな意味があるのか、フェイトは分からない。

「多分、発情……しちゃったのかも」

フェイトは顔をピクリと動かす。
しかしそれは本当に一瞬で、すぐに悪戯を思い付いた子供の様な笑みが張り付いた。
端から見れば「なにこの子供怖い」である。

「じゃあ、少し気持ちよくしてあげようか？」
「……ダメだよ、十歳でも赤ちゃんって出来ちゃうんだから……」

苦笑いでそんなことを言うと、悪戯を思い付いた子供の笑みは消え、逆に少し残念そうな顔をした。ここにラカンがいるならば、「人間臭い」と言うだろう。
そしてフェイトは上を見上げる。

「……アレは君の生徒じゃないのかい？」
「ふえ？」

フェイトが見上げた先を見ると、なにやら危なっかしい所にいる綾瀬と宮崎が……。

「……見なかったことにしてやっぱり続きしない？」
「現実逃避は良くないよ。続きができるのは嬉しいけど、やはりそれは教師としての君の選択肢としては間違ってると思う」
「だよね～……」

ああもうやだ……。なんて呟くイリアの気持ちを、フェイトはなんとなくだけど分かった気がした。

「まぁ、《完全なる世界》について知りたければ後で連絡して。僕としては、君には僕と一緒に来てほしい」

「……ま、考えてはおくよ。じゃあね」

それだけ言って二人は背を向ける。別々の方向に向かって。歩く。歩く。

二人が同じ方向に向かって歩く日は来るのだろうか。

振り返りもしない二人の間にはしかし、繋がっているナニカがあった。

～イリアＳｉｄｅ～

あー、お風呂入りたい。フェイトの強攻でセカンドキスを奪われちゃった訳だし……。なによりナンデスカ、あのアッツアツのねっとりディープキスは……。

思ったけどディープキスは初めてじゃん？　てことはこれをファーストキスにしてもいいんじゃないかな？

そんなことを考えながらもお兄ちゃんの部屋の近くに到着。そこで繰り広げられていたものは……。

「（楓姉直伝！　影分身の術！！）」

なにやってるのさ鳴滝姉妹。

双子だからこそできる芸当であることは認めるけど分身はしてないからね？

「（分身してないです……）」

呆れた目でそれを見ながら、二つの枕を両手に持つ。

そしてそれをさも当たり前のように二人に向かって投げ……うん、

手裏剣みたいな勢いで投げた。なに？　夕映って忍者？

「（あぶぶ！？）」

「（あ！　なんか凶器を取り出したです！）」

「（安心してください。本です。枕の上から叩けばルール違反では無い筈ですから。……ほらのどか。さっさとネギ先生に――」

「お兄ちゃんに、なに？」

「「「「わああ！？」」」」

そんな大声出さないでよ……。他のお客様に迷惑じゃん。

「早く部屋に戻りなさい。新田先生には黙っててあげるから」

「（うー……で、でも……）」「（イリア先生、のどかにだけお願いします。ネギ先生とキスを……！）」

「キスですかー？　いいですよー」

「「「「！？！？！？」」」」

お、お兄ちゃん……？　いや、違う。お兄ちゃんの魔力が感じられない……。じゃあ、これは何？

お兄ちゃんの声をしたナニカが、そこにいた。

修学旅行？　前篇（後書き）

フェイト、キャラ崩壊計画始動。
もう誰も俺を止められな（殴

修学旅行？　後編

「お、お兄ちゃん……？」

違う。お兄ちゃんじゃないナニカ……。

それを四人とも感じ取ったのか、不審なものを見る目でお兄ちゃんもどきを見る。

「キスですか？」

「いいですよ～」

「ちゅ～！」

「うわあ！？」

「ふえええ！？」

お兄ちゃんが……五人！？

まさか……刹那の式神？

「皆は逃げて！　これお兄ちゃんみたいだけどお兄ちゃんじゃないから！」

「「「「はい！」」」」

さて、ボクはここでこの数を相手にしなくちゃいけないわけで……。

どうしよう。派手な魔法を使うわけにはいかない。投影で殺る……のは後味悪いなぁ……。

「ちゅ～！」
「うわ！？」

考え事をしてる間に五人のお兄ちゃんもどきに部屋に連れ込まれる。
って、ええ！？　なんで！？

「「「「「ちゅ～！」」」」」

ホラーだよ！　これ完全ホラーだよ！
しかもそのままの勢いで押し倒されて四肢を抑えつけられてるから身動き取れないし！？
四人は手足の拘束に、そしてもう一人が……。ボクの脚を開けてそこに体を滑り込ませ……って何する気さ！？

「では、キスさせていただきます」

ちょ、待って本当に待って！
一日に異性と二回もキスだなんて！　そんな不埒な真似だけは絶対いやだ！
……でもこれ式神だから異性に入るのかな？
って、そんなこと考えてる場合じゃないし！

「ううっ……仕方ない」

後味悪いけど、この五人を殺るしか……。

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　唸れ壊人の五振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　氷の精集い来たりて敵を貫け『魔法の剣　氷の五振り』！」

五本の氷の剣がお兄ちゃんもどき全員に刺さる。

「『氷結』！」

魔法の剣が、脆い窓ガラスを割った様な音を立てる。さっき言った通り、魔法の剣はお兄ちゃんを氷結。氷の中に閉じ込めた。

オリジナル術式組み合わせ済みだからね。

ボクの言葉に忠実に動くようになってるんだよ。まぁ、一種の言霊でもあるんだけどね。

あ、紙になった。やっぱりこれ式神だったんだ……。

刹那がこんなミスをするわけないだろうから、たぶんお兄ちゃんだね。帰ったらお仕置きでもしてあげようかな～。

朝倉とオコジョの居場所を特定。そのまま食券全部没収と朝までロビーで正座をさせた。

他の参加者は被害者という形にして、部屋に戻すことにした。

亜子とアキラ、千雨も新田先生に事の顛末を話し、なんとか部屋に戻してもらえた。

そういえば、ロビーで亜子とアキラと千雨のことを話してる時に本物のお兄ちゃんが帰ってきた。どこ行ってたのさ……。しかも今に諦めきれなかった夕映がそのロビーで待ち伏せ。

お兄ちゃんの足を引っ掛けて、強制的にのどかとキスをさせていた。

つまり、仮契約成立である。

という感じに事が片付き、やっと寝れる。部屋に入ると瀬流彦先

生は既に就寝。電気が点いていたのは多分ボクのためだね。暗い所は苦手って言ったし。

まぁ、そこまで苦手でもないんだけどね……。狭くて暗いところは凄く苦手だけど。

布団は既に用意されている。瀬流彦先生が用意してくれたんかね？　後でお礼言わなくちゃ……。

消灯をして布団の中に入る。

はぁ……なんか、もうホントに疲れた……。

……あれ？　今思っちゃったんだけどボク様、もしかしてフェイトと仮契約しちゃったんじゃ……。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

その頃、朝倉とカモは……。

「これ、やっぱイリアちゃんだよね……」

「おう、絶対そうだ……。だけどこれ、テルティウムって……誰だ？」

コピーカードとカードを正座しながら眺めていた。

テルティウム。三番目のアーウェルンクス。フェイト。仮契約。

白い少年と白い少女の物語は、動き出す。

修学旅行？　後編（後書き）

今回短めっすね

修学旅行？

翌日。オコジョにカードを渡された。コピーカードとマスターカード、どっちも。

「あー……やっぱ仮契約……」

「ところで姐さん。このテルティウムって誰なんだ？」

んにゃ？　てるてぃうむ？　あ、テルティウムか。確かギリシャ語で三番目……だっけ？　三郎さんとか、そんな感じの名前かな？　……三郎って、誰？ボクは確かフェイトと仮契約したはずなんだけど……。てかボクが従者なんだね……。エヴァにゃんになんて言おうかな、これ……。

しかし、今日はそんなテルティウムが誰だとかを考えてる場合じゃない。

まず第一の難関。どうやって誰にもばれずに京都にある西の総本山に向かうか、だ。

「お兄ちゃん、行くよ」

「うん」

皆がのどかが持つイベントの豪華賞品（仮契約カード）に釣られてる間に、アスナに仮契約カードの基本的な使い方を教えてから、旅館を出た。

アスナとの待ち合わせ場所である橋の前に到着。

「あれー。いないなぁ……。まだ来てないのかな？」

「一番最悪なパターンは待ち合わせ場所を示す際の見解の相違だよね」

「本当にありそうなこと言わないでよ……」

そんなこんな、ちょっとした話をしたり、川を眺めたりして時間を潰していると、アスナ達がやってきた。

……？　アスナ達？

って、ちょっと待っていぃ！？

「ごめっ！　イリア、ネギ」

「何があったのさ……」

「パルに捕まっちゃって……」

そこにはアスナを含んだ五班の姿が……。

「やほー、ネギ君、イリアちゃん。今日どっか行くんでしょ？　私たちも連れてってよ～」

「えー……。（どうするのさ、お兄ちゃん！）」

「えっと……。（ど、どど、どうしようイリア！）」

ボク等互いに目が回ってる気がするよ……。混乱気味だね。

それにしても、ホントどうしようかなこれ……。

「ボクを倒してからついてきなさ～い！」

なんて言うわけにはいかないし……。

「ボクが納得できる等価交換ができるというならいいよ！」

……これしかない。

「じゃあ、ボクが納得できる等価交換物ある？」
「へ？　等価交換物？」
「そっ、これから行く所はとても貴重な所なわけよ。そんなところに生徒をつれていくわけにはいきましぇん！　なので、それに見合う等価交換物を――「はい」ええ！？」
そう言って渡してきたのは一冊の薄い本。
「ハ、ハルナ？　それを渡してどうするつもりですか……」
「ハルナ、ダメだよー……。先生達まだ子供なんだから……」
ん？　子供だからダメ？　どういうことさ。
てかのどかちゃんに子供って思われたのね、ボク等。いいよ、子供じゃないもん。見てやるもん。
「ああ！　イリア先生！？　さっきまでの会話を聞いてなかったですか！？」
夕映が顔を赤く染めながら言ってくる……けど……。
「きゅぅ～……」ボンッ。
顔から噴火、とは正にこのことだよ……。
だって男の人と男の人が裸であぶぶぶうう！？
「だ、大丈夫イリア？！」
「大丈夫……うん、大丈夫。ちょっと刺激が強かっただけだから……」
う～ん、イリアちゃんにはやっぱり早かったか。なんて声が遠く

から聞こえる。
うん、子供でいい。こんなの読むのが大人だと言うのならボクは子供のままでいたい。

「と、とりあえず、もういいよ。行こう。ゲームセンター」
「あれ？　行くところって貴重な場所なんじゃ……」
「京都に来たらまずゲーセンだよ！」

そこで逃げよう、とお兄ちゃんとアスナに目で語りかける。二人とも意思は伝わった様で小さく頷いた。

ゲーセンからなんとか抜けだした。
ゲーセンでお兄ちゃんと対戦した男の子がいたんだけど……なにか違和感があった。
そして総本山まで行ける長い階段の前に到着。ああ、やだな～。疲れちゃうよ。

「イリアの姐さん、大丈夫っすか？」
「うに、なにが？」
「なんか顔色悪いっすけど……」
「ああ、大丈夫。疲れちゃっただけだから」

本当は考え事してるからなんだけどね。
テルティウム。フェイトのこと、なんだろうね。でも三番目ってことは、どういうこと？フェイトは兄妹がいるってこと……？
ていうか、昨日の晩十歳でも子供はできちゃうって言ったけど、吸血鬼であるボクに果たして子供はできるのか……？

あ、いやいや。そんなことはどうでもよくて……。

「神楽坂さん、ネギ先生。大丈夫ですか？」
「わっ！？　なっ……なによアンタ？」
「刹那の式だね？」
「はい、そうです。ちびせつなとお呼びください」

そこに突然現れたのは小さな刹那。
本人よりもキュートな仕様だね。ちっちゃくて。刹那は刹那で可愛いけど。

「これより階段を上った奥には総本山、関西呪術協会の長がいると思われます。ですが東から使者として来たイリア先生とネギ先生が歓迎されるとは限りません。罠などに注意してください。一昨日襲ってきた三人組の動向も未だ不明ですから」

カモよりも分かりやすいだろう説明をありがとう。
それにしても……西の長。近衛詠春。ナギの戦友……。
正体が分かれば、お兄ちゃんはナギの話を真っ先に聞こうとするんだろうなぁ……。
ああ、その姿が目に浮かぶ。

「それじゃ、アスナ。一応アーティファクト出しといてね」
「えー、だってハリセンよ？」
「大丈夫、素手なんかよりは十二分に心強いよ」
「うっ……。分かったわよ。《来れ》」

アスナはエヴァちゃんの障壁を抜いたことがある。もしかするとそういう類の良いアーティファクトかもしれないから、素手なんかより本当に頼りになるんだよ。

階段を上るのって意外とキツイね？　はぁ……。
それにしても、《完全なる世界》か……。フェイトは勧誘って言ってた。ということは何らかの組織だよね。そこにフェイトがいる。或いはフェイトが牛耳っている。けれどやっぱりお兄ちゃんも見てなくちゃ、危なっかしくて……。はぁ、フェイトかネギか。どっちを優先すべきなんだろう……。

「イリア！　ホントに大丈夫！？」

あれ、いつの間にお兄ちゃんとこんなに離れてたんだ？

「ふいーん、だいじょーぶだよ～。今行く～」

うん、考え事は後だ。今は西の総本山であり敵の拠点に最も近い場所なんだから。
そう思い直して階段を駆け上った時、なにか違和感を感じた。思わず足が止まる。
空間が変わった様な。何かの中に入ってしまったかのような……。
『東から使者として来たイリア先生とネギ先生が歓迎されるとは限りません。罠などに注意してください。』
罠……。罠！？

「ちびせつなちゃん！」
「はい？」
「ちょっと先行こう！　お兄ちゃんとアスナは待ってて！　お兄ちゃん、なにかあったらアスナのこと、ちゃんと守ってよ」
「う、うん……」

走る。階段を駆け上る。違和感の正体。
それが罠だと言うのなら……。なんらかの結界。どっかに壁があるはずだから……それをぶち壊せば――。

「うわ!?」
「ええ!?　イ、イリア!?」
「なんでイリアが後ろから出てくんのよ!?」

こ、これって……。

「……イリア先生、横から脱出を試みてみましょう」
「……うん。そうだね」

柵を乗り越えて竹林を走る。けど、やっぱりというべきか……。
数百メートル走ると柵が見えてきた。つまり、ボク達は反対側から戻ってきた。

「……お兄ちゃん」
「わ!?　イリア。こ、これってどういうこと!?」
「やられたよ。ちびせつなちゃんが言ってたでしょ。『罠に気をつけて』って……」
「そ、それって……」
「閉じ込められました。これは無間方処の呪法です。今私たちがいるのは半径五百メートル程の半球状の堂々巡り（ループ）型結界の内部です」

ちびせつなちゃんからの説明にそこにいる全員の顔が青ざめる。
それはそうだろうね。だって、ちびせつなちゃんが言った通りここは無限ループの中。歩いても歩いても関西呪術協会に着くことはないし、出ることも不可能。

「ちびせつなちゃん、この結界の解き方は？」
「分かりません……」
「そっか……」
う～ん、あれ？　これって本格的にヤバイ？

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

竹林の中。二人と一匹がそこにいる。
一人は黒髪の少年。ゲームセンターにて、ネギと対戦した少年。
イリアがナニカを感じ取った少年。
一人は女。丸メガネ。猿を脱いだらただの女。ついでに露出多めの和服を着てナニカの点数を稼いでいる。

「誰がただの女や！」
「ほえ？　なにゆーとんの？」
「いや、なんでもない……。それより、これであいつらはここから出られへん。ええな？　この蜘蛛使うてちゃんと仕留めておき」
「うえー、めんどいなぁ。こういう地味で卑怯な戦い方、俺あんま好きやない。それに、あいつら弱いで。西洋魔術師の男の方ならまだしも、女なんて……」

しかしそれこそフラグなのだ。
皆さんお忘れかもしれない。イリアは、カメレオンの様な生き方をしてきたのだ。歩き方も、雰囲気も、魔力も……その全て一般のそれに似せているのだ。

「そんな二人にうちらはこの前やられたんや。女剣士がいないのがなによりや。あの銀髪の子。月詠はんを圧倒しとった。気ぃ付け」

そう言ってただの女こと天ヶ崎千草は場を離脱した。

「へぇ……月詠の姉ちゃんを圧倒かぁ。なんや卑怯な力でも持っとるんか？」

確かに、卑怯な力なら幾つかある。
その底の知れぬ知識。冷静な判断力。
アーティファクト『斬魄刀』。
オリジナル魔法。
だが考えてほしい。
イリアは月詠を相手にその三つのうち一つしか使っていない。

彼女の本気ともなれば、恐らくフェイトと言えど苦戦を強いられるだろう。
なによりその力の内に、『真祖の力』も加わった。これにより、意識しないで小石を握ればその小石は漏れなく粉々になる。魔力量も微弱ながら増えた。なにより魔力運用が効率的になっていた。火力も数段上がっている。

イリアの戦術に嵌められれば抜けだすことはやはり苦を強いられる。イリアの本気。イリア本人が嫌う「本気」。それがどういうものなのか。見る日がくるかどうかは、未だ不明である。

「お、なんや動くんか。追わなあかんな。あーめんどいわ」

悪態付けながらもしっかり良いつけを守る彼は本当にいい子なんです、はい。

～Ｓｉｄｅ　イリア～

アスナがトイレに行きたいというから、先程見つけた休憩所に入る。丁度良いからと、アスナの契約執行時の身体強化度などを見たりする。そんな時、一人の少年が現れた。一匹の大きな蜘蛛の式の上に乗って。

「へへ、失礼するで。西洋魔術師！」
「だ、誰！？」

あれは……。

「犬上小太郎……だね」
「あん？　なんで俺の名前知っとんねん」
「一昨日の晩、フェイトが言ってた。犬上小太郎を連れて再戦するって」

それを聞いた小太郎は「なるほどな」と勝手に納得した。

「あの白髪が言うとったで、気になる人がいるってな。それがお前っちゅーことか」

へえ～。フェイト、ボクのこと言ってたんだ。意外だな～。
ていうかお兄ちゃんとアスナはなに呆然としてるのさ。

「まぁ、そんなことはどうでもええ。おいネギ。勝負せえ」
「ええ！？　な、なんでさ！」

「西洋魔術師はな、嫌いなんや。男のくせに後ろにいて、前は女に任せる。お前もそうやろ、ネギ。俺はそういうヤツ大っ嫌いなんや」

「待ってよ、小太郎」

「あん？　なんや、お前とはやらんぞ？　女を殴るんは趣味やない」

「そういうことは、ちゃんと状況を見てから言わないとね？」

「なに？　……っ！」

瞬動で小太郎の後ろを取る。そしてその後ろから小太郎に抱きつくように絡み――

「尽敵螫殺……《雀蜂》」

心臓に近い胸部に、剣とは言えない形となった剣……アーマーリング状の剣を一突き。そこに不気味な模様が描かれる。

「な、なんやこれ！」

「死の刻印、《蜂紋華》。この《雀蜂》の能力だよ。聞いたこと無いかな？　雀蜂に同じ所を二回刺されると死ぬ危険性があるって言う話」

一度瞬動で小太郎から離れて適当な岩に雀蜂を一突きする。

小太郎の胸部と同じように、死の刻印が走る。

「この蜂紋華を《雀蜂》で穿つとね……」

もう一突き、ゆっくりとその岩に雀蜂を近づけていく。

本当にゆっくり。そこだけ時間の流れが狂っている様な、そんな感覚。

それを小太郎が、お兄ちゃんもアスナも、息をのんで見守る。
そして――。

「こうなっちゃうんだよ」

蜂紋華の中心に、穿たれた。
瞬間時間は正常に戻り、岩は一瞬で砕けた。

「これはアーティファクトなんだけどね。これの説明書に書いてあったよ。これを扱った者の名は『砕蜂』。その者の名を漢字で書けば、『砕く蜂』。そしてこれは二撃決殺。つまり……なにが言いたいかは解るよね？」

小太郎は青ざめてる。お兄ちゃんとアスナも、たぶん同じだと思う。でも小太郎が一番酷い顔になってるはず。
だって、そんな死の刻印を、胸部に、大々的に付けられたんだから。

「さ、質問だよ。正体と立ち場を教えてくれるかな？　小太郎。教えてくれなかったらどうなるかは、分かってるでしょ」
「……狗族のハーフ。傭兵や」

傭兵かぁ……。なら、簡単だね。

「これは交渉だよ。これは君にも拒否権がある。どう？　お金なら払うから、ボクの方に来ないかな？」
「それは俺を雇いたいと言うとるんか？」
「ま、簡単に言うとそうだね」

これなら戦いにならないし。正直、女を殴る趣味がないっていう

この子が可愛くってしかたないよ。
フェイトとは別ジャンルで良い男だと思うよ。
それにしても、狗族のハーフかぁ。刹那みたいに、迫害されて生きてきたんだろうなぁ……。じゃなきゃ、こんな歳で傭兵なんてやんないもんね……。

「……うし、分かった。ええよ。雇われてやる。あと金は要らん。衣食住の三つを整えてくれへんか？」
「……分かった。なんとかしてみるよ。ありがとっ、小太郎」ニコッ。
「……おう」

なんで顔を赤くするのさ……。
あ、そうだ。

「ところでこの罠、どうにかしてくれないかな？」
「……そうやな。ここから東に十番目の鳥居の上と左右三か所のしるしを壊せばええ。……それより、さっきからこっちを覗いてるピンクパンツの姉ちゃんをどうにかせえへんか？」
「ああ、そうだね。のどか、とっくにバレてるから出てきていいよ～」
「はぅ？！」

なにやら変な悲鳴みたいなのをあげながら茂みから出てきたのはのどか。本を持ってるけど……あれはアーティファクトだね。使い方教えてたんだ、お兄ちゃん。
思わずため息が漏れそうになるよ……。はぁ……。

「まぁ、とりあえず長の所へ向かおう」
「なんや、そっち行くんなら俺は一度別行動させてもらうで。危険

やからな」
「ん、分かった」
小太郎はそのまま竹林の中に消えていった。
「あ、あの、みなさ、……本体の方でなにかあったようで、私、消え――！」
「あ。ちびせつなちゃん……？」
消えた。
本体の方なにかがあった？　刹那に何かが……。
そういえば、フェイトも猿女も、あの二刀使いもこっちに来なかった。
「不覚だね……。とりあえずボク達は総本山の中に逃げよう。西の長に助けを乞うしかないよ」
「う、うん。分かった……」
それからボク等は階段を上り、西の総本山兼木乃香の実家に足を踏み入れた。
和風な入り口を抜け、中に入ってすぐにいた巫女さんに事情を説明する。と言っても、いろいろ隠蔽してるけど。
内容はこうだ。
「家族で旅行に来ていたのだが、何者かに襲われ、両親とは離れ離れ。姉の助け（アスナとかのどか）あって、なんとかここを発見。どうか少しの間匿ってほしい。」
これだけで巫女さんは即座に詠春に許可を取ってきてくれた。
仕事はや～……。

「なるほど、先程の話は嘘。本当は、親書の受け渡しでしたか。はは、まんまとやられましたね……」

確かに、あの男に良く似ている。

そう付けくわえながらお兄ちゃんの頭を撫でる。

「キミがイリア君だね？　義父から聞いてるよ。確かに、ナギに似てないね。けど綺麗なところは母親譲りかな」

「ありがと、詠春」

さっきお兄ちゃんにしたようにボクの頭も撫でる。

母親……。災厄の女王アリカ。だったっけ？

はぁ、なにかとややこしい家族構成だよね。これって。お兄ちゃんは知らないみたいだけど。

「そうですか、刹那君が……」

「うん、だから援軍を頼みたいんだけど……」

これまでの経緯を話している時、どたばたと騒がしい足音が聞こえた。

と思ったら、今度は大きな音を立てて障子が空いた。

「長！　木乃香お嬢様が御友達を連れて御帰りになられました！！」

「……援軍は必要なかったみたいだね」

「その様ですね。では、客間に通します。君は木乃香たちを案内してやってくれ」

「はい！」
「では、ついてきてください」

それにしても、さっきの巫女さん。木乃香が友達をつれてって言った？　誰のことだろう。刹那のことを態々友達だなんて言うかな？

なんでこうなったのさ……。

「いやー、刹那さんの服の中に忍び込ませたＧＰＳ機能付き携帯がこんなところで役に立つとは」

朝倉……。後でお仕置きしてあげよう。
客間に入った瞬間見えたのは、頭を抱えたくなる様な光景でしたとさ。
そこにいたのは五班＋一人だった。
木乃香の御友達っていうのはこういうことかー……。

その客間にて親書を渡し、一つの目的をやり終える。その際何故か拍手が起こりそのまま宴会騒ぎ。詠春はこのまま泊ると良いと言ってきた。旅館の方には式を置いておくとかなんとか。
その式が突然ストリップショーを始めるところが脳裏に過ぎったのはなんでだろう……。
とりあえず携帯で瀬流彦先生に連絡を入れておくことにしよう。

お兄ちゃんとは別の部屋に布団を用意してもらった。理由はない

けど、何となくそうした方が良い気がした。
入浴は既に済ませてあるし、寝巻き用の浴衣も来た。
未だ、皆は騒いでいるだろうけど、ボク様ちゃんは徹夜なんてしてられないのだ～。
ふあぁ～。てことで、お休み。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

イリアの部屋に忍び寄る影。

白髪の少年。三番目（テルティウム）のアーウェルンクス。
少年は音を立てずにその部屋の障子を開けた。
彼の目に入るのはこちらに顔を向けて無防備な寝顔を見せているイリア。ここに来るまでにここに来た一般人の面々は石化させてきた。更に言うと、近衛詠春もだ。レジストはされたものの、それでも少しでも石化の息吹は降りかかった。それだけで勝ったも同然だ。もしかするとネギや女剣士にこのことが行き渡るかもしれないが、彼にとってそれは大した障害ではない。

白い少年は無防備なイリアの髪に手を伸ばす。
その手が触れた瞬間、イリアは少し身をよじる。しかしすぐに猫の様な顔になった。頭からから頬を撫でる様に動く。すると今度はくすぐったそうにする。

白い少年は白い少女に魅かれていた。
可憐な少女に。雪の様な少女に。その赤い瞳に魅かれていた。

「んにゃ……？　フェイト……？」

半分だけ開いた瞳がフェイトを捉えた。

「迎えに来たよ、お姫様。さ、舞踏会へ行こう」

「わ！？」

布団を優しく剥がし、イリアをお姫様抱っこする。それこそ、どこかのお伽噺の『王子様が迎えに来た』シーンの様だった。

「ま、待ってよぅ。どうして急に……」

「こういうのは嫌い？」

「……嫌いじゃない、けど……」

イリアが言いたいのは自分の容姿のことだ。抱きかかえられた際に浴衣は少し開(はだけ)てしまい、腿は丸見えになっている。

しかしフェイトはそんなことに気付きもしない。

ただ首を傾げる。

「うぅ……もう、鈍感……」

「……？」

「それで、どこにつれってくれるのさ」

「賭け事をしようと思ってね。君が勝ったら僕は君の願い事を一つだけ聞いてあげる。僕が勝ったら君は僕の願い事を一つだけ叶えてくれる。そういうシンプルな賭けさ」

「なんの勝負……って、聞くまでもないか」

「ふっ」

「わ！？」

フェイトはイリアを抱え、そのまま上空高く跳び立つ。紅い月が見えた。白い月ではなく、紅い月が夜を照らしていた。

辿りついた先は湖。ここがどこなのかと聞けば、答えは一つ。
飛騨の大鬼神封印の地。リョウメンスクナノカミが封じられた場所。
フェイトはイリアを優しく下ろし、二人は面を向かい合わせた。

「ふふっ、手抜かりなく手を抜いてあげるよ、フェイト」
「……できれば、本気で来てほしいけどね」

二人同時に瞬動で距離をとる。その差は約二十メートル。

「それじゃ、始よっか。……リードしてよね、フェイト」
「ああ、それじゃ、踊ろうか」

白の人形と白の少女の円舞（ワルツ）が、始まった。

修学旅行？（後書き）

展開が作者自身も良く分かんない。
大丈夫かコレ。

イリアは斬魄刀を手にする。
刀を持つ腕を前に突き出し、手首を軸にしてくるりと回す。柄頭に長い帯が紡がれる。
始解するのは美しい、刀身も鍔も柄も白い、雪の刀。

「舞え《袖白雪》」
「……君に似合う美しい剣だ」
「斬魄刀の中で最も綺麗な刀だからね。……ところで君は結局何者なわけ？　人間じゃないよね」
「僕は人形さ」

フェイトは魔法で作りだした岩の剣を、腰を落として構える。
魔法戦というよりも、剣撃戦。剣術を扱える方が勝てる勝負。
イリアは袖白雪で地面に四か所刺した後、刺突の構えを見せ、魔力を込める。

「《次の舞・白漣》」

瞬間、雪崩がフェイトに迫る。
フェイトが逃げ切れず足を凍らされたことを考えれば、速度は申し分なかったと言えよう。

「なるほど、雪の様に白い君はお似合いの剣と言うわけか」
「もう、そうやってお世辞を並べてもなにもあげないよ」

岩の剣の柄部分で凍った脚の部分を叩き割る。

その後、虚空瞬動でイリアのすぐ近くに――

「《初の舞・月白》」

「っ！」

刀を円を描く様に一振り。それは正しく円舞。

円を描いた場所から、氷の円柱が出現する。円内の天地全てを凍らせた。勿論イリアは既にそこから脱出している。

ギリギリで避けようとしたフェイトだったが、岩の剣を持っていた左腕を凍らされ、身動きが取れない。

「《幻影氷刀》！　水天逆巻け《捩花》

……封号解除、血天逆巻け《捩華》！」

このままではフェイトに逃げられる一方。イリアは斬魄刀の更なる力を呼び覚ます。

卍解ではない。封号解除。本来斬魄刀の力の解放は、始解と卍解のみ。

封号の解除により、力は一段と強くなる。更に、新たな力が重なる。《霊力》が、術者に付与されるのだ。言ってしまえば、ブリーチで言う限定解除の様なものだと思ってくれればいいのかもしれない。

「っ……。今のは……」

フェイトは魔力以外の力が加わったことを悟り、急いで左手を引き抜こうとする。が、そう簡単に抜ける訳もない。

フェイトの願いは、イリアを自分のものにすることだ。人間くさい人形だと、本当にそう思う。

《袖白雪》の力でもう一本の氷で出来た刀を作り出す。更に斬魄刀を三又の矛、《《捩花》》を解放させる。

《《捩花》》を持つ限り、水はイリアの味方。そして、スクナの封印の地は湖。

そこにあるのは、水水水だ。更に今《《捩花》》は封号解除されてる。水を操る速度や精密性が一段階上がっている。

《《捩華》》を下から上へと振るう。すると湖から巻きあがった水柱が、一瞬でフェイトを包んだ。

「っ……!?」

「《《幻影氷葬》》！」

幻影氷雪を投擲、水に突き刺さると同時に、《《幻影氷葬》》にて氷爆に似た現象を起こす。忽ち、水柱は氷柱へと変貌した。

本来ならこれで終わりだと思うだろう。

対象であるフェイトを包んだ氷は自然と溶けることのない直径十メートルの氷柱。出られる出られないの前に、凍死するのが自然の摂理だ。

だが、自然じゃない。フェイトは、人間じゃない。なにより、氷を砕くくらい、魔法を知り、扱う者なら造作もない。

氷柱が、砕けた。

「……さすがだね、フェイト」

「まったく……、僕にリードさせてくれよ、イリア」

「ごめんね、でも負けれないから」

イリアの願い。それが何かと聞かれれば、イリアも一つだろう。
フェイトを家族の一人にする。エヴァ邸で、共に住む。
それをエヴァが許すかどうかは別として、だが。

「舞え、《袖白雪》封号解除、舞い狂え《袖之死雪（そでのしらゆき）》」

封号解除の難点と言えば、斬魄刀の力を借りる様なものだ。故に、一つの斬魄刀の始解を封した瞬間封号も共に封じられる。必ず始解していなくては封号解除はなせないのだ。一度封じれば封号も封じられる故に、毎回毎回解除しなくてはいけない。とても面倒臭いのだ。

まぁ、魔力を込めて発言すればいいだけなのだから、簡単と言えば簡単なのだが。

ちなみに、封号解除をすると例外なく、斬魄刀の刀身には紅い模様が浮かぶ。現に、袖之死雪の白い刀身には良く映える紅い模様が走っている。

「『障壁突破・石の槍』」
「《幻影氷刀・千刃葬》」

フェイトからは障壁をものともしない石の槍が一本。
イリアからは氷で出来た冷たい刃が千本。

圧倒的なまでの数。だがイリアの放った千本が障壁を突破できるかと問われれば、答えは否である。

一本一本は触っただけで肌が張り付く程の温度。だが、そのどれもが突破力と言うものを持っていない。それに比べフェイトの石の槍は障壁を突破する術式が組まれている。

どちらが優勢かと問われると、答えを出すのはなかなかに難しい。だが敢えて答えを出すならイリアが優勢だろう。なんせ、彼女はオ

リジナル魔法や、改造魔法の知識は専門家（スペシャリスト）並。天才だ。

先程の幻影氷刀を思い出してほしい。一本だけで、巨大な水柱を凍らせる爆発。

それが、千本迫ってきたとすれば？

「っ……ぐっ！？」

フェイトの出鱈目な障壁を丸ごと氷漬けになるのは、極当たり前なことだ。

だが、フェイトがそれを破壊して出てくると言うのも、極当たり前なことだった。

更に言えば、石の槍すら凍らせてしまっているのも言うまでもない。

「まったく、寒い……」

「当たり前だよ。氷の爆発。冬山登山で遭難して雪の中に埋もれた様な感じだもの」

「例えが何とも言えない説明をありがとう。……ん、来たみたいだね」

フェイトが見る方向をイリアも見る。

そこには、木乃香を連れた天ヶ崎千草の姿があった。

「……木乃香？　ああ、なんとなく分かった。あの猿女のやりたいこと」

イリアの辿りついた答え。

木乃香の魔力を使い、飛騨の大鬼神を復活。更に木乃香の魔力で制御。そのまま西を牛耳り、東を屈服させようというものだろう。

というものだ。
しかし、疑問が残った。

「飛騨の大鬼神如きで東を屈服させるどころか、西を牛耳ることもできないと思うんだけど」
「うん、そうだね。……彼女は西洋魔術師達に両親を殺されてね。そこら辺を上手く利用された人なんだよ。上の人の企みは、恐らく失敗するだろうけどね」
「ふいーん、ボク様十歳だからそういうの良く分かんない」
「……良い言い分だね。それ」

イリアは千草の方をもう一度見る。西独特の詠唱が始まっている。ネギはこれに気付いているのか……。気付いていたとして、どう対処するのか。心配で仕方ない。
ならイリアが木乃香を助ければいいじゃないかと思うかもしれない。だが今はそれどころでは無いことをお忘れではないだろうか。実際、ここでイリアが余所見をしたのは間違いだった。

「前がガラ空きだよ、イリア」
「っ！？」

フェイトの拳が腹部に入る。ずしん、という重い音と共にイリアは水中に吹き飛ばされた。

「……やりすぎたかな……」

思えば、吸血鬼とは言え数えで十歳。それに、果たして溺死から吸血鬼が生き返られるのだろうか。造物主から吸血鬼化の知識は貰っていたが、思えば吸血鬼について詳しいことはまったく知らなかったなと思うフェイトであった。

「ぷはっ……。……あーもう、浴衣がびしょびしょだよ……」

水中から顔だけ出してしゅん、とするイリア。

「大丈夫かい？」

「うー、大丈夫じゃないよー……へくちっ！」

可愛らしいくしゃみをするイリア。その光景はとても戦闘中のものとは思えない程微笑ましいものだった。

「……もう、女の子をずぶ濡れにしといて謝ることもしないの？　フェイトは……」

湖の上に立ち、フェイトに言う。その様は忍者の様だ。

「ごめん、だけど、余所見はいけないよ。……どうかな？　これで僕の勝ちってことで」

「えー……」

その時、唐突に大きな声が聞こえた。

「お前ぇえええぇえええ！！」

そちらの方を見ると、ネギが杖で湖を突っ切ってくるのが見えた。

「……あれは」

「お兄ちゃん……？」

二人して目を丸くする。だがネギは止まらず、それどころか《加

速》していく。
頬には一発殴られた様な後がついていた。

木乃香が攫われたと聞いたネギは、真っ先に風呂に向かった。そこにいたのは裸体で倒れているアスナ。そこで一度フェイトと相対する。刹那もその場にいたが、一撃で負けた。
その際、フェイトが言った言葉。

「ダメだよネギ君。実の妹のこと、ちゃんと守らなきゃ」

そう言っていったのだ。それを聞いたネギは勿論急いでイリアの寝ていた部屋へと向かった。だがそこには布団だけが残され、イリアの影も無かった。

その後は刹那とアスナも加わり、木乃香とイリアが攫われたであろう方向へ向かう。
木乃香を抱えた千草に追いつきはしたものの、そこにイリアの姿はない。

「イリアをどこにやったんですか！」
「イリア……？　ああ、あの女の子か。残念やけど、ウチは知らんで」

当たり前だ。イリアを攫ったのはフェイトの独断。千草が知る筈もない。

そこで千草は木乃香の魔力をありったけ使い、千にも届くだろう数の鬼を召喚。

カモのアドバイスで一度そこに竜巻の壁を作る。そこでこれからの分担を決めた

ネギがイリアと木乃香を助けに行き、退魔専門である刹那と、召喚されたものを一撃で還すことのできるアスナが鬼退治をすることとなった。更に、従者の召喚ができるという仮契約カードを手に入れるため刹那と仮契約。これで、アスナも刹那も、いつでも呼び出せるようになった。

勿論、アスナや刹那だっていつまでも鬼退治をしてるわけにはいかない。数が減ったらネギの応援に行く手筈となっている。

その後、杖に跨り、鬼神復活の詠唱を始めた際の膨大な魔力を感知。ネギは《加速》させながら突き進んだ。

「行かせへんよ～」

「くっ？！」

杖の前に現れたのは月詠。上昇して無視を決め込もうとしたネギだったが。

「百列桜嵐斬」

「ぐあっ！」

気で作られた花弁の斬撃を受け、体勢を崩して落下。

そのまま月詠と相対。

本来相対する時間も惜しいネギは焦る。そこに現れたのが、数匹の黒い狼だった。

「この狼は……小太郎はん……？」

「すまんな月詠の姉ちゃん。俺はもうそっちやないねん。イリアとかいう女に雇われてな。行け、ネギ！　とっとフェイトの野郎をぶっ飛ばして来い！」

死亡フラグである。

「で、でも……」

「アホか――！！」

「あぶ！？」

殴られた。グーで。

「な、なにするのさ！？」

「阿呆、妹が危険なんやろ。大体の状況は把握しとる。妹を護るんが兄や。ちゃうか？」

「……うん。そう、だね……。ありがと、小太郎君。気をつけて」

「誰に言っとんねん。おら、さっさと行け！」

「うん！　《加速》！」

杖に跨り、再び宙を駆ける。

「逃がしませんえ！」

「こっちこそ、邪魔させへん！　漆空　黒狼牙！」

影から作った黒い狼を月詠へ向かわせる。月詠はそれをただの斬撃で防ぐ。

しかしそれこそ釣り。黒狼を相手にしてる間に、小太郎は一瞬で月詠に近づき。

「我流・犬上流　狼牙双掌打！！」

「ぐっ！？」
（ちっ、女相手はやっぱやり辛いわー……）
この状況でも恐ろしい程のフェミニストである。
しかしそれでも、狗神の力を濃厚に使った一撃は勿論有効打。月詠の体勢を崩すことくらいは造作もなかった。
「いくでぇ！　我流・狼牙四連舞！」
右手の狗神を込めた右拳を月詠の腹部に減り込ませ、それを上へ持ち上げ月詠の体を宙に浮かせる。更に狗神を込めた左手のアッパーが月詠の顎を捉える。より一層、月詠の体は飛んだ。
しかしそれも重力に従い落ちてくる。顎を打たれた月詠は意識を手放しそうながらも、ギリギリで耐えていた。しかし最早体を捻り攻撃をかわすことも、虚空瞬動もできなかった。
小太郎は一回転し、頭から落ちている月詠の鳩尾に左肘を穿つ。勿論これも狗神の力を使っている。月詠は木の幹にぶつかりもう一度落下を始める。だが、まだ地面に着くことは許されない。
「これで決まりや」
瞬動の勢いを乗せた右拳を、もう一度腹に食いこませた。今度は打ち上げることもしない。だが、その右拳に籠っている狗神は先程までの倍近く。月詠の体は、木を凪倒し、砂煙の中に消えていった。
「んー、見事な技でござったな……」
「……誰や」
そこにいたのは夕映を抱き抱えた長瀬楓の姿があった。

「保険で呼ばれてた助っ人でござる。どうやら、拙者の出番はなかったようでござるな」
「ああ、そうやな。あんなの、俺だけで十分や」
頭の後ろで腕を組み、胸を張る小太郎。
しかし、これは月詠の油断が呼んだ勝ちだ。小太郎と月詠が本気で殺り合えば勝つのは――。

小太郎の手により邪魔になるものがいなくなったネギは森の上を突っ走る。更に携帯電話を持ってることに今更ながら気付いた。
「おい兄貴！　携帯なんかで話してる場合かよ！？」
「大丈夫！　頼るなら、あの人しかいない！」

――ガチャ。

「もしもし、わしじゃが……どうかしたのかの？」
「はい、学園長。実は……」

電話を終え、更に速度を上げる。そして見えてきたのは、より一層大きくなった魔力と、ずぶ濡れの状態のイリア。そして、それに向かい合う様にいるのはフェイト。

――プチッ

「お前ぇえええぇえええぇえ！！」

実の妹に手を出したフェイトを殴ろう。それしかネギの頭には無かった。元より英雄的で正義の味方的思考であるネギ。実の妹に手を出されてキレない筈がなかった。

だからこそ判断を間違った。

フェイトがイリアに夢中なうちに木乃香を奪還。その後イリアの援護に向かうのが常識だ。

だからこそ、返り討ちに合う。

「はぁ……、《石の槍》」

障壁突破の術式を組む必要もない。それがフェイトの判断だった。ネギの頭には血が昇っている。正常な判断など、できるはずがなかったのだ。

「うわ！？」

「ええ！？　お兄ちゃん！？」

避けようとして、体勢を崩す。

そのまま盛大な水飛沫を上げ湖の中に、入っていった。

一度手放した意識が戻る時に耳に入ってきたのは鈴を弾く様な声だった。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「イ、イリア……」

「まったく、妹と違ってなんでこんなに無様なんだい。ネギ君」

「お前……なんで」

なんで意識を失ってる間に殺さなかったのかと言いかけて、その言葉を唾ごと飲みこんだ。言えば殺される。そんな想像ができたから。

「それより、アレいいのかい？」

「……？　っ！？」

そこには完全に姿を現したリョウメンスクナノカミ。

そして刹那とアスナの姿があった。更に何故か長瀬楓と犬上小太郎も、スクナと対峙している場面だった。

「……どうしてお前はアスナさん達を止めないで……？」

「僕が興味を持っているのはイリアだけだ。スクナが復活しようが封印されようが、千草さんが西を牛耳ろうが東を屈服させようが関係ないんだ」

フェイトはネギの質問がつまらないとばかりに無表情に答える。

彼らしいと言えば彼らしい反応だった。

ネギはフェイトを睨む。フェイトもネギを見る。

下手をすれば火花が散っている様にも見えるかもしれない。……

「過保護な兄」と「妹の彼氏」という関係に見えなくもない。

「きゃあ？！」

「ああ、アスナさん！？」

突然の悲鳴。そこを見るとアスナ、スクナの腕に因って吹き飛ばされたアスナがいた。

アスナだけじゃない。楓も、小太郎も、刹那もだ。

「はぁ……仕方ないかな」
「行くのかい？　イリア」
「うにゃ、仕方ないよ。これ以上生徒に怪我させたら責任持てないもん」
「そうか……。じゃ、この勝負は僕が勝ったと、そういうことでいいんだね」
「……うん、いいよ」

「（まぁ待てイリア。私の出番まで、無くす気か？）」

「え……今のって」

イリアの良く知る声。金を靡かす闇。誇り高き悪の大魔法使い。

「（おい、白髪。うちのイリアが随分と世話になったな。え？　この前イリアを刺したのは貴様か）」
「……闇の福音。……その質問に答えるなら、イエスだね」
「そうか、なら死ね」
「っ！？」

影を使った転移（ゲート）。そこからぬるりと手が出て、フェイトの足首を掴んだ。そして頭が出てくる次に同体、次に足が出てきて、フェイトを一撃で吹き飛ばした。

「エヴァにゃん……ホントに、エヴァにゃん……？」
「ああ、そうだよ。久しぶりだな、イリア♪」
「エヴァにゃーん！」
「うぉ！？　だ、抱きつくなこんなところで！」

その場にいる誰もが固まっていた。ネギも、アスナも刹那も楓も。小太郎は何が起こったのかすら理解できず、困惑するのみ。

「なんで、エヴァンジェリンさんが……」

だって、封印されてるはず。

そう言葉が漏れる。それを聞いたエヴァはネギを一瞥し、言った。

「この前は負けたことにされたが……その借りを返しに来た。それだけだよ。更に言えば、ぼーやが連絡を入れたはずだがな？　そのおかげでジジイから外を出ることを許可されたというわけだ」

封印の方はどうしたかと言うと学園長が頑張っている、としか言えない。

トイレに行けないどころか碌に飯も食べれないとだけ言っておこう。

「まったく……イリアと違って、なかなかな挨拶じゃないか、闇の福音」

「当たり前だ。イリアは私の従者だからな。吸血鬼にしてしまったのは私だが、そうせざるを得ない状況を作ったのは貴様だ。なら、死ぬ覚悟はあるな？」

「……エヴァにゃん、それがその……非常に言い辛いんですけど……」

思わず顔を引き攣らせながら、言う。

フェイトと結んでしまった、仮契約カードを見せながら。

「イリア……お前、なんで……」

「フェイトとキス、しちゃったんだよね……」

「貴様ぁあ！　私のイリアを穢しおったなぁ！？」
「いや、確かにキスはしてしまったけど仮契約は……。ああ、あの時の微弱な魔力はそういうことか……」
「なに一人勝手に思考に耽っておるのだ！？　やっぱ死ねぇえ！」

エヴァの爪がフェイトを殺そうと斬りかかる。
しかしそのフェイトは幻覚（イリュージョン）だ。

「痛いよ」
「知るかぁあ！　幻覚のくせに痛い訳もないだろお！？」
「まぁまぁエヴァにゃん、落ち着いて」
「イリア！　私は認めんぞ！　こんな男との契約なんて認めんぞぉお！！」
「え、エヴァにゃん、首。首しまってる。ギブギブ」
「はっ！　すまん……」

イリアの襟首を締めがくがくと揺らす。イリアが苦しそうにしてるのに気付き手を離すも、エヴァの暴走は止まらなかった。フェイトの幻覚を原型の無くなるまで斬り裂いた。

「はぁ……はぁ……」
「だ、大丈夫？　エヴァにゃん？」
「お前、なんであんな奴とあんなにフレンドリーなんだ？」
「……気に入ったから、かな。ボクはフェイトを許してる。だからエヴァにゃんも許してあげて？　ね」

後ろから優しく抱きついてくるイリア。こうされたエヴァは言うことを聞くしかない。

「……分かったよ。だが仮契約は認められーん！」

「もう、嫉妬してるの？　大丈夫だよ、ボクのマスターはエヴァにゃんだけだから」
「……本当か？」うるうる。
「ごふっ！」口から溢れだす愛。
「うぉい！？　イリア！？　大丈夫かイリアァア！」

こんな騒ぎの奥ではアスナ達が頑張っているのだから、可哀そうな話だと思う。
しかしエヴァの涙なんてレアなものを見れば、口から愛が溢れるのも仕方ないと……言えるのだろうか？
ここに茶々丸がいなかったことが悔やまれるとだけ言っておこう。
そうそう、茶々丸は学園長の付き添いだ。トイレや飯を食べれないくらい忙しい学園長の身の介護とも言う。

「それより闇の福音。今度の連休のうち一晩だけイリアを借りるけど、いいよね？」
「良くない。断じて」
「でも賭け……」
「賭けでもなんでも断じて許さん」
「……娘を彼氏に取られる父親の心境かい？　「違うわぁあ！」……そう？　結構的を射た例えだと思ったんだけど」

しかし考えてほしい。先程言った通り、今こうしてる間にも背景ではアスナ達が頑張っているのだ。

「卍解《黒縄天譴明王》」

さすがにそれを放っておけなくなったイリアがとある斬魄刀を卍解した。
後ろの森に立つ、スクナすらも凌駕する巨人。鎧を纏った巨大武

者。

「行くよ、明王」

イリアが剣を振り上げるのと同時に明王も刀を振り上げる。
アスナ達がいないのを確認、スクナの左腕日本を両断した。
瞬間に突風が吹く。

「刹那！」
「は、はい」

この状況に呆けていたアスナや小太郎、楓。勿論、刹那もそんな呆けていた一人だった。だから突然呼ばれれば驚くことは当たり前なことだ。だが、この後のイリアの言葉には更に驚かされた。

「刹那、そろそろ秘密もここまででいいんじゃないかな」
「……っ！」
「ボクは明王の制御で手いっぱい。お兄ちゃんは疲れてて杖にも乗れない。なによりスクナの腕を掻い潜って木乃香を助けに行けるのは、刹那だけ。だから……、ね？」
「で、ですが……」

勿論、そんな簡単にその願いを聞けるはずもない。
烏族のハーフ。それも白だ。白い翼は不吉を呼ぶとされる者の証……。なにより、刹那にとってその烏族の姿は、とても醜いのだ。

「はぁ……じゃあ刹那。ボクこのままこの剣振り下ろしちゃうよ？さっきの突風見たでしょ。今度こそ真正面から叩き斬るつもりだから、今度こそ木乃香吹き飛んじゃうかもしれないよ？」
「なっ……そ、そんな……」

「そんな顔するならさっさと――「イリア！！」ふえ、なに、エヴァ……っ！？」
「イリア先生？！」

大声を上げたのはエヴァ。
その声が聞こえた直後、イリアの胸部に激痛が走る。思わず、胸を抑えてその場に倒れ込む。
立っていた明王は制御できず、そのまま霧散していった。
激痛の走った胸部を抑えた手に、
――ぬるりと、
嫌な感触がした。

「……あっちゃー……。まさか、明王がやられたの、かな……」

何があったのか。それを言えば単純なことだった。
千草は最初なにが起こったのか分からなかった。突然現れた巨人に戦慄する他にできなかった。
だが巨人は一度の攻撃以降、動きを見せなかった。これを好機と言わずしてなんと言うか。スクナの口から魔力を圧縮させた魔砲を放ったのだ。見事それは明王の胸部に直撃。

本来、それはなんの問題も無いと思うかもしれない。それで壊れてしまったのなら作り直せば良いと。そう思うだろう。だが明王は違う。動きが連動してるだけではない。神経が連動しているのだ。神経リンクと言っても良い。明王が怪我をすれば必然、イリアもそれと同様の傷を負う。

スクナの魔砲は胸部に直撃。その魔砲の威力は絶大。明王の鎧は砕けた。そうなれば必然、イリアは血を流すこととなるのだ。

「おいイリア、大丈夫なのか！？」
「にゃは、大丈夫、だよ。吸血鬼なんだから、こんなのすぐ治る。……刹那、お願い。ボクが回復するまでに、木乃香を……」
「……」

刹那は後悔の念に押しやられた。
自分が躊躇していたから。自分のコンプレックスを、自分の秘密をばらせと言われたことに対して苛々なんてしていなければ。イリアは傷を負わなかったのではないか、と。

「すいませんでした。……行ってきます、イリア先生」

バサッ。
白い翼が、背中から生える。美しい、白い鳥にも見える刹那は、自分の大切な友達を助けるべき飛び立った。

「刹那さん……よね？　今の……」
「ん、そうだよ。アスナ」

アスナの独り言の様な質問に律義に答えながら、なんとか立ちあがる。
過保護な兄（ネギ）と主（エヴァ）はそれを止めようとする。逆にフェイトは立ちあがるのに手を貸していたが。

「ちょっとイリア、大丈夫なの！？」
「うにー、大丈夫だよ。さて、と……。ごめんね天譴、ボクの不注意で……。今は少し休んでて」

刀を撫でると一瞬その刀身が光り、しかしすぐにそれは黒い刀身へと変わった。

「さて、と……胸はまだ痛むけど、ちゃっちゃと片付けちゃわないとだね　。……卍解《大紅蓮氷輪丸》」

その場の気温が、一気に下がった。

「天ヶ崎千草！　お嬢様を返してもらうぞ！」
「なっ……？！　神鳴流のひよっこ？！　くっ……」

刹那が烏族のハーフだと思いもしなかった千草は急いで猿鬼と熊鬼を召喚。
だが刹那の太刀筋は魔を討ち、鉄すらも斬る神鳴流。そんなもの、紙切れもいいところだった。
猿鬼・熊鬼の二体を両断。そのまま千草の目の前にいる木乃香を抱き抱え、一瞬でそこを離れた。

紅い月をバックにしながら飛ぶ姿はどこか幻想的だった。
そんな中、木乃香が目を覚ます。

「あれ、せっちゃん？」
「はい、お嬢様」
「……せっちゃん、その背中の……」
「こ、これはその……」
「なんや綺麗な翼やね。天使みたいや」
「……ありがとうございます、お嬢様」

刹那は内心驚きながらも、感動した。これまで、この姿を見せれば嫌われるとばかり思ってきた。

だが今思えばそんなことはなかったのだ。相手は木乃香。木乃香は容姿なんかで差別する様な人間じゃない。

木乃香のことは自分が一番分かっていたはずなのに……。余計に、イリアに対する後悔が募っていった。

「しもうた！　くっ……スクナ！　はよ取り戻……スクナ？」

木乃香を奪還された。そのことに内心焦っている千草は忘れていた。

スクナは木乃香の魔力で制御されていた。今その制御が解き放たれたスクナは、どうなるか。

「きゃっ！？」

スクナは空いてる手で千草を吹き飛ばした。視界に入っている千草を敵だと判断したのだ。

「よっと、大丈夫？　猿女」

それを受け止めたのは、胸を朱に染め、氷の龍を纏ったイリアだった。

「なっ……お前は、西洋魔術師……？　なんや、その氷の翼は……」

「そんなことは今はどうでもいいでしょ。ほら、浮遊術くらいできるでしょ。自分で浮いてよ。意外と重いんだから」

「なっ！？　失礼な！」

「ハイハイ、ナイスバディですね。はぁ……」

「なんや、大人な体に嫉妬しとるだけか」
「違うもん！」

実際はそうなのだが。
吸血鬼となった今大人な体になることはほぼあり得ない。
いや、幻術を使えばできるだろうが。

「さて、猿女。なにか言うことは？」
「……礼なんて言わへん」
「はぁ……。そうだね、まずは謝るよ。ごめんね」
「……なんで謝るんや」
「フェイトから聞いたよ。西洋魔術師に殺されたんでしょ。両親とも。だから、ボクから謝る。ごめん」
「……」
「こんなことで貴女の心の傷が塞がるとは思ってないから、安心してよ。それじゃ、さっさと地面に降りてよ。ボクはアレをどうにかするから」
「どうにかできるんか？」
「できるよ。油断しなければ、だけどね」

スクナは制御から放たれた。なら動きは獣のそれだ。
単純なのだから、それを避けながら動けばいいだけ。

千草が地面に降りたのを見届け、イリアは前を見る。
そこには赤子のように暴れるスクナ。
それに向かい、刃を向ける。

それと同時に、スクナの周りに幾つもの氷柱が出現した。

「……《千年氷牢》」

技の名を告げ、手首を捻る。瞬間、幾つもの氷柱はスクナの動きを封ずるために、一つの氷塊となった。

「卍解。射殺せ、《神殺鎗（かみしにのやり）》」

解号を告げると同時、イリアを纏っていた氷の龍が霧散。そして刀が伸びた。一直線に。音速の速度で。

瞼を閉じて開けた瞬間には刀は元の長さへと戻っていた。
それから一秒ほど送れて、氷塊と化したスクナが、両断された。
直後、氷は完全に粉砕。スクナの原型は消えて無くなった。

修学旅行？（後書き）

え～なんかいろいろ説明して行きましょうか。

《幻影氷刀》

ブリーチでルキアが砕けた斬魄刀を氷で修復してた気がしたので、なんならもう一本簡易的な剣くらい作れるんじゃね？　と思った結果この技が作られました。

《幻影氷刀・千刃葬》

幻影氷刀を千本作り出し、対象を圧倒する。
また、これらは空中に作り出して射出することも可能。追尾・誘導可能。
イリアの氷の《魔法の剣》の強化版とも言える。

《幻影氷葬》

幻影氷刀を爆発させて、対象を氷の中に閉じ込める。
或いは広範囲に水を一瞬で凍らせる冷気を散布する。

《封号解除》

ブリーチでいう限定解除？
斬魄刀の力を借りて霊力が付与。霊力と魔力を重ねて火力や攻撃速

度。特殊能力等の強化がされる。
封号解除の場合、始解の言葉や斬魄刀の名前が少々変わる。更に例外なく、封号解除時は斬魄刀の刀身に紅い模様が走る。鍔から血が垂れてるように見えるとだけ言っておこう。
ちなみに、魔力の上に霊力を上乗せされるので、イリアの魔力量は五倍程になる。大きな魔力を使う時に使用（例・幻影氷刀・千刃葬）。

（魔力と霊力は同じようなもの。ただ霊力を使えば瞬歩が可能になる。鬼道もオーケイ）

補足。
最後の千年氷牢で閉じ込める必要はあるのかないのか。
答えは「ある」です。というか、念には念にっていう感じですね。
スクナは獣の様な存在になっています。本能のままに動く。敵だと思えば蹴散らす。なら一度動きを封じた方がスクナ粉砕の成功度を高めるという話です。

逆に、神殺鎗でとどめを刺す必要があるのか、ですが。
これも念には念をです。氷雪系最強の斬魄刀とはいえ、仮にも神であるスクナを半永久的に閉じ込められるかと問われれば、恐らく否だから。だから殺した。

こんな感じですかね？
誤字脱字等ありましたら感想にてお願いします。普通の感想もお待ちしています。

修学旅行？

スクナを破壊した日。エヴァにゃんに叱られた。
まぁ、そりゃそうだよね～。うん、帰ったら怒られるって覚悟はしてた。それがちょっと早まっただけ……。

「なんであんな気に食わない奴なんかとキ……仮契約してしまったんだお前はぁあ！」

あれ、怒るところそこ？
普通アレだよね。主の許可なく他者と契約するなとかさ……。

とまぁ、そんなわけでボクだけ皆より寝るのが遅くなった。
叱られてる途中フェイトがマスターカードを取りに来てさらにややこしくなったりもした。契約破棄をしろと言わないのはエヴァにゃんの元々の優しさなのか、ただ単に気が動転してるのか。ボクには分からない。

「刹那？　何言ってんの？」

そんな夜を乗り越えた朝、今度はボクが怒る立場になった。

「イリア先生……？　笑顔が怖いです……」
「はぁ……。あのさ、烏族の掟と木乃香、どっちが大事なのさ」

現状説明！
今朝、起きたら刹那が畏まってた！
そして何を言う出すかと思ったら、「烏族の掟故、あの姿を見られたからにはここにはいられません」だってさ！
てかそんな掟聞いたこと無いよ？　それって刹那の捏造だよね？

「もちろんお嬢様の方が大事です！　ただ……」
「ただ？」
「イリアさんに、大きな怪我を……」
「あ……」

そうだった。
今ボクの胸にはサラシみたいに包帯が巻かれている。
吸血鬼として未熟なせいなのか。傷は完全にふさがらなかった。
そもそもあの魔砲で皮膚が吹き飛んだからね。あの時の感触と痛みと言ったら……。うう、思い出したくもないよ……。

「これくらい大丈夫だよ。ボク様ちゃん吸血鬼だよ？　それにエヴァにゃん特製の傷薬だって塗ってあるし」
「……何故ですか？」
「ふえ？」
「何故、そんな明るく『自分は化け物』みたいに言えるんですか……！」

……ああ、世間一般のイメージとして吸血鬼は化け物。自分のことを化け物だと思ってる刹那から見たら、吸血鬼なんてもっての外な化け物ってことなのか。
あーあ、なんか前にも言った様な気がするけど――、

「ボクは化け物じゃないよ。刹那も、化け物なんかじゃない」

「……化け物ですよ」
「皆が化け物と呼ぼうと、ボクも刹那も化け物じゃない。ボクにとっての化け物の定義は“『理性を以て破壊を行い愉悦を感じる』人”だもん。結局化け物は人なんだよ。人外だからって化け物っていうのは、早計だよ、刹那。化け物。漢字で書けば化けた物。人外という意味なのかもしれない。だけどボクはこう思う。外見が化けても、心が化けなければそれは化け物じゃないんだって。今の刹那から見て、ボクは化け物に見えるかな？」
「……いいえ」
「なら、ボクは刹那のことを化け物だと思ってると思う？」
「……いいえ」
「じゃあ、この話はお終いだよ」

ぱちん、と手を叩いて話の終わりを示す。

「で、でも……」
「あーもうじれったい！　じゃあ刹那？　聞くけど木乃香は種別如きで差別すると思う！？」
「……思いません」
「じゃあいいじゃん」

刹那はきっと逃げたいんだ。
木乃香にあの姿を見られたから。次会った時、なんて言われるか分からないから。
でも確か木乃香からは「綺麗な翼」って言われたって聞いたけど……。

「怖いんです」
「何が、かな？」
「このちゃんと会うのが……」

「嘘だよね？」
「……」
「刹那は分かってるはずだよ。木乃香なら、いつも通り接してくれるって。木乃香はそういう子だって。分かってるはずだもん。……なにか、他に理由があるんじゃないかな？」
刹那は押し黙る。目線の先は……ボクの胸？
「あの、刹那？　あまり胸は……、ほら、ボクのちっちゃいし……」
「ええ！？　あ、いえ！　そうじゃなくてですね！？　その、ほら……お嬢様のことを分かっていたはずで、それでもなかなか正体を現せなくて……。そのせいで、イリア先生に怪我を……」
はぁ、なんでまだそんなこと言ってんのさ……。
さっきも言った通り、吸血鬼なんだし、エヴァにゃんの特性傷薬も塗ってあるから大丈夫なのに。
「それでも、傷を負わせてしまったことに変わりは……」
視線を逸らしながら、まだそんなことを言う。
はぁ……。なんていうか、なんでこうボクの周りには硬い人が多いのかなー……。
ボクはそっと刹那の頭を撫でながら言った。
「もう、ボクは良いって言ってるんだよ？　刹那はきっとボクに怒ってほしいんだね」
「……」
怒られた方が良い。糾弾してほしい。罰してほしい。
罪悪感に苛まれる人や後悔する人の思考だね。

「だけどボクは怒らない。ていうか、怒れないよ。怒っても無いのに、どうやって怒れって言うのさ」

苦笑い。

だって怒ってないのに怒ってくださいなんて、どんな頼みごとですか……。

「だから、ね。ほら、アスナ達が来るよ」

「ぇ？」

ていうかさっきからどたばたと足音してたし。

「刹那さん！　大変よ！　旅館の式が暴れ出したって！」

「ええ！？」

「ほらせっちゃん！　はよ行こ！」

「え、えっと……」

いや、そこでなんでボクを見るのさ。

敢えて何も言わず、刹那に笑顔を返した。

「……もう、仕方ないですね。今行きます」

「うん！」

「急ぐよ、せっちゃん！」

「はい、お嬢様！」

「あんせっちゃん、このちゃんって呼んでえな～」

そんな会話を部屋に置いていき、刹那たち三人は旅館に置いてきた式を急いで静まらせるべく、走っていった。

「はは、なんだイリア？　立派な教師みたいなことを吐きおって……」

いつの間にか盗み聞きをされていたらしい。悪趣味だよ……。

「む……。ボクはこれでも教師なんだよ？　エヴァにゃん」

「生徒に向かってにゃんとか言う教師がいるか？」

「にはは、なに言ってるのさ。ここにいるじゃん」

「……」

「冗談だよぅ。そんな冷めた目線送らないでよぅ……」

そんなやり取りの後、包帯の交換をした。

交換を終えたと同時に、詠春が「お疲れ様」とお茶を持ってきてくれた。優しい殿方だよ、うん。

「ふぅ……。それにしても、詠春。木乃香にはこれからどうさせるのかな？」

「……それは、木乃香が決めることです。私はただ親として、木乃香の行く末を見守るだけです」

「ふっ、それは投遣りと言うものだぞ、詠春。まぁ、自分の子供の生き方を邪魔する大人よりは好ましいがな」

「はは。……確かに、投遣りかもしれませんね」

「ううん、いいんだよ。詠春の言ってることは間違ってないと思うよ。……子供って言うのはさ、親の知らない所に行っちゃうんだよ。こういう世界だと特にね。だから親は望むしかない。子供が、望むべき方向を見て、臨むべき方向へ進んでほしいって……。そうやって祈って望んで願って信じて……介入すべき時には介入する。それが親子ってヤツでしょ」

あれ、どしたのさ詠春。

なんか呆然としちゃって……。
エヴァにゃんはエヴァにゃんで、なんか不敵に笑ってるし……。

「あ、いえ。すみません。遂、イリア君は本当に十歳なのかと……」
「あ、ひっどーい。ボクそんなに老けてないよ？」

「さて、と。待ち合わせ時間はさっき言った通りで良いな？」
「ええ、そうですね」

……ん？
思わず小首を傾げる。

「どっか行くの？」
「ああ、ぼーやがどうしてもってね……」
「ナギの隠れ家に行くんです。イリア君も来ますよね？」

ナギの隠れ家……。
興味がないと言えば、嘘になる。父さんの行方と母さんの行方の秘密が、もしかしたら分かるかもしれないから。
だけど……。

「うにー、ボクは、いいかな」
「そうですか？　なんでまた……」
「正直、ナギのこと、あまり好きくないし……」
「……そう、ですか」

詠春は微妙な表情をしながらもボクの頭を撫でた。

「……？」
「ナギの代わりにはなれませんが、偶に京都に来て、私に甘えても

良いのですよ」
「……詠春……」
くしゃくしゃと撫でる手つきは、タカミチ以上に手慣れてる気がした。
まぁ、そりゃそうか。木乃香と言う娘がいるんだし。
「ん、ありがと……」
「まぁ……なんだ。私にも甘えても良いのだぞ？」
そっぽを向いて、顔を赤くしながらそんなことを言うエヴァにゃん。
ツンデレだにゃ～。
「勿論だよ、エヴァにゃん。エヴァにゃんは私のマスターさんだもん」
エヴァにゃんにジャンピング抱きつきを「ぐべ！？」
……エヴァにゃんから変な悲鳴が聞こえた。
「肋骨が折れた気がするぞ……」
「にゃはは……、ごめんごめん」

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

イリアは温泉に入っていた。思えば、帰ってきた時間は午前の三時頃。それからエヴァに怒られ、風呂にも入れずに寝てしまったの

だ。女の子が入浴を欠かすなど言語道断、というのは頑張りすぎて二日間風呂に入らなかったイリアに対する新田の言葉だ。
そんな訳で、入浴中というわけだ。

「ふいーん、今頃エヴァにゃんはテンションＭＡＸで清水寺でも満喫してるかなぁ」

それに付き合わされるネギ達に合掌。

そうそう。旅館で暴れていた式神だが……あれは既に回収されている。
ちなみに、なにをしでかしていたのかと言うと……。とても言いにくいのだが、ストリップショーを始めてしまったのだ。朝っぱらから。
イリアの式神は大人しくしていたのだが（というか無言）、瀬流彦や新田に子犬の様に着いて行ってしまう様なモノだった。事情を知ってる瀬流彦は良いが、事情も何も知らない新田から見れば迷惑極まりない。……はずなのだが……。
イリアを膝の上に座らせてたり膝枕させたりしてる新田を見かけたと言うのはしずな教員の証言である。
ちなみに、式神イリアはストリップショーが始まる前にうたた寝を打ち、始まった時には瀬流彦の肩に頭を乗せて寝ていたとかなんとか。
そんなことをしてる自分を想像して羞恥する。頬がほんのり赤くなっているのは温泉のせいだけではないだろう。

その時、温泉の戸が開いた。

「……え」
「やぁ、イリア。昨日ぶり。……いや、さっきぶりかな」

「イヤイヤイヤイヤ。えー……」

そこに立っていたのは白髪の少年。フェイトだった。

腰にタオルを巻いて完全無防備。曼荼羅の様に出鱈目な魔法障壁も、感じ取れない。

「どうしたのさ、こんなところに。あ、待って。良いって言うまでそっち向いてて」

いそいそと、体にタオルを巻く。

「ん、いいよ。それで、どうしたのさ」

「なにか理由がなくちゃ会っちゃダメなのかな」

「いや、そうは言ってないけど……」

「……これを渡そうと思ってね」

そう言って渡してきたのはどこから取り出したのか一通の招待状だった。

「……これは？」

「ディナーの招待状。賭けで勝ったのは僕だよ。一つお願い事を聞いてくれるんだよね、イリア？」

「ああ、そういうこと……」

「本当は君を強制的に《完全なる世界》に連れていく予定だったんだけど、それは少し可愛そうだと思ってね。ディナーからその後まで、話し合いも兼ねた親睦会をしようとね」

イリアは考える。エヴァになんて言われるだろう、と。

「そのディナーって、どこでするのさ」

「僕の本拠地」
「ううむ……」
フェイトの本拠地なんて言ったが、実質上本拠地と言えるような場所では無い。ならなんて言えるような場所なのか。それを敢えて言うなら、ナギと二番目のアーウェルンクス決戦の地だろう。
「……ん、分かったんだよ」
「日時はその招待状に書いてあるから、読んでおいてね」
「アイアイサー」
それを伝えた後、フェイトは温泉に深く浸かることもせず出ていった。
「……ていうか瀬流彦先生の結界どうやって抜けて来たのさ……」
いろいろ規格外な少年である。
その日、イリアは適当に溜まっていた書類を片付けるだけで一日が終わった。
翌日、修学旅行最終日。電車の中にて。
「う～、エヴァにゃ～ん……」
イリアの魔法でエヴァは初日から修学旅行に参加していたと皆を誤認識させている上にエヴァがここにいることを不審に思うものはいない。
しかし生徒の膝枕で寝てしまう教師と言うのはどうなのだろうか

……。

「ねぇねぇエヴァちゃん」

話しかけてきたのは早乙女と朝倉。

「ああ？　なんだ」

イリアの寝顔に癒されていたところを邪魔されたエヴァは不機嫌丸出しで応える。しかし二人はそんなことも気にせずに、こう言った。

「はっきり言ってイリアちゃんとどういう関係なわけで？」

「ぶっ！？　どういう意味だそれはぁあ！？」

「え～、だって、ねぇパル？」

「むふ、エヴァちゃんとイリアちゃんから異常な程のラブ臭が……」

「なんだラブ臭とは！？」

相変わらずいじられる方には滅法弱いエヴァであった。

修学旅行？（後書き）

ストックを貯めてた結果、約一週間の間投稿しないと言うことになった。
しかしどうも話が上手くできない。
どうやって進めていこうか、とか。マジどうしよう。

吸血衝動

修学旅行も終わり、久々の休日。イリアは一人、森の中を駆けていた。

（はぁ……。折角休めると思ったのに……）

心の中でそう思いながらも、学園長の命令に従う他ない状況だった。

麻帆良に侵入者。五十を超える鬼を従え、昼の内から行動を起こしたと言うのだ。

今動ける魔法先生の中で最も効率的に敵を討てるのはイリアだけ。スクナを倒したと言う事実が、それを決定づけた。

そうそう。小太郎は麻帆良に住むことになった。イリアの頼みにより衣食住の三つを確保した結果だ。

しかし彼は今、西にて事情の聴取。更に、処罰を決めている最中。麻帆良にはいない。

「むっ、アレかな……」

枝から枝へと駆けていたイリアの目の前に大規模な気配が現れる。

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　来れ闇の精王　百鬼を従えし地獄の覇者　自らの魂喰らいて光を払う闇を成し　雷纏う薙刀となれ　《雷之闇術（たけのやみずち）》！」

黒い雷が木と共に気配を両断する。

見ただけであれば一気に十の鬼を凪払った。

鬼の中心に一人の死覇装を着た男を見つける。が、それを邪魔するように鬼達はイリアに襲いかかる。

「《来れ》　散れ《千本桜》」

桜の花弁と化した千の刃が鬼を切り裂く。

逃げも隠れも許さない。だがこれでもまだマシな方だ。卍解をすれば千の刃等と言っていられない。それこそ億を超える刃が全身を叩き斬る。

「なるほど、イリア・スプリングフィールド。その千本桜、確かに、あの御方の斬魄刀のそれだな……」

「……？　斬魄刀を知ってるの？　侵入者」

「……従え《雀爛丸（ざくらんまる）》」

「っ！？」

どういう、こと……。

そう呟く声はしかし、誰の耳にも届かない。

男が取り出した刀は、正しく斬魄刀。そして解号を果たした今、イリアは一瞬、なにをされたのか分からなかった。

斬られた。右腕を。しかし、両断はされていない。筋肉は斬られたが、そこは吸血鬼の治癒力で自力で回復させた。だが、なにかが違う。自分の右手じゃない様な、奇妙な違和感。

「雀爛丸の能力は、始解の言葉そのまま。斬りつけた一対象を俺に従わせることだ。お前の右手は今俺の支配下にある。無駄な足掻きは止せよ、小娘」

この説明が示す答えを、男は行動で現した。

「右目を潰せ、小娘の右手」
「っ……なに、これ……」
勝手に動く右手。それを抑える左手が力負けする。
「さっきも言っただろ。無駄な足掻きはするな。その右腕は俺のものだ。主導権は俺にある。さぁ、潰せ」
「うっ……ぐっ……」
普通なら、腕の筋肉を斬ってしまうのが最も楽な解決方法。目を潰すよりかは楽なものだ。
だがイリアは吸血鬼。イリアの意思に関係なく、その傷は塞がってしまう。どんな大怪我だろうと。心臓を抜き取られようが、頭が無事なら何度でも治癒する。
つまり筋肉を切っても次の刹那には治癒され、その支配は解かれることがないということだ。
勿論、目玉を潰そうがその目玉はまた治癒される。が、しかし。目だ。目潰し。その痛さは、尋常ではない。
「舞え《袖白雪》。《四の舞・白爛》」
袖白雪で自分の腕を斬った。無論、普通ならそれは意味のない行動だろう。
筋肉を斬っても止められないなら、凍らせればいいじゃないか。
イリアが斬ったところから腕が凍っていく。そしてそれは筋肉も肉も骨も血管も、その細胞全てが凍っていき、イリアの腕が、砕け散った。
「ほぅ……。なるほどな。確かに、それなら新しい腕が生えてくる。

普通に両断するより痛みも無い。なかなかにお利口じゃないか？小娘」

「掻き毟れ《疋殺地蔵》」

斬魄刀が赤子の顔の鍔から、うねりのある三本の刀身が生えた形になる。

疋殺地蔵。

斬りつけた相手の脳から出る信号のうち「四肢を動かせ」という命令のみを検出して遮断し、四肢の動きを封じるという能力。それ故に痛みが無くなることもない、悪趣味な刀。

侵入者は殺さず捕まえ、学園長に報告するのが決まりとなっている。ならばこの刀程、今この状況に置いて最適な刀はないだろう。

瞬動で相手の後ろを取り、そのまま斬りあげる。背中を切ろうとしたが、男の反射神経が良いのか、それは右腕で防がれる。が、勿論右腕が斬れないと言うわけではない。

「ぐっ……。右腕なしでもここまで動けるのか……」

「これでボクの勝ちだよ」

「……なるほど、な……。麻痺薬か何かか……」

「さぁ？　どうだろうね」

右腕が完全に生えたのを確認。肩を回して動きを確認しようとするが……。

「ぇ……？」

「くふっ……。ははははははあははははははははははあははははは！！！　それで治ると思ったか！？　馬鹿か小娘！　コイツは腕に働きかけてるわけじゃない。その斬った対象の神経を操っているんだ。脳を潰さないと、俺の支配から抜けだすことはできない

んだよ！！」

呆然としてるイリアの右目に、イリアの右手が――。

――ぐちゃ。

「っ！？　あぁあぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ

右手を抑えるので必死だ。
抑えていても、それは一秒一秒ごとに、一ミリ一ミリ……刃が主の喉の皮を破き、肉を断ち、骨をも砕こうとしてくる。いや、刀が悪いのではない。この右手が悪いのだ。

未だ右目も左目も回復を見せない。それが何故なのか。
それこそ、男の言う《アイツ》という存在が関与している。

「雪鬼。もう帰ろう」
「逆鬼か。ああ、そうだな。だが最後に一つだけ言わせてくれ。《その右手を以て、自分の心臓を引き千切れ》」

逆鬼と呼ばれた男は、雪鬼と呼ばれた男を担ぎ、そこから消えていった。
男の斬魄刀も、解号を封ずれば能力は消える。つまり支配が消える。だが、封じなければ支配は消えない。

「あ……ぅ……」

イリアの右手は喉を裂こうとするのを中断。しかしその手はすぐに心臓がある部分へともっていかれ……。

「ぐぅっ……。がぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁ

何故イリアの傷がふさがらないのか。それは逆鬼の行いに因るものだ。

今この森の空気中には対吸血鬼用の粉末が撒かれている。治癒を行わせない粉末。

抜き取られ、イリアの小さな手の中にある心臓は未だに鼓動を打っている。その度に血液が流れる。止まらない。

（……死んじゃうの、かな……）

吸血鬼となり、しかし未だ吸血衝動さえ来ぬまま。

イリアの命は、既に風前の灯だった。

そこに、イリアが帰ってこないことを心配したエヴァが駆けつけなければ、恐らく死んでいただろう。

エヴァ邸にて。イリアの治療を終えた時、ネギとアスナがやってきた。

イリアの怪我は、吸血鬼でも死ぬことが可能なものだった。心臓を抜き取られて血は巡らず、あと少しでも来るのが遅かったら、イリアは死んでいた。

イリアの治療をしていたベッドは真っ赤にそまり、正に緊急の手術そのものだった。治療を行っていたエヴァの手も、ベッドと同じくらい朱に染まっていた。

そのエヴァの手とベッドを見て、アスナの顔は真っ青。ネギも負けないくらいに。

だがその現状を目の当たりにしたネギは決心をしてエヴァに言っ

た。

「僕を、弟子にさせてもらえないでしょうか」
「なに？　貴様を弟子に、だと？」
「はい」

今日エヴァ邸に来た目的。エヴァに師匠になってもらうこと。
ネギは強さを求めている。修学旅行中に魔法の世界に巻き込んでしまった人達を護るために。なにより、フェイトを倒そうと決めたから。そして今日、妹を護るためという理由もできた。
イリアはまだ吸血鬼として未熟。力の制御も偶に怠ってしまうし、なにより完全な治癒ができない。そして対吸血鬼武具を前にすれば、イリアはただの仔猫に等しい存在となる。
そして、吸血鬼だと知れ渡れば、イリアはきっと狙われる。
自分と違い、英雄の子供と見られることの少なかったイリア。きっとその肩書は、イリアを護ってくれない。

「今の自分の力量を把握して言っているのか？　ぼーやがどんなに修行をしたところで、イリアよりも強い力は手に入れられんぞ」

冷たく言い放つ。しかし、それが事実だった。
使える戦闘用魔法は今のところ九つしかない。魔力運用も下手。バカでかい魔力も、イリアに比べればまだ小さい。

「う、ぅ？　あれ、ここどこ……」

目と胸部を包帯でぐるぐるにしたイリアが上体だけを起こして、匂いを嗅ぐ。どこか犬の様な仕草である。

「……エヴァちゃんの家？」

「ああ、そうだよ。まったく……心配と言うより、吃驚したよ。なかなか帰ってこないと思って探しに言ったら、血の海の中お前が倒れていたんだからな。……誰にやられたか、覚えているか？」
「……正体は分かんない。ただ、死覇装を着てて……斬魄刀を扱ってた」
「……なに？　斬魄刀は貴様の言う投影魔術から落とされたアーティファクトじゃないのか？」
「このアーティファクトの説明書に、書いてあったでしょ？　能力の他に、過去の使い手とか、性格とか。この斬魄刀も、やっぱり誰かが使ってたのがこうしてアーティファクトとして復刻されたんじゃないかな？」

眼は見えない。今のイリアは、ネギとアスナがいることに気付かない。
いつもなら、気配だけで分かるだろうに。
何故なら、怯えているからだろう。怯えれば敏感になる。気配とか、そういうことに。だが敏感になるはずの感覚が鈍感になってしまう程に、イリアは怯えていた。

「初めて分かった。斬魄刀の脅威って言うのかな……。敵にしたら、勝てない……」

だから弱音を吐く。
自分だけが持ってる力だと思ってた。だけど他にも斬魄刀を持ってる者がいた。ショックというほかない。何より、その能力。
斬った一対象を操る能力。

「っ……」
「おいどうした？　まだ痛むか？」

包帯の上から目を抑えた。それをエヴァは痛いのかと思い、心配する。

だがそんなのじゃない。

圧倒的なまでの力量だった。一回斬りつけて、それで終わりだったはずなのに。一回斬られただけで、終わりにされた。両目を潰されて、心臓を抜き取られた。そしてその一連の動作全てを、この自分の右手でしたのだと。記憶が鮮明になっていくにつれて、改めて実感していく。

――勝てない。今のままじゃ、勝てるはずがない。

そんな気持ちだけが、イリアを支配していった。

まるで、腕を支配されたかのように。

その恐怖や負の感情は、体を支配していった。

「はぁ……はぁ……」

「おいイリア？　本当に大丈夫か？」

息が荒くなる。恐怖から。支配と言う恐怖から、二酸化炭素が逃げていくように。

それと同時に、ある感覚がイリアを襲った。

「エヴァにゃん。水、持ってきてくれないかな……」

「ん？　喉が渇いたのか？」

「うん、ちょっと……」

本当はちょっとじゃない。かなりだ。これまでに味わったことのない程の渇き。

エヴァはそんなイリアを少し訝しみながらも、水を淹れに行った。

「……イリア、本当にどこも痛くないの？」
「……？　あれ、お兄ちゃん、いるの？」
「僕だけじゃないよ。アスナさんもいる」
「大丈夫？　イリア。エヴァちゃんが言うには凄い大怪我だって……て、聞くまでもないか。ごめんね」
「ううん、誤ることはないよ。ボクが、弱かっただけだから……」

それを言ってる間にも、イリアの息は荒い。
心臓は元に戻ってる。傷も、完全にではないが、エヴァの手により塞がっている。
痛みはもうない。目も、本当はもう見えるだろう。
だが、恐怖がある。そして、恐怖だけじゃない。
それは――。

「ほらイリア、持って来てやったぞ。……もう目の方は治っているはずだから、包帯外すぞ」
「うん……。ありがと、エヴァにゃん」

エヴァが優しく包帯を取っていく。
イリアは瞬く間に水を飲み干した。しかし、足りない。
紅い綺麗な瞳は、もう完璧に戻っていた。

「エヴァにゃん、もう一杯お願いしてもいいかな……？」

今度はその両目でエヴァを見ながら言った。

「……無駄だな」
「ふえ？」
「お前も、薄々気付いてるだろ」

「……これが吸血衝動、なの？」
「ああ、そうだろうな。私も最初は困惑したさ。なんせ、水をどれだけ飲んでも喉が潤わないんだからな……」

アスナとネギはどこかおいてけぼりを食らう。
それでも吸血鬼の話だと言うことは、どんなにアホなアスナだろうと、どんなに鈍感なネギだろうと分かった。
そりゃあ吸血衝動とか言ってんのに気付かない人なんてまずいないだろう。イリアの事情を知らない人ならいざ知らずだが。
何故このタイミングなのか。それは大方予想はできる。
血を失いすぎた。或いは、血の匂いを嗅ぎ過ぎた。
基本的に吸血鬼は血の匂いに敏感。そんな吸血鬼が、あれだけの血の匂いを嗅げば、吸血衝動に駆られないはずがない。勿論、吸血鬼として生きていれば吸血衝動の制御など容易いのだが。

「ふむ……、おいそこの二人。少し部屋から出ていけ」
「「え？」」
「貴様は自分の妹が人の血を吸うところをみたいのか？」
「ぼ、僕は別に……」
「はぁ～……。お前は良くてもイリアは困るってことを悟らんか！この戯け共ー！」
「「きゃー！？」」

最終的には実力行使。肉体言語にて二人を部屋から追い出した。

「……ありがと、エヴァにゃん」
「……ふん」

イリアにとって、血を吸うところを兄に見られるのは苦になるだろう。そう考えた結果の行動だった。

実際にイリアはそう思っていたことだったのだから、驚きだ。これが主従関係というものなのだろうか？

ここからセリフのみでいかせてもらおうと思う。

いや、決してめんどくさくなったわけではないぞ。

「血を吸う時のコツとして教えといてやる。今のお前は血の匂いに敏感な筈だ。新しい血か古い血かも分かるはずだ。首の新しい血を飲め」

「どうやって飲むのさ？」

「吸血鬼になると犬歯が発達する。それはお前も例外じゃないだろう。……ほら、見せてみろ。一応見といてやるから」

「んあ」

「……うむ、ちゃんと発達してるな。その犬歯で穴を開けて血を吸いだすんだ」

「うえ！？　ちょ、エヴァにゃん？　なに急に抱きついてきてるのさ……」

「これが一番吸いやすい体勢なんだよ……」

「そう言う割には顔が真っ赤になってるだろうエヴァにゃんであった」

「う、うるさい！　早く飲め！」

「うにー、エヴァにゃんは可愛いにゃ～。んじゃ、遠慮なく」かぷっ。

「ちょ、イリア。もうちょっと優しくできんのか……？」

「ちゅるちゅる～」

「おい聞いてるか！？」

「血って美味しいんだね……新発見」

「自分が吸血鬼であることを思い出せ！　んっ。だからもう少し優しく……」

「ダメ、止まんない」
「何故だ!?」
「エヴァにゃん美味しすぎるんだもん♪」

まぁ、こんな感じに騒がしい時間が過ぎていった。

イリアの乱暴な吸血でエヴァはベッドで倒れ、脳に電極刺されたカエルばりにぴくぴくと動いている。それに対してイリアは肌がつるつるになってたりする。

「あ、あのエヴァンジェリンさん。終わりましたか……？」
「なんかセリフだけ聞いてると微妙に危ない所があった様な……」
「そんなセリフあったっけ？」
「ほら、エヴァちゃんが美味しいとか……」
「ああ、性的な意味に聞こえちゃったのね」
「……」

そんなことをダイレクトに言うイリアに恥と言うものはないのだろうか。きっとないのだろう。
というか、今のこの光景もなかなかに勘違いしそうなものだが。
ベッドの上で痙攣してる美少女。
うむ、なかなかにシュールだ。

「エヴァンジェリンさん、さっきの話ですが……」
「ん？　ああ、弟子とか修行とかの話か？　……まぁ、今度テストしてやる。そのテストに合格すれば、考えてやるよ」

その日の午後。

イリアの胸の怪我も完全に塞がったのを頃合いに、学園長への報告へ行くことになった。
高音がいれば、またややこしいことになりそうだとと言うことでエヴァもついていくことになった。

「失礼するよ、おじいちゃん」
「ふぉ、やっと来たか……。む？　エヴァも一緒か」
「そうだ、悪いか？」

ダイレクトに不機嫌さをぶつけるエヴァ。それを飄飄と受け流す学園長。
何とも言えない空気が流れた。

「それより、早く今回の詳細を教えてくれません？」

いた。
エヴァの予想は当たり、高音が学園長の隣にいた。
タカミチは出張らしい。

「まぁ待たんか、高音君。……イリア君、怪我の方はもう？」
「うにゃ、まだ違和感はあるけど、なんとか」
「そうかそうか。それは良かったのぅ。……それで、君をそこまで痛めつけた者は、一体誰じゃ？」

訝しむのも無理はない。
スクナという鬼神を粉砕させた張本人が負けた。それも、ズタズタに。心臓まで失ったという。

「ボクにも、分からない。ただ死覇装を着てる男だった。それと、斬魄刀を使ってきた」

「ふぉ？　斬魄刀と言えば、イリア君のアーティファクトの……」
「うん。でも、このアーティファクトにはあんな能力を持つ斬魄刀はない……」
「その、能力とは？」

高音が恐怖を感じているように聞き返す。
瑠璃色孔雀の恐ろしさを知ってるからこそだろう。

「名を《雀爛丸》。能力は、斬りつけた一対象の主導権を奪う能力。それも、自らの脳を潰すか、相手を殺すか、或いは、相手が斬魄刀を封ずるかしないと解くことができない、厄介な能力だよ」

そうして学園長室での報告を終えた晩、イリアとエヴァはまた一緒のベッドで寝ていた。
突然「一緒に寝ても良いかな？」なんて聞いた来たイリアに、エヴァは戸惑ったものの、吸血衝動のこともあるからという理由で承諾した。

「エヴァにゃん暖か～い」
「お前も暖かいぞ、イリア」

ベッドの中で抱き合いながらそんなことを言う二人。端から見れば百合なバカップルである。

吸血衝動（後書き）

イリアを痛めつける回でした。
書いてる途中で興奮した俺はサドなのだろうか。

雀爛丸の名前はその場しのぎで考えちゃっただけです。深い意味なんでものはありませんよ？
更に言うと最後の方で高音さんが出てきたのも深い意味はないですはい。

《四の舞・白爛》

参の舞まであったんだし、四の舞があってもなんら不思議じゃないでしょ。そう思った結果がこれだよ。
斬った対象の中身から徐々に凍らせていき、最終的には砕く技とでも言っておこう。

修正
すっかり忘れてた、新しい魔法の説明をしようと思った。
『来れ闇の精王　百鬼を従えし地獄の覇者　自らの魂喰らいて光を払う闇を成し　雷纏う薙刀となれ　《雷之闇術（たけのやみずち）》』

闇と雷で構成された魔力刃の様な物。
魔法分析、というか、魔力的な特性で言うなら《純粋な破壊》と《無邪気な轟雷》。
闇は破で雷は痺。破壊し損ねても相手は感電する故、当分動けなくする。

修行と再会

「おい茶々丸。お前何を撮っていた？」

朝から不機嫌丸出し。そんな顔では幸運は逃げていくばかりだと言っておこう。

「まぁまぁエヴァにゃん。ボクとエヴァにゃんの愛の行いを撮ってただけじゃないか。ねー、茶々丸？」

「はい」

「愛の行いってなんだぁあ！？　ていうかやっぱり撮ってたのか！　ええい巻いてやる！　巻いてやる！」

「あああ、ダメですマスター。そんなに巻いたら」

茶々丸がなにを撮っていたのかと言うと、茶々丸とイリアの寝姿だ。

愛の行い、と言えるかどうかは謎だが……。

そんなこんなで騒がしい朝を迎えた訳だが……

～イリアＳｉｄｅ～

なんか古菲が朝から不良みたいな人達に絡まれてた。

いや、なんでさ。なんて言うまでもない。ボクがここに来てからは良く見る光景だ。

古菲何気に気を使えちゃってるからねぇ……。なんでただの中学生やってるのか不思議なくらい。まぁ、そんなこんなで中武研の部長をやってる古菲には挑戦者たちが後を絶たないらしい。

そんなことも知らないらしいお兄ちゃんはなにやら古菲に尊敬の眼差しを……。あ、お兄ちゃんの後ろの人が襲いかかろうと……。

「黒鷺流、竜双牙」

双掌打の様な形の打撃。おじちゃんから護身用にと教えてもらった流派だね。

それをお兄ちゃんに襲いかかろうとした人にぶっ放しちゃった。てへっ。

ちなみに本気の本気でやると、闇と炎の魔力を上乗せさせるから、普通の人だったら体じゃなくて上半身がぶっ飛んじゃうね。

「イ、イリア？」

「アイヤー……。イリア先生強いネ。どうアル？　今すぐ戦り合わないか？」

「ダメだよー古菲。副担任と戦いたいだなんて言っちゃ」

「なはは、冗談アル」

そんな朝の日の放課後。お兄ちゃんが古菲を呼びだした。

どうせ中国拳法を習いたいって言うんだろうけど……。なんでクラスの皆はお兄ちゃんが古菲に告るみたいな話になっちゃってるのさ。

いや、まぁ中学生だから当たり前なんだろうけどさ。

数日後。

なんだかエヴァにゃんが不機嫌です。なんでしょーか。

「ぼーやがカンフーの修行をしていてね。私の弟子にしてくれと頼んでおいてあの小僧は……」

「……ああ、嫉妬？」

「違うわー！」

「ていうかさー、エヴァにゃーん」

「ん？　なんだ？」

「ちょっと、修行をつけてくれないかな」

「……なんだ？　兄妹そろって」

「ボクは斬魄刀を持ってるだけで、僕自身の剣の才能とか、力量とか……そういうのが圧倒的に少ないんだよ。頭でイメージは構築はされていくけれど、イメージトレーニングだけじゃあ、やっぱりダメ。エヴァにゃんくらいの力量、或いはそれ以上の力量の人と模擬戦をやっておきたいの。……ダメ、かな？」

そう言いながら、ログハウスのソファーでくつろいでるエヴァにゃんの上に乗る。重いかも？　とか思ったけど、エヴァにゃんなら大丈夫かと思い躊躇いなしでエヴァにゃんの布団になった。

「顔が近いぞ、イリア」

「顔が真っ赤なエヴァにゃん萌え～」

「萌えとか言うな！　ていうかそんな言葉どこで覚えてきた！？」

言ってることが下品な言葉を言った子供を叱る親みたいだよエヴァにゃん。

ちなみにハルナに教えてもらったりしたよ～。

「ね、お願い」

「……はぁ、分かったよ。だが、まず覚えるべきことは戦闘技術で

は無く再生だ」
「……再生？」

なんのこと？
治癒関係の話？

「お前、まだ自然治癒に関しては不完全だろ？　だから再生魔法というやつさ。吸血鬼の固有スキルだ」
「再生と治癒……。確かに似てるようで別なものだけど、それって覚える必要あるの？」
「ああ、あるさ。自然治癒が不完全なお前にはな」

シニカルに笑いながら、言う。
けどエヴァにゃん？
ボクに覆い被さられてる状況だと全然カッコ良くないよ？

別荘。
やっぱり修行をするならここが一番。年齢を止めるブレスレットも必要なくなったこの体。嬉しいやら悲しいやら。せめてボンキュッボンくらいにはなりたかった……。

「さて、じゃあまず手本を見せてやろう。イリア、なんでもいいから私の腹に大穴を空けろ」
「ホントにいいの？」
「私を誰だと思っている？」
「ボク様の愛人？」
「誰が愛人だぁあ！？　いいからさっさとやらんか！」
「ほーい、んじゃあ。天地貫く闇の槍　螺旋を描いて敵を貫け《逆巻く暗柱》！」

ボクの手にどす黒い槍が出現する。それをそのまま一直線に、エヴァにゃんのお腹目掛けて撃つ。

「っ……。これで、穴が開いた訳だが……ごふっ」

血反吐吐いちゃってますけど……。

「ちょ、エヴァにゃん！　ホントに大丈夫なわけ!?」

「まぁ見てろ」

そう言った瞬間、エヴァにゃんの体が消えた。いや、消えたとは言えない。

蝙蝠になった。それは映画さながらの光景。

そしてその蝙蝠がまた集まり、人の形を成していく。

「ほら、これが再生だ」

「おお……」

エヴァにゃんは再生したけど服は再生しないんだ?

「驚くべき所はそこなのか!?」

いや、だってね?

それより、見たこと無い術式だった。そりゃそうか……。吸血鬼特有固有技能だからね。

「ほら、まずは術式を組め。ヒントくらいはくれてやるから」

「ほほーい」

術式完成。え？　端折りすぎ？　何を今更……。

「それじゃあ、とりあえず適当なのを撃つから、その後再生して見せろ」

頷くだけ頷くけど、正直怖い。

痛いのは当たり前だけど、再生が上手く行かなければ、腕が脚とか、手が足とかになりかねないからねぇ……。怖い話だと思うよホント。

再生の際の描写をするとかなりえぐいことになりそうだったからこれまた端折らせてもらうよ。

結果的に言うと成功。一回目で成功してしまったせいか、エヴァにゃんが呆然としてたね。

「ねぇ、エヴァにゃん。剣で最も強い人って誰だろう……」

「剣だと？　むぅ……、魔法先生から見れば、あの刀子とかいう奴か？　だが、お前の方が強いな。この麻帆良に剣で強いもの等いないと思うが？」

「そっか……、うん、そうだね」

ここにいるのは魔法使いや魔法拳士であって魔法剣士ではない。

ふいーん、どうすっかなぁ。

そして日曜の午前零時。
なんかエヴァにんに強制連行された。いや、なんでさ……。
眠い目を擦りながらそこを見ると、お兄ちゃんとクラスの魔法関係者。それから一般人が四人と古菲、小太郎がいた。……本当にどういうことさ？

「これからイリアとぼーやで戦ってもらう」
「「……ええ？」」

お兄ちゃんと息ピッタシにエヴァにゃんの顔を見る。

「ぼーやがイリアに勝てれば合格。弟子にしてやる。ぼーやがイリアに一撃入れればテストは合格だ。制限時間は一時間。いいか？これは破格の条件だ。これでも合格できぬようなら、カンフーを極めることだな」

等と言うが、実のところ破格の条件なわけがない。
相手が茶々丸ならいざ知らず、ボク様だよ？

「尚、イリアはアーティファクトを禁ずる」
「……その前になんでボクがお兄ちゃんと？」
「茶々丸が今日メンテナンスだったのだが、ハカセが人の心を持ったかもしれないと騒いで、今大学に出払っているんだ。だから急遽、お前に代行してもらうことにした」

えー……。
正直、お兄ちゃんとボクじゃあ勝負になんてならないんじゃ……。

「まぁ、そのギャラリーはさっさとどっかに隠れてろ。……では、

始めるがいい」
「契約執行九十秒間　ネギ・スプリングフィールド」
我流で作った自分に対する魔力供給。強引すぎるし荒削りすぎるけど、スピードは結構上がってるね……。
それから流れる様な回るような動きで攻めてくる。
なるほど、中国拳法……。これは確かに厄介だね。
「黒鷺流、三打核誅」
お兄ちゃんの流れる動きを一度右腕で止め、左手で突き飛ばす。
「うわ？」
風の魔力を込めた掌打はそのままお兄ちゃんを軽く吹きとばす。
その後吹き飛んだお兄ちゃんの襟首を左手で掴み、こちらに引き、右肘を鳩尾に入れた。
更にお兄ちゃんは吹き飛び、数メートル滑ってからやっと止まった。
「かふっ！」
「きゃっ！」
「痛っ！？」
あー、これはなんか……一般人の皆さんには怖い存在として見られていきそうだなぁ……。
はぁ、不幸だ。
「ふん、やはりその程度か……」

「ナンダ、御主人。不機嫌ソーダナ」
「まぁな。ほら帰るぞイリア。テストは終わりだ」
「え、あ、うん……」
「……待ってよ、イリア」
「お兄ちゃん……」
「僕はまだ、立てるよ」

無茶だよ……。
てかボクの株ダダ下がりだよ。

「イリア殿のあの流派。あれはただの流派とは違うでござるな」
「うむ、そうアルね……。中国拳法とは違う感じに絡むような空気。しかし、あんなの見たことないアル」
「さすがイリアやな。俺でも勝てる気せえへんわ」

あれ、一部では上がってる？
ま、まぁいいや。

「エヴァにゃん……」
「自分の兄だろ。自分でなんとかしろ。……と、言いたいところだがな。ぼーや、もう止めておけ。貴様ではイリアには勝てんぞ。私に一撃を簡単に入れてしまうイリアに、勝てる道理があると思うか？」
「はい、勝てます。勝ってみせます。護るためには、勝たなくちゃいけないんです」
「……ほぅ、ならやってみろ」

なんだかインモラルな空気が……。
はぁ、なんで自分の兄をボコボコにしなくちゃいけないのかな？
手加減すればいいんだろうけど、それがばれればエヴァにゃんに

なに言われるか分からないし……。

「そうそう、イリア。もし手加減したら、お前の体で一晩遊ばせてもらうぞ？」

勝とう。うん、勝てば問題ないよきっと！

「じゃあ、行くよ、お兄ちゃん」

「うん」

お兄ちゃんが出してきたのはただの正拳突き。それを見切り、最小限の動きでかわす。

更にお兄ちゃんの体に潜り込んで、左肘を鳩尾に入れる。

「……急所ばかりを狙ってくるでござるな」

「なんや恐ろしいやっちゃなぁ……」

「しかしネギ坊主もまだ負けてないアル！」

今度は倒れることはなく、靴を焦がしながらふんばる。うん、これだけでも成長だよね？

「はぁ！」

ボクの真似かな？　とはいえ中国拳法で形にはなってる肘打ちを繰り出してくる。

「黒鷺流、百花蹌踉」

その肘打ちも最小限の動きで避ける。

避けながらお兄ちゃんの服を掴み、足を払う。倒れていく途中で

更に服を払い、回転させる。
普通の人間なら吐いてもおかしくないくらいに。
そして回転したお兄ちゃんは地面に激突。多分もう動けない。
本当は止めに地面にめり込ませるように殴るんだけど、さすがにそこまでしたら骨折しちゃうし。
「大丈夫？　お兄ちゃん……」
本当に動かない。
さすがに死にはしないだろうけど、さすがに心配。
「やはり、テストは不合格だな。イリア、帰るぞ」
「えっと……」
「早く帰らないと本当にお前の体を一晩、私の玩具にするぞ？」
「イエス、マム！　今すぐ帰ろうエヴァにゃん！」
ごめんねお兄ちゃん。後で謝罪のお菓子とかもっていくから我慢してね？
後日。お兄ちゃんに和菓子を渡しに行ったんだけど、お兄ちゃんは不在だった。
木乃香と刹那曰く、夕映とのどかが内密の話があるとかで図書室に向かったらしい。ちょうどすれ違いになっちゃったみたいだね……。
そんなわけで寮を出ると、まき絵と亜子がいた。
二人ともお兄ちゃんの修行テストにいた訳だから、なにかと変な空気になる。と思ってた。

「やほー、イリアちゃん」
「亜子……」
「昨日の晩な、アスナから聞いたで。イリアちゃんとネギ君は本気で殴り合いしないと生きていけない世界にいるって」
ちょ、どんな説明!?
「それで強くなりたいって言ってたネギ君にイリアちゃんが現実を見せたんだとも言ってた。お兄ちゃん思いの良い妹なんはウチも知っとるから、そんな暗い顔せんといて？」
「うん、ありがと、亜子」
まぁ、安心だね。
ボクの株は下がって無かった！
とりあえずお兄ちゃんのところ行かなきゃ。
「じゃね～」
「うん、また後でな～」
「ていうか良く考えたらネギ君怪我らしい怪我なかったよね？」
「うん、確かにそやな……。あんな吹き飛んだりしてたのに」
そこはほら、加減というものをだね？
「ネギ先生、あなたは魔法使いですね？」
急にどしたのさ夕映。

てかそんな言葉が図書室の外に漏れてる時点でアウトー。

「なにしてるのさ、お兄ちゃん」

「あ、イリア。それが……」

「ネギ先生が魔法使いと言うことは妹であるイリア先生も恐らく魔法使い。更にネギ先生との会話から察するにエヴァンジェリンさんはかなり強力な魔法使い。更に更に木乃香さんも、その祖父に当たる学園長も魔法使い。もうこの時点で信じたくない程の非現実……いえ、驚くべき現実ですが。そして木乃香さんの父上の話から推察するに世界にはかなり巨大な魔法社会があると考えたです。

なにより、この麻帆良学園……。あの図書館島での動く石像。そして可笑しい程に大きな世界樹。……それら全て！　『魔法使いが作った』という仮定が最も最有力なのです！」

記憶を消してやりましょうか？

てかお兄ちゃん。どんな会話をしたらここまでばれるのさ……。

「はぁ……あのね夕映。夕映は今多分、ファンタシーな世界を想像してると思うんだ」

「はい。魔法とはそういうものです。私たち一般で何もない現実。それ比べ、魔法とは私たちが踏み入れたことのないファンタシーな世界。……違いますか？」

「違うね」

これくらい言っとかないとね。

「魔法って言うのはファンタシーなんかじゃないよ。幻なんかじゃない現実。例えば、魔法が当たり前な世界で育ったら、その魔法は自分にとっての一つの現実でしかない。そして使う人によって魔法

は危険なものになる。更に言うならば、ボクは魔法使いじゃなくなった」

「……？」

「吸血鬼。魔法使いではあるけれど、人外の存在だよ」

「吸、血鬼……。本当に、そんな存在が……」

「魔法があるんだもの、それくらい予想しとかなきゃだよ。でもね、真祖の吸血鬼になれば不老不死。そんな吸血鬼が、悪さをしないでいられると思う？」

「で、では……イリア先生は……」

「人を殺すことくらい、なんとも思わない化け物……になってるかもしれないよ」

夕映の表情が強張った。

しかしそこで発言したのは、意外なことにお兄ちゃんだった。

「イリアは化け物なんかじゃない」

「お兄ちゃん……？」

「イリアは、人殺しできる性格じゃないって、知ってるから」

「にゃはは、なに言っちゃってるのさ。ちょっとした冗談だよ、イッツアブラックジョーク！」

「ええ！？　せ、折角兄らしこと言えたと思ったのに……」

そんな落ち込まないでよ……。

翌日の朝。

なんでこうなったのさ。

今お兄ちゃんは夕映とのどかを杖に乗せて空を飛んでいる。

いやホント、なんでこうなったのさ……。
ちなみにボクは普通に浮遊術ができるから、その隣を飛んでる。
勿論認識阻害魔法くらい掛けてるから、一般人に見つかることはない。

まぁ、今の現状把握と共に現状説明でもしとこうか。
えーっと、どうやらお兄ちゃんは西の長から麻帆良の地図を貰った模様。その地図に隠されたヒント「オレノテカガリ」の場所へ行こうと言うのだが、準備をしてからがいいので明日の朝に行くことにした。
お兄ちゃんはアスナを関わらせない様に部屋を抜け出そうとしてたらしいけど……逆にアスナがいた方が心強い様な気がするよ？
まぁいいけど。
それで木乃香に一度見つかりながらも寮を出てきたと言うお兄ちゃん。そしてエヴァにゃんに事情を伝えてやってきたボク様の前に現れたのが、夕映とのどかだった。
お兄ちゃんが木乃香に見つかったのはやはりヤバかったらしい。
図書館島探検部の情報網侮りがたし……。

んで、結局根負けだ、という感じに空を飛んでる感じですね、はい。
てか、ボクが吸血鬼と知りながらも普通に接してくるとは……。
やはり侮りがたし夕映吉。

「誰が夕映吉ですか」
「あれ、聞こえちゃった？」
「ばっちり」

そんなこんな会話をしながら辿りついたのは図書館島の地下。お兄ちゃん達が一時期勉強をしたというところだね。

階段を杖で降下中に蜘蛛の糸に引っ掛かったりしてボク様ちゃんネッバネバ。

「うえー、気持ち悪……」

カエルの他に蜘蛛の糸まで嫌いになりそう……。

――カチッ。

「んにゃ？　何今の音」

「なんだかすごくベタな匂いがするです……」

そして聞こえてくる音。

――ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ。

「って、ベタにも程があるよ！？」

落ちてきた。というか転がってきた。

人間一人軽く潰せるくらいの鉄球が。

なんていう苦難に会いながらも辿りついたのは大きな扉の前。

「この扉の奥に、手掛かりが……」

とお兄ちゃんが言ったところで、ベチャベチャと液体の様な音がボクの頭から……。

「うえ？　なにこれ……」

うわ、今度はなんか涎っぽい液体でボク様ベットベト。
もうやだ図書館島。
折角の私服がー。髪がー。

「イ、イリアせんせー……」
「う、ううう、後ろ……」
「イリア、早く逃げっ！」
「ふえ？」

後ろ？
……うぇい！？

「ガルルルルルルル……」
「ド、ドラゴン？」

いやいや、いやいやいやいや。
ないわー。
なんでこんな極東の島国にこんな魔法世界の生き物がいるのさ……。しかもそれなりに上等な部類だし……。

「イリア！　早く逃げようよ！」
「むー……」
「ガルルル……」
「イ、イリア先生……？」

ドラゴンを睨む。ドラゴンも、ボクを睨む。
しかしその時間は意外と短く、先に動いたのはドラゴンだった。

「ガルル」

うめきながら首をボクの顔の高さまで下げる。
そしてその鼻っ面をぺしっ、と叩いてみた。

「ちょ！？　イリア！？」
「謝りなさい。ボクをベットベトにしたことを謝りなさい。今すぐ謝りなさい」

怒気を孕んだ口調で淡々と言う。

「ガルル……」

意外と大人しい……。
この扉の守護龍ってところかな？
なら、無駄に領域に踏み込まない方がいいね。

「お兄ちゃん、今は帰ろう。龍の領地には踏み込んじゃいけないだろうから」
「う、うん……」

と言うわけで手掛かりを探すのは断念。
その後はボク様ちゃんに残ってるテストの配点。
更にエヴァにゃんと一緒にちょっした修行だけで終わった。
勿論、今日もエヴァにゃんと一緒に寝た。
エヴァにゃんは暖か暖かなのですよ～。

そして翌日。お兄ちゃんがせめて修行を少しでも見てほしいとエヴァにゃんに頼みこんで起きた。
あ、ちなみにだけど、既にゴールデンウィーク突入。エヴァにゃ

んの呪いが解けてれば旅行に行くのもありだったんだけど、あの契約があるからね。大人しくエヴァにゃんと一緒にログハウスの中で過ごすことにした。

んで、そんな時に面倒事を頼まれたもんだからエヴァにゃんは不機嫌丸出し。

ボクが折角だから見てあげなよと言ったところ、渋々ながらも見てくれることになった。

ちなみにお兄ちゃんの従者と、小太郎と古菲がこの場にいる。

「まずは全員の契約執行百八十秒間だ。刹那、気は抑えておけ。それ相応の練習が無ければ、気と魔力は相反するだけだ」

「はい」

「では始めろ」

「契約執行百八十秒間。ネギの従者　宮崎のどか　神楽坂アスナ桜咲刹那」

今のところ契約してる三人の契約執行。やっぱり一気に四人はなかなかにきついものがあるよね。特に魔力運行がまだ下手だからね、お兄ちゃんは。

「次、対物・魔法障壁全方位全力展開」

「はい！」

「次、対魔・魔法障壁全力展開」

「はい！」

うひゃー。容赦ないなぁエヴァにゃん……。

「三分後に北の空に向かって魔法の射手百九十九矢。勿論障壁はそ

れまで持ち堪えろ。……イリア、結界の準備をしとけ」
「アイサー」

対魔法吸収型結界陣。
相手の魔法を吸収し、それを使い結界の強化に運用する。卑怯な結界。
だけども幾らボクでもそんな強力な結界をずっと維持できるわけがない。精々一分が限度だね。
だからお兄ちゃんが魔法の射手を撃った瞬間に展開すれば良いわけかな。

だけどそれまで暇かなー。ちょっと散歩してこよ。
三分後の北なら、太陽の位置で分かるし。

三分後、お兄ちゃんが魔法の射手を放ったのを見計らい、術式発動。魔法吸収型結界陣によってその百九十九矢はなかったことにされた。
それでも少しだけ残る魔力の粒子は日光に当てられ、キラキラと輝いていた。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

「久しいな。イリア・スプリングフィールド。……どうやってあの森から抜けだした？」
「……っ」

心臓が一つだけ大きく高鳴る。この声。この気配。

大きく高鳴った心臓は鳴るたびに大きさを上げていく。張り裂けそうな程に、血流が早くなる。熱い。

蘇る感覚。

痛み。苦しみ。

心臓を抜き取った、あの感覚。手が自分の血に染まる、あの感覚。

「聞こえんかったか？　どうやって、あの森から抜けだした。いや、そもそも何故生きている？」

「……ボクのマスターが助けてくれたから、かな」

イリアは「《来れ》」とだけ呟き、漆黒の刀身を持つ斬魄刀を身構える。

しかし、心臓は早く動き、正常に動いているかも怪しい。足が震える。奥歯が噛み合わない。

「なるほど、小娘の主が……。で、刀を抜いてどうするんだ？　あの時の続きをするか？」

「当たり前じゃん。ボクに心臓を抜き取らせたこと、後悔させてあげるよ」

イリアは後ろを見る。そこにはこの前みたとおりの死覇装の男。

この前は余裕が無く見れなかった顔も、今ははっきり見れる。皮肉な笑みを貼った顔。黒い、しかしぼさぼさの髪。銜え煙草が死覇装に死ぬほどそぐわない。

殺気と殺気がぶつかる。

イリアの殺気は無意識だ。恐らく防衛本能。

しかし男の殺気はそのイリアのレベルに合わせている。故意に出している。

この差が、力の差なのかもしれない。

「まぁ抑えろ。今は仕事じゃない。仕事じゃない時にガキを斬るのは、なにかと目覚めが悪いからな」
「戯言を……」
「俺が剣を抜いてるか？」
「……」
確かに、男は剣を抜いていない。それどころか、刀を腰に差してすらいない。
完全に無防備だった。
「まぁ、なんだ？　俺は仕事じゃなければ女の子には優しいんだ。……なんか悩んでるって顔だったな。なにかあったのかよ、小娘？」
「悩みの大半は自分だって言う自覚はないの……？」
「あぁ？　なんで俺が小娘の悩みの大半になってんだよ」
「心臓を抜き取ってくれた人がそれを言う？」
「知らん。心臓抜き取ったら大抵死ぬからな」
一理あると言えるのだろうか？
しかし吸血鬼と戦ったことがないのだろうか。
「仕事、って言ったよね。貴方は何者なの」
「俺は元死神だ」
いきなり意味不明なことを言った。
「そんなの、信じると思う？」
「斬魄刀の持ち主は皆決まって死神だ。アーティファクトの説明書をちゃんと読めば書いてあるんじゃないか？」
「残念だけど、斬魄刀の持ち主ならいざ知らず、死神だなんて単語

はどこにも書いてなかったよ」
「いや、もう一度読めよ」
「ボク様ちゃんの頭舐めてんの？」

イリアの記憶力は正しく天から授かったものだと言っていいだろう。決してサヴァン症候群だとかな訳ではない。外見だけの自信家な訳でもない。
所謂、本物だ。

「まぁいい。……んで、なんだ。どうせなら俺がお前に剣を教えてやろうか？」
「……それでひょいひょいついていくと思う？」
「俺に、勝ちたいんだろ？」
「っ……」

にやっと笑う男は、どこか楽しんでる様にも見えた。

修行と再会（後書き）

思ったけど、イリア体術なんもなくね！？
って思ったから黒鷺流とか言うの作ってみた。基本は中国拳法。だけど邪道なくらいカウンターばかりの攻撃。

てか、これからの展開どうやって持っていこうかな～……。

水着＝海＝夏＝修復

死覇装の男との再会を果たした日（イリアは再会などしたくなかったが……）から三日。それは突然起こった。

イリアはいつも通りのデスクワークを朝のうちに終わらせようと、出勤。

新田からは「あれくらいのデスクワークなら私に任せて、休日くらい兄と遊んではどうですか？」と言われたが、さすがにそれはできないと断った。そもそも、最近ネギの調子が悪くて遊ぶ暇などない。

エヴァと茶々丸に見送られ、麻帆良中に行くための電車に乗り、職員室に向かおうとしていた。突然だった。そう、突然。

「わぁ！？」

目の前が真っ暗になり、誰かに担がれる、というか抱えられる感覚。

目の前が暗くなったのは、恐らく布だろう。感触からして間違いない。だが問題はその先だ。

（ね、眠い……？）

そう、布に覆われてからやってきたのはとてつもない眠気。

夜は十二分に寝ているイリア（偶にエヴァで遊びながら寝るため夜更かしもあるが……）。この期に及んで眠気など、普通なら来るはずがない。

そう、それは普通ならの話。

（ていうか、吐き気が……。ま、まさか……クロロホルム……？）」

それなら納得がいく。皆さん、良くドラマなどで口に薬品を滲み込ませた布を宛がって気絶させるシーンなどを見たことがないだろうか。

あの布に滲み込まされているものの大半はクロロホルムという設定だと聞いたことがある。

しかし、ドラマや映画、漫画の様にはいかない。

人間程の大きい動物になればその効果はほぼないと言っていい。だと言うのに、今イリアは失神しそうにある。更に言うとイリアの感じた眠気はどちらかと言うと目眩に近い。というか、明らかに滲み込ませた量が多い。このままでは死んでしまうのではないだろうか。

証拠に、さっきまでもがもがと暴れていたイリアが今は動かなくなっている。

意識を飛ばした方が楽なのではないかと思うが、これをした犯人が分からない以上、迂闊に気を失えない。更に言ってしまうと、イリアを抱えている一人ともう一人の気配。それらから魔力が殆ど感じられない。

もし相手が一般人である以上、魔法は使えない。

身体強化をしようにも、時既に遅し。最早術式等を組むことを思考できない。

段々脳が働きを止めていく。何かが遮断されていく音。

そして、暴れなくなったのを確認したのか、顔を覆う布が開かれた。

なんとか首を持ちあげ、抱えてる本人ともう一人の顔を見ようとする。が、なかなか上手くいかない。　体がなかなか言うことを聞

かない。

「ぁ、亜子……アキラ……？」

それでもなんとか、犯人の顔を見た。イリアの虚ろな目に映ったのは、手を合わせてごめんね、をしている亜子とアキラ、二人の姿があった。それを見たイリアは完全に気を失った。

「発癌性があるってことを知らないの！？　下手すりゃ死ぬ可能性もあるんだよ！？」

目が覚め、いつの間にか水着（それも白のスク水だ）に着替えさせられていたイリアは、其処にいた犯人達（３－Ａのクラスメイト達。一部不在）を叱っていた。それもそうだろう。あんな危険な薬品（日本では違法にもなる薬品）を使って人攫い等、犯罪以外の何物でもない。

「「「「す、すみません……」」」」

「まったく……委員長も、なにやってるのさぁ……」

「す、すみません。ネギ先生があまりにも元気が無い様だったので……」

「お兄ちゃんが？」

この前、結界を張った後、適当に暇つぶしをしていたイリアは知らない。アスナとネギが、今喧嘩中であるということを。気付いたのも、調子が悪そうだな～くらいだ。

イリアが委員長から聞いた話をまとめると、こうだ。
ネギの元気がないと言う情報を即座に入手。ショタコンである委員長がこのタイミングを逃す訳にはいくまいと、ネギを海に連れていった結果、皆が皆ついて来てしまい、挙句の果てにはイリアを無理矢理連れてくる始末。

「で、なんでボクは水着に着替えてるのかな？」
「そんなん、ウチが着替えさせたからに決まっとるやろ」
「もうボクお嫁にいけない……」
「大丈夫、ウチがお嫁に貰っとる！」
「亜子、キャラが壊れてるよ」
「何言うてんの、アキラ。ウチはいつも通りやで？」
「うん、そうだね。イリアちゃんの前ではいつもこれだったね。ごめんね」

ちなみに、学校の仕事は新田が引き受けてくれることになったらしい。
後でお礼を言わなくてはと思うイリアであった。

そんなこんな、結局遊ぶこととなったイリアは亜子達とビーチバレーをしたり、亜子に弄られたりした。しかも亜子の「弄り」が最悪な方向に展開を迎え、イリアの肌と言う肌をペタペタと触る、どっかの変態オヤジの様に成り果てていたのは、恐らく幻覚だろう。
そう信じたいイリアである。

～ＡＭ１１：００～

亜子とアキラとまき絵、それとイリアでビーチバレーをやろうという話になった。
勿論、ここにいるのは麻帆良中３－Ａ。これが競争やイベントに発展しないわけがなかった。

「よーし、これ勝った方のチームの人は負けた方のチームの人になんでもしていいってルールで行くよ！」

そう言いだしたのは祐奈。
それを聞いた亜子の目が変わった。

「アキラ、イリアちゃんの敵、ネギ君チームに行くよ！」
「「ええ！？」」

勿論イリアも吃驚だ。

「な、なんでさ亜子～。ボクのこと嫌いになっちゃったのか～！？」

駄々をこねる様に亜子の腕を掴みながら、上目遣い＆涙目の破壊力。
こうかは　ばつぐん　だ！

「ぐはっ！　私の中の何かがぐはっ！　でもな、イリアちゃん。ウチはイリアちゃんが好きやから敵に回るんやで？」
「ふえ？　どういうことさ？」
「ま、見てれば分かるよ～」

結果。イリアチームの負け。
亜子達が向こうでなにか細工をして、こちらの勝ちにしてくれるのかと思っていたイリアはｏｒｚ状態だった。

「委員長とアスナが組んだら勝てるわけないよ～……」

肩で息をしながらｏｒｚ状態から復活。しかし兄に負けたのが悔しいのか未だ微かに涙目になっている。

「まぁまぁイリアちゃん」
「これはゲームなんだから、そんなに落ち込まないで」
「亜子とアキラがあっちに行ったのも負けた原因なんだけど……」

アキラと亜子は運動神経が良い。アキラは水泳部。亜子はサッカー部のマネージャーだが、体力がないと言うわけではない。逆に、クラスの中では上位の運動神経の持ち主だ。

「う〝……、ごめんね……」

それを指摘されたアキラは謝罪を述べる。が、

「なー、イリアちゃん？　さっきの祐奈が言ってたルール覚えとるか？」

亜子は何故か、不敵に笑っていた。
いや、ある意味予定通りなのだ。正に計画通り。

「ま、まさか亜子……？　だ、ダメだよ。ボク達、生徒と先生の関係なんだよ……？　モラル的にそれはヤバいって……」

亜子の暴走に勘付いたイリアはあくまでそれから逃れようと、顔を引き攣らせながら言う。
しかし、亜子にモラルのモの字もなかった。

「さ、イリアちゃん。あっちに二人っきりになれるビーチがあるんや。そっち行こか」
「きゃー！　アキラ、助けてー！」
「ごめん、イリアちゃん……」

最早アキラでも止めることはできない亜子だった。

亜子に無理矢理連れて来られたのは、誰もいないビーチ。
そこでの亜子とイリアの甘美な響きを聞けるのは読者という第三者視点ならではなのだろう。

「あっ……だ、ダメだってば……。ちょ！　ホント、くすぐったいから……」
「イリアちゃんって意外と感度高めなん？」
「なんの話？！」

イリアの肌をペタペタと堪能する亜子。
さっきまではまだマシだった。ただ二人でジュースを飲んだり、海で水の掛け合いをしたりと、「なんだ普通のことじゃん、やましい考えをした自分が恥ずかしい」とイリアは思っていた。
しかし、間違いなどでは無かったのだ。水の掛け合いも体力的にきつくなってきたと思った頃、唐突に亜子がイリアに抱きついたのだ。勿論困惑するイリア。
水着同士だから、肌と肌の密着度が半端じゃない。亜子から伝わ

る温度が、亜子から漂う匂いが、亜子から感じられる肌の柔らかさが。それらが、女であるはずのイリアの心臓を高鳴らせる。

それは亜子も同じだった。

華奢な体。綺麗な銀髪。吸い込まれる様な紅の目。触るだけで吸いつく様な肌の感触。触れれば消えそうな細い輪郭。髪から漂うシャンプーの香り。

それらに僅かながらの興奮を覚えた。

「なぁ、イリアちゃん？　女の子同士でこんなん、おかしいんかな？」

「ふえ？　急になにさ……」

「最近な、アキラに言われんねん。イリアちゃんの前だとウチが変になるって」

紛れもない事実ですね分かります。

「べ、別に同性愛とかあってもいいんじゃないかな？　それが嘘偽りのない本当の心なら……って、いつまで抱いてるのさ」

「いや、イリアちゃんがそう言うならちょっとモラルを破壊してみようかなーと」

「え〝……って、どこ触ってんの亜子～～！！」

そして今に至ると……。

海から上がり、誰も来ることのないだろう島の内部へと入っていく。勿論イリア強制連行で。魔法での身体強化をしていないイリアは年齢相応外見相応だ。吸血鬼の力は、エヴァに貰ったブレスレットで抑えられているから。

マネージャーとは言え、それなりの運動をそれなりにできる亜子に勝てる道理など無いらしい。

「んっ……、くすぐったいってば～……」
「くすぐったそうにしてるイリアちゃん可愛いわ～」

何故亜子がこんな笑顔なのか。まぁ、理由など言う必要もないのだが。
亜子はしゃがんでイリアのわき腹をくすぐる様な手付きで弄っていく。

いつの間にやら後ろから抱きつかれる様に体を弄られるイリア。
亜子の手はイリアの肌を蹂躙していく。と言っても、優しい蹂躙だが。
最初は腹部を弄っていたが、亜子の両手は下へ下へと、肌に這わせる様にして……。
ギリギリ際どい、内腿を触りだす。

「ちょ、あ、亜子！　そんなとこ……っ！」
「なんや？　女の子同士なんやし、ええやろ？」

そう言うものの、本当にギリギリだ。イリアは体から力が抜ける様な感覚に陥る。

イリアの弱い所が首だと判明し、そこを重点的に舐めていく亜子。
少ししょっぱい。海に入ったせいなのか、それともイリアの汗なのか。それは分からない。
そして数分後。遂に亜子の手がイリアのその小さな膨らみに……。

「亜子、さすがに怒るよ！」
「ややなぁ、ちょっとした冗談やないか……」

亜子の顔が冗談なんて顔じゃなかったのは特別明記するべきことでもないと思う。

まぁ、そんなこんなでイリアはいろいろ弄られていたという訳だ。

同時刻、アスナとネギの仲は更に亀裂が入ったことも知らずに。

「もう、酷い目にあったよ……」

「あはは。亜子ってば、イリア先生を目の前にすると顔色変わるもんね～」

「まき絵、暢気に言ってるけど結構やられる側としては疲れるんだよ？」

「ごめんごめん。さっきのはさすがにやりすぎたと反省しとるえ？」

顔が全然反省していない。というか肌がつるつるになってる。

（あれ、もしかしてボクからナニカを吸収した？）

そんなことを思ってしまうくらいに肌がつるつるだった。逆にイリアは疲れ切ってる顔をしている。

「ところでネギ君、大変だね～」

そんなイリアの顔を少し心配そうに見る亜子（誰のせいだ、と突っ込みたい）の隣でまき絵が遠くを見ながら言う。その目線の先では、アスナとネギの鬼ごっこ風リゾート地一周フルマラソン大会たるものが開催されているようだ。

「なにしてるのさ、お兄ちゃんは……」

「アスナと喧嘩だってさ。どう見たって姉弟だよね、あれ」
「……」
それを面白くなさそうな顔でイリアは見る。
お兄ちゃんはボクだけのものだもん！
とか思ってるわけではない。ただ、アスナの顔を見てるのだ。喧嘩だかなんだか知らないが、どう見てもその表情は怒ってると言うより、楽しんでいる。
「確かに、姉弟のじゃれ合いだね」
面白くなさそうな顔は無くなり、いつも通りの笑顔が貼られていた。
その日の夜。イリアはアスナの部屋にいた。
「まったく、アスナも頑固だね～。いや、楽しんでるだけかな？」
「うっ……。な、なんのことかしら……」
目を逸らしてる時点で反論は成立していない。
「お兄ちゃんをからかって面白いのは妹であるボク様が一番知ってるし、アスナの気持ちも知ってる。けどさ、さすがにそろそろ可愛そうだと思うよ？」
「……」
「ああ、そっか。謝るのが恥ずかしいんだ？」
「なっ……！」
頬を赤くして反論しようとするが、今度は言葉すら出て来なかっ

た。
　イリアの言ってることが正しいからだ。
「謝らなくても別に良いと思うよ？」
「え……」
「謝らなくても、ホントはもう怒ってないって思わせればいいんだよ。アスナの場合それすら恥ずかしいんだろうけど……。でもさ、いつまでもこんな状況じゃ、ネギのパートナー失格になっちゃうよ、アスナ」
「わ、分かってるわよ……」
「うん、それじゃ、ボクは亜子と晩御飯食べる予定だから。頑張ってね、アスナ」
「……うん」

　翌日の朝、アスナとネギの大声が響いていた。

「なんや？　あの二人はまた喧嘩か？」
「違うよ。じゃれ合い、だよ」
「……？」

　ちなみに亜子の我儘でイリアは亜子と一緒のベッドで寝たことは余談である。

ディナー

アスナとネギが仲を修復した次の日の夜。
イリアはエヴァが作ったゴスロリ系ドレスを着て、世界樹の下にあるベンチに座っていた。

「……ん、来たかな？」
「迎えに来たよ、お姫様」

白と白が再び交じり合う。
修学旅行の日、フェイトから貰った招待状を覚えているだろうか？　その招待状に書かれていたことが、世界樹の下で待ち合わせだった。

「それじゃ、行こうか」
「っ……！　なにをしたの？　ていうか、ここどこ」

イリアが気付かぬうちに……気付かぬ間もなく、背景が変わっていた。
とある城の部屋だと言われれば納得してしまうだろう飾り付けられた部屋。だが、外を見ると、この部屋がある建物は宙に浮いてることが分かる。

「魔法世界だよ」
「こんな簡単に来れるものなの……？」
「まぁ、いろいろとね」

訝しむイリアを置き、フェイトは部屋に用意されているテーブルに座る。

「どうぞ、座って」

「……うん」

フェイトの促しに素直に従い、フェイトと反対側の席に座る。

ディナーと言うだけあって、そこには極上で高級そうなステーキをメインとした夕食が置かれていた。

「……ところで、この部屋の外にいる三人は？」

イリアの言うとおり、部屋の扉を少し空けて覗いている三人の少女がいた。

「ああ、あれは《完全なる世界》の構成員の一部だよ。気にすることはない」

「で、その《完全なる世界》は何をする組織なの？」

「……結果的なことを言うなら、世界を救う」

「へぇ……、世界を？」

「まぁ、食べながら話そう」

「それじゃ、いただきます」

テーブルに置いてあるステーキをナイフで切り分け、フォークで口に運ぶ。

「意外だね。いや、君らしいのかな？」

「うに、なにが？」

「毒が盛ってある可能性を考えないのかい？」

「ボク様吸血鬼だよ？　毒なんて効かないよ。……多分」
「なるほど、一理あるね」

斯く言うフェイトも吸血鬼のことをそれ程知ってるわけでもないのだが。

十数分後、時折雑談を交えながらも《完全なる世界》の説明を聞きながらの食事は終わった。

「それで、どうだい？　組織には来てくれる気になったかい？」
「うーん……。正直に言うとかなり難しいところかな」
「へぇ、なんでまた？」
「だってさ、それって魔力枯渇問題が起きるといろいろ面倒だから前もって世界を消しちゃいましょうって言う計画でしょ？」
「……まぁ、間違いではないよ」
「フェイトの近くにはいたいけど……。残念だけど、その計画には賛同できないよ」
「そう、か。少し……いや、かなり残念だよ。……暦くん、お皿を下げてくれるかな」
「にゃ！？　は、はい！」

扉の奥に未だ一人残っていた暦を呼びだす。
しかしこのままではなかなか話が進まない。

「少し、場所を変えよう」
「ん？」
「僕の部屋に招待するよ、イリア」

話をするならそこが一番良いと考えた末の結論だった。

「（にゃ……？！　ふぇ、フェイト様の自室……！？　私ですら入ったことがない、あの神聖な場所に……）」

約一名ヤキモチを焼く者がいたが。

またもや景色が一瞬で変わる。魔力の流れを感じ取る暇すらなかった。

そこは、一言でいえば殺風景だった。

何もない、まるで古い監獄を思い立出せる様な石の部屋。

「好きにくつろいでくれていいよ」

そういうフェイトは部屋の角で壁に背を預けて座りこんでしまった。

しかし、そう言われてもくつろげる場所がないのだが。　勿論それを言われたイリアは困る他ない。ある物と言えばベッドくらいなものだ。

（……、ベッド？）

そこでイリアは何故かこれまでされてきた悪戯の数々を思い出していた。

突然の抱擁と思えば突然のディープキス。更にお姫様抱っこをされた。しかも湖に落とされ服をびしょびしょにされた。更に言えばエヴァの説教を受けてる時に突然現れて話を更にややこしくさせた。

（……これまでのことを考えると段々腹立ってきた……）

「……？　どうしたんだい。いつまでも立ってないで、ベッドにで

も座ってくれ」
「……少し疲れちゃったから横になってもいいかな？」
「……？？　別に構わないけど」
フェイトは訝しむ。そして直感が告げる。
（――なにか企んでいる？）
「ねぇねぇフェイト」
「ん？」
ベッドにうつ伏せで寝たイリアは、その体勢のまま、フェイトに手招きをする。
「えっちぃこと、しよ？」
笑顔で、言った。そんなことを言ってしまった。
本当はちょっとでもフェイトを弄ってやろうと思い付いた言葉だった。
それが、こんな事実を生むことになるだなんて、イリアは思っていなかった。
チュンチュン、という鳥の囀りが聞こえる。
窓から光が差し込む。目を開ければ、きっといつも通りの天井が見えるだろう。
そう思っていたイリアだったが、目を開けて見えたのは石の天井

だった。

（――あれ？　どうしてボク……。フェイト？）

イリアの隣ではフェイトが寝ていた。寝るときまで無表情。思わず吹き出しそうになった。

しかし、何故？

答えはとても簡単なものだ。特にイリアなら、少し考えればすぐ思い出せるような――。

（えっと……確か昨日悪戯返しをしようとして、それで失敗したんだっけ？　いや、違う。えーっと、なんか途中から記憶が混乱してるのかな？）

実際、混乱しているのだろう。

感覚で言うなら、頭の中のイリアが記憶と言う名のビデオを「見るな」と言ってテレビの電源を落とした様な。だけど電源を落としただけでビデオは動いている。

だから、少しずつ思い出す。感じていた感覚が、蘇ってくる。

（……えっと、フェイトに悪戯しようとして、それでなんか気持ちよくて、でも痛くて、でもやっぱり気持ちよくて、熱くて……えっと～……）

（「好きだよ、イリア」……）ぼんっ。

完全に記憶を思い出したイリアは顔を赤くさせる。顔から噴火。耳から煙。

「ん……、もう朝か……」

びくり、とイリアは体を震わせる。それが何故と言うなら、すぐ隣で囁く様な声が聞こえたから。というかフェイトの息が首筋に掛かったから。

「あ、イリア。もう起きてたのかい？」

「……」

イリアは顔を赤くしフェイトの背を向け無言。

「……ああ、そうか」

フェイトはイリアがどういう状況なのかを悟ったらしく、そこから離れ――

「好きだよ、イリア」

「～～～っ！」

離れるどころかイリアの耳元で囁いた。

耳元で囁かれるこそばゆさに、イリアは声にならない絶叫を上げる。

「も、もう出てってよぅ！」

「痛いよ、イリア」

ぽかぽかとフェイトを殴る……いや、叩く。

「それにしても、一夜を過ごしてしまった訳だけど」

「言わないでよ……」

「君のマスターは大丈夫なのかい？」
「……」
「更に言うと、今日学校は？」
「……フェイト、今何時！？」
「魔法世界と旧世界の間ではかなりの時差があるけど……今は多分朝の六時くらいかな」
「今すぐ帰して！　ログハウスに！」
「言われるまでもなく、用意してあるよ。……それじゃあ、また会おう」
「……うん、分かったから、早くお願い」
「それじゃ、《リロケート、イリア・スプリングフィールド》」

また、景色が一瞬で反転した様な感覚。
イリアが立っているのは、間違いなくエヴァ邸のリビングだった。

エヴァ邸の時計ではすでに八時を回っており、遅刻は決定事項となっていた。
そしてイリアとネギの授業。

「はぁ……」

イリアは溜息をついていた。
それもそうだろう。フェイトを困らせようと悪戯をした結果、まさかの本番突入。どこのエロゲーだと言う話だ。

「どないしたんやろ、イリアちゃん、元気ないなぁ」
「うん……どうしたんでしょうか……」

亜子が後ろを見て心配するのに釣られ、隣の席ののどかも後ろを見て心配を述べる。
いつも騒がしいクラスも、イリアの悩んでますオーラ的なモノで静かになっていた。

イリアが何を悩んでいるのかと言えば、やはりそれは本番をやってしまったという限りない後悔。しかもその記憶がとても曖昧なのだ。
そして更に言えば昨日の会話。「世界を救う」というフェイトの言葉。《完全なる世界》には入らないと言った。だが、フェイトを放っておけば魔法世界が沈む。
折角ナギが救った世界。子供である自分が、救うべきなのだろうか。
その娘が、その魔法世界を崩壊させようとした敵と仲良くなる。
それは、果たして良いことなのだろうか。そんな念が押し寄せる。

「――ア。イ――」

そんなことを考えていれば、当たり前な程に人間は自分の世界の中に入っていく。
歪みのある正義。歪みなき悪。
自分はどちらにいるべきなのか。

「イリ――。――ア！」

自分は未だ未熟。正義と悪というものを理解すらしていない。
しかし立派な魔法使いと呼ばれた者がしてきた悪行の数々は知っている。悪を行えば、それは悪になるのだろうか。善を行えば、それは善になるのだろうか。

否。

悪を行えば悪になるだろう。だが本物の善を行おうと、それは恐らく偽善となる。そして悪もまた、恐らく善になることがあるのだろう。善が偽善で悪が偽悪で、悪が善で善が悪で。

立派な魔法使いを見れば、それは分かることだ。

存在が悪だと言って、簡単に吸血鬼を屠る魔法使い。自分は、その屠られる側にいるのだ。

吸血鬼を屠る程の力量を持つ者などそういない。それこそ、体を木っ端微塵にできる程の力を持ち、尚且つ立ち回りを考えなくてはいけない。人間でそんなことができる者などいるのだろうか。

――いや、いる。

ナギならきっと、立ち回りなんて面倒なことをせず、ただただ力だけで潰すだろう。

だがしかし、人間を故意的に殺そうとしない吸血鬼を、殺したくて殺している訳ではない吸血鬼を、彼は殺すだろうか。

その答えもまた否だ。

現に今、エヴァは生きている。

エヴァはナギに助けてもらったことがあると言った。

しつこくナギに付き纏った時期もあったと言った。最終的に呪いや魔力の封印などをされてはいるが、それでも助けられた。それは事実。本人が言うのだから、絶対的に事実で自然的に現実で必然的に真実なのだろう。

「――ア！　イリア！」

「うわあ！　な、なにさ……。お兄ちゃん」

悩み耽っていた目の前にはネギが立っている。

それも、さっきまで無視されていた所為か、少しばかり怒っている様子だった。

「さっきから呼んでるのに、なんの反応もしないから心配になったんだよ」

「あ、ごめん……。あれ、授業は？」

「もう終わったよ。ほら、朝集めたプリント職員室に置きに行かなくちゃだから、早く行こう、イリア」

「……うん、そだね」

今は、考えない様にしよう。

そう思った。ここは学校で自分は教員。今は、教員なのだ。生徒を導くための存在。

ならば、今ここでのこの悩みはただの邪魔だ。

しかし、邪魔だからこそ、考えてしまうと言うものなのだが。

ディナー（後書き）

これ投稿していいのかとすごく悩んだ。
短いし、フェイトと――自主規制――しちゃったし。

百合系小説にしようとした結果がこれでいいのか！？

もうこの際逆ハーレム作って腐女子をキャーキャーいわせたろか！
？　むしろホントはイリア男の娘だった的オチで！（勿論冗談です。

過去の記憶（トラウマ）

学校の放課後。イリアとエヴァ、ネギは別荘の中にいた。
それと言うのも、エヴァの弟子になるということが諦めきれなかったネギの根性が招いたものである。そもそもエヴァ自身、ネギの魔力容量を見て結構な興味を持ったのだ。
桁外れた魔力だった。
イリアがいない世界（つまり原作）でのネギは、あのイリアが死神と名乗る男と再会を果たした日、あのトレーニングをした後ぶっ倒れた。だがこの世界のネギは、少し立ち眩みをするくらいで、倒れることはなかった。

「ぎゃう！」

そんな訳で、今では弟子と言ってもおかしくない程、ネギの修行に付き合っているのだ。まぁ、エヴァの立場上（というか性格上）、イリアに「お兄ちゃんの修行を見てあげてよ」と言われないと付き合わないのだが。

「ほらどうした！　そっちにはイリアがいるぞ？」
「あっ……」
「あはっ、残念。《雷の斧》！」
「ああっ！」

イリアの加減した《雷の斧》がネギに直撃する。と言っても、加減しすぎだ。証拠に、ネギは痺れることもなく、一度片膝を突きながらも立ち上がった。

が、

「遅いぞ。ここが戦場なら既に死んでいる」
「うひゃう！？」

後ろからエヴァに蹴られた。しかも、倒れたネギの顔を足で踏む。
ちなみに、何故かエヴァは裸足。別荘はエヴァの家の様な物。裸足でいてもなんの問題もない、というのだろうか。

「まったく、お前は妹を護りたいはずなのに何故妹に手加減された上に周りへの配慮が出来んのだ！？　というか、二人の女の子相手に十秒しかもたんとはどういうことだ！」
「あううううう～！」

エヴァにフニフニと顔を踏まれるネギ。ある種特別な人達からすればご褒美だ。だが、ネギにそっちの気はない。つまり、ただの苦痛。

「だが、さっきの《雷の斧》で少し思い出したな。どれ、ぼーや。もう一回飛んで来い」
「ええ！？　あ～う～！？」

ネギを蹴り飛ばし、そのまま瞬動で接近。ネギの胸に手を当てる。
無論、攻撃の邪魔をされぬよう、効き手を抑えている。
バチッと音を立てた。それがなんなのか。簡単なことだ。無詠唱による雷の矢。
ネギに雷の矢が命中したのだ。ネギはそのまま重力に逆らうこともせずに地面に落下していく。

「イリア程ではないが、加減してやる。耐えろ。りク・ラック　ラ・

ラック　ライラック　来れ虚空の雷　薙ぎ払え！　《雷の斧》！！」
（ケノテートスアストラブサトー　デ・テメトー　デイオス・テユコス）
「ひゃあ！？」

先程の雷の矢等比べ物にならない電撃の斧がネギを襲う。魔法障壁で防ぐも、雷の特性である『痺』はダイレクトにネギに体を蝕んだ。

「今のはサウザンドマスターも好き好んで使っていたコンボだ。覚えておいて損はないぞ」
「父さんが……」

無詠唱近接魔法の射手の後に詠唱の速いタイプの上位古代語魔法（ハイ・エイシエント）。まぁ、あのバカで有名なナギがそんな深いことを考えて使っていたわけでもないのだろうが。

「むぅ……頭がくらくらするー……」
「む、イリアもか。まぁ、四時間ぶっ続けで魔法使ってれば当たり前か……。ぼーや、今日もきっちり授業料を払ってもらうぞ」
「えっ……。で、でもこの前もあんなにたくさん……」
「何言ってるのさお兄ちゃん」

エヴァは座っているネギを跨ぎ頬を撫でながら、イリアはネギに後ろから抱きつきながら言った。

「あの程度じゃ、全然足りないよ？」
「あの程度では全然足りぬ……？」
「あっ……」

二人の口が、ネギに近づいていき……。

～イリアＳｉｄｅ～

「いや～、今日もいっぱい搾り取っちゃったね、エヴァにゃん」
「ああ、そうだな。まぁ、ぼーやのアレはなかなかに美味だからな」

なんだろう、すごく勘違いされそうな話をボク等してるよね？
まぁいいけどさ。
そんなこんなで最近はお兄ちゃんの相手とか結構してるから暇な時がない。
ていうかボクがいなかったらお兄ちゃん、教師の仕事しなかったんじゃないかな？

「ふいーん、疲れた～」
「少し肩を揉みましょうか？」
「うにゃ、お願い茶々丸～」

茶々丸の肩揉みは超が作ったマッサージ器並の気持ちよさ。まぁ、茶々丸を作ったのも超とハカセだって言ってたからね。

「おい茶々丸、イリアを風呂に入れに行くぞ」
「「え？」」
「いや、だってもう九時過ぎてるぞ？」
「ありゃ、本当だ」
「そういうことだ。行くぞ茶々丸」
「はい、マスター」

いや、あの。えー……。

「なんで茶々丸はボクを猫みたいに抱えてるのかな？」
「……すいません。思わず……」
「いや、いいけどさ……」

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

「にゃっ……エヴァにゃん、ダメだよそんな……あっ」
「相も変わらず首を洗う時は変な声を出すな……」
「仕方ないじゃん、弱いんだから……ひゃんっ？」
「マスター、イリアさんは内腿も弱いそうです」
「……弱い所多くないか？」

とまぁ、入浴。イリアは自分で洗うから良いと言いながらも結局エヴァに洗われる羽目になった。
洗われると言うよりも、弄られると言った方が正しそうだが。
更に言うと、茶々丸はついこの前まで入浴などと言ったことができなかった。だが、ハカセが『ロボが恋をした可能性』を見つけた為に、実験的に防水加工された。故に入浴も可能。

弄られたイリアは床にはにゃ～んとなっている。まぁ、つまり疲れきって床に寝転がっているのだ。

「寝るならベッドで寝ろよ」
「うにー、分かってるよー。あ、そだ。明日もお兄ちゃんの修行見てくれるよね？」
「ん？　ああ、別に構わんぞ」

最早エヴァにゃんと一緒に寝るのが日常化してしまった。と言うのはイリアのセリフである。
日常化と言うのが最も適している状況なのは、確かなことなのだが。

「お兄ちゃん大丈夫なのかな、アレ……」
「なに、ここ最近ではいつものことだろう。……この前教室で悩んでいたお前よりは幾分マシだろ」
「ボクそんなに悩んでないもん……」
「嘘を言うのは、感心しないな。あのアーウェルンクスのことだろ」
「エヴァにゃんに嘘は吐けないという諺はこのことか……」
「そんな諺存在せんわ！」

途中から話の腰が思いっ切り折れてしまったが、つまるところ、日常化と言えばネギの疲労も日常化しているのだ。疲労がぶっ飛ぶときと言えば別荘の中で修行をするときくらいだ。それ以外は、授業だろうと職員会議だろうとなんだろうとふらふらふらと、疲労の色を見せている。
勿論、何故なのか、等と言う質問は愚問であり愚問でしかない。それに応えるのも愚答と言うものだが……。まぁ、結論からいえば『エヴァとイリアの修行』だ。
いや、修行だけなら幾分マシなのだろう。修行の後が、大変なのだ。

魔法関係者のもの（主にネギに巻き込まれた人達）は、ネギを追跡していた。
それと言うのも、最近のネギの疲れ様。アレはおかしい。たった二〜三時間の修行でああなるわけがない。なら、なにか裏があるは

ずだ。
　それも大声で言えない様な――自主規制――なことをしているのかもしれない。と言うのは勿論パパラッチ娘朝倉の考察である。

「あ、ネギ君誰かと会ったよ」
「あー、ヤバイ。イリアだ……」
「なにがヤバいんや？」
「木乃香、良く覚えときなさい。イリアなんかにかかれば私たちなんてすぐに見つかっちゃうってこと」
「確かに、イリア先生ならあり得そうですね……」
「イリア先生はなかなかの実力者と聞いてるアル。う～、戦いたいアルネ～」
「……止めときなさいよ？　幾らくーふぇでも勝てないだろうから……」
「あ、ネギ君イリアちゃんと一緒にどこか行くえ、追いかけな」
「そうね、行きましょう」

　そして行きついたのは勿論エヴァ邸だ。このログハウスを知らないのはアスナを覗いて誰ひとりいない。故にイリアが一人住んでる場所だと勘違いして驚くのもまた自然。そしてアスナに「エヴァちゃんも一緒に住んでるらしいわよ。というか元々エヴァちゃん一人の家だったみたいだし」と言われてまた驚くのもまた自然なのだろう。まぁ、「あんなメルヘンな家に住んでるのか」という意味での驚きだが。

「あれ～、どこにもいないね……」
「ううーん、確かにこの家の中入ったんやけど……」
「もしかしてイリア先生が私たちに気付いて逃げたとか？」
「確かに、それはあり得そうですね」

皆でイリアとネギを詮索中。

「あのー。皆さんこっちに来てくださいー！」

珍しくのどかが大きな声を上げた。
何事かとのどかに着いていく。
地下に続く階段を下り、人形が盛り沢山の地下室に入る。
暗い地下室。等身大のものから、可愛らしい小さな人形もいる。
それらは真ん中の通路を隔てて睨みあう。
途中目線と言うものを感じたりするので、恐ろしい部屋だ。
その地下室を抜けると、また部屋がある。
そこに、ミニチュアの建造物が入った球体のカプセルが置いてあった。

「これがどうかしたの？」
「は、はいー……。この中に小さなネギ先生とエヴァさんとイリア先生が……」
「え？　どういうこ――」カチッ。

朝倉が言おうとした言葉は、とある音に遮られた。

「え？」
「あれ？」
「む？」
「うーん、なんなのかしら……。って、あれ？　みんな？」

部屋の中には誰もいなくなっていた。アスナ一人を残して。

あれから数分後、やっとミニチュアの中に入れたアスナ。そこで夕映に現状を聞かされ驚くこととなった。

周りを見ると、どこかで見た様な南国の島。
それも、アスナにとって数分だったものが、夕映達からすると数時間経ったというのだから、驚くなと言う方が無理だ。

「ねぇみんなー！　本屋がこっちでネギ君達の声を聞いたって……」

そう言う朝倉の目線の先には先程の地下室へ続く階段を思わせる様な石の階段。その先は暗くなっていて、電気はない模様。

「本屋ちゃん今日はお手柄ねぇ……。とりあえず行ってみましょうか」

何故かアスナがリーダーシップを取っている。遅れてきたくせに……。まぁ、それというのも恐らく、魔法無効化によるものなのだろうけれど。
そしてその地下室の先。明りの灯る一室。そこから声が聞こえてきた。
皆一斉に身を強張らせ、壁に張り付き身を隠す様にして、その声を聞く。

「も、もうダメですって……無理ですよ……」
「何言ってるのさ。お兄ちゃんだって若いんだから、すぐに復活するって」
「そうだぞぼーや。いいから出せ」
「あうう……」
「あは。お兄ちゃんの、凄く美味しいよ？」
「い、言わないでよそういうの……」

わなわなと、アスナが震える。

「こ、これはまさかー……やっぱり自主規制が必要な感じなんじゃー……」

朝倉が思わぬ正解を当ててしまったと顔を引き攣らせる。

「あ、ああ……」

「アスナ？」

「あんた達は子供相手なにしてんのよー！　イリアはイリアで実の兄に――って……あれ？」

考えてほしい。イリアとエヴァは吸血鬼なのだ。

その点を考えれば、先程のセリフは、一体なんなのか。すぐに分かると言うものだ。

「む……？　なんだ神楽坂明日菜。何故ここにいる」

「アスナー、どしたのさ？　そんな不自然なこけ方して……」

ネギの腕を引っ張ってそれに齧り付く少女が二人。

両手に花。とでもいうのだろうか。

「なんでもない、うん、なんでもないのよ……」

この別荘のことを説明をしたら大層驚かれた。まぁ、当たり前なことなのだが。

だがしかし、今では驚いたという事実なんて無かったかの様に、さも当然のように夕映がいった。

「魔法を教えてくれませんか？」と。

勿論、そんなことを言われて「はいそうですか分かりました」なんて言うイリアではないし、エヴァも「めんどくさい」と言って付き合わない。

そうなればその矛先はネギに行くのはとても自然なこと。

しかし、教えたとして、それをすぐに実践できるかどうかで言えば答えはノーだ。

《火よ灯れ》なんて言ったとして、それで杖に火が灯る様になるのはそれなりの訓練が必要。簡単にいえば、コンビニでも行って百円ライターを買った方が遥かに楽なのだ。

勿論その日、火を灯らせることができる人はいなかった。

「それにしても、どうするんだ？　アレ」

「うにー、仕方ないよ。巻き込んじゃったら最後まで巻き込むしかないし。中途半端にしといた方がかえって危険だもの」

「じゃあ、お前はぼーやと共に教えると？」

「結果的にいえばそうだね」

別荘の一室でこれからを話すイリアとエヴァ。しかしその先は不安だらけだ。

エヴァは別に他人事だ。だがイリアからすれば、自分の教え子を危険な世界に引き込んでしまうのではないかと言う考えがどうしても纏わりつく。

どうするべきなのか。答えを言うとしたら、やはり護身程度の魔法は教えるべきなのだろう。その為にはまず基本的な魔法をして感覚を覚えていく他ない。遠回りなどではない。これが一番の近道なのだ。

「私は付き合わんからな」

「分かってるよ～、エヴァにゃん面倒事嫌いだもんね～。でも、大変だな～。教師の仕事した後に今度は魔法を一日教えなくちゃいけないだなんて～」

白々しく言う。

「……分かったよ。付き合ってやる。だが少しだけだからな」

「やーん、そんなエヴァにゃんが大好きだよ～！」

「まったく……見境もなく抱きつくのは止めてほしいのだがな」

別に誰かが見てると言うわけでもないのだから良いと思うのだが。

～同時刻～

小太郎は走っていた。ネギにとあることを伝えにいくために。

（あのおっさん。強かった……。速くて重い拳、あれほどのもんとはあんま戦ったことがないで……）

小太郎の目の前に現れた老紳士。

ただの老紳士では無いことくらい、小太郎はすぐに勘付いた。

（あかん……、逃げ切れるか！？）

小太郎のすぐ後ろには女の子三人が追ってきている。そのどれもが人間とは言えない。それが何故なのかと言えば、

「ちっ、ねばねばとしつこいねん！　さっさと離れろ！」
「離れろなんて言われて離れる敵はいないよ～だ」

手を一メートル以上伸ばして小太郎の足を捕まえに来る。
それと言うのも、人間じゃないからできる芸当だ。スライム。
イメージではへにゃちょこだが、現実は人の形も取れるし思考回路もきちんとしている固有生物なのだ。

「ぐあっ！」
「残念だったな、犬上小太郎。君には暫し眠ってもらうよ」
「なっ！　それは――！」

足を完全に絡め取られ、遂に地面にひれ伏すこととなった。そしてその小太郎の目の前に、老紳士がたっていた。
老紳士が取りだしたのは西の符。西に事情聴取されていた時に付けられていたものだ。知らない訳がなかった。
狗神の力を、封ずる符。

「ごふっ……」

地面に這い蹲った状態から逃げる術はなかった。足で背中を踏まれ、動くこともできない。その足で踏みつけるという行為さえ、とてつもない重さを伴っていた。肺から強制的に空気が排出される。
そして老紳士はその小太郎の額に符を――。

「ぐっぅ……」
「さて、小瓶は回収させてもらうよ」

小太郎の姿は犬の姿となる。符の所為だ。小太郎の髪の毛に隠れていた筈の小瓶を、老紳士は早急に回収する。

「さて、では目標を見つけに行こうか。と言っても、誘き寄せればいいだけのこと。簡単な仕事だな」
「しかし旦那、油断は禁物だぜ？」
「分かってるよ。すらむぃ」

その後、小太郎は那波の家に引き取られることになるのは余談だと言っておこう。

～別荘内～

今イリア達は、ネギとアスナの奇行を、遠くから眺めていた。魔法陣を敷き、でことでこを合わせる様にする。

「アレって……」
「アレは意識シンクロの魔法だな……。ぼーやの過去でも見るんじゃないか？」

そこにいた一同がなるほど、と納得する。

「どれ、宮崎のどか。貴様のアーティファクトでぼーやの記憶でも覗こうじゃないか」
「え！　で、ですが、そういうのはあまり良くないと言うかー……」
「好きな男の過去くらい見ておかないでどうする」
「な！？　なんでそんなことを知ってるんですか――……！」

いつもネギに向かって視線を送ってる姿を見れば誰でも気付くと思うのだが……。

ネギの過去。
それは何とも形容のし難いものだった。

『ここって……』
『僕の家です。この頃、イリアとは別居してたんです。どうも村の感じに馴染めなかったみたいで……。お姉ちゃんも、月に一度帰ってくるか来ないかで……』
『へぇ、そうなんだ』

アスナとネギの会話が、のどかのアーティファクト、いどのえ日記に書かれていく。絵がコメディーなのは仕様なので仕方ない。

「ナギは戦争で勝っただけじゃん！　そんなのただの虐殺者だよ！」
「違うもん！　父さんは英雄だ！　皆を助けるために戦ったんだ！」

イリアとの口論。
それを困った顔で見るネカネと、溜息を漏らしているアーニャ。
そしてもう一人、こちらは温厚そうな笑顔を……いや苦笑を浮かべている四十代のおじさん。彼が、イリアを育てたも同然の存在だった。

しかし四歳の子供がする喧嘩の内容では無い。虐殺者等と言う言葉を四歳で覚えるなど、まともな生活などしてきていない。

そしてそのままイリアの髪の毛がネギの鼻をくすぐり、くしゃみと言う名の武装解除が放たれた。
無論、今よりも容赦のない一撃。イリアの服など、簡単に吹き飛んでしまった。
イリアはただ無言でおじさんの顔を見た。おじさんはさっきより

も更に酷い苦笑を浮かべていた。

「ね、ねネ……ネギなんて大っ嫌い！」

「ぶげら！？」

イリアのビンタが炸裂。ネギはそのまま地面を華麗に滑っていった。

「おいイリア。昔のお前たちはいつもこんなだったのか？」

「うにー、昔のことはあまり思い出したくないんだけど……。まぁ、そうだね。ボクが一方的に自分の意見を押し付けてそのまま喧嘩に発展っていうのが日常だったよ」

今のイリアからは予想もできない。小さいイリアは、今のイリアの面影が残っているからか、少し新鮮な様にも思えた。

イリアはおじさんが用意したローブやらを即座に着こむと、そのまま脱兎の如く逃走した。ネギの記憶だからか、それ以降のイリアの足取りは掴めなかった。

そんな時に、アレ等は来た。

――――悪魔と言う存在が。

アスナが瞬きをする間に、村は炎に包まれていった。瞬きをすればするほど、炎は勢いを増していった。

『なによ――、これ――』

最早放心状態だった。

「……」

「……？　どうかしたか、イリア」

「何でも、ないよ。ただ、ちょっとした後悔が、ね――」

顔を俯かせるイリア。

その姿にそこにいる者は全員首を傾げた。

しかし思えば当たり前でもあるのだ。イリアがいれば、村の被害はもう少し小さくできたはずだった。小さな頃からそれなりの力を仕えていたイリアなら。

そこに思い至ったものは、敢えて何も言わずに日記を見た。

ネギはその場にいたネカネに助けられた。石化魔法を足に食らったネカネだったが、対魔力が高いのか、石化の速度が異常なほど遅い。

すぐに駆けつけたスタンも石化された。こちらは容赦なく、全身を。触れば砕けてしまう存在となった。

ネギはナニカを呟いていた。

聞き取れない。アスナは訝しむ目でそれを見た。

「――ごめんなさい」

『っ！？』

ネギのその一言が大きく聞こえたと思った次の瞬間、爆発音がした。

そちらを見ると、ネギと同じ赤茶色の髪の毛をした男が、杖を構

えて立っていた。

『も、もしかして……これって……』

――ネギのお父さん？

そう言葉が出そうになった時、四方八方から悪魔の大軍が襲ってきた。

それを圧倒して行く一人の男。ネギの父親でありイリアの父親。

その様は、確かに虐殺者だった。

最後の一匹の首をへし折り、ネギの頭を撫でる。

「悪いな。来るのが遅くなった……。お前がネギか？　はは、あんま俺と似てねえな……一度安全なところに運ぶぞ。お前の妹も、助けなきゃだからな」

くしゃくしゃと乱暴に撫でた。ただただ、父親だった。父親の顔だった。微笑んでいた……。

「「「……」」」

日記を見ている朝倉達は声を出せない。エヴァも同じだ。死んだと思っていた人が、確かにネギの記憶に出てきたのだから、当たり前だった。それが想い人だったのだから、尚更。

その後は、ネギを村から離れた丘の上に置き、そのままイリアの救助に向かった。

帰って来た時のイリアは、とてもやつれていた。この一瞬で、ここまでなるのかと思うほど。

そんなイリアを、ナギは撫でた。ネギにしたように、くしゃくしゃと乱暴に。だが確かに。

まるで、

――まるで、これまでの時間を取り戻そうとしている様に。強く撫でていく。

イリアは涙すら流せない。当たり前だ。今迄育ててきてくれた人が完全石化したところを見たのだから。しかし、この日記からはその描写がない。当たり前なのだが。

しかし、心地がよさそうでもあった。初めての、親の感触を知った子供の様に、無邪気そうでもあった。おじさんが死んだと言う事実と、父親が生きていたという事実。

だがイリアは曲解した。

「っ――」

ナギはもういない。アレは幻覚なのだと。

そう思って生きてきた。

「……ほら、ネギ。お兄ちゃんだろ。イリアを護ってやんなくっちゃな。……ふ、俺の形見だ。持ってけ」

そう言ってナギは持っていた杖をネギに託した。

それが、あのネギがいつも持っている杖だと言うことは、誰もが分かった。

「その杖で、ちゃんと護ってやんだぞ。……どうやら、もう時間だな。悪ぃな。お前らにはなんもしてやれなくて。……こんなこと言えた義理じゃあないけどよ、元気に育て！　ネギ、イリア」
「待って、父さん！　父さん！　父さっ――！」
ナギは虚空に消えていく。魂が消える様に、消えていく。
「父さぁぁあぁぁん！　うわあぁあぁあぁん！」
泣きじゃくる。ただ泣きじゃくる。外見相応年齢相応に泣いた。
イリアは泣かなかった。
『すみません、みっともない所見せちゃって……』
『うわ！？　あ、ううん。大丈夫よ……』
『……今でも思うことがあります。アレは罰なんだって」
『え……？』
『父さんはピンチになれば駆けつけてくれるって思ってた、僕に降りかかった罰なんだって』
「――あんた、何言ってんのよ！」
魔法が解けた。それと同時に日記の絵も変わった。
「意識シンクロは感情を高ぶらせると解けてしまうからな……。それにしても、」
エヴァのその後は続かなかった。
そのまま無言で立ちあがって、部屋に戻っていくイリアを見たから。

皆、少し不安になった。あのトラウマを、まだネギの様に話すことができる心情じゃないのかもしれない、と。六年経った今も、本当はネギ以上に心の整理がついていないのではないか、と。

エヴァが部屋に入ると、イリアは既にベッドの中に入って寝ていた。

いや、寝ているかどうかは分からないが。

「イリア、起きてるか？」

「……」

応答がない。どうやら寝ているらしい。

仕方ない、とエヴァもベッドの中に入った。そして気付いた。

（……泣いてる……？）

見れば、イリアの肩は僅かに上下している。ちゃんと耳を澄ませば、小さな嗚咽も聞こえてくる。

エヴァに背中を向けても、意味がなかった。

「イリア……」

少し、後悔した。

ネギの過去を覗いた結果、イリアを泣かすとは思いもしなかった。

「ねぇ、エヴァ」

「ん、どうした？」

優しく応えた。イリアを労わる様に。
なにを言われても、優しく答えてあげれる自信があった。

「お兄ちゃんは、あの事件のこと、自分のせいだって、思ってたんだね……」
「……」

だというのに、なんて答えれば良いのか分からなかった。

「私だって、思ってた。自分の所為だって。自分がいなかったから、あんなに被害が広がったんだって。なにより、自分が、英雄の娘――だから……」
「……」

まだ分からない。

「おじさん、死んじゃった……。もう、いないんだ……」
「イリア……」

やっと出てきた声はしかし、名前を呼んだだけで虚空に消えた。

声に出すことができないんだと、エヴァは悟った。言葉は、なんて軽いのだろうと。
時には重く圧し掛かるくせに、こう言う時に限って、なんでこんなにも軽いのだろうと。

だから、行動で示した。

「エヴァにゃん……？」

イリアの小さな背中を抱きしめた。思いっ切り。ナギがイリアの髪を撫でたのと同じくらい力強く。

「お前のせいなんかじゃないさ。あのバカの所為だ。お前を、一人になんかさせたのが悪いんだ」

「……うん、そう思ってた時期もあったよ。ナギが、――父さんが村にいてくれれば、ああはならなかったんだって。だけど、そんな『あったかもしれない』現実なんて、結局逃げ場になんて成らなかったんだよ、エヴァにゃん……」

「そうかもしれないな。だが、見ただろ。ナギは、ああやっていろんな人を助けてきたんだ。私もその一人だからな。だから。――だから、今度ナギにあったらあのアホ面を殴ってやろう、な？」

エヴァは優しく言った。さっきまで答えられなかったのに、声がでなかったのに。今は出る。あふれ出る感情と比例するように。

エヴァは優しく言う。さっきまで答えられなかったのに、イリアに触れた瞬間。どんどん出てくる。イリアが正解を持っているように。イリアが答えの様に。イリアが、本当は答えを知っている様に、その答えを、代弁しているかの様に。

「親として自分の近くにいなかったことを肉体言語で糾弾して、それから思いっ切り抱きつけばいい」

「もう、無理だよ。ナギに抱きつくだなんて、ボクにはできない……」

「少しずつでいいんじゃないか？」

「……」

「なにも急がなくてはいけないわけではない。少しずつ、ぼーやと同じようにとまでは言わないが、本当に少しずつナギのことを、父親だと思える様になればいいんじゃないか？」

エヴァは思う。自分には似合わないな、と。
こういうことはタカミチやアル、赤き翼メンバーの面々がやるべきだ、と。
だからネギはそっちに任せようと思った。私は私で、イリアを育てようと。親代わりというより、姉妹の様になってしまうだろう。兄がいるイリアには不要な存在かもしれないが……。

「ありがとっ、エヴァにゃん」

イリアは思う。さすがエヴァだ、と。
自分よりずっと長生きしてきたから、親なんかよりもずっと長生きしてきたから。だからだ、と。
ネギはきっと分からないだろうこの気持ち。自分の親を否定し続けることの、苦しさ。ナギに暴力を振るわれた訳ではない。逆だ。なにもされなかった。だからこその否定。それはとても苦しい。
それはさながら、会ったこともない芸能人を否定し、批判し、そして自分の意見が正しいのだと傲慢にも他人に押し付け、そして他人に否定されるような。そんなことに似ている。

だからあの村にも馴染めなかったのだろうと思う。ナギのことを否定していたから、だから村の空気が嫌いだった。ナギを崇拝する村人が嫌いだった。ナギをバカと言っておきながら本当は敬愛しているおじいさんたちが嫌いだ。

違ったんだ。と思った。

いや、本当はとっくに気付いてた。あの六年前。
ナギに頭を撫でられ、抱かれ、また撫でられ。その時に気付いていたはずだった。
ナギは自分の親なんだと。例え自分を育てたのがあのおじさんだ

ったとしても、ナギが親なのだと。

「エヴァにゃん」
「ん？　なんだ」

イリアはもぞもぞとベッドの中で動き、方向転換。
エヴァの方を見て、

「好き」
「なっ……？」

屈託のない笑顔だった。エヴァは突然の笑顔と告白に顔を赤に染めた。

「な、なにを突然言ってるのだ、お前は！」
「好き、だよ。エヴァにゃんも、お兄ちゃんも、フェイトも好きだし、きっとタカミチも好きになれる。だから私、ナギ……いや、父さんのことも、好きになれるよね？」

笑顔が一瞬崩れた様に見えた。
父さん、と呼んだ時、泣いているかのように見えた。
イリアの頬には泣いた後が残っている。エヴァはそれをそっと指先で拭いた。

「ああ、そうだな」

こちらを向いている笑顔のイリアを、エヴァはまた抱きしめた。
やましいこともない、ただただ温かい抱擁。
イリアの顔は、エヴァのまな板とも言える胸の中。温かいな、と。
本当にそう思った。

イリアが寝たのを見届け、エヴァは少し考え事をしていた。

（また、一人称が変わっていたな……）

ボク、やボク様。或いはボク様ちゃん。元より一人称のレパートリーが多いイリア。その中でも、一番異常であり正常な一人称。「私」。

女性なら、それが当たり前。だがイリアは「ボク」と呼ぶ。

どちらが本当のイリアなのか。

（きっと、「私」のイリアが本当のイリアなのだろう……）

がくがくと、ぶるぶると。そうやって震えている「私」の時のイリアが、きっと本当のイリアなのだ。

「ボク」はただただ強がっているだけなのだろう。きっとそうやってずっと過ごしてきた。

一人になると、きっとずっと悩んでいる様な性格。

兄と、まったく同じだった。

過去の記憶（トラウマ）（後書き）

ということで、本当はイリアは過去のトラウマを拭えていなかったという話ですはい。
ネギに比べれば、イリアはマシだと思われがちかもしれんが、そうでもない。育ててきた人が一人でも石化すればそれがトラウマになるのは極自然。
ネギの心の方が強かったーみたいな話ですねーはい。
後はやっぱり双子って似るんだなーっていう話。

後書きが凄くてきとーだけど気にスンナ（笑。

てかぶっちゃけイリアが泣くときって感動的話にしようとして失敗していってんだよね。

次回、悪魔と戦闘するかも（曖昧。

悪魔との契

別荘で一日を過ごしたメンバーは帰っていく。イリアを気に掛ける者もいたが、エヴァとイリアに「別に大丈夫」と言われるだけなので、いつしか気にしなくなっていた。

外は雨だった。
嫌な雨だった。

一度出掛けると言って帰ってきたエヴァが発した一言は、
「おいイリア。侵入者だ。準備をしろ」だった。

「ふえ？　侵入者って……」

イリアは困惑する他ない。いつもは一人で片づけるか他の魔法関係者に任せてるくせに、何故今日は自分もつれていくのか、と。

「悪魔だ。アレはぼーやだけでは対処できん。私は動く気がない。ならお前が助けに行ってこい」

悪魔……。そう口の中でだけ呟く。悪魔と言うことは、召喚されたということだろう。
ならどこかに召喚術師がいるはず。
ネギの手に負えないほどの悪魔を召喚できる術者。それはかなり限られる。西なら鬼を召喚する。なら、誰が？

「考え事は後だ。さっさと行くぞ。茶々丸、お前もついてこい。私と一緒に傍観だ」
「んにゃ、らじゃ～」
「はい、マスター」

同時刻、那波が悪魔に連れて行かれたのを何もできずに見送ったネギと小太郎は急いでいた。悪魔に指定された場所は「世界樹前のステージ」だ。

「おいネギ！　あのおっさんにお前勝てるんか！？」
「勝つしかないよ！　アスナさん達の他にも那波さんまで連れて行かれたんだし……勝つしかない！」

本当は勝つ自信などなかった。自分と同等どころかそれ以上の近接格闘のエキスパートである小太郎が負けたのだから、自信など疾うの昔に砕かれている。それどころか、イリアに頼ってしまおうか、などという心まであった。

だが、屈しないと決めた。イリアは吸血鬼で、護られる立場なのだ、と。特に麻帆良で戦闘など、いつボロが出てイリアが吸血鬼だとばれるかわかったものじゃない。

これでもエヴァとイリアから戦い方は少しだが教わっている。なにより古菲から習った中国拳法がある。

勝てる勝てないじゃなく、勝つという選択肢しかネギにはないのだと決めつけているのだ。

しかし、結局イリアは出てくることになるのだが。

そんなことも知らぬまま、ネギと小太郎は雨の中を杖に跨り駆けていく。
雨が降っていた。
嫌な雨が、降っていた。

世界樹前ステージでは、ネギに巻き込まれた魔法関係者がスライム特性の牢屋に閉じ込められていた。半裸とか全裸で。
ここにイリアがいるなら「なんでさ?」と言っていたに違いない。

そんな状況でアスナと老紳士が言い争いになっていた。
それというのも、老紳士が着換えさせたのが悪い。囚われの姫だからと言って、パジャマは似合わぬと言い、勝手に着換えさせたのだ。それもエロティックな方の服に。
この服装のどこが囚われの姫なのだか、今一度問いたい。

「む、来たようだね」
「え?」
「《魔法の射手　光の一矢!》」

――バシュゥウ!

変な音を立てて、ネギが放った魔法の射手は防がれた。
それと同時に、アスナに妙な痛みが走った。

「……小太郎君、僕が言くよ」
「な……。アホか!?　俺が負けたんやぞ!?　お前みたいな中国

拳法のひよっこが勝てる訳ないやろ！」
「小太郎君」
「な、なんや……」
「さっき自分で負けたって言ったの忘れたの？　小太郎君が負けたのなら僕だって負ける。だけど、時間稼ぎくらいなら……」
「アホ、それかてお前が後衛や。自分が魔法使いっちゅーこと忘れたんか？」
「……」

「なんか言い争ってるみたいだけど、こういう場合は二人同時攻めが一番有効だよ、お兄ちゃん♪」

声が聞こえた。凛とした、鈴を弾いたかのような声。
ネギの後ろ、そこからスライムの拳が迫る。だがそれを容易く防いだうえにカウンターを喰らわせる者が一人。

「そんな風に言い争ってるから、こういう風に簡単に後ろを取られちゃうんだよ？」
「イ、イリア……」

勿論、その正体は白の少女なわけなのだが。
ネギは驚愕と共に「しまった」という念が募る。
自分が言い争ってるから、イリアを戦場に立たせてしまった。

いや、今からでも遅くないか。

「イリア、下がってて」
「……？　どして？」
「イリアが吸血鬼だってバレたら、どうなるか分からないじゃん……」

「だいじょーぶだよ～。とっくに一部にはばれてるんだし、今頃バレたって何があるってわけでもないしね」
「で、でも……！」
「自惚れないでよ、お兄ちゃん。あんなおじさん、ボク様一人でも十分なんだよ？」

笑顔でそう言うが、やはりネギは心配だった。
もしこれが修行の一環だったら？　きっと誰かが見張っている。
或いはカメラを出しているはずだ。
そんな時に、イリアがぼろを出したら――。
考えるのも嫌だった。
だがそんなネギと裏腹に、イリアは即座に行動を開始した。

縮地に近い瞬動。だがやはり、まだ縮地にはほど遠いらしい。

「むっ……。その歳でこの瞬動か。聞いていた通り、妹の方は既にそこら辺の魔法使い以上だな」
「煽ててもなんもあげないよ、おじさん。それとこれは忠告、前ばかり気にしてたら、後ろをとられちゃうよ？」
「む！？」

目の前で殴りかかろうとしていたイリアが突然消えた。そして後ろに走る激痛。
老紳士が後ろを見る。そこには黒い刀身を持つイリアの姿があった。その刀身には、赤くて紅くて朱い模様が走っている。
しかしイリアはその刀を使わず、体術で攻めていた。

「我流　瞬打双魂」

これはイリアが独自に作ったものだ。

封号解除による特殊能力。霊力付加。これによって、イリアは瞬歩と鬼道が使える。
つまり今の瞬間移動は瞬動では無く瞬歩。

いつの間に封号解除をしていたのか、それを言うなら、エヴァに忠告されたからだ。つまり最初から。
最初の瞬間移動は瞬動。それは自分のレベルを下げるため。相手にとって自分がどれだけの力量なのかを見させるため。更に、刀はずっと黒のコートにしまっていたため、気付く者などいなかった。
いや、ネギなら気付けたかもしれない。その黒衣もアーティファクトの一部なのだから。

「む、ぐぅ――」

後ろの打撃は名の通り、魂それ自体にダメージが入っている様な痛みだった。
形的には、ソウルイーターの黒星ビックウェーブを思い出してくれれば結構だ。

この場合、魂の波長ではなく、純粋な魔力爆発を起こしているのだが。

「何故、急に接近戦を……。君は魔法使いの筈だがね」
「何言ってるのさ。さっきのアレくらい、どうやったのか解ってるんだよ？」
「なに？」
「魔法完全無効化能力の下調べかな？」
「……」
「その無言は肯定と取るよ、おじさん」

やっぱり、とイリアは思う。
アスナについているネギの魔法の射手を防いだ時、ペンダントが少し変化を見せた。そして魔法は防がれたと言うより、かき消されたのだ。
そうなれば、魔力を乗せて撃つのが主な戦闘方法である『斬月』の封号解除『残月』の力は好ましくない。形を変えるか、とも思うが、そんな暇を相手が与えてくれるか分からない。
相手は、伯爵レベルの悪魔だ。

「さて、仕方ないな。少し、予定が早まったが……。この姿を、君は覚えているかな、イリア・スプリングフィールド」

老紳士は帽子を取る。それを顔に翳し、下に下げていく。
心臓が高く鳴った。一度じゃない。何度も何度も。何度も何度も何度も何度も。

「ぁ……ぇ……？」
「ふふ、分かったか？　私は、君の復讐するべき相手だよ、イリア・スプリングフィールド」

見覚えがあった。その顔。村のなかにいた、悪魔だった。
何故気付けなかったのだろう。思えば魔力も、あの時のそれだ。
イリアの記憶が検索され、あの顔が出てくる。石化魔法を、使っていた悪魔だ。

「ふっ、どうだね？　少しは、心の傷（トラウマ）を開けたと思うのだがね。……っ！？」
「あ……ぁあぁ……」

イリアから異常な程の魔力が流れる。だが、動かない。

まるでその魔力に動くのを遮られているように、俯いたまま、動けなかった。

「ふん、やはり子供か。早々に済ませよう。――はぁっ！」

「あぐっ……」

イリアは動かない。そんなイリアの脇腹に、悪魔の拳が入った。

そのままイリアは吹き飛ばされる。

壁に叩きつけられたが、それ程の衝撃は来なかった。

なぜなら、

「大丈夫？　イリア」

「……」

ネギが受け止めたからだ。代わりにネギにとてつもない衝撃が走ったのは言うまでもない。

ネギはトラウマを克服しつつある。だが、何故だかイリアは克服できぬままだった。

心の整理がずっとついていないのだ。ナギと言う存在が、心の整理の邪魔をする。

「お兄、ちゃ……」

イリアの体が震えていた。

その体に触れているネギだから分かる程微弱にだが。

「私、ダメ、だ。感情、抑え、らんな……」

「っ！　イリア、落ち着いて！　大丈夫だから」

受け止めた姿勢のまま、イリアを縛る様に抱く。

このままだったら、きっとイリアは暴走すると思ったから。

この世で最も動物が安心できるのは『抱擁』という行為をされることだ。それくらい、ネギの知識にだってある。だから、抱いた。

「あぁぁ……あ……」

「大丈夫、大丈夫だから」

だが本当は大丈夫じゃない。一秒ずつ、悪魔は歩いてこちらに近寄ってくる。瞬動でも使えばいいものを、そうやって恐怖を煽っているのだろう。

ネギは、虚空に視線を送った。

「む……？」

勿論そこはただの虚空。なにもない。

だが悪魔はそれに一瞬気を取られた。

しかしその視線の方向とは反対側に、痛みを感じた。先程のイリアの攻撃程ではないが、それでもかなりの痛みだった。

「俺のこと忘れとったんはとんだ失敗やったで、おっちゃん。我流・狼牙四連舞！」

今できる最大の気を込めた右拳。それが痛みの正体。そしてその気を乗せたままの拳で、アッパーを放つ。悪魔だって、それを読めないわけじゃない。ギリギリでかわす。

「へっ……」

「む？」

「後ろ、気ぃつけんと危ない言われたん、忘れたか？」

「ぐっ！？」

背中に突如、痛み。この死角から来る打撃は、悪魔にとって本当に厄介だった。

しかもそのまま悪魔は吹き飛ばされる。

さっきのアッパーを放ったのは、小太郎の分身だ。実体のない虚像。

「オラオラ、どんどん行くでぇ！」

瞬動の勢いのままに吹き飛ばされた悪魔に追い打ちをかける。

吹き飛ばされている途中にまた腹に拳が入った悪魔は、胃液らしきものを吐く。

更に勢いを増した悪魔はそのまま壁にめり込まされる。

そして小太郎は狗神を込めた両手の掌打を悪魔に喰らわせた。

「が……ぐ……」

小太郎の狼牙四連舞。これはどう避けられてもすぐ違う行動を起こせるように決めた動きなのだ。かわされなければ、月詠を倒した流れでそのまま行く。いざ避けられれば即座に本体により近い分身を作り、相手の裏を掻いて自分の流れに無理矢理持ってこさせる。

更に言うと、符はとっくに剥がされている。故に、狗神も使用可能ということだ。

「なるほど、成長著しいと言ったところかね？　犬上小太郎」

「はっ、吠えてろ。それより、アンタ上を気をつけた方がええで？」

悪魔は気付かない。小太郎が僅かに上を見たことに。

悪魔は気付かない。小さな存在が、既に真上に来ていると言うこ

とを。そしてそれは、とっくに詠唱を終えていると言うことを。

「なにを――「《雷の斧》！！」――がぁあっ！？」

「ほぉら、言わんこっちゃないわ」

バチバチと。一瞬の閃光。

ネギは杖の上に立ち、小太郎の攻撃が終わるのを待った。そして小太郎は攻撃が終わったことを『目線』でネギに伝えたのだ。

瞬時にそれらを成功させるこの二人は、恐らく最高のライバルであり至高のコンビなのだろう。

「ネギ、イリアはどうしたんや？」

「さっきエヴァンジェリンさんが来て……」

そう、イリアの奇行を見たエヴァが、心配になって高みの見物を止めたのだ。

今はネギの胸では無くエヴァの胸の中に抱かれている。

何か最近イリアを抱く回数が増えたな、と心の中で思いつつ本気で心配するエヴァ。

そこに、一人の男が現れた。唐突に。突然だが、自然。まるで予定調和。初めからこうなると分かっていた様に、そこに現れた。

「イリア・スプリングフィールド……」

「何者だ、貴様」

「吸血鬼は、処分」

「（吸血鬼……私のことか？　それとも……）もう一度だけ問うぞ。

貴様は何者だ」
「吸血鬼……処分、処分……。悪は、消す」
「（立派な魔法使い……にしては様子がおかしすぎる。アレらとはまた別の団体か、それともただのカルトか……）」

ロン毛で根暗そうな男。顔は痩せ細っているが、元は美形の持ち主だったのだろう、その面影が残っている。

「ゲシュ・バルサ・ラスベルサ　来れ光精　主よ　弱き羊に明るき死を」

聞いたことのない詠唱だった。

「《明死葬送》」

男の手が光った。いや、光球が現れた。一見魔法の射手光の矢のように見えるが、違う。
エヴァは悟った。
対吸血鬼用魔術。
しかしそれは失敗した術式。誰もが夢見て溺れていった、架空の術式だった。

だがあの光はなんだ？
魔力球ではないか。いつの間にか作り出されていたと言う可能性も考えるべきだろう。
故に、対策をしようとした。そう、しようとしたのだ。だが、

「お、おい。イリア……」

ゆらゆらと、ふらふらと。

エヴァの胸に抱かれていたイリアが、立ち上がった。男の手を、男が作った魔力球を、潰した。同時に、イリアの手から煙が出る。焼かれたかの様に、或いは熔けたかのように。

「馬鹿者！　なにをしているんだお前は！」

急いでイリアを無理矢理連れ戻す。

エヴァは急いでイリアの手を見る。

その手は、皮が剥げて肉が剥き出しになっており、それはもう酷い有様だった。

「……」

男も想像外の行動だったらしく、唖然としている。

「吸血鬼が、悪って言ったよね」

怒気を孕んだ声が響いた。

その声はネギ達にも聞こえたらしく、そっちの方を見る。悪魔は未だ動けぬらしく、ただ目線だけをそっちに寄せていた。

だが悪魔は既に消えかけている。恐らく後数十秒ももたないだろう。

「吸血鬼になった者の気持ちも知らずにそういうこと言うの、良くないよ」

エヴァは困惑する。さっきまで怯えていたイリアはどこへいった？　今ここにいるイリアは、何者だ？

「吸血鬼だって元は人間。そんなことも分からず、そんなことを言

う貴方は、死ぬべきだ」

初めて聞いた、言葉だった。

イリアから発せられたと思いたくないと、ネギは思った。

――死ぬべきだ。

それは遠回しに、いや、直球で「死ね」と言っているのだから。

「くっ……教主様！」

男が大声を出す。天に向かって、虚空に向かって。

「対吸血鬼用魔術、これは完全なものだったはず！　触れただけで吸血鬼は死ぬはず！　何故死なない！　イリア・スプリングフィールド！」

何故。

そこにいたものは誰もが思った。

何故イリアが吸血鬼だと、知っている。

「ブレスレット」

「な……？」

「このブレスレットをつけてる間、ボクは普通の人間だよ。確かに吸血鬼特有の治癒能力は残るけど、力は子供のそれ……」

そう言って掌を見せる。既に皮膚ができあがっていた。

「吸血鬼は悪だ！　悪でしか存在を保てないものは悪だ！」

「ボクは、悪を成してきたつもりはないけど」

「存在が悪なのだ！　存在が悪でしかない者は悪を成すことでしか生きていけないんだ！」

宗教にはまった様な言い様だった。

「教主様の教えは正しい！　我が偉大なる『リング』は貴様等を許しはしなっ！」

男の首を掴む者が、いた。

「そこまでにしておくことだ。さもなければ、消え去る最後に貴様を石化させることにするぞ、道化」

悪魔、だった。

その光景を、誰もが疑った。あり得ない。何故だと。

「き、貴様……。悪魔のくせに、我が『リング』に直々に召喚されておいて……主に背くか！」

「私は無理矢理連れて来られたに過ぎない。『あの時』の様にな」

あの時の様に。あの、村を襲った時の様に。

「まったく、魔法使いとは腐ったことを言うものが多くて堪らんな。其処にいる子供たちの方がよっぽど善意がある。いや、悪魔である私が善意など……。いやはや、青くなったものだな」

「なにを、戯けたことを……」

「あの時の魔法使いもそうだ。あの時はメガロメセンブリアとか言ったか。次は『馬鹿げた宗教団体』。ここまで来ると、私の運は最悪だと言って違いない」

悪魔は首を横に振る。
だがそうしてる間にも悪魔は消えていく。既に足はない。

「イリア・スプリングフィールド」
「……」
「先程の魔力、しかと受け取った。君が私を使役すると言うなら、私は君に従おう」
「……そんな、こと……」
「ふむ……できるわけ、ないか。ならば、これだけでも渡しておこう」
「……」
「私を召喚するべき状況に陥った時、この紙を破れ。それで私の召喚ができる」
「なんで、ボクに……」
「成長したネギ君達と手合わせができることを望んでいるよ。では、さらばだ。《永久石化》」
「なっ！？　がぁあ！」

男は石像と化す。その姿が、村人と重なっていく。
イリアの体から流れ出る嫌な汗が止まらなかった。

「っふ、先程、理由を聞いたな。その答えを言うならば『君の様な魔法使いは好きになれそうだから』だよ、イリア・スプリングフィールド。最後に名乗りだけはしておこう。礼儀だ。『ヴィルヘルムヨーゼフ・フォンヘルマン』。覚えておくと良い」

それだけ言って、悪魔ヘルマンは空へと消えていった。そこには、雨に濡れることもなく地面に落ちた紙だけが残っていた。

悪魔との契（後書き）

あるぇー。タイトルでは悪魔と契約した風になってるなー、おかしいなー。

そんなことを感じながらも修正しない俺は恐らくめんどくさがり屋です、はい。めんどくさがり屋って方言じゃないよね？　方言じゃないことを祈る。

さて、どうしてこうなった。なんでこうなった。ホントなんでこうなった。

いつの間にか悪魔がイリアの味方みたいになってるよ～？

味方が増えたよ、やったねたえちゃん！

あ、はい自重しますすいません。

俺自身この悪魔そんなに嫌いじゃないんですよね。だからこうなったとでも言うのだろうか（棒心霊番組風。

追記：ユニークがいつの間にか２００００超えしてた。吃驚した。

吐血した。口から溢れる愛って素晴らしい。

斬魄刀と新たな敵

あの後、茶々丸の手により囚われていた魔法関係者とアスナは助けられ、イリアは気を失った。
イリアはネギが一晩世話を見ると言い、一度寮に泊らせることにした。
アスナと木乃香も勿論兄としてそれくらいするべきだと言い、寮に泊らせることを許した。

翌日は休み。朝になっても目が覚めないイリアをさすがに心配しだす。アスナに「一度寝たらどうよ？」と言われたが、兄としてそれはダメだと拒んだ。

昼ごろになってやっと起きたイリアを見て、ネギは思わず抱き付きそうになった。が、さすがに自重したが。
しかし眠気がすぐに襲ってきた。戦った日の晩に寝ないなど、無謀もいいところだったのだ。
イリアの膝の上で寝てしまい、イリアは上体を起こす以外に行動ができない。困った兄だと思う前に、ありがとうと礼を述べるイリアは、恐らく良い妹なのだろう。

ネギの頭を撫でるイリアは、腹が減ってるにも関わらず笑顔。その姿を「お婆ちゃんみたい」とアスナに言われキレたことは、特に明記するべきではないだろう。
その後木乃香がご飯を食べさせたことにより機嫌が回復したのは言うまでもない。

途中アスナと木乃香は刹那は部活だと言うので寮から出ていく。
必然、ネギとイリアは二人きりになる。

「ん……あれ、イリア？」
「んにゃ、起きた？」

二人が寮を出てから十分後、ネギがやっと目を覚ます。と言っても、本当ならもっと寝ていてもおかしくないのだが。

「あ、ごめんイリア。重かったでしょ……？」
「ううん、大丈夫だよ。ていうか、あのオコジョはどうしたの？この前から全然見てないけど」
「ああ、カモ君なら学園長の所に報告だってさ」
「ふぅん、そっか」

暫しの沈黙。
何故かネギはイリアの膝枕のままで。

「……あ、ごめん！　今退くよ！」
「う、うん。そうしてくれると嬉しいかな……」

寝ているならまだしも、起きてる人（というか兄）を膝枕するのは少し恥じらいがあるらしい。頬を指で掻きながらも、少しだけ頬を赤くした。
ある意味イリアらしくないと言えよう。

「うーっす、小娘いるかー？」
「え、いや……なんで？」
「だ、誰？」

本当、なんでこのタイミングなのだろうか。いや、そもそも何故ここなのだろうか。

死神が。

元死神と名乗った男が、部屋に無断で入ってきた。

勿論ネギは困惑。困惑の果てに杖を握って臨戦態勢。相手が単なるイリアの知り合いだったらどうするつもりなのだろうか。いや、死覇装で腰に刀を差している男が一般人なはずないのだが。

「いや、なんだ。今思ったらこっちはお前の名前知ってるけどお前俺の名前知らないよな？」

「雪鬼、でしょ。てかなんでここにいんのさ」

「それ偽名だよ。敵には本名を教えない主義なんだよ、俺は。朽木黒哉。覚えとけよ、俺の名前」

「えっと、その……。黒哉、さん？　イリアに用ですか？」

「んー、誰だ小僧」

いやなんでさ。

イリアは心の中で言った。

俺、というか作者も言いたい。なんでネギと黒哉は視線を通して火花を散らしているのかを。

フェイトの時もそうだったな～、とイリアは密かに思いだす。

「おーい！　兄貴！　イリアの姐さんを学園長室にーって……」

どこから現れたのかカモがネギの肩に現れる。それと同時に男を見つけて固まる。その姿と、腰にぶら下げた刀。それを見て、カモは固まった。

「……ま、まさか……」

「ん？　なんだ小動物」
「護廷十三隊の、現世隊……」
「ほぅ、俺達を知ってるのか」

カモは固まったまま。時間軸から外れたようにも見えるその姿もままで、怯える様な声でいった。
現世隊。
護廷十三隊という組織をご存知だろうか。死後の世界。尸魂界に存在する、虚を狩る者「死神」の組織。
本来死神にならなければ六十余年で現世へ帰れる。つまり生き返る。或いは生まれ変わるだ。
しかしその魂が無くなれば、生き返ることも普通は不可能。

だが、偶に例外が出る。

それが黒哉達の存在。現世隊。或いは現世の護廷十三隊という意味を込めた「現廷十三隊」とも呼ばれる。
死神の力を持つ者が死に、本来ならその魂は消えうせる。
しかし何故か、現世にてその魂を復元する者が現れるのだ。虚に喰われれば魂は戻らない。つまり、護廷十三隊との斬り合いや不慮の事故で死んだ場合でしか、現世に魂を留める者はいないのだ。
正直に言ってしまえば、護廷十三隊と現廷十三隊は仲が悪いのだ。
それこそ、現廷の者たちは護廷のものと斬り合って死んでいったのだから。

「まぁ、そういうことだ」

一連の説明を終えた黒哉は、イリアが淹れた紅茶を啜る。
イリアとネギはそれを興味深そうに聞いていた。当たり前だ。死後の世界が存在すると言う話だけで、とても魅力的なのだから。

「それ全て言ったことに嘘はないね？」
「当たり前だ。なんなら、読心術師でも呼べばいい」
「そうだね。後で呼ぶよ」
「……いるのかよ、読心術師」

恐らく冗談で言ったのだろう。紅茶を啜りながらジト目でイリアを見る。

「お前の処分だがな、総隊長が見送りにしてくれたよ。喜べ」
「なんでボクは処分されそうになったのかな」
「危険人物、或いは要注意人物と言っても良いな。お前のアーティファクトが問題だったんだ。そもそもの始まりは、京都だ。俺等現廷は京都に拠点を置いていてな。その京都にて、巨大武者が出たという話になった。あの霊力……というか魔力体はどう見たって斬魄刀の力だったんだよ。というか、狛村隊長の卍解そのものだったしな」
「狛村左陣のこと？」
「ああ、そうだよ。良く知ってんな……。ああ、アーティファクトの説明書か。いや、そんなことはどうでもいい。処分の見送りだが、理由については俺の報告のお陰だ。感謝しろよ？　お前が死神のことを知らない感じだったーって言ったら、危険人物では無いと判定されたんだよ」

つまり、イリアのアーティファクトが問題だった。
とある護廷で起きた事件。現廷の耳に入った、あの事件。

――斬魄刀の実体化。

アレは犯人が見つかっている。となると、今回は別の犯人がいる

のかもしれない。その犯人が、イリアかもしれない。
そう推測したのだろう。
だが死神の存在を知らない。斬魄刀は知ってるが、死神を知らない。それは矛盾だった。

そこで現廷の総隊長が下した結論が、「今回の件に死神は一切関係ない」だった。

「んで、今日来た理由を教えよう」
「……修行、かな？」
「まぁ、惜しいな。修行と言うより、実験だ」
「実験？」
「そう、実験。……『お前自身の斬魄刀を持てるかどうか』のな」

男は――、黒哉はニィッと笑う。楽しそうな笑みだった。

修行（？）をする前に学園長室に向かい、そこで悪魔の件について話た。勿論渡された紙のことも。何故この様な紙を残していったのか、実質ナニカを企んでいるかもしれないと言う疑いは晴れないと言うことも。

その後はイリアと黒哉の初対面の森で修行だ。
一回イリアは殺されかけて黒哉にブチギレたことは特に明記すべきことではないだろう。

結果的に言うなら、イリアにも斬魄刀はある。あったのだ。恐らく、霊力の高さからだろう。この場合霊圧と言うべきか……。

だが、まだ名は分からない。

そこは、一言で表すなら「無」だった。あるものと言えばミルク色の海。そこにある黒い砂浜だった。

「――なぜだ」

その声は響き渡る様にイリアへと伝わる。
とても低い、心臓が震える程の声。

「何故、君がここにいる」

イリアは振り向く。声のする方へ。
黒い砂浜を残し、全てがミルク色の海。その海に一人、立っているのもがいた。
イリアと同じ銀髪。だがその無表情さからは何もうかがえない。
白衣の男だった。

「貴方は……」
「……名か？　私の名は《■■■■》」
「え？」

まるでモザイクが掛かったように、名前だけが聞き取れなかった。
白の男の名は白で掻き消えていくようだった。

「……そうか、まだ分からんか。いや、確かに会ったばかりで名を分かりあえるなど、あり得もしない話だったな」

ショートヘアーの銀髪を、風に靡かせる。イリアの髪は、靡かない。
無言の見つめ合いが暫し続いた。
だがその時、突然に空から白い箱が落ちてきた。
「なに、これ」
「死神の力だ」
「死神の、力？」
「そう、探せ。君自身の力を。君自身の、私を」
男は上を見上げながら言う。
イリアもそれに釣られる。そして驚いた。
空が崩れているのだ。ミルク色の空は崩れ、隙間からおぞましい黒が覗いている。
「この空が完全に崩壊すると同時、君は私を使えなくなるぞ。イリア」
「どうして、ボクの名前……」
「今は探せ。それがやるべきことだ」
そう言って男はミルク色の虚空に消えていった。
白い箱が落ちてくる。一個、十個、百個。それ以上。数えるのも馬鹿になるくらいの数。
「この箱のどれかに死神の力があるってこと？　うわー、それってかなりやばくない？」
そう思いながら、一つの箱を開ける。

何もなかった。本当に、なにもなかった。

これらすべてを覗いていっても変わらない。イリアは、賭けに出た。魔力探知能力で、魔力（霊力）に違いのあるただ一つの箱を調べるのだ。

結果、すぐに見つかった。自分のすぐ目の前の箱だった。

箱を開けると、柄があった。刀の柄だった。黒の、暗闇のように黒い、柄だった。

イリアはそれを引き抜く。それと同時に、意識がさっきまでいた森の中に戻った。

黒哉はいつの間にかイリアの頭を撫でていて、一言。「良くまぁ、なんの詳細も教えてないのに斬魄刀を手にできたな」と言った。

いつの間にか地面にぺたんと座っていたイリアは腰を上げる。その手には、一本の刀。鞘に収まって尚、黒の柄は光沢を放ち、輝いていた。

んで、その鞘に収まった刀で黒哉を叩きまくった。「詳細知ってたなら教えてからあの場に送れ」と。

「これが、ボクの斬魄刀……」

「そうだ。……多分だが、お前、霊力使えるだろ」

「え、あ、うん。斬魄刀の封号解除すれば」

「は？　封号解除？　なんだそりゃ……」

死神との相違点。それが限定解除と封号解除だろう。

限定解除は元ある力を現世にて解放すること。封号解除は元ある力を更に上乗せさせること。

「そういえばその斬魄刀の名前なんなんだ？」
「むぅー、名前か……。スーパーマン？」
「その名前は可愛そうだから止めておけ。てかお前のネーミングセンスを疑うよ」

ジト目で言われた。少しショック。

「そもそも名前はつけるものじゃない。そいつが元からもってるもんだ。俺等が、それを探す側なんだよ」
「名前を探す、か……」

イリアは目を閉じた。
握ってる刀に話しかける。

――名前を教えてくれないかな。

「ほぅ……」

黒哉はただ感嘆する。なにも言っていないのに斬魄刀との対話方法を試みるとは、と。

そしてそれはなんの予兆も無く怒った。

イリアの周囲が凍った。それも綺麗な白い氷。しかし攻撃的に鋭い氷。一見、袖白雪の作り出した氷の様だ。

「……」

男は、あり得ないものを見る目で見た。

それもそうだ。斬魄刀の名も知らないのに、斬魄刀の力が解放されることなんて、ない。

ちょっとした冷たい空気がその場を覆うくらいなら分かる。だが、これ程高密度な霊力で固められた氷を出現させるなど、本当にあり得ないのだ。

イリアがそこを見ると、見慣れない光景の中に自分がいた。

凍てつく空気。暗がりの中に、一点の光を見つける。それは人の形となっていき、二人の姿が現れた。

一人は先程の長身の銀髪ショート。

もう一人は女だった。こちらも銀髪。紅い眼はイリアそのもの。

というか、成長したイリアの姿の様だった。吸血鬼となった今、イリアは成長などしないのだが。

だが、美人だったとだけ明記しておこう。

「ほぅ、早くも対話に成功、か。私が見た限り、我が主はなかなかに死神の素質があると見て良さそうだな」

「ええ、そうね」

心臓を轟かす声と、脳に直接伝わる様な声。

どうにかなってしまいそうだった。

「単刀直入に聞くよ。あなた達の名は？」

「「《■■■■》」」

「ダメだ、聞き取れない……」

まるで違う国の言葉……いや、異世界の言葉の様だった。

「まぁ、そう落胆することもあるまい」

「その内分かる時が来るわ。その時を末永く待ちましょう」

そう言いながら、二人はイリアの頭を撫でる。

「……なんかお父さんとお母さんみたいだね……」

思わず思ったことを口走ってしまった。

それを聞いた二人はきょとんとする。だがすぐに、

「ふ、ふはははは！　はははははははは！」

「ふふ……」

男は爆笑。女は込み上げてくる笑いを堪える様に笑う。

むっとするイリア。この光景を見る第三者がいるならこう思うだろう。

――本当に親子の様だ。

「まぁ、今はなんの変哲もないただの刀かもしれん」

「それでも、貴女にとって前へ進む力に、私たちはなれるはずよ」

「だから、その時まで私達を使っていくことだ」

「私たちと、貴女の心が完全に繋がるまで」

「一つ、訂正させて」

イリアは極めて真剣な顔で男の顔を見る。

「む、私に言葉にナニカ訂正するべき点があったかね？」
「使うだなんて言わないで」
「なら、何と言えばいいのかね？」
「協力する、だよ」
「……ふ、ははは。なるほど、協力か。ああ、なるほど。それは良い」
「ええ、それじゃ、お互い協力し合ってね」

右肩を男。左肩を女が優しく撫でてくれた。
その感触が気持ちよくて。周りは凍てつくように痛いのに、その肩だけはとても温かいと感じた。

しかしそれは束の間。目を閉じ、その温かさを感じていようと思ったイリアは、周りの急激な温度の上昇を感じた。

目を開けると、そこは先程までいた森の中だった。

「よぅ小娘。どうやら、対話は完全に成功したみたいだな」
「対話……」
「おう、それが斬魄刀を理解する第一歩だ。いいか？　斬魄刀はお前の一部だ。二人で一人なんかじゃない。自分の一部だと考えろ。さすれば、きっと完全に斬魄刀のことを理解できるだろう」
「二人じゃないよ」
「ん？」
「三人、だよ。黒哉」
「三人……だと？」

黒哉は訝しむ様な目でイリアを見た。

三人。どういうことだ。
斬魄刀が、二人？
まさか、これは。

――二刀一対の、斬魄刀？

馬鹿な。二刀一対の斬魄刀は尸魂界でも京楽隊長と浮竹隊長の《花天狂骨》と《双魚理》しか確認されていないはずだぞ。

思考する。ただ思考する。ただただ思考する。

「――あだっ！」

だから、鞘に収まった刀で叩かれる。

「なにすんだ小娘！」
「何回呼んでも返事がないからこうなるんだよ？　ところでボクの体に戻るにはどうすればいいのさ？」

そう。今イリアはイリアの体にいない。魂魄となって、体から出ている。つまり幽霊。

「それなら簡単だ。自分の体に入ればいいんだよ」
「え、それだけ？」
「ああ、それだけだ」

そうそう。死神の力を手に入れたからか、今イリアは死覇装を着ている。
その死覇装を着たイリアは自分の体に入る様にしてみる。幽霊って本当にすり抜けられるんだ……なんでことを思わず考える。

「ん、これで元通り？」
「ああ、そうだな。俺が少し弄っといたから、俺と同じように幽体離脱染みたことしなくても斬魄刀は取り出せる。その刀を隠せるもんはねえのか？」
「ああ、それなら……。《来れ》」

アーティファクトの付属品であるコートのみを出現させる。
それを刀に巻けばなにか長いものを持ち運んでる人にしか見えないはずだ。……第三者から言わせてもらうとかなり怪しいが。それでも剥き出しで持ち運ぶよりかは幾分マシだ。

「とりあえず俺は今日この後仕事が入ってる。なんでも、俺等と敵対してる組織が動いたって言うのでな」
「そっか。んじゃ、とりあえずまた今度」
「おう、斬魄刀との対話は毎日欠かさずすると良い。その方が、斬魄刀の心の内とかが分かってくるだろからな」

これは忠告だ。
もしこの前の尸魂界での『実体化』が起こるのはとても厄介だ。
まぁ、『正宗』の様な能力を持つ者などそういやしないのだが。

黒哉と別れてからイリアは麻帆良内をぶらぶらと散歩していた。
エヴァの元に帰って安心させるのが一番良いかと思ったが、なんとなく、本当になんとなくで散歩をすることにしたのだ。
そこで出会ったのが、まぁ、お約束と言うべきか、亜子だった。

「お、イリアちゃんや。どうしたんや？　イリアちゃんもデザートを食べに？」

「んにゃ、デザート？」

首を回して店を見る。確かにそこにはパフェやアイスクリームの写真が眩しいカフェがあった。

「いや、別に目的はないんだよ。ちょっとぶらぶら～としてただけなんだ。……ね、亜子。後でお返しするから奢ってくれないかな」

「ん、ええよ」

ということで、カフェ店内。

イリアはチョコクレープを、亜子はソフトクリームを食べている。食べている間にも亜子は話題を尽かさない。誰と誰が付き合ってるかもしれない噂や、昨日みたテレビのこと。いつも通りの会話だった。

しかし、イリアはどうしても聞きたいことがあった。しかしこれは《斬魄刀》と《自分》の問題。誰かに聞いて分かる様な問題では無い。それでも、聞きたかった。

「亜子」

「ん、なんや？」

「なかなか名前を教えてくれない人に名前を教えてもらうには、どうしたらいいのかな？」

亜子は少し考える素振りを見せてから、笑顔でイリアに言った。

「その子が名前を教えてくれない理由にもよるけど、自分は無害です～とか。或いは相手の考えに同調してあげるのがええんとちゃう？」

真っ当な答えだった。
相手を安心させる。それが友達づくりの第一歩だろう。友達になった経緯など、覚えている者も少ないが。

「なるほど……」

亜子のアドバイスには、確かに斬魄刀の名を知るきっかけがあった。
だがそれにイリアが気付くはずもない。

デザートを食べ終え、店を出た。そしてイリアは再び斬魄刀との対話を試みることにした。だから亜子とも別れることとなった。
はずだった。

「ほな、イリアちゃん。また後で――きゃ!?」
「亜子!?」

亜子の約一メートル後ろで大きな爆発。
周りにはいつしか人がいなくなっていた。

「イリア・スプリングフィールド……。ハリーハリーハロー、吸血鬼」

男だった。
この前のロン毛の男が着ている服と同じ服を着ていた。紅い六芒星が背中に書いてある黒いコート。

「イ、イリアちゃん……アレ、なんなん?」

尻もちをついて、腰も砕けたらしい。亜子は立つこともできずに、そこにへたり込む。

イリアは即座に判断する。

亜子は一般人。相手は恐らく、ロン毛男の仲間。ならば戦闘になるのは避けられない。一般人である亜子は逃がすべき。だが、「見られた」という理由で亜子が狙われる可能性もある。

なら、こちらで亜子を保護しながら戦い、逃げる。

「亜子、掴まってて」

「うわ！？　イ、イリアちゃん？」

亜子をお姫様抱っこする。身長差や体格差のせいで不格好になるが、これが一番逃げやすい体勢だと判断した。

しかし、両手がふさがった。背中に下げた斬魄刀や、アーティファクトが使えない。

いや、魔法も使えない。亜子の前で、そんなものを見せる訳にはいかない。

ただ走るだけじゃ逃げ切れない。だからと言って浮遊すれば魔法がばれる。そんなジレンマが、イリアを襲う。

「イリアちゃん……さっきの人なんなん？」

「ボクも分かんない。……とりあえず逃げなくちゃ」

「そ、そやな」

逃げなくてはいけないと言うことは亜子も把握しているらしい。

しかし男は今も尚追って……来ない。

「あれ……？　なんだ、追ってきてないじゃん」

「ふぅ……。そ、それより下ろしてくれへん？　重いやろ？」
「全然重くないよ～」
しかしだからと言って「下ろして」と頼まれたら下ろす他ない。
適当な裏路地に隠れ、亜子を下ろす。
「なぁ、イリアちゃん。ほんまに今の人見覚えないんか？」
「見覚えなんてないよ……」
しかしあの時の男と仲間だということは大抵予想がつく。
それにしてもあの爆発、一体なんだったというのだろうか。
「鬼ごっこ。お子様にはお似合いの遊びだ」
「っ……！　な……影を使ったゲート……？」
男がイリアの足元からぬるりと出てくる。
亜子は既に気絶しそうである。
「だが、これも《教主様》の教え。鬼ごっこは、大人の遊びでもあるんだよ、吸血鬼」
「仕方ない、かな……」
背中に下げていた黒コートでぐるぐる巻きにされた斬魄刀を取る。
相手の力は未知数。だが、実戦でこそ斬魄刀を知る機会。だからこそ、アーティファクトを使わず、名も知らぬ斬魄刀を使う。名を知らなくても、自分の斬魄刀だから。
「ふん、鬼ごっこはおしまいか。つまらんな。だがまぁ良い。ハリーハリーハリー、《鉄を物質交換。直ちに起爆せよ》」
「っ！？」

相手がパチンコ玉を投げた。と思った瞬間、投擲されたパチンコ玉が爆発する。
亜子の手を引っ張り、狭い裏路地で必死に爆発を避ける。

「そんな魔法見たことないけど……」
「当たり前だ。これは教主様が作り出した魔法。俺には対吸血鬼用の魔法は扱いが難しくてな。代わりにこの力を貸してもらったに過ぎない」

教主様。
何者なのか。宗教団体？　それともただの変人集団？
そんな者のトップが、果たして対吸血鬼用魔法など造ることができるのだろうか。

「イ、イリアちゃん……その剣って……、ていうか、魔法ってなんや……？」

亜子の脳は既に処理が追いついていない。
ただ目の前の光景を脳に映しているだけだった。故に、誰かにこの状況を教えてもらうしかない。

「……亜子、今から《非常識》で亜子にとって《非現実的》な光景を見せることになる。いいね」

イリアは最早亜子に隠すことは不可能だと理解する。
どうせばれてしまうのなら、イリアにはその《現実》を見せる必要がある。自分が元来、どういった世界にいるのかを。

イリアは鞘を抜く。それを亜子に「お願いできるかな」と言いな

がら渡した。亜子は顔面蒼白状態で、最早頷くしかない。

刀身は、黒く輝く柄と対照的な鋼の色だった。

「貴方が何者なのか、教えてくれないかな。この前のロン毛さんとはどんな関係？」

「これから死にゆく者に教えることなどない」

「死ぬ前にくらい教えてくれたっていいじゃない」

「……まぁ、いい。あいつは俺が信仰する御方の部下……。新入りだったんだ。だがそいつは悪魔等と言う下劣な存在を従わせ、教主様の命を果たそうとした。外道であり邪道な道であいつはお前を処分しようとした」

「仲間だったって解釈でいいのかな」

「仲間？　あれが仲間なわけないだろう。もういい、お前はさっさと逝け。ハリーハリーハリー《鉄を物質交換。直ちに起爆せよ》」

またパチンコ玉を投擲してくる。だがその速度は最早銃撃と言っても良い。

避ける訳にはいかない。後ろには亜子がいるから。ならば、と最大限の対物魔法障壁を最大展開する。

パチンコ玉は障壁に当たり、爆破する。

「脇がガラ空きだぞ、吸血鬼」

「うぐ……」

ずどん、と重い音を立て、男の拳がイリアの脇腹を抉る。

嫌な音がした。悪くて肋骨が折れたか……。良くても罅が入ったに違いない。

「イリアちゃん！？」

その一連の光景を見た亜子は、一瞬目を閉じる。だってイリアが吐血したから。亜子は、血が嫌いだ。

しかしすぐに目を開けイリアの名を呼ぶ。目を開けたそこにイリアの姿は無く、横を見ると、壁にめり込まれたイリアがいた。

「ぁ……ああ……」

「う、ぐ……」

「ふん、やはり教主様の言った通り。吸血鬼としては未熟か」

ブレスレットを外そうか。

しかし躊躇がある。亜子の前で吸血鬼の姿を見せたくないと。

骨は未だ治らない。切傷などよりも、骨折は治りが遅くなるのだ。

イリアは口を高速で動かす。詠唱。それを、できる限りの速度で呟いていく。

「《雷之闇術》！」

詠唱を終え、腕を振るう。

その腕の動きに合わせ、闇の雷で構成された薙刀が相手を切断しようと迫る。

が、

「魔法無効化薬」

「ぇ……」

男は着ていたコートの内ポケットから試験管の様な物を取り出す。

その中には不思議な色をした液体。その試験管を、雷之闇術に向かって放り投げた。

試験官が雷之闇術に当たる。それと同時、雷之闇術はかき消された。

「な、なんで……」

「これは試作でな。まだ完成してないんだ。だがそれでも十分だな」

これが、あの時の。悪魔襲撃事件の黒幕だったこの男たちの目的。魔法無効化薬の制作。

（やっぱり接近戦で行くしかない、か）

今のイリアは常時死神の様なものだ。封号解除しなくても霊力を使えるため、瞬歩ができる。鬼道は未だ未熟故、使えないのだが。

「っ！」

「はぁッ！」

男の後ろを取ったイリアは短く声を上げながら刀を振るう。

男はそれをコートの中に隠していた鋏で受け止めた。一見普通の鋏だった。男はその鋏でイリアの刀を弾きとばし、唱えた。

「ハリーハリーハリー、《鉄を増大、直ちに剣と成れ》」

鋏が大きさを変え、二本の剣と成る。二つの刃を外し、双剣の様に構えた。

そしてその双剣と化した鋏がイリアを襲う。

振り上げられた男の右手の剣が、袈裟懸け切りに振り下ろされる。

しかしそれはイリアの刀に因って受け止められる。

だが男は笑う。

「腹がガラ空きだ」
「ぅ、あ……かはっ……」

なんの力もない刀はイリアの剣の腕前がもろに剥き出しになる。刀を扱い始めて未だ一年も経たないイリアに、剣術などない。これまでのは全て、斬魄刀の力がフォローしてくれていただけなのだ。

「イ、イリアちゃん……？」

イリアは倒れ込む。勿論この程度の傷なら、すぐ治るはずだった。肋骨も既に治っている。

しかし、吸血鬼となって未だ数カ月も経たないイリアが、ここまで吸血鬼の力を酷使するのは、危険だった。

ガタが来た、という表現が一番的を射ているだろう。

「ふん、他愛もない」
「そこまでにしておいてくれるかな」
「っ？　誰だ、お前」

亜子も男も、声のする方を見る。

裏路地の更に奥。そこに立っていたのは白い少年。フェイト・アーウェルンクスだった。

斬魄刀と新たな敵（後書き）

イリアと言ったら氷雪系と相場が決まってきた気がすんぞ。

まぁいいか。得意な属性闇と氷だし。

最近エヴァの出番無くね？って思ってたり。

まぁいいさ。後でおまけ的な感じに百合百合してやる。

運営から注意が来そうなくらいにベットベトな百合百合を書いてやる。

なぜなら俺、ノクターン行けないから。だって１４歳だし！

目的（前書き）

あるユーザー様が二つ名メーカーというものを使っていた。だから俺もやってみた。

イリア＝『漆黒妖花（ダークネスダークネス）』
闇系魔法が得意で更に周りの者を魅せる妖の如く花。
合ってると言えば合ってる？

朽木　黒哉＝『残虐暴動（ティーンエイジスクランブル）』
仕事時の残虐さは正しくこの名に相応しい。
だけど暴動って……。

フェイト・アーウェルンクス＝『木製の雷帝（ベルベットリミット）』
最早何一つ合ってない気がするゼヨ。

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル＝『溶解念慮（アンバランスリキッド）』
逆に凍らす側の人だと思われます。得意魔法的に。

ちなみに俺は『断絶奇禍（ランダムトリック）』でした。

目的

白い少年と黒い青年が睨みあう。
亜子はあたふたとイリアのことを見る。今も尚血が流れてくる。
その光景だけで、失神しそうだった。元より血が嫌いな亜子。ちょっとした血を見ただけで気絶するほどだ。流血を見ながら意識を保っているのは素晴らしいと言えよう。

「……」
「……」

男とフェイトはただただ睨みあう。
フェイトは目線で暗に言う。

――僕のものに手を出すのは許さない。

男も目線で暗に言う。

――俺の仕事の邪魔は許さない。

しかしその拮抗状態もすぐ解かれた。
最初に動いたのは男。
鋏だった双剣を投擲。更にパチンコ玉も一気に数個投擲。

「ハリーハリーハリー、《鉄を物質交換。直ちに爆破せよ》」

先程より凄まじい爆音が響く。
裏路地の外。其処には人がいなかった。人払いだ。フェイトが麻帆良内での魔法露見はよろしくない、と結界を張ったのだ。

男はニヤリと笑う。

「所詮はガキだな。さて、さっさと吸血鬼の処分を――っつ！？」

男がイリアの方へ歩もうとした時、腹部に激痛が走った。

腹を見る。岩だった。岩が、刺さっていた。

「君がなにを目的でイリアを襲ったのかは知らないけど、イリアは僕のものだ。僕のものに手を出すのは許されない」

無表情に言う。無感情に言う。

だが、今この場面ではなによりも心強い少年だった。

亜子は未だ混乱状態だが。

「ふん、おいフェイト。誰が私のイリアをお前などにくれてやったって？」

今度はフェイトと逆の方向から声が聞こえた。イリアの正式なマスター。エヴァだった。

その光景に、より一層混乱する亜子。なんでいつも居眠りしてる同級生がここに？　なんでこんな男の子が？

しかし今この状況で最も混乱している主な理由。

――なんでイリアちゃんは血を流してるん？

これだった。イリアがナニカ悪いことをしたのか。なにもしていないではないか。そんな思考が亜子の状況把握能力を低下させていた。

「エヴァンジェリンに謎の少年、か。ここは一度、引き下がったほうが良さそうだな。ハリーハリーハリー、《魔力を物質変換。直ちに煙と成り我が周囲を拒絶せよ》」

男の魔力が突如煙となり、男を包んだ。

煙が晴れるが、そこに男の姿はなかった。

「逃げられた様だね。今の煙、魔力探知阻害が施されてた」

「追跡はやむを得んな。和泉亜子、そこを退け。イリアの治療だ。……恐らくガタが来始めたな。治癒能力が低下している。一度ログハウスに運ぶが……。お前はどうせついてくるんだろうが、和泉亜子。貴様はどうする」

「ぇ、あ、ウチ？」

亜子は放心状態だった。イリアが血を流し、突然同級生と見ず知らずの少年が助けてくれたのだ。ただでさえ理解能力が処理しきれていないと言うのに、この状況はあまりにも酷だった。

だが、

「ウチもついていく。イリアちゃんには聞きたいことといっぱいあるし」

亜子の眼には、なにかを決心した様な光が灯っていた。

ログハウス内で治療を終え、エヴァは手を洗う。

（はぁ……。最近、イリアが無茶をしすぎているな）

つい最近もこの様なことがあったのを思い出す。イリアは最近連敗続きだ。

黒哉に負け、悪魔に気押され、次は謎の組織により命を狙われこの様。

どうしたものか、と思わず溜息が出る。

「ごめんね、エヴァにゃん。最近こんなのばかりで……」

いつの間に起きていたのか、エヴァのベッドで寝ているイリアが話しかけてきた。

「別に構わん。お前は私の従者だからな。世話が焼ける我が子程可愛いものはないんだよ」

ぶっきら棒に言う。

だがそれが紛れもない本心だった。

「うん、ありがと」

そう言うものの、イリアは寂しげに、嫌、悲しげに窓の外を見る。

「……」

「ん、エヴァにゃん？」

エヴァがイリアに後ろから抱きついた。

イリアの髪の毛が頬に触れ、こそばゆい。

「いつものお前は、どこにいったんだ？」

抱きつきながらそんなことを言う。
イリアはエヴァの温もりを感じながら、また少し自虐的に言った。
「最近負け続きだからさ……。なんか、なかなか元気でなくてさー」
抱きついているエヴァの腕を握りながら、イリアは言う。
そんなイリアの横顔を眺める。少しまつ毛が長いと思った。
「おや、エヴァンジェリンは同性愛の持ち主だったのかい？」
「ええなぁ、ウチもイリアちゃんに抱きつきたいわ～」
「……貴女も同性愛の持ち主か……」
このしんみりした空気の中、どうしてこうも堂々と部屋に入ってこれるのだろうか。
部屋の入口からした声は二人。だがそこに立っているのは三人だった。
ネギだ。
さっきからフェイトに対して警戒心を振りまいている。
エヴァが亜子に頼んで連れてきたのだが、やはり間違いだったかと思う。
ネギは修学旅行の時、フェイトに殴りかかっていた。それはイリアを誘拐し、更に襲っていたからと勘違いしたから（勘違いもなにも、イリアを誘拐したのは本当の様なものなのだが）。その勘違いが解かれていなかったのが問題だった。
故に今、外にはネギの動きを一度封じるために使った岩の欠片が残っている。

「あれ、お兄ちゃん」
「イリア、コレどういうこと？」

そう言いながらフェイトに杖を向けて「コレ」を示す。

「杖を人に向けるのは、危険だと教わらなかったのかい？」
「にゃはは……。ごめんねお兄ちゃん。フェイトはボク様のボーイフレンドなんだよ」
「冗談、だよね？」
「あはは……」

イリアにとって、この関係が冗談だった場合の方がとても嫌だ。
だから苦笑い。

「僕は許さないよ、こんな奴と恋人関係なんて」
「これはイリアの問題だ。イリアの問題に、君の許可が必要なのかい？」
「当たり前だろ、イリアは僕の妹なんだから」

いつの間にやらネギとフェイトの間で火花が散っていた。というか、イリアからするとこんなネギ見たこと無い。気の所為かこめかみに浮かんだ青筋がぴくぴくとしている。フェイトも何やら怒気を孕んだオーラを出している。言葉で表すならゴゴゴゴゴである。
エヴァは「またか……」と呆れた目でそれを見ていた。先程も、こんなやり取りを見たからだ。フェイトとネギが話をすれば、二言目には喧嘩に発展する。
当たり前と言えば、当たり前なのだが。

「エヴァにゃーん」
「あ？　なんっ……だ！？」

突然エヴァを押し倒すイリア。
ネギも亜子も吃驚。フェイトでさえ状況把握ができないという顔になっている。
そして、

「エヴァにゃんをいただきます」
「なにを言って！　……んんっ！？」
「「「っ！？」」」

いただきます。エヴァの唇を、いただきます。
最早イリアの行動に唖然とする三人。いや、四人。一匹は今チャチャゼロと共にワインを飲んでいる。

「ぷはっ。……なにをしているんだイリア！　突然！　キ、キキ、キスとか！！」
「いや～、この場を適当に和まそうとね？」

逆に修羅場になりそうである。主にフェイトが暴れそうである。
いや、彼の性格上それはないだろうが。

「イリアちゃん、ウチともキスせえへん？」
「ん～、仮契約ならいいけど？」

その言葉にまた空気が重くなった。

「ああ、そうだった。……亜子、魔法の話は……」
「聞いた。皆から」
「そっか。それじゃあ、亜子は今どうしたい？」
「ウチは……」

少し躊躇ったように俯いた。が、それも束の間。今度は決心のついた顔でイリアを見る。

「ウチはイリアちゃんと一緒にいたい。本当の意味で、隣にいられる存在でいたい」

告白ですかと問われれば思わず頷いてしまいそうなセリフだった。

「……それでいいんだね？」

「うん」

「それじゃ、エヴァにゃん、お願いできるかな」

「ああ」

短く答えてから、エヴァは床に魔法陣を描いていく。

なぜならイリアは仮契約の魔法陣を知らないから。

「ねえ、イリア」

「ん？　どしたのお兄ちゃん」

「本当にいいの……？」

「……亜子がこっちにいたいっていうんだもん。ボクはそれを尊重してあげたいかな」

「そうじゃなくて……」

「んにゃ？」

ネギが言いたいのはフェイトのことだ。

本当に恋人同士の仲なのか。恋人同士だったとして、本当にそれでいいのか。

なんせフェイトは木乃香誘拐事件に携わった関係者。本来なら、

西に捕まっても仕方ない存在なのだ。

「あー、フェイトなら大丈夫だよ。ボク様が保証する。それに、もしフェイトがなにかしそうになったらちゃんとボクが止めるから。だからお兄ちゃんは安心して。ね？」

「……うん」

それでやっとネギからの警戒心が消えた。

フェイトもやっとか、とでもいうかのように肩を落とす。

「ほら、仮契約の準備はできたぞ」

「ん、ありがとエヴァにゃん。それじゃ、亜子」

「うん、ウチはいつもでええで」

床に描かれた魔法陣の上に二人が乗る。

イリアの身長に合わせ、亜子が腰を曲げる。イリアはその亜子の頬に手を宛がって、唇を重ねた。

部屋の外にまで漏れる程の光が部屋を支配した。

光が収まる頃にはカードが出現しており、イリアと亜子の唇も離れ――。

「んーんー！」

離れていなかった。

亜子が強制的に唇を重ねたままにする。イリアは息苦しい様で、抗議の声を上げている。

「おい和泉亜子。そこまでにしておけ、私の従者を殺す気か……？」

「んー、じゅぱじゅぱ」
「ちょ！　なにディープな方をしているのだ!?　私ですら今だ舌を入れたことないのに!?」
「僕はもう舌を入れたけどね」
「いつの間に……」
「んんんーー！　んー……ん……」がくっ。
「イリア!?」

それからイリアの目が覚めたのは約一時間後のことだったらしい。

茶々丸の淹れた紅茶を飲みながら、ネギとフェイトはまた喧嘩をしていた。

「まったく、なんでもかんでもミルクミルクって……。まるで子供の様だ」
「ミルクティーは紅茶の完璧な飲み方だよ」
「僕は圧倒的に珈琲党だからね。そんなものを飲むなら、僕はコーヒーを飲むよ。現に、コーヒーを僕は日に七回は飲む」
「へぇ、あんな無粋な泥酔を良く日に七回も胃に流し込めるね」
「コーヒーは頭の活性化につながる。それに、ミルクティーよりは良いと思うよ。僕も、紅茶は飲むけどね。レモンティーをアイスでだけど」
「レモン？　アイス？　冗談だろ？　あり得ないね。レモンは紅茶の風味を壊す。君、舌は大丈夫？」
「驚いたね。味覚馬鹿の英国人（ブリティッシュ）に舌の心配をされるなんて」
「君、僕のこと個人的に嫌いなの？　喧嘩売ってるの？　いいよ？　やるよ？　被害が出ない限りでならだけど」

なんというか、うん。喧嘩をするほど仲が良いということにして

おこう。
そんな二人の喧嘩を止めるのは、其処には一人しかいない。他の人は皆興味なさそうに自分の紅茶を啜っているからだ。
「もう、ダメだよ二人とも～。紅茶は褒め合いながら飲むものだよ？」
褒め合いながら飲むものなのかは疑問だ。
「……」
「……」
二人は視線を逸らす。
それと同時、ログハウスのドアが叩かれた。
「はいはーい、今行くよー」
「イリアさん、ここは私が……」
「んにゃ、茶々丸はいいよ。ボクが行くから」
茶々丸を無理矢理座らせ、ログハウスのドアを開ける。
「あれ、小太郎？」
「いやー、ここの学園長に聞いたらお前はエヴァンジェリンとこにおる言うてたんでな。お前にお願いしに来たんや」
小太郎は耳を隠す帽子を被りながら悠長に話していく。
このログハウス内の空気を知らないからこそだろう。
「お願い？」
「そうや、お願いや」

イリアは可愛らしく小首を傾げる。
それと同時、イリアの顔面目掛けて拳が――。
――パシィン、という音を立てて受け止められた。
「……急になにさ、小太郎」
「嫌やなぁ。俺の拳を受け止める同年齢なんてそうそういないで？　そいつに会ったからには何をするか、決まっとるやないか」
「決闘ならお断り――」
「俺と修行してくれへんか？」
「……へ？」

イリアは最初、決闘の申し込みかと思っていた。
このバトル脳の子供ならそう来るだろうと。
だが考えてほしい。小太郎はフェミニストなのだ。恐ろしい程の。
そんな彼が女を相手に決闘を申し込む筈がないのだ。

「あのネギを倒した時使ってた流派、あれを会得したいんや！」

小太郎が言っているのは恐らくネギの試験の時の話。そしてその時使った流派と言えば、というか、イリアが持っている流派と言えば、《黒鷺流》しかない。

「え、ええと……」

思わずエヴァを見る。

「別にいいんじゃないか？　丁度お前の修行にもなって一石二鳥ではないか」

確かにここ最近連敗続きのイリアには修行は必要だろ。
だがそれ以上に、今は斬魄刀の名を知りたいのだ。
彼等の名を知らないのは、まるで親の名を知らぬ様で落ち着かない。

「それに、俺だけやないで」
「え？」
「やっほ、イリア」
「ウチ等も来たで～」

小太郎の後ろには、アスナや木乃香といった魔法関係者がずらりと並んでいた。

別荘内。
そこでは、小太郎とイリアの二人の模擬戦が繰り広げられていた。
だが力の差は圧倒的。イリアの《黒鷺流》の連携は、小太郎の我流を圧倒的に上回っていた。

「さすがイリアだな。犬っころくらいになら圧倒的か」
「当たり前じゃないか。あそこにいる薬味はどうか知らないけど」

フェイトとエヴァはその模擬戦を傍観。
ネギは魔法関係者に《魔法の射手》を教えている所だ。

「ところで、アレはいいのかい？」
「あ？　なにがだ？」
「あそこにいる薬味、一般人に魔法を教えているけど」

「いっそのこと全員にばらしちまえばいいんだ」
「冷たいね」
「お前ほどではないさ」

そんな会話をしている間にも小太郎とイリアは舞い続ける。

「我流、黒狼双掌打！」
「黒鷺流、極炎掌打！」

小太郎が放つ二つの掌の攻撃は、軽くイリアの炎に包まれた片手の掌打により防がれる。
イリアの使う《黒鷺流》は魔法を所々挟むため、並の練習ではそう身に付くものではない。それに魔力では無く気を使う小太郎には苦難だらけだ。

「……貴女の別荘の地形が変わっていってるけどいいのかい？」

さっきからイリアと小太郎のぶつかり合いで、主にイリアが崖を崩していっている。

「あまり良くない。が、イリアなら問題ない」
「……やっぱり同性あ「違うわぁあ！」……そう？　どっからどう見ても同性あぃ「それ以上言ったらマジで殺すぞ貴様！」……」

心の中で「この人を弄るのは楽しい」と思い始めるフェイトであった。

そんな話をしている間にも、イリアと小太郎の模擬戦は終わった。
模擬戦をした理由は一つ。

小太郎には問題がある。それこそ先程挙げた、魔力では無く気を使うというところ。気で補えば良いのだが、やはり魔力を使うのと違い、動きや体力消費に負担が掛かる。

ならばと、イリアは一度模擬戦をすることにしたのだ。それで小太郎の弱点を見つけ、その弱点を補うことができる技を覚えさせる。それも、小太郎が簡単に身に付けられるように、魔力を使わない技を覚えさせるのだ。

「まずだけど、小太郎はやっぱり女を前にするとダメだよね。どこまでフェミニストなのさ」

「仕方ないやんけ、そういう性格なんやから……」

エヴァ達の方に歩きながら二人は話を進めていく。

「小太郎はさ、もっとカウンターを使った方がいいと思うよ」

「なんや？　《あの時》みたいに鳩尾に肘入れまくれ言うんか？」

「いや、そうは言わないけどさ……。でも、今の小太郎なら多分、相手に流れを掴まれるともう巻き返せなくなるよ。影分身の密度も高いから、そういうのを応用して行こうよ。あのヘルマンの時も使ってたじゃん」

確かに、小太郎は影分身で強引に自分の流れのままヘルマンを倒した。

だが相手に流れを掴まれれば、最後。打開策がないのだ。

「そんな小太郎に進めるのは、黒鷺流の中心でもある『鳩打ち』だよね～」

「なんや、やっぱ鳩尾狙いの技か。確かに俺、そういう技持っとらんけど……」

自分で修行を頼んでおいて我儘な小太郎である。

「《黒鷺流》は基本的にカウンター技なんだよ～。おじさんが護身用にって習ってたくらいだからね。ボク様のも護身用。それも、普通の相手なら一撃で気絶。悪ければ死んじゃうね」

「えげつな……」

「それにカウンターは戦闘のエッセンスだよ。相手から流れを奪うのに最も大事で最も大切で最も重要な要素。更に言えば、カウンターからの流れる様なコンボこそ、《黒鷺流》の本質なんだから」

つまり相手の流れを奪うことに特化しているということだ。

黒鷺流はイリアが言った通り護身用の技。相手に襲われるのが大前提の流派。

「ま、なんでもええ。イリアが言うんなら、俺はそれに従うまでや」

「ああ、それが良いだろうな。犬ころには丁度良い」

「うぉ！？　で、出た……」

「出たも何も、私は最初からいるのだが……」

それ程イリアとの時間が大切だったのだろう。

小太郎の目の前から聞こえた声の主は口調から分かる通りエヴァ。

フェイトは何故かイリアの頭を撫でていた。

イリアはイリアで、それを普通に受け止めている。いや何故だ。

これでは本当に恋人同士……いや、兄妹同然。ネギの立場滅多刺しだ。

そんなネギは、《魔法の射手》を教え終わり一息。茶々丸が持ってきてくれた紅茶を飲んでのんびりしていたりする。

別荘内で夜を迎えた。そうなれば必然的に皆は眠りに就く。
そんな中、寝ずにテーブルに着く人影が三人。エヴァ、イリア、フェイト。茶々丸もいるが、エヴァの後ろで待機しているだけのため、会話には参加していない。

「やれやれ、死神の登場ときたか」
「死神は私でも知っている。だが、まさか斬魄刀を扱う者だとまでは、知識が及ばなかったな……。それからイリアを狙う、《リング》という組織。いや、リングが組織名かは未だ不明慮。あいつらの言う《教主様》が誰なのかも不明。苦難続きだな……」
「うん。それに、フェイトが言った死神の方もまだ不明瞭だよ。実際こちらに味方をしているのは黒哉だけ。ううん。黒哉だって、こちらの動向を探るためのスパイかもしれない」

フェイトとエヴァはワインを。イリアは紅茶を啜りながら、今の状況を整理して行く。
本来なら、フェイトの立場もなかなかに難しい。本来なら、敵である立場なのだから。

「それに、アレはもしかすると錬金術に連なる力じゃないかな？」
「……あのハリーハリー煩かった男かい？」
「錬金術……あり得るかもしれんな。だが問題なのは、錬金術は魔術面から消え失せ科学的方向へ行ってしまった、云わば魔術から消え失せ、忘れ去られた魔術だ。……いや、大した問題では無い、か」
「どういうこと？」
「忘れたか？　対吸血鬼用魔術を使おうとしていた男のことを」
「ぁ……」
「それを完成させている可能性も、否めない。対吸血鬼用魔術（キルブラッド・マジック）も錬金術（ルケミー）

金術も、忘れ去られた術。共通点がある」

エヴァはワインを一気に飲みほした。

「ならば、先手必勝」

エヴァが言う。

「忘れ去られた術式、術印、魔法、魔術。その全てを洗いざらい調べ、相手に備える」

フェイトが続ける。

「勿論、ボク様も対抗できるだけの力を手に入れる。そして最終的には“吸血鬼であるボク”を襲う理由を吐かせる」

イリアが締める。

確かに、これまで襲ってきた全ての者は“イリア”ではなく“吸血鬼であるイリア”を襲ってきた。

なら吸血鬼の抹殺という良くある宗教団体のように思える。だが、ヘルマン事件の時に襲ってきた男。彼はエヴァに目もくれず、イリアのみを消そうとしていたように見える。

目的は、一体なんだ？

目的（後書き）

対吸血鬼魔術をキルブラッド・マジックとか言ったけど、実際なんて言うんだろう。

そんなことを気にしながらの投稿。
最近ストック貯めをしていない……。ということでストックを貯めていこうと思う。故に更新がまた送れる。

そんな俺だけどどうか許してぇ！

※タイピングミス修正しました。

麻帆良祭前？

守りたい物。一人に一個はあるそんな大事な心（もの）。
貴方は……貴女は何を護りたいのですか。

そんな、誰に話しかけたかもわからない言葉が自分が口走った様な気がした。それが目覚まし代わりなんていう、ちょっと不思議な体験。
今日もいつも通りの日が始まる。

「オッス、イリア。ネギ」
「おー、おはよ小太郎」
「おはよう小太郎君」

珍しくネギ達と合流したイリアは、そのままネギと職員室に向かっていた。そんな時、話しかけた来たのが小太郎だった。
小太郎は制服を着ていて、正式に麻帆良の生徒になったことを示していた。

そんな中、異常が起こった。

――ズシン。

後ろから聞こえた、重い足音。
ネギと小太郎は振り向く。イリアも、一テンポ送れて振り向く。

「え……」

「な、なんや！？」
「おー、良く出来てんなぁ」
「そだねー。完成度たっかーい」

四者一様……ではない。ネギと小太郎は気付かない。重い足音の正体である怪物の正体が麻帆良大学生の作ったものなのだと。
カモとイリアは既に気付いており、感嘆の声。
ネギと共に来たアスナ達、小太郎を居候させている那波や夏美達は相変わらずのクオリティの凄さに「わーすごーい」などという棒読み的感嘆の声を出した。

「よ、良く出来てるって、これ……」
「いや、着ぐるみでしょ？」
「着ぐるみってレベルじゃないやろコレ！？」

その怪物の様にデカイ、中の人どうやって歩いてんの的疑問すら残るデカイ着ぐるみ「はいごめんよー」などと外見に似合わぬ口調と声色でネギ達の前を通り過ぎていく。

何故こんな着ぐるみなんかが歩き回っているのか、と言えば。

「な、なんやこれ」
「あれ、小太郎知らないの？　もうすぐ麻帆良祭だよ」
「麻帆良祭……ああ！　思い出した！　確かに職員会議でそんなことを……」

いやお兄ちゃん、忘れちゃダメだよ……。
そんなつぶやきはネギには聞こえなかったらしく、ただただ、目の前にあるあり得ない光景を見た。

それは麻帆良の門。しかし、つい先日まではなかった筈の門。
当たり前だ。
これも、遂数日の間に造られたのだから。それも、麻帆良大学生のみの力で。

「おや、丁度良い所に見つけたネ」

そんな時、後ろから聞こえた声がした。

「ちょっとお話良いかな。ネギ先生?」

超鈴音だった。

超とネギは屋上にいた。
そこにはネギの他にも一人の男がいた。金髪の男。

「やぁ、ネギ君。はじめまして」
「あ、貴方は?」
「超の協力者。すまないけど、今はそうとしか言えないよ」
「はぁ……」
「さて、本題ネ。ネギ先生、過去を変えたいと、或いは、妹を消したいと思わないか?」
「なっ……?」

ネギは絶句した。
一体なにを言っているのだろうと、理解できなかった。

「ネギ君。君は妹であるイリア・スプリングフィールドを怨んでいるんじゃないかい？」
「そ、そんなこと……」
「怨んではいなくとも、恨んではいるよね？」
「……」ネギは答えない。
「村の事件。何故イリアが助かったのか、謎で仕方なかった。その謎は、もう解かれた筈だよ？」
「……」
「あの固有結界。そして投影魔術」
「っ……。そんなの、知りません」
「へぇ、知らないんだ。まぁいいけどさ。でもさ、その力が使えるなら、村はあそこまで被害が出なかったんじゃないかって、思わないかい？　ああ、君が思っていようと思っていなかろうとどうでもいいんだけどさ」
「そもそもイリア先生は、いるはずがない存在だったネ。所謂イレギュラー。分かるかいネギ先生」

最早二人の話が分からない。
イリアはいなかったはずの存在？
僕がイリアを恨んでいる……？

一体全体、なんでこんな話に……？

「それに、イリア・スプリングフィールドは、吸血鬼なんだよ？」
「っ！？」

何故だ。
何故コイツが知っている。
ネギの思考が間に合わない。

質問ばかりが溢れ、答えが間に合わない。

「吸血鬼は魔法使いからすれば悪だ！　これは変えられない事実なんだよネギ君？　現実なんだよ、真実なんだよ。分かってるのかい？　君は立派な魔法使いを目指しているはずだ！　そんな君が、吸血鬼を許容するのかい？
ましてや、英雄の息子である君が！？」

嫌な汗が噴き出る。
息が不安定になる。
なんで、こんなことに……。

その後ネギがクラスに帰ってきたのだが……。とんでもないことになっていた。
イリアは何故か裸で白いニーソを穿かされた上に、どういう原理かしっぽが生え、獣耳が生えていた。勿論クラスの皆の手に因って。

その獣耳としっぽが相俟って、最早小動物化したイリアの「にゃあああああああ！」という悲鳴は、麻帆良中を駆け巡ったそうだ。
しかもそのせいで新田までクラスに入ってくる始末。
その日のイリアは一日中「お嫁に行けない、お嫁に行けない」と呟いていたそうだ。

イリアからすれば、何事も問題は無く（？）終わった一日。だがネギからすると、とんでもない人物と遭遇してしまった日でもあった。
ネギはずっと考え事ばかり。その日の修行も身が入らず、エヴァ

に踏まれ、イリアに心配される始末だった。

その翌日。

ホームルームすら、ボーっとしているネギの代わりにイリアが麻帆良祭での出し物を再び決めることとなった。そう、再び。つまり昨日のイリアの全裸獣耳尻尾白ニーソの格好は出し物を決める際のクラスの暴走によるものなのだ。

候補として挙げられた提案が、これだ。

ドキ☆女だらけの水着大会・カフェ（ポロリもあるよ、とかなんとか）。

女だらけの泥んこレスリング大会喫茶。

ネコミミラゾクバー。

最終的には那波の「ノーパン喫茶」までもが候補として残っていた。

いや何故だ。

更に最後の最後で亜子の「狐っ子カフェ」なんていうマニアックなものまで……。

「このクラス……どうなっちゃうの……」

一人収拾がつかなくなったクラスをどうしようと考えるイリア。

しかもそんな中、いきなりネギをノーパンにさせろという発言が……。

さすがのネギも聞き捨てならず、考え事を中断。

必死に逃げまくった結果、何故かイリアに捕まり、脱がされそう

になり……。
そこで丁度新田が入ってきたお陰で収拾がついた。
「はぁ……」
「もうお兄ちゃん、どうしたのさ」
その日の午後。職員室で紅茶を飲みながらまた溜息を吐くネギ。
イリアも、もう何回目かも分からない質問をする。が、
「なんでもない。うん、なんでもないよ」
いつもこれで返される。
器用にもこの受け答えを数えているイリア曰くこれで三七回目だそうだ。
超の誘いというものがダメだったのだ。
味方に来ないか、と誘われた。
超の計画の全貌は知らないが、ネギはすぐに断った。イリアを消されるかもしれない。それが、ネギにとって一番恐ろしいことなのだ。
麻帆良に来てやっと和解できた妹。そんな妹を、消されては堪ったものじゃない。
その日、イリアとネギは四葉五月に連れられ中華屋台「超包子」で甘酒を飲んでしまうのだった。
丁度超包子オーナーである超がいなかったのは、ネギにとって何よりの幸だった。
「おや、ネギ先生にイリア先生ではありませんか。朝は災難でした

なぁ」
「や、イリアちゃん」

そこに新田と瀬流彦。
更に途中から高畑まで加わり、ネギが「僕ダメ魔法使いなんです～」発言をしたりと、もうハチャメチャだった。
イリアなんかは瀬流彦の膝で寝てしまうし……。酔いとは恐ろしいものである。

イリアは帰りに瀬流彦がエヴァ邸に連れていったが、ネギの方は特に酔いが酷かった。故に、超包子の屋台で休ませることとなった。

エヴァ邸に帰った後も、イリアの暴走は止まらず、エヴァに抱きつき舐めまわしたりした後にやっと寝てくれたのであった。

そんな日の後日。クラスではイリアが今度こそ頑張って候補を絞っていき、最終的に残ったものはお化け屋敷だった。

ただ一つ、問題があった。
この教室にいる、幽霊の存在である。

相川さよ。なんとなくで気付いたイリアだったが、吸血鬼となってからはっきり見える様になっていたりする。同族というものなのだろうか。
時折、怖がらせようとしているのか「う、恨めしや～！」などと言っているのが微笑ましい。まぁ、当然の如く誰も気づかないのだが。

出し物がお化け屋敷と決まったは良いものの、まずはステージを作らなくてはいけない。ここは麻帆良。ちゃっちい出し物なんぞ、在って無い様なものなのだ。

故にここは超の技術提供により、教室の大改造……。なのだが、やはりまずは壁などの外装から造ることとなった。

「うに、眠い……」

「なんならウチの胸の中で寝てもええんやで？」

「……何されるか分からないから良い……」

悪寒がしたので丁重に断った。

しかし、イリアが何故眠いのか。酒のせいなどではない。そもそも、とっくに酔いなど覚めている。なら何故？　当然、答えは今が夜だからだ。

教師としては皆を帰したいのだが、クラスの皆の必死の呼びかけにより、特別に許しを得たのだ。

勿論、イリアからの許可なので、新田などに見つかれば怒られるのは当たり前。こそこそと作業するしかない。

しかしこの作業中に幽霊さよが大暴走。

のどかのアーティファクトによってさよの心を読みとったところ、おぞましい絵と共に「ともだち……宮崎さんともだち……」などと勘違いをしても仕方のないことが描かれていたのだ。

そんなこんな「悪霊ですー！」とのどかが騒ぐ。そしたら皆が皆騒ぎだす。

どうにかしなくてはという気持ちばかりが先走り、ポルターガイスト現象が発動。机と椅子が宙に浮く。

更に窓に「ごかいデス」などと言う「これってわざとでしょ？」と言いたくなるような血文字が描かれて、更に更に祐奈に乗り移る

始末。
退魔専門の神鳴流である刹那が出動する事態となった。

勿論この事態を収拾したのが、さよを見ることができる吸血鬼二人組……と言いたいところだが、エヴァは当然の如く「めんどくさい」と言って教室の隅で寝ている。故にイリアがこの場を収拾したのであった。
しかも感情の問題なのか。イリアが話しかけると同時、皆にもさよが見える様になった。意外な程に可愛い容姿に皆吃驚。

「ありがとうございました、イリア先生！」
「ううん、ボクは大したことしてないよ～」

そんな会話を境にさよが皆の目から消えた。

「「「……成仏したみたいだね」」」

いや、気配が消えうせただけである。
何故か皆の見えないところでさよがイリアをうっとり見てたのは秘密である。

それからまた数日。麻帆良祭準備も本格的に始まった。
アスナ達は皆ネコ耳を生やしたりして楽しんでいたりする。それはイリアも同じで、この前着けていた獣耳と尻尾、白ニーソ。そこにゲームに出てきそうな服を着こんでいる。恐らく麻帆良祭の裏イベント。コスプレ大会で一位を取るのも難しくないだろう。

「ねぇ、アスナ」

「ん？　どうしたの、イリア」
「最近ネギの様子がずーっとおかしいけど、なんかあったの？」

この前からずっとおかしい。
あの、超に呼び出された日から。イリアの思考内では「超にナニカをされた」ということまでしか分からない。

「そんなの、私が知りたいくらいよ。なにか悩みがあるなら相談しなさいよって言っても、『大丈夫です』で返されちゃうし……」

ネギのダメなところ……なのだろう。
悩んでるのはもろにばれているのに、それを隠そうとする。
逆にそれが心配を誘うことも知らず。

さて、その後はなにがどう転がったのか、アスナが高畑をデートに誘えないみたいな話になっていた。皆さん忘れてはいけない。アスナはオジコンで、高畑のことに好意を抱いていることに。
実問題、それが本当の好意なのかは分からないが。

今日くらいビシッと言ってネギの悩みを聞きだそうとアスナ達の部屋に入っていったのは良いのだが……。

「おー！　ボク様ちゃんナイッスバッディ！　次元が綺麗に歪んでるぅう！」

なんというか、ぶっ壊れていた。
これというのも、カモが買ったと言う年齢詐称薬のせいである。
青い飴玉を飲むと年齢が下がり、赤い飴玉を食べると年齢があがるというものらしい。

しかしこちら側から何歳まで上げるということが設定できないのが難点だ。

ちなみにこの薬はネギの通帳から買ったものである。それがばれた歳、ネギでは無くイリアに制裁をされたそうだ。

まぁそんな余談はさておき。

大人の姿となれば、イリアの悪戯心が刺激されないはずがない。

まぁ、大人と言っても外見年齢は十八歳程なのだが。

そんな訳で、麻帆良を歩き回っているというわけだ。

幻術なわけだから、いつ解けてもおかしくない。だが、そこはイリアの根性。魔力制御で幻術を維持させると言う魔法理論も吃驚なことをしている訳だが。

そこで最初にあったのが亜子とアキラ、まき絵だった。

亜子は最初、麻帆良祭に出店されているアイス（準備中でも準備の終わった店は既に売りだしている）を食べていた。そして前を向いた瞬間、綺麗なお姉さんがいたわけだ。

銀髪を腰まで靡かせ、外国人特有の輪郭。雪を思わせる様な白い肌。

「……ほえー」

いつの間にか魅入っていた。

アキラとまき絵も、というか、そこにいる者は男女問わず全ての人が魅入っていた。

「どうかしたのかしら？　アイスが融けてるわよ」

イリアの悪戯は成功。口調まで変えているのだから、ばれるはずがなかった。

「え！？　あ、ほ、ほんまや！　すんません……。え、えっと……」

亜子は融けそうな部分を舐めとり、その後でお礼を言おうとして言い淀んだ。

――あれ、この人、どっかで……。

無論、イリアなのだからどっかで会ったもの何もないのだが。

「ああ、名前？　私は……アイリス。そう呼んでくれるかな……あ、いや。そう呼んでくれる？　亜子」

「え……、なんでウチの名前……」

「ふふ、なんでかしらね」

亜子の困惑した顔が面白い。

しかしだからと言ってボロを出すわけにはいかない。悪戯とは時に慎重になるべきなのだ。

「おや、おやおやおや？」

次にどう出るかを悩んでいる時、邪魔が入った。

金髪の男。どこか古い歴史の貴族を思わせる服を着た、金髪の男。

亜子の後ろから、突然現れた。勿論、そこにいる全員が突然の闖入者に驚いた。

「えっと、どなたですか？」

アキラの質問に男は答えない。

ただジッとイリアを見ていた。

――ぞくり、

と、イリアの背筋に冷たい刃が……。

いや、これは幻痛。だが、刃を突き立てられた様な感覚は、消えない。

「……そう硬くならないでください。肉が不味くなりますよ？　いえ、汗が丁度良くしょっぱい味付けでもしてくれますかね？　なんにしろ、美味しいままでいてくれなきゃ、私が困る」

金髪の男はそれだけ言って去っていった。まるで状況が掴めなかった。

アキラもまき絵も、なにがなんだか分からなかった。

だけど、亜子だけは分かった。魔法関係者だ、と。

「ごめんなさい。私行くわね。……亜子、ちょっと来てくれるかしら？」

「え？　ウ、ウチですか……？」

「そう、亜子だよ」

「っ……やっぱり、貴女は……」

「今はお口にチャック、ね？」

「あ、う、うん……」

それだけ言って、亜子とイリアは駆けていく。取り残されたアキラとまき絵は、ただただ首を傾げていた。

「やっぱイリアちゃんやったんか」
「うに、どこでばれてたのかな？　てかどうして分かったのさ？」
「匂い」
「ってことは……最初から！？」
「ウチを嘗めたらアカンで？」

そんな話は、今のところちょっとした気休めだ。

エヴァ邸に入り、エヴァを探す。
二回に上がり、寝室。そこでパジャマ姿で（もう寝ようとしていたのだろうか？）フェイトと話をしていた。フェイトがいるのは僥倖。
亜子とイリア（元の姿に戻った）は先程のことを話す。

「金髪の男、か。それだけでは、なんのヒントにもならんぞ」
「ああ、確かにそうだ」

二人とも困惑顔である。

「今のところボク様ちゃんの一番の疑問はなんでエヴァにゃんがパジャマなのか、なんだけど……」
「ああ、麻帆良祭の準備だかなんだかで汗を掻いたからな。風呂に入ったんだ」

あれ。汗掻くほどなんかしてたっけ？
そう思うイリアだったが、自分の記憶力の中では完璧エヴァは寝ている。疑問にすらならなかった。

「エヴァにゃん……」
「な、なんだその目は！」
「ううん、なんでもないよ。頑張ったね、エヴァにゃん」
「止めろ！　そんな哀れむような目で見るのは止めろお！」

そんな光景を苦笑いで見る亜子。
だがしかし、今はそんなことを話している場合では無い。
フェイトが逸れた話を元に戻す。

「とりあえず、その金髪の男が《リング》の一味である可能性がある。……今では僅か〇，一パーセントの確率でも見逃せない状況なのだからね。僕も、部下を使って探してみるよ」
「うん、ありがとフェイト。好き！」だきっ。
「……ありがとは良いんだけどね。突然好きって言われて抱きつかれても困るよ」

無表情で言うな。なんか怖いから。
ちなみにこの光景を見たエヴァと亜子は何故か「ごふっ」と吐血したそうだ。
一種の「口からあふれだす愛」なのだろうか。

「それにしても、いよいよもって分からんな」

そんな中、口を開いたのは吐血したエヴァだった。
金髪の男がイリアを見て「美味しいままでいてくれよ」。確かに、意味が分からない話だった。もし彼が《リング》の一員だろうと一員じゃなかろうと、その発言は敵を表す。ならば敵なのか。しかし疑問が残る。何故攻撃しなかった？
ただイリアを見ただけで、何故去っていった？

「ふん、敵なんて皆そういうものさ。漫画の世界を夢見る。僕も、その一人だから良く分かる」
「へぇ～、フェイトは敵なんだ～？」
「今は違う……」
フェイトは困り顔で、未だ抱きついたままのイリアに言う。
なんだかもう人間くさいを通り越してニンゲンソノママの様だった。

翌日。何故こうなったのだろう。
ネギは年齢詐称薬を使い十五歳の姿になってアスナとの予行デートをしていた。アスナと高畑のためである。

そんな日、イリアは超に呼び出しを喰らった。相談があると言う言葉が建前であることを、イリアは直感的に悟った。

ネギがこの前連れ出された屋上で、超が切りだした。

「どうかネ、イリア先生。我々に協力してくれないカナ？」
「……まず、なににどう協力するのか。それを教えてくれないと答えは出せないよ。ボク様ちゃんにだってできることとできないことがあるんだから」
「魔法を全世界にバラス」
「……本気？」
「ああ。本気ネ。本気も本気。本気の本気だヨ？」
「それは一体誰の特になるのかな」
「誰の特にでもなるし、誰の損にでもなる。だが、それが最もリスクもデメリットも少なく、なにより緩和的に《世界を救う》方法ネ」

「……」

世界を救う。

あの白い少年も、同じことを言っていたことを思い出す。

しかし、それにしても、だ。

魔法を世界にばらすことの、なにが世界を救うことになるのだろうか。

「安心してほしい。私は上手くやる」

「その申し出は、拒否するんだよ。超。貴女は一体何をする気なのかな？　世界を救うと断言した者は逆の道へと足を歩めていくんだよ。それは、超一流な頭を持つ超が一番良く分かってるはず。どんな才能を持っていようと、その存在が世界を動かすことは極稀なことなんだよ」

「だから私は言ったネ。上手くやる、と」

「超、ボクは――」

「魔法をばらすことの、なにがそんなにイケない？」

「……」

無理矢理話を逸らされた。

だが気持ちのいい話ではないことだけは確かだった。

「魔法をばらせば、傷ついたものを即座に癒すことができるんだヨ？　魔法をばらせば、生活がより一層楽になるんだヨ？」

「でも魔法はそれと同時に危険も伴う」

「そんなの、今も同じネ」

「……」

言い返せなかった。

それが事実だから。真実だから。現実だから。

気持ちの悪い正論。

「進歩しすぎた科学は魔法とは良く言ったものね。だが科学は《機械》に頼らざるを得ない。《魔法》は精霊に頼れば良い。科学では限界があることくらい、貴女にも分かるでしょ？」

「だけど……」

「無理にとは言わないね。だがその場合は、今から麻帆良祭の終わりまで眠ってて貰うことになるヨ」

「超……」

「冗談なんかじゃないネ。龍宮サン、ハカセ」

ザッと音を立てて二人が屋上へ下りた。どこから降ってきたのかは知らないが……。

其処にいたのは確かに、褐色肌の龍宮と、丸メガネのハカセだった。

「やぁ、イリア先生」

「手荒なまねはしたくないです。どうか、協力してください」

「……」

「何を迷う必要がある？　貴女は――」

「そこまでにしてもらうか。超鈴音」

「……エヴァンジェリンか。茶々丸を貸してくれる気になったカナ？」

そこにいたのはエヴァだった。屋上のドアが開かれ、後ろに茶々丸がついている。

その後ろには、高畑までいた。

「エヴァにゃん、茶々丸……タカミチ？」

「ああ、なんか最近話をしてなかったから久しぶりな感じがするね、

イリアちゃん」
「超。確かに貴女は私を作った親的存在。ですが、イリアさんの敵になるなど、できません」
茶々丸は無表情に言った。
だが、イリアの方を見て、少し微笑んだ。優しい笑みだった。それこそ、温かい笑みだった。
「……まったく、茶々丸は反抗期。高畑先生達からは要注意生徒。エヴァンジェリンからは敵、か。さて、イリア先生？　貴女は、どうするのカナ？」
「おい超鈴音。止めろ」
「超君。先生苛めはあまり尊敬しないよ」
高畑は手をポケットの中に入れて臨戦態勢。エヴァも糸を使う準備はできている。人形使い（ドールマスター）の血を滾らせる。
「おやおや、これは怖いネ」
「超、やっぱりボクは協力何かできない。
幾ら超の頭が良かろうが、頭が良いだけなんだよ。才能を持っていようと、才能を持っていると言うだけの話。天才だろうが天才じゃなかろうが、人間だろうが人間じゃなかろうが……。世界を変えようとする人は、皆自身の破滅の道を歩んでいく。それを忘れないで」
イリアはエヴァ達と共に屋上を出ていく。
必然的に超とハカセ、龍宮が残った。
「おやおや。吸血鬼を引き込むことはできなかったようですね？超」

「……貴方か。いや、私も意外ね。ネギ坊主と、まったく同じことを言うだなんてね……。いや、この場合はネギ坊主がまったく同じことを言ったのかな？」

イリアの請負なのかもしれない。そう考えた。

実際、そうなのだ。

イリアはネギに死ぬほど言ってきた。数回数十回数百回数万回と繰り返してきた。

「世界を変えることは、自身の破滅を示す」と。だからナギは消えた。《世界を救う》という《偉業》をしてくれたおかげで、消えてしまったのだと。

ネギは、何度も何度も聞いてきた。

子供の頃のネギはそれを聞き入れなかった。だが、今のネギは違った。きっと、そうなのだと。代償なのだと、考え始めたのだ。自分の教え子を同じ道へ歩ませるわけにはいかない。だから協力を断った。

だが、それでもネギには付きまとう一つの言葉があった。

「妹を、消したいと思わないかい？」

思ったことがないと言えば、嘘になる。

そう、嘘になってしまうのだ。

《あの日》。イリアが村にいれば良かったんだと。投影魔法があの頃使えたかは知らない……。だけど、いてくれれば良かったんだと……。

そう思わずを得ないのは、確かなことだった。

なにより、嫉妬があった。

あんなに強かった。黒鷺流なんていう流派をいつ覚えたのか、知らなかった。村と馴染めなかったイリアの方が強いという事実が、嫌だった。認めたくなかった。

最悪、殺したかった。

そう思った自分を、彼は罵った。「兄失格じゃないか……」と。

それを知らないイリアはまだ「お兄ちゃん」と呼んでくる。それが、辛かった。今も辛い。もし、自分が「殺したい」だなんて思ってたと知れば、きっとイリアは糾弾する。ネギを「兄」として見てくれなくなる。それが、本当に怖かったのだった。

そして、彼は今も尚、悩んでいる。

と言っても、今はアスナとの予行デートに忙しい身なのだが。

麻帆良祭前？（後書き）

なんだか今回流れていく様なストーリーでしたね。
さよとはあんま関わらなくなります。
そして原作とまた違うところが幾つか出てくるのですが……その頃には既に原作の影がなくなります！

それでもオーケイな人はこれからも読んでくれると嬉しいです。

麻帆良祭前？

学園祭準備が着々と進んでいく中、ネギと小太郎は年齢詐称薬を飲んで十五歳程の外見になっていた。なんでも、格闘大会に出るためらしい。

それをエヴが見つけ「ナギ」と勘違いしてしまったのは言うまでもない。

無論そこにもイリアがいるわけで、そのナギとなったネギに「頭を撫でてみて！」などという素っ頓狂なお願いをしていたりする。

彼女なりに、父親の温もりが知れるかもしれないと思ったのだ。

なんせ、エヴァがナギと間違う程だ。なら、きっとその温もりも、ナギのそれ……。

しかしまぁ、結局ネギは「恥ずかしい」とそれを断ったのだが。

英国紳士のくせに。

「なんだろう、今なんか嫌味を言われた気がする……」

果てなんのことでしょうか。

「そんなことよりイリア。お前はその格闘大会とかに出るのか？」

「ふいーん、めんどくさいから出ないかな？」

「そ、そうか？　でも、その～ほら、ここは出てみたり、な！？」

「エ、エヴァにゃん？」

イリアの肩を掴み必死の説得。何故か顔が赤くなり「はぁはぁ」言っている。

「エヴァにゃん、何を企んでいるのかな？」

「い、いや！？　別に企んでなんかー……」

露骨に視線を逸らした。
相変わらず、分かりやすい時は非常に、異常な程に分かりやすいエヴァである。

「まぁ、エヴァにゃんがそこまで言うなら……」
「本当か!?　本当だな!?　よし、それならちょっと来い！　お前に会わせたい変態……いや、同士がいる！」
「え？　えええぇえええ!?」

無理矢理手を引かれ、どこぞへと言ってしまったエヴァとイリア。

「……今のなんだったの？」

アスナの疑問は、その場に静かに響いたそうだ。

「それで、会わせたい変態って……」
「おや、変態？　私のことですか？」
「うにゃ!?」

いつの間にかイリアは襟首を掴まれ持ち上げられていた。それはもう、ネコのように。

「ふむ……確かに、彼には全然似ていないですね」
「だろ？　アル」
「ア、アル？」
「ああ、自己紹介が遅れましたね。私はアルビレオ・イマ。……ですが、私のことはクウネルとお呼びください」
「ク、クウネル？」

なんだその「食っては寝て食っては寝てを繰り返した某ＫＦＣ創設者」みたいな名前は。

そう。エヴァがイリアに会わせたかったのはアル……いや、クウネルだ。彼もまた、イリアの父親の戦友。重力魔法の使い手なのだ。性格に難ありだが……。

「確かに、これは良いロリっ娘……あ、いえ。幼女で」

「あまり言い直しになってないよ……？」

「ところでエヴァンジェリン。賭けは成立ということでよろしいですね？」

「ああ、良いとも」

か、賭け？

口の中で繰り返す。繰り返したのは良いものの、イリアはやはり、この不穏な空気が酷く堪らなかった。だって、クウネルとエヴァが、なにやら黒い笑いを……。

「では、イリアが決勝戦まで生き残ったら私の勝ち。もしイリアが敗退するようなら、クウネル。貴様の勝ちだ」

「ええ、よろしいでしょう。格闘大会にはネギ君も出る様ですが……。ふふ、どうなるんでしょうね」

「え、お兄ちゃんが？」

お兄ちゃんには悪いことになりそうな気が……。

そうイリアは思うが、実はそうでもない。

ネギはエヴァとイリアとの修行の時には見せていないが、中国拳法をかなり会得している。かなり会得している、というのが日本語として正しいのかどうか、かなり怪しいが。

それより、イリア。気付くべきことがある。さぁ、問え。
賭けの内容を！

「エ、エヴァにゃん？　賭けってどういう……」

っふ、と不敵な笑みを浮かべながら、エヴァは答えた。

「もし私が勝ったら、イリアとネコ耳ゴスロリ衣装で麻帆良デート。アルが勝ったら、私とアルでお前に恥辱を与えるというものだ」
「どんな賭け！？　っていうか勝っても負けてもエヴァにゃん得！？」
「そこら辺は気にするな！」

なんて滅茶苦茶な……。最早そうとしか言葉が出なかった。

（これは……、逃げるしかない！！）

そう思考した瞬間、クウネルはその思考を読みとった様に言った。

「ああ、そうそう。言い忘れていましたが、逃げた場合は私とエヴァンジェリンで強制的に貴女を誘拐し、裸ニーソにネコ耳尻尾装備で、更に首輪を繋げて犬の如く麻帆良を練り歩かすこととなっていますから、ご注意を」
（に、逃げられない……！？）

嫌な汗がだらだらと出る。

「で、でもクウネル？　ボクほら、子供だよ？」

反論、もとい無駄な足掻きをする。

それを聞いたクウネルはしかし、キランと目を光らせ、言った。

「ご安心を！　私の守備範囲は九歳も含まれています」

（へ、変態って……こういうことか～……ま、待ってよ？　恥辱を与えるって……つまり……。オーケイ！　負けなければいいんだね！！）

なにやら自己完結したイリアはさすがにネコ扱いは酷いと抗議の声を上げる。

「うにゃ～、そろそろ下ろしてよ～」

「だが断ります」

「なんでさ……」

なんだか涙が出そうなイリアである。

「アルビレオ・イマ？」

そんな中、一人の少年の声がした。

イリアとエヴァは既に聞き慣れた声。

「貴方は……、アールウェンクス……」

まさかの闖入者。アルは顔を強張らせ、手を翳す。

「待って、クウネル！」

「っ……。どうかしましたか、イリアちゃん？」

「（うっ……。クウネルまでちゃん付け……。なるほど、皆の心が分かった気がするよ……）フ、フェイトはその……ね？　もう大丈夫だから……」

「……大丈夫？　はて、どういうことでしょうか」

フェイトは目を閉じ、かつかつかつと足音を立てて近づいてくる。
猛然と、しかし自然な足取りで。

「イリアの言うとおり。僕は、計画を今は凍結している。今は、イリアとの時間を大切にしたいからね」
「……一体、どんな風の吹きまわしですか？　確か、貴方は三番目でしたか。テルティウム……。イリアちゃんと、どういう関係で？」
「イリアは僕のモノ。所謂ガールフレンドだよ」
「……」

うそでしょ？
そんな意味合いを含めた目線でエヴァを見た。エヴァはゆっくり首を振る。
イリアを見た。イリアもまた、首をゆっくり縦に振った。
ちなみに、イリアは未だ襟首を持ち上げられてる状態なので、あまりにも可愛そうなシチュエーションだった。

「はぁ……。まぁ、こんなところで無為に戦闘というのも好ましくないのはお互い様。今は、見逃しておきましょう」
「ああ、それは助かるよ。アルビレオ・イマ」
「私のことはクウネルと、お呼びください」
「……クウネル？」

フェイトも首を傾げる。
そうなるよね～、とイリアは思う。エヴァもそう思っている。
だって、クウネルって……ぷぷ。

「なんでしょう。今とても腹が立つことを言われた気がします」

「恐らく気の所為だから気にしない方が良いよ」
「そうでしょうか？　まぁいいです。ところでどうです？　テルティウムも賭けに参加しますか？」
「僕のことはフェイトと呼んでほしいけどね。……賭けの内容を教えてくれるかい？」

賭けの内容を聞いたフェイトは、未だクウネルの手中にあるイリアを見る。
見ると涙を流していた。

「フェイト～～～。この二人どうにかしてよ～～」

しかし、フェイトはニィッと笑う。

「賭けに、乗るよ。勿論、勝ちの方にね」
「ほぅ？　もしイリアが勝ったら、お前はどうするつもりなのだ？　デートはダメだぞ。私が予約済みだ」
「……恥辱の限りを与える」
（ああ、逃げ場ないや……。皆なんでサドなのさ……）

勝っても負けても恥辱を与えられる。逃げればそれ以上の恥辱。
最早イリアは泣くしかないのだった。

次の日。
イリア達、魔法関係者は世界樹広場に集まっていた。最後に残ったのはネギと刹那。

「ううむ、遅いのぅ……」

「まぁまぁおじいちゃん。気長に待とうよ。あと数年くらい待てる心の広さを持たないと」
「数年もここで待っとったら死んじゃうわい……」
しかし、先程から高音とガンドルフィーニの視線が痛い。
高音には兎も角、ガンドルフィーニに吸血鬼だと疑われてるのは非常にまずい状態だ。どうせなら信用を得ておきたいものだ。いや、実問題高音には疑われているというより、既に吸血鬼だと断定されているのだが。
「うに、ガンドルフィーニ先生？　どうかしたのかな？」
「む、いや……なんでもないよ」
「ふいーん、そっか。まぁいいけどさぁ……。瀬流彦センセー」ステテテ、と足音を立てて瀬流彦に抱きつく。
「ん？　なんだい、イリアちゃん」
瀬流彦としては、既に何回も繰り返されたやり取りなので何ともない。
だが周りからすると、「ああ、羨ましい」とか、「子供ってやっぱ可愛いよなぁ」とか言う感想が心の中で繰り広げられてたりするのだ。
「ガンドルフィーニ先生が欲情した目で見てくるよ～」
「ぶはっ！！」
吹いた。いや、噴いた。盛大に。
ガンドルフィーニが。
「な、なな!?　わ、私が欲情なんてするわけ……！」
「えー……。だってずーっとボクのこと見てきてたじゃん」

「そ、それは違う。断じて違うぞ！？」

はぁ、と高音は溜息を吐く。周りからは「え、マジ？」みたいな冷たい目線がガンドルフィーニに突き刺さった。

（ふふん、ボクを疑った罰だよ）

まぁ、疑うも何も、吸血鬼なのは事実なのだが。

そんなこんなでイリアが先生たちで遊んでいる中、やっとネギと刹那が来た。

ちなみにそこにいる大半の魔法関係者をしらなったネギは、

「え、えええええ！？　こ、この人たち全員魔法使いなんですか！？」

勿論、こんなリアクションをするのが当たり前だった。

さて、学園長がここに皆を集めた理由。

それが、

「ネギ君とイリア君、小太郎君は特に良く聞いてほしい。皆の者は知っているが、君達は知らんからな。世界樹伝説……それは知ってるかね？」

「あー、なんか俺のクラスのガキも言っとったわ。学園祭最終日に世界樹にお願いするとその願いが叶うとかなんとかな。くだらん」

「え、恋人になれるんじゃないの？」

「そこら辺はあれじゃない？　噂が広まるといろいろ変わっていくのは仕方のないことだっていう……。で、おじいちゃん。その伝説がどうかしたの？」

「うむ、実はその伝説、本当なんじゃよ。二十二年に一度、本当に

願いが叶ってしまうんじゃ」
「「「は？」」」
三人の声が重なった。
それに構わず、学園長は続ける。
「世界樹広場での警戒。それが諸君らに与える任務じゃ。特に告白は絶対阻止じゃ。良いな？」
「それは良いんだけどさ、おじいちゃん。誰かに見張られてるけど、良いの？」
イリアの視線の先には、さよ……と超が作ったと思われる監視機材。
「《魔法の剣　闇の一振り》」
イリアの魔法の剣がそれを真っ二つに切る。
「「「おお……」」」
そこにいた魔法関係者は全ての人が驚いた。
その速度。正に瞬く間だ。魔法の射手などより、よっぽど戦闘に特化されているのが良く分かる。
「超だね。……お兄ちゃん、次超に会ったら気をつけて」
「え？」
「自分のクラスの人を疑うのは教師として間違ってるけど……これは一個人。ううん。お兄ちゃんの妹として忠告するよ。超は危険だ

よ。
だから、気をつけて」
「う、うん……」
思わず頷くしかないネギ。イリアの顔は真剣そのものだった。
その後は解散。
しかし、すぐに超の捜索をすることとなった。ネギと刹那はそれを知らぬまま帰っていったが……。
「正直、あなたと共闘するなんて不本意ですが……」
「まぁまぁ高音ちゃん。にしても胸大きいね」
「ひゃん!?　どこ触ってるんですか、貴女は!」
とても仕事中のセリフと行動とは思えない……。
高音の『影』――通称では『人形』――は探索に持って来いの上に奇襲もできるという優れ物。ただ、一定以上のダメージですぐ消えるのが難点だ。
そこで、イリアの強化術式を組み込ませた《共同術式》たるものを使った。これで、ちょっとやそっとで人形は消されない……はずだった。
「あれは魔法の射手……まずいですね。超の味方に魔法使いがいます。それも、イリア先生の術式で強化された人形を一撃か二撃で撃退していきます」
「うに……なんだか嫌な予感がするんだよ……」
そしてそのイリアの予想は見事に的中することとなる。

「はぁ……なにしてるのさお兄ちゃん」
「え、えっと……」
「ネギ先生。超は超要注意人物なんですよ。そんな彼女を庇うだなんて……」
「ち、超さんはそんな悪い人じゃありません！」
「いいや、極悪の魔法使いエヴァンジェリンとの関係も疑われているんだぞ。彼女は我々の敵に成り得る」
「ねぇガンドルフィーニ先生？　エヴァにゃんってそんなに悪い人じゃないんだよ」
「……そう考えられる様、できるだけ善処はするよ」

やはり、超側に魔法使いがいた。それも、イリアの兄。英雄の息子。ネギが超側に着いたのだ。
と言っても、彼は超の口車に乗ってしまっただけなのだが。

「とりあえず超君、君は連行させてもらうよ」
「痛っ！　手荒に扱うのは止めてほしいネ」

超が無理矢理連れて行かれそうな、そんな時。ネギが、言った。

「超さんは僕の生徒です！　僕の生徒を、勝手に悪とか善とか決めつけるの、良くないと思います。もう一度言います。超さんは僕の生徒です。ですから、超さんは全て僕に任せてください！」

其処にいた魔法先生は思わず耳を疑った。僅か十歳の子供がそんなことを言えるのか、と。
イリアはイリアで耳を塞ぎたい気分だった。

（さっき気をつけてって言ったのに……。はぁ……）

「貴女も、気をつけておいた方が良いですよ」
「え？　ボク様？」
「ええ。ガンドルフィーニ先生は貴女を警戒していますから。勿論、私もですけどね」
「……うに。分かってるよ……」

少し暗めの表情で答える。
高音はこの時、疑問に思った。吸血鬼とは須く悪の筈だ。なのに、何故こんな表情をするのだろう。止めてくださいと、願った。こちらの罪悪感を誘うのは、止めてくださいと。

「……さて、と。ボク様ちゃんは修行行こうかな～」
「修行……ですか？」
「うに、なんだい高音ちゃん。ボクが修行するのはおかしいと思うかい？」
「いえ、そうではないのですが……」

修行が必要なのか、と言いたいのだ。
だから、イリアの言ったことは大体合っているのだ。

「まぁ、ボク様自身、確かに修行なんて必要ない身だからね～」
「……？」
「ほら、ボク様天才だから」

屈託のない笑顔だった。
凡才が聞けばムカつくだろう言い方。だが、その笑顔で全てを許してしまう。そんな存在。小さくか弱く、特に恐ろしく大きく強い存在。

高音はその大きくクリクリとしている紅眼を見据える。

「あれ、もしかして嫉妬しちゃったかな？」

挑発するようにクスクスと笑う。

「安心しなよ。天才なんてこの世には五万といるんだからね。テレビを見てみな、バラエティに出てくるのは自称天才と他称天才。そして自嘲天才と多少天才な奴等ばかりだから」

自嘲するようにニヤニヤと笑う。

何故か、その笑みがとても悲しい笑みの様に見えた。本当に、それが何故なのか。高音には分からなかった。

麻帆良祭前？（後書き）

いやー、なんだか原作どっかいっちゃった。てへっ。

ってどうすんだ俺ぇえええ！

覚えてねえぞ！？　ストーリーの流れ覚えてるけど（かなり曖昧に）セリフとかどうすんだよぉお！　てか三十五冊のマンガが行方不明ってどゆことよ！？

あ、そういえばお気に入り数がいつの間にか１６４もありました。驚きです。一瞬頭の中が真っ白になりました。

これがネギま効果かぁ、とか思ってたり思ってなかったり。

でも他の人の二次創作見るともっとお気に入り数凄いから、オイラ萎え萎えだぁ（笑。

麻帆良祭・遭遇

青い空。正しく晴天。そんな朝を迎えたイリアは、ネグリジェのままログハウスの外に出た。

「あ、おはようございます。イリアさん」

「んにゃ、おはよー茶々丸」

外で猫に缶詰をあげてる茶々丸を発見。挨拶をしてから、空を見上げた。

遂に麻帆良祭突入だ。

「おーい、エヴァにゃーん。早くしないと麻帆良祭始まっちゃうよー！」

「イリアがキスしてくれたら早くする」

「んっ」

「んっ……って本当にキスした！？」

「え！？　ダメ！？」

どんなやり取りだ。もしエヴァかイリアが男だったら完璧バカップルだ。

そんなこんな、エヴァの目覚まし（キス）も終え、二人一緒にゴシックロリータな服に身を包ませる。今日は仮想の一種にも見えなくもないだろう。

～イリアＳｉｄｅ～

十時。遂に麻帆良祭開催。学生たちによる曲芸飛行や、仮想パレードなどで賑わう中、エヴァにゃんとボク様……と、フェイトはパフェを食べていたりする。

「何故貴様が……はぁ。学園祭はイリアと二人で練り歩くのが楽しみだったと言うのに……」
「そうそう。そんな貴女に朗報だよ」
「あ？」
「これを、とある女学生から預かった」
「なんだ？　これは。懐中時計か？」

フェイトの手から渡されたのは酷く一般的な懐中時計……。けど、妙な魔力を感じられることから魔法具であることは勘がつく。しかし、この学園の女学生が何故そんなものを持っているの？　という疑問が浮かび上がるね。

「その女学生の特徴ってナニか分かる？」
「酷くチャイニーズみたいな人だったけど」

……超か……。

古菲ってオチは絶対ないだろうし。それにしても超、フェイトのこと知ってるのか……。やっぱり魔法関連では要注意人物なんだね。ということはもしかすると二十年前のことも……。

「その女学生から貰った説明書には、どうやらそれがタイムマシンであるかのように書いてあったけど」

「にゃ？　タイムマシン？」

それって物理法則。魔法理論。地球の中心基点半径一京六万兆の輪転。空間的移動の粒子分解法。それらを取ってしても成し得なかった大難題じゃん。

それをこの懐中時計一つでできちゃうって言うの？　幾らボク様でもそんな怪しいものには手を出さないけど……。

「確かに、これなら何度でも学園祭を繰り返せるな」

「だからこその朗報だよ。勿論僕にとっても朗報だしね」

「え？」

フェイトにとっても朗報？　どういうこと？

「今は秘密だよ、イリア」

首を傾げるボクに不敵な笑みを向けるフェイト。パフェのクリームが口についた状態でそんな笑み見せられても可愛いだけやっちゅーに。

「ぺろっ」

「っ！　イリア……」

「ん？　どうかした？」

思わず舐めた。いや、ほら。バカップルが良くする行為って聞いたよ、あの某パパラッチ娘に。

にしても意外。フェイトも顔を赤くすることあるんだね～。

「イリア……お前の口にもついてるぞ」ぺろっ。

「うにゃ、くすぐったいよエヴァにゃ～ん」

あれ、なんかピンク色のオーラがボク等から出てるよ？　なんでだろうーね！

っていうかなにやらフェイトに視線が集まってるよ、主に男から。きっと場違いだとか思われてるんだろうな～（注：実際のところ周囲の男性から殺気を孕んだ視線で見られています。なんてリア充なんだ、と）。

「それにしても、タイムマシンかぁ。お兄ちゃんが貰ったら恐竜時代に行きたいとか言うんだろうな～」

「む、それはできなそうだぞ？」

「え？　なんでさ？」

「ほら、説明書。これは術者の魔力を使った時間跳躍だ。それも、並の術者じゃ動かせんほどの魔力だ。故に、超鈴音はこの魔力が満ち満ちている学園祭中にこれを……」

「学園祭中の魔力……これって、やっぱり世界樹の？」

「ああ、そうだよ。あの樹は、本当にいろいろ特殊だからね」

フェイトは遠い目でその世界樹を眺める。いやなんでさ？

この、なんかフラグを立ててますみたいなさ……。

その後は本当に適当に遊んでたね。んで、突然、

「イリアを少し借りてもいいかな」

とフェイトが言ってきた。本日何度目になるか知らないけど言っとくよ。なんでさ？

「タイムマシンがあるからいいでしょ？」

「むぅ……まぁいいだろう。イリア、なるべく早く帰ってこいよ」

「アイアイサー」

というわけでフェイトと学園祭デート。最終日ならとてもロマンチックなんだろうけど、きっとボク様、告白阻止の任務の所為でデートどころじゃないだろうしね。

「……なんでこうなったのさ？」

「いや、なんていうか……こっちの方が僕らしいかなって思ってね」

今フェイトはスーツを着ている。イメージカラーの白いスーツ。しかし背丈がおかしい。いつもの様な子供の姿じゃない。大人だった。

髪も其れ相応に伸びていて、なかなかにイケメン。どっかの雑誌の表紙を飾っていてもおかしくない。

一方ボク様は小さいまま。本当はエヴァにゃんの幻術（イリアがカモから貰った年齢詐称薬をエヴァに見せたところ、それを改造。幻術は半永久的に解けない代物になった。解除はいつでも可、量産も可）を使おうと思ったのだけれど、フェイトから「いつも通りのイリアが良い」と言われた。ううむ、なかなかに気恥かしいことを言ってくれるではありませんか。

更に言うなら元から着ていたゴシックロリータがすこし派手になったくらいかな。

こちらは黒で纏められていて、小悪魔系になっていたりする。

「なかなかにお似合いだと思うけどね、僕達」

「どちらかというと親子みたいになっちゃったけどね」

「……まぁ、そこら辺は気にしないでいこうよ」

だけど確かに、さっきよりも注目度が増したことは確かだね。一体どういう目で見られてるのかは知らないけど。というか考えたくないよ。

「それで、こんな姿になってどうするのかな？」
「僕としては二人きりになれる場所に行きたいけどね」
「あはは、今の姿で言ってもただのロリコンだね」
「……」
「そんなしょんぼりしないでよ……冗談じゃんか……。それに、二人きりになるのはまた後で。今は遊ぼうよ、フェイト！」

だって学園祭だよ？　二人きりにならいつでもなれるけど、毎日が学園祭なんてことにはできないからね。

それにしても目立つな～。フェイトのイケメン具合のせいかな？　スーツ着てるせいもあってなんだかどこぞの貴族が来てしまったみたいな感じになってる。周りの女性が話しかけようとしているけど……。ボクの存在があるおかげで話しかけられないみたいだね～。誰も子供の前でナンパなんてしようとしないよ、うん。

「イリア、さっきから食べてばかりいるけど、太らないかい？」
「ボク様吸血鬼だからね、意外と太らないんだよ」
「へぇ、便利な体だね」

まったくもって激しく同意だね。周りの女性から反感買っちゃいそうだよ。
それにしても、良い光景だよ。平和ってヤツだね。
風船を持ってる女の子。お面を付けた男の子。子供と手を繋いで、

微笑ましそうに見てる親達。お似合いのカップルや、友達同士での馬鹿騒ぎ。

「……ふふ」

「ん、どうかしたのかい？」

「ううん、なんでもないよ。次はどこ行く？　フェイト！」

～フェイトＳｉｄｅ～

屈託のない笑顔。僕はそんな彼女に魅入ったのだろう。彼女の魅惑力と魅了力。どれをとっても、僕がこれまで見てきた女性の中で抜群だった。

そしてそれ以上に、彼女の瞳に魅かれたのだと思う。

「フェイト～！」

背が高くなった僕の背中に飛びついてくる。僕はそれを受け止め、背負う形になる。所謂おんぶというやつだね。

何故僕が彼女の傍にいたいと思うのか。それを言うなら一重に彼女の匂いだ。ああ、いや。変な意味でではなく。しかし匂い一つ取ったところで彼女の魅力は語りつくせない。

紅く染まった瞳。

両親のどちらにも混ざらない白に近い銀髪。

その銀髪にも負けず劣らず、綺麗な白い肌。

それらの魅力を語れと言われれば、僕は一日話し続けられる自信がある。

彼女からは同族の匂いがする。人形。ホムンクルスとはまた違うけど、そんな感じ。だけど人形にしては感情を持ちすぎていて、そしてその感情を包み隠すことができない。それは一種の感情の欠落と言えるのかもしれない。僕も感情が欠落していると、そう思っていた。

しかし彼女の前では人間らしくいられる。そう思えた。

イリアとはまた違う形で僕の傍にいてくれる彼女達。しかし、その全員とイリアを天秤にかけても、尚足りない。一目見たときから、僕は彼女の虜、だったのだろう。

吸血鬼にしたことを悔やむ？　いいや、逆だ。永遠に近い命を、僕も持っている。ならば、それだけの間、彼女と共にいられる。僕の勝手なエゴだけど、それだけが僕の今の望みだ。

人生を楽しむって、きっとこういうことなんだろうね。

～イリアＳｉｄｅ～

ううむ、次どこ行こうってなったのはいいんだけど……。なんでジェットコースターに乗ってるんだろう……。

「うにゃぁあああああああああああああ！！」

急降下。地獄の断末魔。フェイトは最早無表情。

急降下して行く時の風が気持ちいい。冷や汗が冷たくて服が体にぴったりくっついて気持ち悪い。

そしてまた上昇して行く。じっくりと。じっくりと。それがまた

恐怖を大きく……。

「……」

「フェ、フェフェ、フェイト――――！」

「……」ニヤニヤ。

え、ちょ……なんでニヤニヤしてるのさうにゃあぁあああぁあ！

「うにゅ……酷い目にあったよ……」

「こちらとしては眼福だったけど……」

「むぅ……」

ていうか学生なんかがジェットコースター作んなっちゅーに！

にしても最近ボク様の周りサドな人しかいなくない？　なんでさ？　ボクにマゾっ気はないはずなんだけど……。

――背中に、ゾクリと嫌な悪寒が走った。

まるで今すぐにでも大きな顎（あぎと）に背中から食われていく様な感覚。

それはフェイトも同じ様だった。足を止め、背中に突き刺さる視線の主の行動を窺っている。

「おやぁ？　おやおや。視線を注ぎ過ぎましたかね……」

そんな声がした。背中を、唾液たっぷりの舌で舐めとられていく。

正しく、食われる直前。

だから、行動に出た。

――投影（トレース）、開始（オン）。

相手に気取られない様にするには、これが一番。投影させる直前まで魔力を感じ取られるはずもない。微弱な魔力しか流れない。普段放出している魔力の放出量とあまり変わらない。だからこそ気取られない。

「なにか手を出そうとしている様だが、止めた方がいい。私は良いが、貴女方は部が悪い」

「部が悪いのはどっちかな」ボクが言う。それに続く様に、フェイトも言った。

「ここは麻帆良。魔法使いの巣窟だよ」

しかし、そんなのどうということもない様に、男は、すぐ後ろに立っていた男は、ニヤリと笑った。

金髪の、高貴な貴族の様な服を着た男。

「ああ、魔法使い……。魔法使いですか？　あまりにも貧弱な奴等だ。それでいて傲慢で劣悪で卑劣で卑怯で偽善を上辺で並べたて悪を成して尚悪びれない下等な生き物。そしてそれらに殺されていく下等な吸血鬼……」

「っ……」

「フェイト！」

「……分かってる」

何故ボクがフェイトを止めたのか。それはフェイトの手を見れば分かる。

人差し指を突きだし、相手に向ける。それは《石化の邪眼》や《石の吹雪》を放つ前兆。ボクはそれを知っている。

「やれやれ、血の気の多い……」

「血の気なんて、僕にはないよ。僕は人形だからね」

「……人形……。ふっ、まぁいいでしょう。ところで、どうです？　お茶でもしませんか？　ここの紅茶はとても旨いですからねぇ……」

男の案内で来たのはカフェ。と言っても、人の気配は一切なく、先程までの学園祭は幻だった様に思わせる。

「それで、お話があるんでしょ。早く話したらどう？」
「そう急かさないでください。……そうですねぇ、貴女、なんで超の計画に協力をしなかったんです？」
「貴方には関係ないことだと、ボク様ちゃんは思うけど？」
「関係ない？　大有りです！　私は超の協力者ですからねぇ……ええ。私の目的はただ一つ。貴女を殺すことだ吸血鬼」

紅茶にミルクを淹れてカチャカチャと音を立ててかき混ぜていく。外見と違い、随分と礼儀がないみたいだね。音を立てちゃダメって習わなかったのかな？

「フェイト、手を出しちゃダメだからね」
「……善処するよ」
「オッケイ。じゃあ、貴方の言ってること……ボク様を殺すことの目的が、超の目的とナニカ関係あるのかな？」
「有りますよ在りますとも大有りですとも！　なんせ、超にとって貴女はとても不安定な存在だ……。なにせ、貴女は、超の本来いるべき世界では、いないのですから」

……え？

「超のいるべき世界……。なに、異次元世界の話？　そんな御伽噺を信じろって？」

「ですから急がないでください。急かさないでください。これからゆっくりゆったり時間を掛けて説明してきますよ。

まず、超のいるべき世界。それは未来！　ネギ君が子を生し、そしてずっと続いてきた家系。その一賊……。いわば、リンシェン・スプリングフィールドというわけです。今では……いえいえ未来では、ファミリーネームは変わっていますが……。

そしてその家系図。ネギ君は勿論、ナギ・スプリングフィールドも載っているその家系図に、貴女がいないんですよ、イリア・スプリングフィールド」

「それは大した問題じゃないと思うよ」

紅茶を啜りながら、こちらの焦りを気取られない様にいつも通りを心がけて言った。

「それは大した問題じゃない。うん、全然大した問題じゃないんだよ」

「……と、言いますと？」

「ボクは吸血鬼。最早高潔なスプリングフィールド家にボク様の存在は邪魔なだけ。だから家系図に入れず、ボク様の存在を隠した。ふふ、どう？　これで辻褄が合うよ」

「……」

ボクは笑う。男は笑わない。

フェイトは、相変わらずだね。

「っハ！」

突然だった。

本当に突然で唐突で。

「ハハハハ！　成程成程、成程成程成程成程！　吸血鬼だから存在を消されたと！　成程ねぇ、ああ成程成程。ですが、残念です。辻褄は、合わないんですよ」
「……どういうことかな」

うわー……隣にいるフェイトが怖い。こめかみがぴくぴく動きながらも無表情を保とうとしてるし……。てか今の男のセリフに怒る要素あった？

「ええ、そうですねぇ……。言わなくてもいいと思うんですけどねぇ、これは」
「……勿体ぶるのは止めてほしいかな。どうせ言うんでしょ？」
「いやはや、つまらない小娘ですねぇ。思いませんか？　吸血鬼と言えば、密かに暮らすことも儘ならない存在。そんな存在となった貴女が、なんの資料にも載ってないなんて、可笑しいと思いません？　例えばエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。彼女は女子供を殺したことがない。それはとても有名な話だ。ですがこの事実はあまり知られることはない。有名なのに知られることはなかった。果て、なんででしょう？
正解は簡単です」

ボク等の回答など聞く気がないみたいだね。なら聞くなよぅ……。

「この不殺の事実は、ある資料に載っていた……。《アヴェンジャーの復讐録》という資料はご存知で？」
「うん、知ってるよ。エヴァにゃんを調べたときに見つけた」
「その資料は名の通り、元復讐者が書き記したもの……。彼女の手により殺された魔法使いの妻。これはその資料の一文ですが……。
『私は復讐を誓い、夫が死んだ元凶である吸血鬼を殺しにいった。だが、その時彼女が言った言葉はとても衝撃的なものだった。「殺

さないでやるから帰れ」。私は怒りに怒りエヴァンジェリンを刺した。手に持った短刀で。だが、吸血鬼は私を見るだけ。口から血を流し尚、彼女は言った。「それで復讐は十分か」と『』。……まるで悲劇のヒーローですねぇ？　いえ、ヒロインですか？　この資料を見た者は皆エヴァによる犠牲者の録書を見た。そして、事実。彼女は女子供を殺していなかったということが明らかとなった。だが魔法使いは『そんな偽善めいたことを吸血鬼がするわけない。それは偶然だ』と言い、公開を禁じたのです」

ボクは答えない。
なにも言わない。

「この通り、吸血鬼には何らかの資料が残る。なぜなら、吸血鬼という運命（ルート）には必ず『殺す』という言葉が纏わりつくから。
例えば《アレイスター》。彼の資料にはこうある。『畜人殺衝』。人を鬼畜に殺す衝動がある彼の二つ名です。彼もこうしって資料が残っている。ですが、貴女は？　残念。どこにも載ってないんです。なににも。どんな資料にも。イリアのイの字も載っていない。果て、なんでしょう？
正解は貴女が生まれていない。或いは貴女が世間に吸血鬼だと知られる前に『死んだ』です。ふふ――」

男は両手を広げ、大袈裟に言った。

「そこで、私はある組織を作ることとした」
「「……」」

嫌な予感がした。耳を塞ぎたかった。だけど手が動かない。なにも動かない。足も動かない。
心臓も――動かない。

「――《リング》。私の名だ。覚えておくといい」

そして男は立ちあがり、ボク達に背を向ける。

「私はお前を殺すよ。私の手を以てして私自身の正義を貫く」

「貴方の正義とは？」

「化け物を駆逐し、最高の恥辱を与え、最悪の苦汁を飲ませ、最たる屈辱を与えることだ。その化け物の中に、お前が、イリア・スプリングフィールド。君がいるんだよ、――化け物」

瞬間、時間が動いた。

～フェイトＳｉｄｅ～

「化け物を駆逐し、最高の恥辱を与え、最悪の苦汁を飲ませ、最高の屈辱を与えることだ。その化け物の中に、お前が、イリア・スプリングフィールド。君がいるんだよ、――×××」

僕のなかで何かが弾けた。勿論、それがなんなのか知らない。無論、それが何なのか知る術はない。

だけど、理性が飛んだのだけは分かった。

まるで体という窮屈な皮袋から飛び出し、魂としてそこにいる様な。

「きっ……」

ナニカを言おうとした。そう、言おうとした。だが、言えなかった。

「フェイト！」

イリアに後ろから取り押さえられた。それだけは辛うじて分かった。

だが現状が分からない。

何故僕は机の上で取り押さえられている？　何故、僕の手は男の喉を掴んで離さない？

「くっ……なるほど、君も化け物か――」

「黙れ」

「フェイト！！」

「お前こそ、少し黙ったらどうだ？」

イリアは恐らく、もう僕をこのままにしておくことを危険視したのだろう。だから、そこからの意識はなかった。ただ、ドガッという鈍い音と、ブツン、というナニカが切れた音を残して。

ただ、そこにもう一人の存在があった気がしたのは覚えている。

そう、イリアの、御主人様（マスター）。

～イリアＳｉｄｅ～

え、えっと……今起こったことをありのまま話すぜぃ！？

なんか突然エヴァにゃんが来てボクが頑張って取り押さえていたフェイトを手刀で気絶させた！

「……エヴァンジェリン、か」

「貴様がイリアのつけ狙う犯人。それでいいな？」

「そうですねぇ……役者が揃ったことです。――一人は気絶してしまいましたがね。……もう一つ、私の本命の目的を教えましょう」

本命の目的。

確かに、ボクも思った。あんな程度のことで組織を作る必要があるのかと。対吸血鬼魔術や錬金術を現代に復活させたこの男が。

「私の目的は……過去の改竄、では超の目的に被ってしまいますね……。ええ、そうですね。未来の改竄。或いは、運命の改竄と言いましょうか」

「どういうことなのかな」

「私の目的は、世界の崩壊ですよ。魔法世界の、崩壊をね。幻想は、この世に要らないんですよ。では、これで。――化け物共」

そう言って男は右手の人さし指を振る。虚空を凪っただけのその場所に、亀裂が走る。一種の魔法なのかな……？

そういえば投影しといたナイフ結局使わなかった……。ま、いいか。使わなければいけない状況でもないし。

「次に会えると気をお待ちしていますよ。可愛い可愛い吸血鬼と恐ろ恐ろしい人形君」

夜になってから、別荘に突入。別荘から出た後は時間跳躍してエヴァにゃんとデートの予定だ。果たして女同士でデートが成立するのかどうかは分からないけど……。

っちゅーわけで睡眠。

人間の三大欲求には抗えないからね。一日が二回って良く考えたらかなり辛いし、使うタイミングとか環境って結構シビアだよね。このタイムマッスィーン。

ちなみにまだフェイトのターン。エヴァにゃんは外で苛々しながら待ってると思うけど……。

「フェイトって自分のこと人形とか言う割に人間っぽいよね」

フェイトの腕の中で言う。広いベッドに広い浴場。ホント、この別荘っていいわ～。

「僕でも驚いてるけどね」

背丈もボク様より少し大きいくらいのいつも通りのフェイト。服はスーツから簡素なTシャツ。一回フェイトにパジャマを着せてみたいと思う。うん、それが今のボク様ちゃんの目標だね。

「それにしても意外だね」

「……なにが？」

「ベッドの中に入ったら早急に襲われると思ってたよ」

「……僕のイメージって……」

「え、獣？」

「……」

「冗談だって……」

ごそごそとフェイトの胴に力を入れてしがみつく。無論吸血鬼の力はブレスレットで封じられてるから、骨がバキバキー！　みたいなことにはならないよ？

「フェイト～」
「……なに？」
「呼んでみただけ～」

にへへ、と笑ってみる。
フェイトは呆れた目で見てくるけど……。

それにしても、と思う。《リング》。彼の目的。化け物という化け物を駆逐し、魔法世界を崩壊させる。真意は分からない。彼の言いたいことがまるで分からない。化け物を駆逐するのが正義。そんな正義を持ってる人が、何故魔法世界を崩落させる？
分からない。分からない。解らない。解らない。

別荘内で朝を迎えた日。ボク様にとって意外なことと言えば、フェイトが本当に襲ってこなかったこと。別に求めてたり期待してたりするわけじゃあないんだけど、覚悟していたボク様からすると結構拍子抜け。

んで、別荘から出る前に斬魄刀の対話をしようというわけ。
フェイトの目の前で対話を試みるけど、黒哉の話によると氷がズバドーン！　って感じに出てくるらしいから、距離を取ってもらっている。

「ふぅー……」

斬魄刀に意識を傾ける。そう、これは傾ける。
意識という意識を全て斬魄刀へ委ねる。斬魄刀を、頼りにする。

バリバリバリと――、空間が割れる音がした。
目を開く。暗い空間だった。もう慣れたけど。

「や、こんにちは」
「ふむ……デートも良いが、私達を持ち運ばないのは、不用心だぞ。イリア」
「もう、出会い頭に叱らないの……。ごめんねイリア。でも、心配なものは心配なのよ」

《彼女》はボクの肩を持って、励ますと同時に心配をした。まぁ、分かるけどさー……。

「ほら、ボク様剣道とかに携わってないからさぁ。ボクが刀みたいな物体（というか刀）を持ち歩くと不審がられるんだよね～。竹刀っていう言い訳も、微妙だし」

これは正しくそのまんまの事実。
どうすればいいのか、まるで解らない。

「だがしかしだね……」
「剣道の道に携わってないのなら、携わることにしたって言えばいいじゃな～い」
「「……え？」」

ボクも《彼》も、思わず聞き返す。

「ほら、剣道部の子がいたでしょ？　あのしんめいりゅーとか言う流派の子」

ああ、刹那か。
で、刹那がどうかした？

「だから～。その子に剣道を教えてもらってるって言う設定にしちゃうのよ」

ああ～言いたいことは分かった。うん、解ったよ。
オーライ。

「解った。学園祭中にこの設定を持ち出すのはさすがに無理があるから、また後で頼んでみる。まぁ、学園祭中も一応持ち歩くことにするよ」
「ええ、そうしてくれると助かるわ」「ああ、そうしてくれると助かるよ」

ほぼ同時に言う。合唱みたいだけど、未だこの声には慣れない。
脳に響いて、心臓に轟く。ホントにどうにかなっちゃいそうだよ……。

それからちょっとした雑談をした後、意識を元の世界、エヴァにゃんの別荘へと戻る。

「……どうやら、《対話》というのはできたみたいだね」
「うん！　ボク様にとってこれはもうお茶の子さいさいのそうすけ～だからね」

「……良く分からない返答をありがとう」

なにをぅ。今の返答の何が良く分からないのさ～！

等と無意味な反論をしたものの、軽く流された。ううむ……、本当に最近フェイトがサドっぽくなってるよ……。いや、今のはただ単に冷たかっただけなのかな？

……。

「フェイトに冷たくされた……」

思わず浜辺でしゃがみ込んでのの字を書く。

「なにしてるの……？」

「フェイトが冷たくしたからボク様極寒の地で遭難しちゃったみたいな心境だよ、だよ……」

「……じゃあ、こうすればいいのかな」

「うに。暖か暖か～……」

フェイトはやっぱり人間だと思う。

人形はこんなに温かくない。ボクを包み込むような腕から感じる温もり。脈動。それらはすべて、人間と言って間違いない。

思わずはにゃ～ん、となりそうになるけど……。

「はにゃ～ん」

「……そんなに温かいのかな、僕」

「温かいよ～」

「でも、そろそろ出ないと君のご主人様は御立腹だよ」

「うに……そだね。フェイトは温かくて気持ちよくしてくれるし好きだけど、エヴァにゃんも同じくらい温かくて気持ちよくて好きだからね～」

なんだか語弊を招きそうな言い方になっちゃったような？　ま、いっか！

実際フェイトもエヴァにゃんも暖かくて気持ちいいし～。

麻帆良祭・武道大会　前篇

イリアとフェイトが別荘から出てすぐに迎えたのはエヴァの魅力的な、しかしとても悪魔的な笑みだった。そして、

「お前らはいつまでイチャついておるのだー！」

という嫉妬により強靭になった拳が待っていた。勿論殴られたのはフェイトだけだったが。一方殴られてないイリアはそんなフェイトの頭をポンポン叩いて、「大丈夫？」などと言っている。対して心配などしていないのだが。

いや、フェイトが嫌いという意味では無く、エヴァが怪我をさせる様な真似をすることはないという確信からである。

「よし、ではイリア、一回目の時間跳躍だ。私とのデートが終わったらもう一度時間跳躍して格闘大会へ出場。いいな？」

「アイアイサー！」

「おいフェイト、お前は来るのか？」

「ああ……いや、僕はいいよ。同じ人物が二人もいるのはいろいろめんどくさそうだから。イリアが数人いても、ややこしいだけだからね」

「そうか？　まぁ、いい。それでは、行くぞ、イリア」

「らじゃ～。それじゃ、《時間跳躍》！」

突如、イリアの視界がぐにゃりと曲がる。だがそれも束の間。そこは朝の日差しが差し込むログハウスだった。と言っても、時間は

既に十時。既に学園祭は始まっている。

「ほらイリア。早く行くぞ！」

「うん、分かってるよエヴァにゃーん。ってちょっと待ってよ～！」

イリアは未だ名も知れぬ斬魄刀を布で纏い隠し、背負ってからログハウスの外に出ていった。

最早恐ろしい程の百合百合カップルだった。

勿論第三者から見た二人の光景である。

一緒に一つのパフェを食べたり、一緒に一つのクレープを食べたり……。とにかくピンク色のオーラがそこにあった。

イリアは先程までと打って変わって白の天使を連想させる様なゴスロリ。エヴァはいつも通りの黒いゴスロリを着ている。フェイトの時同様、お似合いの二人だった。

勿論イリアの巧妙な時間操作により、二人が「もう一人のイリアとフェイト」に会うことはない。

ただ「銀髪の女の子は分身の術が使える凄腕」などと言う噂が影で広まっているのだが。

「おいイリア、次はどこに行く」

「ジェットコースター以外ならどこへでも～」

「よし、ジェットコースターに行こう」

「ええ！？」

なにやら墓穴を掘っていた。

「なんだかもう……疲れた」
「成程、アーウェルンクスがお前をジェットコースターに乗せると面白いと言っていたが……確かに眼福だったな」
（フェイト、後でお仕置き決定……）

フェイトのお仕置きが決定していた。
お仕置きという柔らかな言葉だからと言って侮ることなかれ。イリアのお仕置きとは即ち精神的お仕置きである。
ある意味彼女の本気の力と言えよう。

「そういえばイリア。お前は警備などをしなくていいのか？　ぼーやは忙しいとか言っておったが……」
「うにゃ、ボク様ちゃん一人いなくても大丈夫でしょ。それに学園長ならサボっても許してくれるよ～」
「……まぁ、それもそうだな」

本当のことを言えば、イリア一人いなくなることがどれほどの戦力減少につながるかを言っておきたかったエヴァだったが……。所詮は警備。それも告白防止だ。イリアが良いと言うのだから良いのだろう。というか警備等という任務如きで自分とイリアの時間を潰されて堪るか。という感じである。

フェイトの時と違い、イリアとエヴァの邪魔をしてくるものはいなかった。ということで、無事に夜を迎えたことになるのだ。
斬魄刀の真名は結局知ることができないままである。

また別荘で休憩を取ってから、エヴァとフェイトと共に格闘大会に行くために時間跳躍をする。またイリアの視界がぐにゃりと歪む。見ると、やはり。先程までの暗い外とは違い、窓には太陽が差し込

んでいた。

～イリアＳｉｄｅ～

格闘大会に出るために行った場所では『格闘大会臨時変更』と書かれている看板だけが立っていた。エヴァとフェイト、共に首を傾げる真ん中でボク一人、看板の内容を見ていく。

――本大会は超鈴音さんにより買い取られました。大会出場者は次のことを確認したうえ、移動してください。多大なるご迷惑をおかけして申し訳ありません。

・場所　　：龍宮神社
・受付時間：午後六時まで

良く分からないが、超が大会を貸し切ったそうだ。いやなんでさ？超の事だから何か裏があるのかもしれないと思えた。

――世界に魔法をばらす。

お兄ちゃんもこの大会に出るって言ってた。エヴァにゃんは出ないみたいだけど、アル……ううん、クウネルは出るみたいだし……。タカミチも出るらしい。魔法関係者、多くね？

そんな訳で移動。移動それ自体に時間はかからなかったけど、大会の受け付けを済ますのに時間が掛かった。フェイトとエヴァにゃんはやっぱ傍観みたいだね。勝手に賭けしてるし……。

受け付けを済ませただろう人達が集まっている場所にいく。ちなみにボク様エヴァにゃんとのデートの時から着替えをするのをすっかり忘れてたりする。今更になって「うわー……」とか言っても遅いよね……。

この集団の中。見ると、雰囲気は隠しているもののばればれな衣装を着た高音ちゃんとその付き添いだろう中等部の佐倉ちゃんもいる。

他にも何故かガンドルフィーニ先生まで……。って、言うかなんでアスナと刹那まで……？

「あ、イリア！」
「んにゃ、お兄ちゃん」

声が聞こえた方を向くと、まぁ大方予想通りにお兄ちゃんがこちらに駆けてきていた。その後ろには小太郎とタカミチ、真名に古菲に楓までいる。

え、これ皆大会出場すんの？

「当たり前ネ！　我が弟子がどれだけ成長したのか見とくべきアルしな！」

いや、普通にいつもの訓練で見てあげなよ。

「真名ちゃんは？」
「ちゃん付けは止めてほしいな、イリア先生？」

ニヤッと笑ってくる。真名ちゃ……真名は超の協力者。やっぱり気は抜けられない。

「まぁ、勿論出るよ。クーや楓とも戦ってみたいからね」

あんたらが戦ったら会場ぶち壊す勢いでしょ。
思わず目がジト目になる。

「ニンニン♪　イリア先生も出るのでござるか？」
「うん、勿論。出ないと大変な変態に本当に大変なことされるだろうから……」

っふ、と不敵に笑う二人が背後に。いや、三人かな。

「どうやら、役者は揃ったようですね、イリアちゃん」
「むぅ……その気配がない移動どうにかしてよ。てか大会までその《ニセモノ》の姿で出る気なの、クウネル？」
「っ……。おや、おわかりでしたか、イリアちゃん。ですがこれは他言無用でお願いしますよ。私の目的が果たせなくなります」

クウネルの体は偽物。本体がどこにいるのかは知らないけど、雰囲気や、気配がまったくない移動からするとやっぱりそれは間違いないなかったらしい。
……目的？

「クウネル、目的って」
「ネタばれはできません。――ふふ、決勝戦に残るのは貴女かネギ君。どちらでしょうね？」
「……さぁ？　案外、ボクら二人とも敗退するかもよ？」
「っふ、皮肉にしか聞こえませんよ。貴女が言っても。それより、そろそろ予選が始まるみたいですね。さ、舞台に立ちましょう」
「クウネル」
「はい？」
「お手柔らかにね」

「……はい」

信用性のない笑顔のままクウネルは消えていった。ホント、不気味な人……。

おっと。それよりも、今は大会だね。

「さて、と……お兄ちゃんとボク、確か同じBグループだよね。一緒に行こ♪」

「う、うん。よろしくね、イリア」

「……どったの？」

「え？」

「ううん、なんでもない」

いきなり真顔で「よろしく」って言われても、ねぇ。

とりあえず、この大会の予選は簡単だ。

お兄ちゃん以外の人を掃討する。或いはお兄ちゃんを下がらせるのも良いけど、それはなにかとインモラルな空気になりそうだから止めておく。

『おーっと！　Dグループ戦闘開始から早くも数分が経ちましたが……古菲選手が圧倒しているー！』

うわ、さすが古菲。えげつないよ……。

なんか防具をつけた剣道部の人がいるけど、その防具も最早紙も同然。古菲の前ではなんの役にも立たなかった。

『おお！？　Bグループには子供が二人……いえ、Eグループにも子供です！　思いっ切り場違いだぁ！』

失礼だよ朝倉。ボク様だってそこら辺の大人くらい軽く投げとば

せるんだから……。

『それでは、Ｂグループの人数が揃いましたので、試合開始です！』

「よぅし。まずは怪我させないように女の子から退場させなくちゃな～」

「おいおい、その役は俺が……」

「なに言っとんねん。ここは俺の出番やろ。ほら、飴玉あげるから会場から出ていき――ぶばら！？」

「「「っ！？」」」

あ、思わず手が出ちゃった……。いや、この場合足が出ちゃった、かな。

ボクの足が関西弁のお兄さんの顎を捉え、そのまま回る様に一回転。関西弁の人はトラックに轢かれたが如く弾きとばされた。

うあー……やりすぎた。

『な、なんでしょうか今のは！？　なにか武器を使ったのか！？　あ！　只今資料が手に入りました！　あの二人は今年から麻帆良に来た噂の子供先生だそうです！　それにしても一体なにをしたのか！？　倍はあるだろう男の人を一蹴りだぁあ！』

朝倉演技上手いなぁ……。

ちなみに今のも黒鷺流。勿論カウンターだ。そもそも黒鷺流に構えなんかない。襲われるのが前提の流派だからね。

『おっと！？　もう一人の魔法先生も圧倒的だ！！』

え、お兄ちゃんが？

信じられないと言う感じでお兄ちゃんの方を見る。

瞬間、巨体が吹きとんでいた。

「……」

え、まじ？　お兄ちゃんってあんな……え？

……ドーピング？

確かに魔力供給である《戦いの歌》は使ってるっぽいけど、お兄ちゃんがあの百キロオーバーな巨体を吹き飛ばすなんて……。

あ、中国拳法……？

そんなことを思考してる間にも、ボクを大会から引き摺り出そうとする人は絶えない。

最早目で見るまでもなく、男の人達にカウンターを入れていく。

「おらあ！」

む、下段の蹴り。

「よっと」

「んな！？」

前方方向に回転するようにジャンプ。その遠心力を殺さぬまま、

「どこにそんな脚力が――ぐげえ！」

頭の頂点に踵落とし。

うむ、我ながら決まった。

……あれ、なんで攻撃が止まって……。

「あの、嬢ちゃん？　あんま跳ばない方がいいと思うぜ？」

「パンツ丸見え……」
「あう！？」

反射的にスカートを抑える。
そ、そういうことかー……。スカートは長い方とは言え、さすがにジャンプ系はダメかぁ……。ああ、なんだかもう、ホントにお嫁にいけない……。

「お、なんか動きが鈍くなったぞ！　行けー！　野郎共！」
「「おおぅ！」」
「いやー！　来ないでー！」
「げふっ！」「ぶげら！」「がふっ！」「ひでぶ！」
『えー、なんというかBグループでは乙女の怒りにより地獄の断末魔が聞こえ出しましたが……Eグループあんたらなにやってんの！？』

男たちの手が出なくなったのを見計らって、Eグループを見る。
えー……。なに。小太郎と楓が影分身対決してる。しかも格闘じゃなくて影分身の量で。てかそんな人離れした行動しないでよ……。ただでさえ超がなにすんのか分からないのに……。

気付くと、ボクを襲っていた人はいなくなっていた。ふぅ……疲れた。
そんな訳で落ち着いて周りを見渡す。

『おっと！？　Fグループは一体なにが起きているんだ！？　次から次へと人が倒れていく！？』

「て、てめぇ高畑……なにしやがった……」
「悪いね、もうちょっと修行してから来てくれ」

ヒュ～♪　さすがタカミチ、決まるねぇ。
だけど、タカミチの隣にいるあの人、なんなの？
タカミチが倒していってるのを普通に静観してるけど……。てかタカミチはタカミチで手を出してないし。どうなってるのさ？
『Gグループ、あれは何事だ！？』
うわ……クウネル手加減なし……。次々と掌底でなぎ倒していく。ガンドルフィーニ先生もそれに唖然とするしかない。いつの間にか、クウネルとガンドルフィーニ先生をを残してGグループの試合は終わった。
こっちもお兄ちゃんが最後の一人を片付けて、予選は終わりを迎えた。
「おつかれ～、ネギ、イリア」
「お疲れ様です。ネギ先生、イリア先生」
「おっつ～アスナ、刹那！　いや～、良い色仕掛けでドンドン人を倒していきましたな～」
「い、色仕掛けなんてしてないわよ！」
うそでしょ。アスナのパンツ見て鼻血垂らしながら卒倒してた人いたよ。ボク様も人のこと言えないかもしれないけど……。
そんなとき、朝倉からのアナウンスが鳴り響いた。
『皆さまお疲れ様です！　本大会出場者、十六名が決定しました！

本選は明朝、八時より、龍宮神社にて開始となっております！
では、本大会での厳正な抽選の結果決定したトーナメント表を発表しましょう！　こちらです！』

B
A

ガンドルフィーニ　―　高音・D・グッドマン
佐倉愛衣　―　犬上小太郎

ネギ・スプリングフィールド　―　タカミチ・T・高畑
大豪院ポチ　―　クウネル・サンダース

神楽坂アスナ　―　桜咲刹那
長瀬楓　―　中村達也

木賀　誠　―　イリア・スプリングフィールド
古菲　―　真名

ううむ……相手で生き残りそうなのはやっぱりクウネルだよね……。古菲か真名、楓あたりも実力はあるんだろうけど、クウネルは偽物の体使ってるからなぁ……。ダメージが蓄積されないから倒れることはない。
つまり、偽物を消せる程の魔力や気が必要なわけですな～。

「はぁ、前途多難。まずは一戦目の相手を倒すことを目標にしよう。タカミチ～」

お兄ちゃんと話をしているタカミチを呼び、情報収集。

「あの誠って人、どんな感じだった？」
「え？　まこと……？　誰だい、それ？」
「タカミチと同じグループにいたあの人だよ～」
「んん～……。ああ、あの男の子か。彼ねぇ……なんだか、良く分からない子だったよ。戦ってる時はいなかったのに、まるで戦い終わったのを見計って出てきたみたいな。そんな感じの子」

……え？

「予選中タカミチの隣にずっといたけど……」
「ええ！？　本当かい、それ……。う～ん、参ったな。まったく気付かなかった」
「……」

タカミチが気付かなかった？
現役で魔法世界で働いてる凄腕のタカミチが気付かなかった……。
酷く気配を薄くしているのかな？
はぁ、一戦目から嫌な予感がぷんぷんするよ……嫌になっちゃう。

～おまけ的にね～

エヴァにゃんと時間跳躍してデート。さっきのジェットコースターを除けば、それなりに楽しい。まぁ、エヴァにゃんは人が多いのを嫌そうにしてるけどね。
ううむ、よし。

「エヴァにゃん」
「ん？　どうした、イリア」

「ちょっとあっち行こうよ」
「お、おいイリア？」

エヴァにゃんの手を取って中等部の教室に向かう。向かう教室は勿論３－Ａ。

「あ、イリアちゃん来てくれたんだ～。およ、珍しい、エヴァちゃんまで」
「来たよ～桜子ー！」
「わはは、待ってたよ～イリアちゃん」
「ふえ？　待ってた？」
「まずはこれ着て！　いや、着替えさせてあげよう！　エヴァちゃんも！」
「えええ!?」「な、や、止め！」

そんなこんなでゴスロリを引っ剥がされて、着たのは所謂コスプレ？　どうなんだろう。とにかくミニスカ絶対領域のネコ娘。
エヴァにゃんも、尻尾と羽を生やして小悪魔ちゃんみたいな服になっている。

「イリア、これはどういうことだ。私たちが着替えてからおかしい程に男たちが集まってきてるぞ……」
「さ、さぁ？　なんでだろう……」

そんなこんなで、最終的には男の人以外にも女の子まで集まってきちゃって、そのついでにお化け屋敷に入る人多数。売上は上々ってことでいいのかな？

脱いだゴスロリ衣装を鞄の中に入れて、次の場所に向かう。ちなみに鞄は何故かランドセル。おかしいよね？　仕方ないじゃん。桜

子達に無理矢理装着されちゃったんだから……。
んで、次の場所がどこかと言えば、ここ。コスプレ会場！

「おいイリア？　まさかこれに出るとか言うんじゃないだろうな？」
「やだな～エヴァにゃん。ここはお兄ちゃん情報によると千雨ちゃんが来るんだってさ～。だから千雨ちゃんに挨拶していこうかな～ってさ」
「千雨……ああ、あの根暗か」
「もう、そんなこと言わないの！」

そんなこんなでコスプレ会場の奥の方にまで行くと、さすがに所謂典型的なオタクっぽい人やコスプレをしてる人が目立って見えてくる。
そんな中、

「あ、あの！」

と、メガネを掛けてカメラを持ってる男の人に話しかけられた。

「ふえ？」
「に、にゃーって言ってくれないかな！？」
「くだらん、さっさと千雨に会って違う場所に行くぞイリア」
「にゃ～」「おい！？」
「「おお～……」」

猫の手にしてにゃ～って言っただけなのになにこのどよめき。
しかもカメラのシャッター音が多数……。

「こっちにも一枚！」
「にゃ～」

「ごふっ！」
「おい！　誰かが吐血して失神したぞ！　保健室だ、保健室に運べ！！」

あれ、なにこの妙な修羅場。
吐血とか……。

「大丈夫？」
「うっ……ぐはっ！」
「おいイリア、離れてやれ。お前の顔が近くにあるとそいつは恐らく一生そのままだ……」
「え！？　ボクの所為なのこれ！？」
「「ボクっ子キタ――――！！」」
「うわ？　な、何今の……」
「はぁ……。イリア、離れよう。ここはお前にとって害悪にしかならん」
（な、なな……）

～一旦イリアＳｉｄｅＯｕｔ～

そこに一人、３－Ａのクラスメイトがいた。
長谷川千雨。ネットではアイドル、現実では正しく現実主義者。
イリアとネギをあり得ないものを見る目でみる一人。クラスの中で最も常識人。

（なんで、あんなに……くっ、私も写真！　写真を撮らなければ！　あわよくばイリア先生に許可を取ってホームページにｕｐしなくては！）

そんな常識人も今ではイリアの虜になりつつあった。

勿論、イリアのコスプレに。いや、あれは本人は望んであんな格好をしているわけではないのだが……。

「あ、エヴァにゃん。ここ丁度着替えられるんじゃない？」
「お、そうだな。試着室で着替えられそうだ。では、さっさと――」
「ちょっと待ってくれ！」

思わず、呼びとめていた。

～イリアＳｉｄｅ再び～

「ちょっと待ってくれ！」
「んにゃ？」「あ？」

聞き覚えのある声。
でも見た目は誰？　な人に話しかけられた。

「……あ、千雨ちゃん？」
「今気付いたんかい！　いや、いいです。とりあえずイリア先生、数枚写真を撮らせてください！　エヴァンジェリン、お前もだ！」
「はぁ!?　私もか!?」「オッケイだよ～千雨ちゃ～ん。千雨ちゃんはボク様の生徒だもんね～」

エヴァにゃんは渋々ながらも引き受けてくれた。それにしてもエヴァにゃん。これ上なく小悪魔衣装似合ってるよね……。ボク様ネコ娘……。似合ってるのかな、これ……。

「それで、先生たちはなんでこんなところに？」
「ん～？　お兄ちゃんに教えてもらったんだよ。ここで千雨ちゃん……いや、ちうちゃんがコスプレをするかもしれないって」

「んな！？　なんで先生がその名前……！？」
「お兄ちゃんに教えてもらいました～！」
「あのガキあとで殺す！」

うわぉ！？　なんか物騒なこと言ってるけど大丈夫？
というよりボク様の所為でお兄ちゃんの命大ピンチ♪　あはっ。

「多分後でお兄ちゃん来ると思うから、頑張って！」
「はい、頑張って殺します」
「……うん、頑張って。さて、じゃあボクは着替えてからどこか適当なところ行こうか、エヴァにゃん」
「ああ、そうだな」
「え？」

エヴァにゃんが「早くしよう」とでも言う様に首をブンブン縦に振る中、千雨ちゃんが疑問符を上げた。

「先生達、コスプレ大会に来たんじゃないんですか？」
「うにゃ、違うよ」
「でもその格好……」
「あー……これはまぁ、いろいろあってね。で、こんな姿をお兄ちゃんとかに見られたらそりゃーもうボク頭がバーンですですよ」
「でも……」

手振り腕振り話していく。
まぁ、なんとか「仕方ない」と千雨ちゃんは退いてくれたけどね。

んで、着替え。何故かエヴァにゃんと同じ部屋。はは、ホントなんでさ？
ちなみにエヴァにゃん曰く「態々二部屋使うものでもないだろ。

それもこんな場所なら尚更な」だそうですよ。エヴァにゃんが周りのことを考えている……！

成長したな～エヴァにゃん……。とか思って感動してたら亜子並に体を弄られたんだけどね（第二一部、『水着＝海＝夏＝修復』参照）。もう泣きたい。

さっきまでエヴァにゃんを連れ回し過ぎた……。ということで今度はエヴァにゃんがボクを連れ回す番なんだけどぉおおおおおおおおおおお！

「うにゃぁあああああああ！」

「イリア、汗で服が透けているぞ！」

「ジェットコースターなんかに乗せるからじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

本日（？）三度目ジェットコースターに乗ることになっていた。

麻帆良祭・武道大会　前篇（後書き）

なんだか疲れたぜよ……。

とりあえず麻帆良武道大会はそんなド派手にやったり詳しくやったりはしません。

麻帆良祭・武道大会　前篇・続

麻帆良祭二日目。
今日の八時から大会は始まると言うことで、お兄ちゃん達がログハウスに来た。え、どういうわけかって？　やだな～。だってお兄ちゃんの相手、タカミチなんだよ？　そりゃログハウスに来て別荘にこもって打開策も練るって。

「あ、そだ。ね、お兄ちゃん」
「ん、なに？　イリア」
「ちょっと魔法の射手を一矢だけ撃ってよ。ボク様に向かってね」
「え、でも危ないよ？」
「いいからいいから～。ボク様を信用してないの～？」
「う〝……、分かった。でも怪我しないでよね」
「分かってるよ～」
「《魔法の射手　光の一矢！》」

お兄ちゃんの光の矢がボクに向かってくる。ボクはそれを片手一本で迎え撃つ。
え、腕が吹き飛ぶんじゃないかって？
何言ってるのさ。

「えい！」
「え！？」

弾いた。勿論片手一本。吸血鬼の力は封じてる。

「ふふん」

「あーやっぱりそうなんや」
「お、なに。小太郎。気付いてた？」
「おう、気付いとった。なんとなくやけどな」
「……？？」

お兄ちゃんだけ分からないみたいだね……。もう、学校で何習ってたのさ。いや、学校でも習ってないことだから仕方ないんだけどさ。

「どういうこと？」
「なんやネギ、ホンマに分かっとらんのか？」
「う、うん……」
「つまりね、お兄ちゃん。――《魔法の射手》は、《お兄ちゃんが魔力を込めて放ったストレートパンチと同等の威力》しかないってことなんだよん」
「そ、そんな……」

いや、なに落ち込んでるのさ。
確かにお兄ちゃんにとってこの大会で行える魔法は「遠当て」と勘違いさせることができる《魔法の射手》なんだろうけどさ……。
そもそも、魔法の矢はただ撃つためのモノじゃない。

「いい、お兄ちゃん？　まずはこの魔法の射手の特徴を生かすことだよ」
「魔法の射手の特徴……？」
「そ、特徴。たとえば、この魔法の射手は誘導可能。まぁ、この誘導は大会上では使えないだろうけどね。次に空中待機ができる。これならギリギリ気かなんかだと勘違いしてもらえるだろうから、大丈夫。そして更に次。拳に矢を乗せて撃つことも可能だよ。これでお兄ちゃんの拳は二倍の威力を持つことになる。これも大会で使え

るね。中国拳法といろいろ合わせたりすると面白いんじゃないかな？　それに、一矢だけならかなり出が早いからね。お兄ちゃんのその背の小ささを活かして、タカミチを撹乱させる。うん、これが最も良い戦い方だと思うよ」

ううむ、こんなにヒントを出しちゃうなんて……。ボク様ブラコン？

まぁ、お兄ちゃんがタカミチに勝っちゃう場面とかも見てみたいし。

あれからお兄ちゃんは考え込んじゃった。それと本人曰く、瞬動がまだ完成していないらしい。てかいつ瞬動なんて覚えたのさ。少なくともボク様知らないよ？

ああ、なんかお兄ちゃんが別の所にいるみたい……。

「おいぼーや」

「あ、エヴァンジェリンさん」

「これをくれてやる」そう言いながらお兄ちゃんに渡したのは指輪。え、もしかしてプロポーズ？

「これは……」

「指輪型の魔法発動媒体だよ。杖を持ってカンフーはやり辛いだろう？　イリアが折角ヒントをくれたんだ。勝たなくては許さんからな、ぼーや」

「は、はい！」

あ、お兄ちゃんがやる気だしてどっか行っちゃった。ま、いっか。いつものことだし。

やる気が出ると周りこのことがすぐ見えなくなるからねぇ……。

「んで、エヴァにゃん」

「ん？」
「さっきのは結婚指輪？」
「違うわぁあ！」
「あ、違うんだ」
「結構指輪ならお前にくれてやるよ」
「あは、ありがとエヴァにゃん」
「……抱きつくな、肌の密着度を考えろ」

そうそう。今ボク様もエヴァにゃんも、というかここにいる皆は何故か水着に着替えている。アスナと木乃香と刹那もスク水に着替えてるしお兄ちゃんと小太郎も、勿論水着。
まぁ、正しく南の島の別荘だからね。水着に着替えて楽しんでこその別荘だよ。

「あー、ネギはどこまで行ってもうたんや？」
「んにゃ、まぁ、お兄ちゃんなら大丈夫でしょ。いつものことといつものこと～」
「あれがいつものことって……大丈夫かいな」
「イリア、私は少し酒を飲んでくる。少しその犬ころの相手をしてやれ」
「アイアイサー」

エヴァにゃんはそのまま屋内へ。お兄ちゃんは未だどこにいるかが分からない。アスナ達三人は浜で遊んでる。じゃあ、ボク等はなにすりゃいいんだろ？

「なにかしたいことある？　小太郎」
「修行や！」
「はぁ……」

さすがバトル脳。

「な、なんやその溜息は……」

「ねぇ、小太郎ってさ、《女の子》に興味はないの？」

思わずジト目で聞きたくなる。

いや～、まぁ自分で言うのもアレだけどさ？　女の子が前にいて突然『修行！』なんて言い出す男の子を男とは言わないよ……。

せめてさぁ、こう……ねぇ？　男性なら女性に気遣って「お風呂に入ってきたらどう？」とか言うべきだよきっと！

「あ？　女の子に興味があるかないかって……」ぼんっ。

いや待って、なんで顔を赤くしたのかな小太郎。

「ああ、あああ、あるわけないやろ！！」

……ああ、そういうこと。

そういうことかそういうことなんだね小太郎。ふふ。

「ふ～ん、そうなんだ～。興味ないんだ～？」

ちょっと意地悪。小太郎の顔を覗き込むように上目使い。いや、誘う様にって言った方が正しいのかな。ふふ。

「ざんねんだな～。ボク様はフェイトとエヴァにゃんの物だけど、今からでも遅くないよ？　小太郎」

下から覗き込むようにしてたボク様は小太郎の顔に近づけていく。後少しでも前へ進めば口と口が交わるくらいに。

「ねぇ、小太郎」
「っ！！」

小太郎の胸に手を置く。小太郎は水着で、上着を羽織ってはいるけど胸部は曝け出してる。だから、ボク様の生の感触と体温が小太郎を襲ってるはず。異性にこうしたことをされたことがない……或いは限りなく少ないだろう小太郎は、身体をビクンと振るわせる。それが少し可愛かった。

「縛道の六十三《鎖条鎖縛》」
「な！？」
「ふふ、油断したね、小太郎♪」

小太郎の体に太い鎖が蛇のように纏わりつく。
鬼道。死神が使う技。縛道と破道。遂最近、《彼等》に教わりながらやっと形にできた技。

「なんや、これ」
「ふふん、さぁ？　なんだろうね。小太郎、これで小太郎は動けないよ？　ボクが小太郎の始めてを貰っちゃってもいいんだよ？」
「な、なんの話や！？」
「さぁ？　なんの話だろ～？」

ニヤニヤと笑う。いや、笑ってしまう。
小太郎を押し倒し、その上に跨る。

「これで小太郎はボク様がいつでも殺せる。尻に敷かれた虎の皮。ふふ、うふふ」
「イ、イリア……？　なんや冗談やんな？」

「あは、なに？　回文？　それにしても、冗談？　ふふ、それこそ冗談でしょ？　ボク様はいつでも本気だよ～。それとも、ボク様が冗談でやってると思う？」ぺろっ。
「アフッ……」

小太郎の鎖骨部分に舌を這わせる。小太郎のリアクションがとても新鮮。なんせ、いつもはボク様がやられてる立場だからね……。
それにしてもほんとに初々しい反応するなぁ小太郎は。もっと苛めたくなっちゃうな～。エヴァにゃんとフェイトもこんな気持ちなのかな～。

「ぺろぺろ」
「ちょっ、イリア……マジでアカンてこんなん……あふっ」

ふふ、なんだかゾクゾクしてきた。ボク様さでぃすてぃっく～。

「ま、冗談はここまでにしとくよ、小太郎」
「ふぅ……」

鎖条鎖縛を解除。小太郎の身を解放する。

「イ、イリア？　どいてくれへん？　さっきから太腿の感触が……」
「ん？　なに？　太腿の感触が、気持ちいい？」
「ちゃうわ！」
「すりすり～ってされたい？」
「された……いわけないやろ！」

もう。そんなに熱くなんなくてもいいじゃないか～。

「はいはい、今退きますよ～だ」

不機嫌さを装いながら退く。だけど、本音はかなり楽しい。小太郎は精神的年齢が一番幼稚っぽいからね～。まぁ、幼稚すぎて《女の子》に興味はないんだろうとは思ってたけど、まさか普通に興味があるとはね～。

あ～楽しい。

「あー……」

小太郎はなんか砂浜で倒れたまま唸ってるけど。なんでさ？

ま、いいけど。

そういえば、本当にお兄ちゃんどこ行ったんだろ。別荘はそんな広くないから、お兄ちゃんの足ならもうすぐ一周して来てもおかしくないんだけどなぁ。

「ま、いっか～。小太郎」

「あ～、なんや～……」

「どしたの？　そんなやる気でないみたいな声出して。《念願の競馬出場決定、ただし出場馬全部犬！》みたいな？」

「意味分からん……。けど想像したら恐ろしいやっちゃなぁ……」

さて、と。

「んじゃ、ボク様お風呂入ってきちゃうから」

「あ～、ええよ。俺はネギの奴探してくるわ」

「ん、そんじゃあよろしく～」

というわけで入浴～。

そしてエヴァにゃん乱入～。ってなんでさ。

「エ、エヴァにゃんっ？！　なんで……」

「見てたぞ……。あんな犬ころ相手に何をやっておるのだお前はぁあ！」

「にゃあああああ！」

そっからはいつも通りの弄って弄られてのごった返し。

ボク様も正体不明の対戦相手について悩むべきなんだろうけどねぇ……。

ちなみに、ネコ耳（ネコ娘）でデートをしてしまったので賭けの内容が少し変わったらしい。

ボクが大会で勝ったらフェイトと一緒にボクに恥辱を与えるんだってさ。なんかより一層酷くなってない！？

今頃、小太郎の対戦が始まったかな～というとき。ボクは麻帆良の上空にいた。

いや、なにもすることないからさ～。暇だな～って。でもこういう光景を眺めるのは好きだ。平和的な慣れ合いは、とても好きだ。

そんな気持ちのいい風を感じながら、考える。将来のビジョン。

ボクはもう成長しないどころか不死の存在になってしまった。なら、ゆっくり考えればいいのだろう。どうせなら、修行が終わった後も麻帆良で教師として働いて行こうか。認識阻害の魔法があるから、ずっと成長しなくても不審に思われないだろうし。

それとも、なにか組織を作ろうか。でも、組織を作らなくちゃいけない様なこともないしな～。ううん、この際なら家族を増やすという目的でもいいのかもしれない。

或いは吸血鬼らしく、この地を蹂躙していこうか。破壊願望、他殺志願、それらそのままに行動しようか。

《地獄という地獄を蹂躙し、天国という天国を破壊し、安楽という安楽を支配し、苦難という苦難を屈服し、化物という化物を屈従させろ。遠慮は要らない憚るな。何物も何者も邪魔はしない。存分に乱れ、存分に狂い、存分に暴れろ。我欲のままに、本能のままに。私が許す。さぁ、壊せ》

ううん、即興で考えたセリフにしては良いセリフじゃない？　悪役っぽいけど。

そんな話をしてる間にも聞こえてくるアナウンス。

『第六試合、開始！』

あっちゃ～……やっちゃった。お兄ちゃんに試合始まっちゃったよ。古菲と真名の試合も終わっちゃったっぽいし……。あーあ。考えすぎるのも考えモノだな～。

そう感じながら、ボクは急いで麻帆良会場に向かった。

ネギは優勢だった。そう、最初こそタカミチから流れを奪っていたのだ。

これまでに成功しなかった瞬動を成功させ、タカミチの後ろを取り、そのままニーを喰らわそうとする。しかし幾ら予想外の瞬動成功に驚いているタカミチでも、それくらいなら防げる。まだネギの動きには無駄が多い。そもそもそれは反射に近しい。これまでに幾つもの戦場を練り歩いてきた。そしてタカミチは今も現役で過去の仇敵《完全なる世界》の残党を片付けていっている。まさに掃討だ。

その《完全なる世界》の頭とも言えるような立場の人とイリアが仲が良い（それどころか恋人同士にまで発展している）と知った時、彼はどんな顔をするのだろう。

（それにしても、ネギ君ちっちゃいな～）

そんなことを知りもしないタカミチはネギとの戦いに集中する。

ネギの小ささ、古菲とエヴァの修行により手に入れた俊敏性。中国拳法による投げ技の連続。それらはやはり、タカミチの知るネギの動きではなかった。

そして、タカミチは危惧した。ネギが魔法の射手を練っているのに気付いたからだ。

それは収束されていき、ネギの右手に集まる。

雷華崩拳。古菲と共に作ったオリジナル魔法だ。と言っても、基本魔法たる《魔法の射手》を手に収束させ拳に乗せて放つという、オリジナルというよりは応用に近い魔法なのだが。

「ぐっ……」

タカミチはしかし、油断していた。だからこそ直撃を喰らい、十メートル四方の戦場の外へと投げ出された。

足場がなくなったタカミチの下にあるのは水。すぐにタカミチは水に足場を作り、なんとか体勢を作り直す。そう、ここからだ。一度タカミチと距離が離れれば、流れは逆転する。

さっきまでネギの距離を詰めながらの攻撃は正に正解だった。なぜなら接近戦でタカミチは《居合い拳》が使えない。それは正しく相手の戦い方を潰すやり方だった。だが、今は？

十メートル四方の戦場は、居合い拳から逃げられる距離じゃない。

そして、タカミチは本気を出す。

「ネギ君」

「……？」

「これはね、君のお父さんの仲間の一人。僕の師匠が使ってた技なんだけどね……。受けて見せろ」

「っ……」

タカミチの雰囲気が一転した。その目は敵を排除する目……とまではいかない様だ。やはりネギの成長を見るのが今回のタカミチの目的なのだろう。

「左腕に魔力、右腕に気」

――合成。

本来魔力と気の併用なんて、相対し、反発しあうのが当たり前だ。
だがそれは修行をしなかったらの話。修行をし、魔力と気を併用できれば、それは正しく『究極兵装』だ。

「あ、お兄ちゃん……」

観客席の屋根に乗って戦いの末を見るイリアは、久しく畏れを感じた。
それこそ、《あのおじさんと出会った時》程の戦慄だった。

ネギもまた、戦慄する。僕が知ってるタカミチじゃない、と。
イリアに言われたヒント。それこそ、さっきまでの戦い方にあった。ネギの小ささを利用しタカミチを錯乱し戦う。だが、今は？
瞬動をも潰すだろうタカミチの拳は、今ポケットの中に入っている。

「まずはサービスだ、避けろ」

ネギにそんな忠告をする。
そしてそんな忠告をした本人が出したとは思えない穴が、そこに穿たれた。

（はっ――はっ――。な、なん……？）

ネギは思考が追いつかない。意識的にではなく無意識的に避けていた。本能的に避けていた。体が勝手に動いたと言ってもいい。
戦場に、大砲で穿たれたに等しい穴が空いていた。

（……なん、なんだ……今のは……）

そんなことを思考する。ピンチであるにも関わらず、思考し続ける。

「ほらネギ君。考える暇は与えないよ」

「っ！」

なんどもなんども、穿たれていく。

「……お兄ちゃん……」

イリアは居合い拳……いや、豪殺居合い拳を放ってくタカミチに目もくれない。

ただ、兄の行方を追っていた。心配するように、ただただ見ていた。

だが、

――ニィ。と、笑った。

まるでナニカを確信したように。なにかが解った様に。なぞときに成功した子供の様な笑み。

まるでナニカに陶然するように。なにかに酔い痴れた様に。恋に墜ちていく大人の様な笑み。

まるでナニカが誕生するように。なにかを待ち望んだ様に。待ち望んだ事が訪れた様な笑み。

まるで、まるでナニカ予定調和な光景を見て、その滑稽さを嘲笑う様な笑みだった。

しかし、タカミチに追い詰められたネギは、

「がはっ」

遂に豪殺居合い拳の直撃を喰らった。正しく砲丸で押しつぶされた様な圧迫感。それも、地面に叩きつけられた形。

それでも骨が折れなかったのは、タカミチの手加減具合の上手さだろう。

無論、それでも砲丸を喰らった衝撃を全身を走れば、立つことなど不可能だった。そう、不可能だった。

「その程度かい、ネギ君？」

「その程度で終わりなのかい？」

「君は、ナギに……お父さんに追いつきたいんじゃないかい？」

「じゃあ、立たなくちゃな」

見下す様に、しかし見上げる様な眼差しだった。

ナギの息子であるネギを、ナギを追い続けることができるネギを羨む様な目だった。

そしてネギとて、そんなことを言われれば立ちあがらない訳にはいかない。

朝倉がネギに近寄ろうとするのを、ネギが自ら制止させる。

「ふぅ……。タカミチ」

「……」

なんのリアクションもないが、タカミチはネギの次の言葉を待っている様だった。

だから、言う。

「手加減、しないでね」
「っ……」

タカミチは一度動揺を見せる。
だが、それも本当に一刹那だった。

「ああ、いいよ。その代わり、骨折しても恨まないでほしいかな」
「……」ニッ。

ネギも、笑う。まるで、まるでイリアの様に笑う。イリアの笑みが伝染したかのように笑う。力強い笑みだった。

――どぉぉぉっん。

何度も言おう。タカミチの使う豪殺居合い拳は大砲なんていう表現が甘くなるほどの威力だ。
しかしその分隙も大きくなる。なにより、タカミチは観客のいる方向に豪殺居合い拳を放てない。ならば、ちゃんと見切れるのだ。
冷静な判断力と行動力があれば。

ネギはさっきまでの動きを取り戻す。中国拳法の歩法と攻法を混ぜた攻撃でタカミチを撹乱していく。瞬動を何度も酷使して、動き続ける。

――止まれば負けだ。

本能がそう告げる。ならば動こう。止まれば負けるなら動き続ければいい。合理的に、豪殺居合い拳の軌道を読み、タカミチの思考を読み、瞬動による次の着地地点を決定。行動に移る。

（なるほど、ナギと同じ動き……。と言っても、ネギ君はきちんと計算しているようだけど）

そう、ナギとネギは、偶然にも同じような動きをしていた。昔の大戦時代の、動きのそれ。本能的に相手の攻撃が来る場所と、逃げる場所を把握し動いていたナギ。

しかし、逃げる場所が分かっていながら相手の攻撃を真正面から受ける馬鹿だったが。いや、それでこそナギなのだろう。

それは本当に予定調和な光景だった。

ネギはタカミチの攻撃が来る場所が解る。解ってしまっている。なら、ならば。引っ掛け問題を出せばいいんだ。

タカミチはネギの少し後方へ視線を向ける。ネギはそれを見て前方へ――動かなかった。

「お……」

「へへ、騙されないよ、タカミチ」

タカミチは感心する。まさか、これほどとは――と。

「（魔法の射手　雷の一矢）！」

この大会での魔法呪文の詠唱は禁止されている。だから無詠唱魔法を使うしかない。

ネギは拳に乗せたそれを、タカミチの腹に食い込ませる。

「くっ……。……っ！」

タカミチは体を宙に浮かせる。そして、目の前のネギが消えた。

そう、消えた。
そして、目がくらむような痛みが、後ろから。

「雷華崩拳！！」

ネギだった。
それはいつの日か。あの悪魔襲撃事件の日に見せた、イリアや小太郎の動きと酷似していた。

「ぐっぅ……。はぁッ！」

無理矢理な体勢から豪殺居合い拳を放つ。勿論そんなものが当たるはずもない。
両者距離を取る。

「タカミチ！　次で終わりにしよう」
「……そうだね」
『ここで両者フィニッシュ宣言。確かに時間制限である十五分も迫ってきている！』

そう、時間制限。十五分。
あと一分もない。

「（魔法の射手　雷の三矢）。（特殊術式『夜に咲く花』リミット三十！　無詠唱用鍵設定、キーワード『風精の王』。魔法の射手　光の九矢）」
「……」

三矢までなら、まだ出が早い。
そして、ネギは思考する。

腕に乗せることができる。なら、腕じゃなくても、魔法の射手を乗せることはできるんじゃないか？

たとえば、身体に乗せて。

しかし保険も重要。遅延呪文も組み込ませていく。

「うぁあああっ！」

自身の周りに滞空させていた雷の三矢を収束。瞬動で全身にそれを纏いながら突進した。

（突進……なら、潰すことも容易いか）

豪殺居合い拳を放つ。

「（風花・風障壁！）」

「む……。（なるほど……、十トントラックも防げる対物理魔法障壁か……！）ぬっ……ぐぁ……！」

ネギの突進がそのまま、タカミチの腹に入り込む。

タカミチは予想を遥かに超える痛みに表情を歪める。たった三矢。たったの三矢でここまでの威力は、普通あり得ない。それこそ魔法理論を無視したものだ。

いや、魔法理論を無視など、ネギはしていない。

（なるほど、『練り』を念入りにしたのか。確かに高密度な雷の矢だ……！）

「あああああ！」

水飛沫。次に爆発音が聞こえてくる。観客は何がどうなったのか見えず、息を飲む。

そんな水煙で周囲が見渡せないタカミチは片膝を突きながらもネギを探す。だが、どこにもいない。そう思っていた。

「へへ、これでお終いだよ。タカミチ」

「なっ……」

後ろ。

タカミチの真後ろだった。

「（解放！　《魔法の射手　光の九矢》！）ああ！　桜華崩拳！！」

「（遅延呪文か……！？）ぐっ……ぁあ！」

タカミチを地面に減り込ませるように、叩きつけるように、ネギは容赦なく、タカミチの腹部に拳を入れる。

「はぁ……はぁ……」

ネギはもう疲れ、立つのも辛い状況。タカミチは……地面に減り込まれ、その会場の地面にはクレーターができていた。逆転。その一つの単語が、観客の脳裏に浮かんだ。

『第六試合終了！　勝者、ネギ選手だぁああ！！』

興奮気味に朝倉が言うと同時に、観客達もネギに対する祝福の言葉を送る。

「……ふふ」

イリアは、微笑むだけだった。

それは妹というより、弟を見守る姉の様であったが……。

麻帆良祭・武道大会　中編（後書き）

戦闘描写ってどうすりゃいいのか分かんねー。

麻帆良祭・武道大会　後編

「イリアー！」
「お兄ちゃ～ん！」

タカミチとの試合が終わり、ネギが真っ先に向かったのはボクがいる選手席だった。勿論そこにはアスナや刹那もいる。だけど、お兄ちゃんは子供剥き出し。ボクに向かってダイビング抱きつきをしてきた。

「お兄ちゃん、苦しい、苦しいよっ……」
「ああ、ごめん！　で、でも勝ったよ！　タカミチ相手に勝てた！　やったよイリア！」

にゃはは……元気だなーお兄ちゃん。体中ボロボロで痛いくせに……。

「何が勝っただ戯けー！」
「あうう！？」

ちょ、エヴァにゃん、なにしてんの……。

「あんなもの勝たせてもらったも同然だ。タカミチはまだまだ本気を出していない。あいつが殺る気ならお前なんか数秒も立ってられんぞ」

いや、なに殺る気前提で話してるのさエヴァにゃん……。

「まぁまぁエヴァにゃん。そう言わないの」
「む……だがしかしだな……」
「最初の瞬動の成功は、褒めるべきだし、最初の動きはスムーズ。途中のグダグダがなければ、オール満点じゃない」
「……ま、それもそうだな」

相変わらず、素直じゃないなーエヴァにゃんは～。もちっと褒めてあげればいいのに。

第七試合。刹那とアスナの戦いも終わった。ボク様の番……なんだけど、思考が集中の邪魔をする。いや、今は思考しよう。すっきりした方が戦いやすい。

アスナの、アーティファクト。ハマノツルギ。あれは、一体なんなの？

ボク様が見たアスナは、自我を失っていた。なにかの使命に従う様に動いていた。ハリセンだったハマノツルギを、本物の刃に（、、、、、）変化させて。

なんにしろ、アスナの動きは素人のそれじゃなかった。恐らく恐怖。そして孤独。アスナの動きはそれを経験してきた殺人者のそれだった。

『舞台の修理が終わりました。第八試合を始めたいと思います。選手は舞台に上がってください』

むぅ……仕事が早い大学生達を恨みたい。もうちょっと考えたいのに。

でも仕方がない。今は集中しよう。相手はタカミチにすら気配を気取られなかった謎の男の子。背丈からして大学生かな？

舞台に上がる。それだけで、相手の違和感が感じ取れた。

『それでは、試合開始！』

位置に着いたのを見計って、朝倉が開始の合図を告げる。

だが、相手は動かなかった。木刀を持つ手を動かそうともしない。

そして突然話始めた。

「……スプリングフィールド。戦争の英雄の娘、というところかな？」

「うに？　そうだけど……それが？」というかやっぱり魔法関連者なのね。

「ぼくは木賀誠。ええ、貴女の様な高潔な方にお会いできたことを誇りに思うよ」

「……ねぇ、そろそろ始めない？　観客を退屈させたら役者失格だよ」

「役者……ああ、そうだね。ぼく等は確かに役者だ。この予定調和の様な舞台のね」

誠と名乗る少年は、姿を消した。

そう、消した。

「……」

感覚を研ぎ澄ます。

どこから来るのか分からない……。

「おい、どこいったんだよ」
「分からない……まるでコマ落ちしたみたいに消えたぞ」
「CGか？」

観客も混乱気味みたいだね。
解説の人も、『何が起こったのか分からない』って言ってる。ボクも分からない。何が起こったのか、まるで分からない。微塵も、分からない。

「へぇ、意外かな」

後ろから、声がした。それが耳で囁かれた様に聞こえ、背筋がゾクリと……。

「気付かれると思ったんだけど……」

「あ、おい！　出てきたぞ！」
「いつの間にあの子の後ろに……」
「イリアちゃん！？」

最後の声は……亜子？　え、亜子来てるの？　嫌だなー、無様な姿を見せるのは。
だから、悲鳴を上げるのを我慢して、倒れそうな膝を無理矢理立たせた。

「……うん、意外だ。幾ら木刀とはいえ、かなり強めに打った筈なんだけど……」
「……」

がくがくと、膝が笑う。

背中が痛い。とてつもない激痛。

「今のは……」

「無為式と呼ばれたぼくの持つ特殊兵装でね。まぁ、この場合は無意識って言った方がいいんだけどね」

次に、腹部と胸部に痛みが来た。分からない。攻撃方法がなんなのか。

まるで分からない。

「かはっ」

なにかに叩きつけられた様な感覚もないのに痛みが走り、強制的に肺の中の空気を吐き出される。とても新鮮な感覚だった。

「なるほど……無意識、無意識かぁ……」

無意識……うん、なるほど。分かってきた。

無意識の行動を予測するのはとても困難。それと同じだ。

無為式っていうのがどういう意味なのかはボクには分からないけれど、無意識なら分かる。

「（魔力閉鎖（リミッター）、解除）」

魔力の解放。吸血鬼の力までは出さないけど、お父さんから引き継いだ魔力でも十分、相手に中てられるはず。

出鱈目に、会場の全てに魔力の圧を掛ける。

「っ……」

ぶわっと風が吹き、相手の気配がすぐ背後に現れる。
瞬歩を使って相手の気配の後ろを取る。
そして互い背を向けたまま話す。

「……まったく、話し過ぎたかな……」
「うにゃ～、いずれ気付いたと思うよ？」魔力を中てて、相手に恐れを感じさせて『無意識』から『有意識』に切り替えさせることくらい。
「確かに、そうかもしれない。だけど、やっぱぼくのキャラじゃないな。饒舌キャラより無口キャラを目指してるんだけど」
「にゃはは。で、誠。君はどこから来たのかな？」
「……言ったでしょう。ぼくは無口キャラを目指してるって」
「そうだった、ね！」

ぎゅるっと、変な音を立てて右足を軸に回れ右。相手と相対、そのまま掌打を……！

「あぐっ……」
「リーチの長さを、考えた方が良いと思うよ」

相手の掌底を喰らって、舞台の端にまで吹き飛ばされる。
……ふふ。優しいな～。小太郎みたい。まさか風圧で（、、、）吹き飛ばすなんて。

「そうだね。でも誠も考えた方が良いと思うよ」
「……」
「ボク様、これでも鍛錬を積んできた方なんだから」
「ッ！？」

でもボク様は優しくない。

だから、相手の木刀を貰っちゃったりもするんだよね。

「それ、ぼくのなんだけど」
「でも今はボクの手の中だよ、まーちゃん」
「……それってぼくのことかい？」
「なに、不満？　どうせならまこちゃんもあるけど」
「普通に呼んでほしいかな」
「ふいーん、つまんないのー」

そんなことを言いながら、小さい体を活かして相手の懐に潜り込み、木刀を逆袈裟に振り上げる。
だけど、やっぱりそんなのを喰らってくれる程相手も優しくない。すぐに瞬動で後方へ下がった。

「……」
「……」

腹の探り合い……ってわけでもないけど、とにかく睨みあい。一種の心理戦。隙を見せれば相手はまた『無意識』を繰り出す。いや、こちらが隙を見せなくとも、相手が『無意識』を発動させればボクは隙だらけになる。

――ぞくり、と
嫌な予感が背中を
腹を
体中を駆け巡った。

「ぁ……」

その感覚が消えた頃には目の前に誠はいなくて……。

「ぼくが優しいとか思わない方がいい。ぼくは自分以外の人間はなんだっていい。どうなったっていいんだ。君がここで死んでも、ぼくは構わない」
「あぐっ……ああっ！」

体中。
足、脚、腿、腹部、胸部、手、腕、背中、頭。
それら全てに激痛が。
走っていった。
思考が定まらない。脳を揺らされた……？　そんな……でも、だって……。お兄ちゃんは、あんな頑張ってタカミチに勝ったのに……。

『い、一！　二！』

朝倉のカウントダウンが始まったのが遠くで聞こえた。
ああ、ということはボク様今倒れてるんだ……。耳を澄ませば観客の声が聞こえる。「あれは卑怯だ」とか「なにが起こったのか分からない」とか、「弱い者いじめだ」とか。好き勝手言ってくれちゃってる。

『五！　六！』

あと四。
どうする？　立つ？　立つべきだよね？　でも動かないよ。なんでだろう。意識が遠ざかっていく気がする。
ダメだよ。
立たなくちゃ。
立つしかないのに、なんで動かないのさ。

自分の体でしょ……？　動いてよ。

「っ……」

「おお……」

「へぇ……良く動けるね。ツボを結構な強さで打ったんだけど……」

「うぅー、頭がクラクラする……」

痛いところを抑えた手が紅く染まっていた。あーあ。血が苦手な亜子の前で、血ぃ流しちゃったなぁ……。嫌だなー。

血の匂いを嗅いじゃうと、陶然して、酔い痴れちゃいそうになっちゃう……。それが自分の血でも。

「ぺろ」

「……自分　血を舐め　　、墜　吸血鬼でもそうそうよ」

誠が何言ってるのか分からない。

ただ手に付着した血を、その紅い血を舐める。頬張る様に、貪食するように。

――頭がクリアになっていくのを感じた。

「……無意識って、言ったよね」

「ん？」

「それってさ、こんな感じで良いのかな」

「え……な……？」

なにも考えない。そこに立つのは自分と誠だけ。真っ白な空間に、誠とボクだけ。その白い空間は、あのミルク色の海で構成された《彼等》の住処のようだった。

「……」

誠はキョロキョロと首を巡らせる。つまりボクが見えてない。

そっか。こんな感じかぁ。ふぅん。こんな感じなのかぁ。

ボクの手の中にあった木刀はいつの間にかなくなっていた。ああ、さっき倒れた時落としちゃったのかな。

まぁ、いいや。

「黒鷺流・我流」

「っ……」

誠は体を震わす。ボクの声は聞こえるのか。ああ、確かにさっきも、誠の姿が見えなかったのに声は聞こえてたなぁ。

「《序曲・黒鷺演舞》」

「なっ……」

誠の腹部に魔力を込めた右拳を食いこませ、宙に浮かせる。

そして重力に従い落ちてくる誠の脇腹に回し蹴りを喰らわせる。

「っ……」

「《鎮魂曲・黒鷺琴舞》」

舞台のギリギリに立つ誠に追い打ちを掛ける様に踵落としを喰らわそうとする。

けれど、

「くっ」

「あ……」

どうやら無意識が解けてしまった様子。誠は腕をクロスさせて踵落としを防いだ。

誠が腕に力を入れたのが分かった。だから自分から離れる。吹き飛ばされるよりは、幾分マシ。

「ふぅ……。驚いたよ。まさか、こんなに容易く見破られた上に、実践までされてしまうなんてね……」

まだ頭はくらくらする。だから答えられない。

「……なるほど、なんとなく、君の魅力が分かってきたよ」

「……うに？」

魅力？　魅力って、どういうこと？

「とりあえず、もうすぐ時間でしょ。終わりにしよう」

「え……」

頭に、クリアになっていたはずの頭にまた靄が掛かる。

もう、終わり？　早いなー。なんだかなー。

「そうだね、終わりだね」

もう立つのも辛い。なんなんだろう。こんな、呆気ないものなのかな……。

「ごめんね、イリア」
「ふえ？」
唐突に聞こえた声は耳のすぐそばで、すぐそこに誠の姿があって……、
「うっ……」
「また後で、会おう」
鳩尾に、入った、拳が、痛くて、倒れる、自分、ああ、どうして、もう、ほんと。
「やだよ……お兄ちゃん、頑張ってたのに、ボクはこん、な……」
どさっと、音がした。どこか他人事だった。その音がボクが倒れた音なんだって理解する間もなく、ボクは意識を手放した。

麻帆良祭・武道大会　後編（後書き）

あれ、いつの間にかイリア負けてーる……。

麻帆良祭・武道大会　終わりの始まり

白い空間だった。あの、ミルク色の海と漆黒の砂浜。その海面に立つ、二人の影。

「……あれ、なんでボク……」
「まったく……慢心が過ぎるぞ、イリア」
「ふえ……、ああ、貴方か」

酷く頭が痛い。いや、頭だけじゃない。体中……。あ、あぁあ……。

「っ……ああ……そっか、負けたんだっけ」

そう、負けたんだ。初戦で、負けたんだ。お兄ちゃんは頑張ってたのに……。

「悲観することはないわ、イリア。あのルールじゃあ、身体強化だけしか魔法を使えない様な貴女には、酷な勝負だったもの……」

そんなことはない。お兄ちゃんの様に魔法の射手を腕に乗せてパンチだってできたはずだった。

思わず膝をついて、お腹を抱える。先程までの痛みが襲ってきた。痛い痛い痛い。

もう、眠れてしまったら楽だった。ううん、楽なんかじゃないの

は分かってる。けど、やっぱり……。

「イリア……？」

「……うん、大丈夫。ありがとっ」

心配してくれる《彼女》が、ボクの顔を窺ってくる。何故だか嬉しかった。ううん、理由なら単純明快。だけれど、自分の感情だからこそ複雑に絡み合って、その単純明快な回答を教えてくれない。

「ふぅ、君は少しイリアを甘やかし過ぎではないかね？」

「あら、貴方だって私みたいにイリアを心配したいくせに」

「ぬぅ……」

「くすくす」

二人の声がどことなく近くに消える。

「ごめんね、ボクがもっと頑張らないから……貴方達の名前……」

「……急ぐことはないよ、イリア。君だって頑張っている」

「頑張ってるだけじゃ、ダメなんだよ……」

頑張っても結果を出せなくてはダメなんだ。じゃなきゃ、頑張ってる意味がない。

「だからこそ急ぐ必要はないのよ、イリア」

「……」

なんて返せばいいのか分からない。《彼女》と《彼》は、ボクなんかが主じゃなかった方が良かったのではないだろうか。そう思ってしまう。無意識に、思ってしまう。

「急いでいては頑張っても結果はついてこないわ。一から順番に慎重にいきましょう、ね？」
「……うん」
「よし、ではイリア。そろそろ戻ってやれ。彼等が心配しているよ」
「え……」

彼等……。心配？　ボクを心配してくれる人なんて、いたっけ？
あの村に、ボクを心配してくれる人なんて……。ああ、ネカネちゃんかな。ううん、おじさんかもしれない。でも、その人達以外、ボクのことを見てくれる人は……。
そこで、意識が途切れた。接続が切れたように、突然に途切れた。

「んっ……ん……？」
「お、やっと起きたか……。まったく心配させおって……」
「エヴァにゃん……？」

目が覚めて一番最初に見えたのはエヴァにゃんの顔。上体を起こすと、体中に鋭い痛みが走った。まるで全身を針で突かれた様な、そんな痛み。

「無茶はしない方がいいよ、イリア」
「フェイト……」

ああ、心配してくれる人達って、エヴァにゃん達のことか……。

「負けちゃった……。あーあ、なんかお兄ちゃんより弱くなった気分」

そんなことを言いながらなんかスースーする体を伸ばす。なんだ

か、仕事の疲れが溜まってる感覚がするー。あ、なんかスースーすると思ったら、ボク上半身裸じゃん。いや、包帯巻いてあるけどさ。

なんとなくでフェイトの顔を見る。フェイトはボクの視線を感じ取ってから、少し考え込む様にしてから、「寒い？」と聞いてきた。間違ってはないけど違うっちゅーに。本当に鈍感だよね、フェイトって。お兄ちゃんよりも鈍感なんじゃないの、もしかして。

そんなフェイトの奥に、もう一人、誰かがいるのがちらりと見えた。

「……」

「え、なんでまーちゃんがここにいるの」

「まーちゃんって……、普通に呼んでほしいって言ったはずだけど」

今更だけどまーちゃんってこの中で一番まともな人なんじゃないかな？

エヴァにゃん百合に目覚めちゃったし、フェイトは鈍感過ぎ。うわ、まじまーちゃんまとも。

「ところでところでエヴァにゃんにゃん」

「……なんだ？」

「ノンノン、そこは突っ込んでよ。ま、いいけどさ。今試合ってどこまで行ったの？」

これが一番気になること。

ボクが一体どれだけ寝てたのか……。

「小太郎が負けて……ああ、今は丁度ぼーやが戦ってるんじゃないか？」

「そうだね、今あのガンドルフィーニとか言う人と戦ってる」

あー、ガングロ先生かー。どうなっちゃうんだろうなー……。
そんなとき、朝倉のアナウンスが聞こえた。

『またもや炸裂！　ネギ選手のなんだかすごく光るパンチがガンドルフィーニ選手に直撃だぁあ！』

「どうやら勝ったらしいな」
「みたいだね～」

いやーよかったよかった。
にしても、小太郎が負けた……。誰に？　って、聞くまでもなくクウネルなんだろうな～。

「……あれ、もしかしてまーちゃん、その内お兄ちゃんと……」
「ん？　ああ、いや。ぼくは棄権した。だから君の兄はこのまま準決勝進出だよ」
「そっか。……じゃあ、刹那とお兄ちゃんか……」
「どうする？　見に行くか？」
「んにゃ、身体が痛くて動けないよ……」
「……」「……」
「……どうして皆してぼくの方を見るんだ？」

あはは……。
まぁ、でも体が痛いのは事実だし、どうしよもないなぁ……。はぁ、超が何の行動起こすかもまだ分からないのに、こりゃないよ……。

「……それよりまーちゃん」
「まーちゃん言うな」
「まーちゃんは、どっかからの刺客……とかなの？」

ボクの言葉にフェイトとエヴァにゃんも表情を強張らせる。
部屋の空気が冷たく、六つの視線と共にまーちゃんの体を射抜いているように見える。

「……まぁ、一種の傭兵だったんだよ。ぼくはこれでも実戦向きではないんだけどね。特別だったから」
「特別？」
「そう、特別。特殊と言っても良いかもね。《英雄の娘を殺して来い》なんていう任務、特殊以外になんて言うんだい？」
「だけど、ボクを殺す前に少し興味が出た」
「……読心術でも取得してるのかい？　まぁ、そうだね。殺そうとしたけど、一戦だけ公平な場所で戦ってみようと、ね。だけど、殺す気が失せた」
「弱かったから？」
「魅了されたから」

魅了、魅力。ボクにそんなものがあるとは思えないんだけど……。
どちらにせよ、まーちゃんにボクを殺す気はもうないはず。なら、安心、だよね？
外から、楓とクウネルの戦いが終わったことを知らせるアナウンスが響いた。
じゃあ、次は刹那とお兄ちゃんか……。

あれ、そういえば……。

「なんでクウネルはこの大会に出てるの？」
「んあ？　ああ、それなら……。そうだな、どうせ刹那は加減でもしてぼーやを勝たせるだろうし……。恐らくぼーや対アルになるはずだ。アルの目的は多分……遺言を伝えに来たんじゃないか？　い

や、この場合遺言と言っていいのか分からんがな」

遺言……？

それってどういう……。

それからは、まーちゃんがせめて「まこちゃん」にしてくれと頼んだり、そのまこちゃんに皆での質問攻めが始まったりした。

『凄まじいスピードの連撃！　ネギ選手と刹那選手、本当に人間なのか！？』

そんなアナウンスが聞こえてくる。

もう時間制限である十五分も迫っているだろうというときに、クウネルが部屋に訪れた。

「イリアちゃん、随分と呆気なくやられましたね」

「うにゃ～、勝っても負けても逃げても結果が変わらないんじゃ、やる気もなにもでないよ～」

思わず本音が漏れる。

勝てばご褒美が貰えるというなら、もうちょっと卑怯気味にでも勝つ気になったんだけど。

まぁ、過ぎたことを愚痴愚痴と言っても仕方ないんだけどね。

「ふふ、それもそうですね。ところで、次の戦いですが……どうですか、観られそうですか？」

「う～ん、まぁ、傷という傷は大体治ったかし、大丈夫じゃない？」

「そうですか……、では、是非とも観てください。ネギ君との戦いが一段落ついたら、私に抱きついても良いですから」

あはは、誰が貴方みたいな変態に抱きつくもんですか。
それよりも、観ておいた方が良い、かな。エヴァにゃんの言ってた遺言とかも気になるし。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

『それでは決勝戦、一方はフードを脱ぐことをしない謎の男！　これまでの戦いではその掌底で全ての人達を蹴落としてきました、クウネル・サンダース選手です！』
「ふふ……」
『そしてもう一方は噂の子供先生！　中国拳法の使い手、古菲選手の弟子！　あのデス・メガネ相手に勝ち残った少年、ネギ・スプリングフィールド選手です！』
「……」

二人は対峙する。位置に着き、その顔を窺う。

『それでは、試合開始！』

開始の合図が鳴った。
そして時間は動き出す。

『試合開始！』

「来れ」
「っ！」

アルはアーティファクトを取り出す。

ネギは、彼の姿を目に捉えたまま、お得意の思考をしていた。
――本当に、今日逢えるんですか……父さん。

彼の心にはそれしかなかった。

選手席から視線を感じた。いや、視線なら四方八方から客のものを受けている。だが、それとはまた違う視線だった。

……イリア？

イリアだった。
サラシを巻いただけの、寒そうな服装だった。アーティファクトの黒いコートを着てるから寒くはないのだが（意外にもコートは防寒仕様）。そのイリアの視線が、ネギの顔に突き刺さっていた。

「さて、ネギ君」

アルの言葉で、ネギは意識をアルに戻す。
そこで、あり得ない物を見た。
本。
彼の周りを、アルの周りを無数の本が浮かんでいた。一種の図書館の様に、螺旋状に、彼を取り巻く様に、本が浮かんでいた。
正しく魔法な光景。
客も、それに魅入っていた。

「もう、知ってるでしょうけれど、教えてあげましょう。私も目的……」

アルはそう言いながら、宙に浮かぶ一冊の本を取る。
そしてその本をバラバラとページを開き、一つのページに枝折を挟んだ。一度本を閉じ、その枝折を引き抜く。
同時、枝折には魔力が宿り、
一本の光柱が出現した。

神秘的とも言える光景は一瞬。その柱が巻きあげた砂煙から現れたのは、フードを脱いだ、アル……いや、タカミチの師匠、ガトウだった。

「え……、貴方はタカミチの……」

ネギも勿論、知っている。詠春から、記念にと貰った写真。紅き翼メンバーの、記念写真に写っていた人だった。だが、彼はもう既に……。

「ふ……」

ガトウは不敵に笑い、跳躍。

豪殺居合い拳を、使い、水煙を上げた。
その威力はタカミチと同等かそれ以上。それが、五回。五回連続では無い。同時に五回の豪殺居合い拳を繰り出した。
勿論タカミチでもそれはできるだろう。だがこれはガトウの本気ではない。
と、その水煙の中、ネギの目の前にフードを着たアルが立っていた。
「……」
「さすがガトウです。凄まじい攻撃ですね」
枝折を持ちながら、そんなことを言う。
嘗ての仲間を惜しむ様な顔にも見えるその顔。しかし、その顔はまたすぐに消えていった。
「私のアーティファクト、『イノチノシヘン』はこの通り、他者の身体能力と外見的特徴の再生……。しかしこの能力は自分より勝れた者の再生はほんの数分しかできません。あまり使えない能力ですね。まぁ、どっかの宴のネタにはできるでしょうけれど……」
詠春が、詠春の顔をした……いや、最早詠春の体となったアルが、言う。
「私の趣味は他者の人生の収集。この魔法書一冊一冊に、それぞれ一人分の人生が記されています」
今度はネカネだった。
「そして、我がアーティファクトの能力はもう一つ。この『半生の

書』を作成した時点での、特定人物の『性格・記憶・感情』の全てを含めた完璧な『全人格の完全再生（リプレイ）』」

次はアーニャだった。ネギの幼馴染。イリアを何故か毛嫌いしていた、村の住民の一人。

「最も、再生時間（リプレイタイム）は僅か十分間。この魔法書も、魔力を失って単なる人生録になってしまうため、これまたあまり使える能力ではありません。まぁ、使えるとしたら

――『動く遺言』といったところでしょうか」

遺言。

その言葉に、イリアとネギは反応する。

エヴァの言っていたことが、理解できた。ネギも、理解できた。

今この瞬間、ナギの……父親の完全再生がされる。それは感情も記憶も性格も、全てが全て父親のもの。それは、きっと本物の父さんと同じなのだ。

焦る。

イリアは、焦る。

ただただ焦る。

すぐにでも会いたい。

あの、自分を……自分達を置いていった父さんを、殴るために。

「いかがです？　ここまでは、お分かり頂けましたか？」

アルは、元の自分の姿に戻っていた。フードを深く被った奥から、不敵な笑みが漏れているのが分かった。

「では、本題です。十年前、我が友の一人からある頼みを承りまし

た」

自分の心臓が高くなっていくのが分かった。煩かった。

これから大事な人の声を聞けるかもしれないのだから、邪魔をするな、と。

ネギもイリアも、彼の姿を見たまま棒立ちになる。

「……アーウェルンクス。お前はどっか、見えないところに行った方がいい」

「……そうだね。彼の完全再生とくれば、僕に襲いかかることも否めないしね……」

その言葉が、これから起こることの現実味を増してくれた。

「自分にもし、なにかあった時……まだ見ぬ息子と娘に、なにか言葉を残したいと……」

イリアは言い知れぬ喜びに体を打ちひしがれた。

今のがナギの言った言葉なのなら、自分の存在を、父さんは認めてくれていると分かったから。

イリアのその表情を、エヴァは満足気に見る。フェイトも、それを見届け、少し微笑んでから姿を消した。と言っても、空からその行く末を見届ける気がなのだが。

「では、心の準備はよろしいですか？　時間は十分、されど十分です。……再生は一度きり、せめて、心残りのないように……」

「あ、ま、待ってください！　六年前！　六年前のあの人は、クウ

ネルさんだったんですか!?」
「六年前……。いいえ、私はなにも――」
その言葉は、光りに消えていった。
そして、そこに一人の男が立っていた。白い鳩に囲まれ、立っていた。
頭に被っていたローブが外れ、その赤毛が現れる。後ろ姿。その赤毛は、ネギにそっくりで……。
「ぺっぺっ！　なんだ、これ。鳩か!?　まったく、またアルの過剰演出か……」
声が、した。
父親の肉声。
それが、鼓膜を揺らし、脳に伝わる。
「――よぅ、お前がネギか?」

こちらの存在を感じ取り、見てから、言った。

「と、と……」

ネギは口にできない。喜びが、声より涙を出す方を優先させた。

「父さん！」

だけども、言えた。そして駆けだした。抑えていたものを、放りだす様に。

「ふっ……」

エヴァとナギの呆れ交じりの息が漏れる。イリアはただ、その姿を見ていた。イリアの記憶（メモリー）に、ちゃんと残せるようにと。

「はっはっは」

「ぶげら！？」

ナギは笑いながら、ネギをデコピンで弾きとばした。

「えー……いやなんでさ」

涙目に成りながら、その行動に突っ込む。

しかしその顔は笑顔だった。

想像通りの、滅茶苦茶な人だ、と。

「な、なにするんですか父さん！？」
「麻帆良武道大会決勝、か……懐かしいな」
「え……？」
「まったく、こんなマメな舞台用意するところは、相変わらずだよなぁ、あいつも」
本当に懐かしむ様な目で、言った。
「おうおう、我が息子よ。俺の息子であろう奴がそんな泣いてんじゃねえよ。てか俺には娘もいたはずだがな……？」
記憶を辿る様にして見せる。そして、会場を首を巡らせて探す。
娘の姿を。
「おっ」
そんな中、一人強大な魔力を持つ少女を見つけた。そしてもう一人。見憶えてのある金髪の少女も。
膨大な魔力の持ち主は、銀髪の、涙を流している少女だった。感情が不安定になっていて、魔力を隠しきれなくなっていた。
「……へへ、まったく……。なんだよ、アイツが俺の娘か？　はは、全然似てねえじゃねえか」
イリアを見て笑う。
その発言に少しむっとするイリア。
「だけど、綺麗な所は、アイツ譲りだな……」
その言葉に、はっとする。あいつ、というのはきっと母親。災厄

の女王……。

「さて、と。なんだ、おい司会者ー」

『は、はい！？』

「イリアの奴もこっちに来させられねえかな。時間がねえんだ」

『あ、はい……。ではイリア選手、お願いします！』

「……」

イリアは、何も言わず俯きながら進んでいった。

そして舞台の中央に立ち、アルを……いや、ナギを見る。

「……どうだ？　この素晴らしき父上に会えた気持ちは――」

「どこが素晴らしいんだか……」

「なに！？」

「ボク達のこと、放ったらかしたくせに」

「……」

イリアは、ナギに抱きつく。ネギも、そこに被さる様に抱きつく。

親子の再会。いや、対面か。

「まったく、俺の子供達は我儘でいけねえなぁ」

肩を竦めながら、二人を抱くナギ。親の姿だった。正に、親の姿だった。

「本当は、稽古でもつけてやりたいんだけどな……」

「あはは……」

ネギは笑う。「稽古なんてやってられるか」だった。イリアの言葉に、少なからず責任を感じたのだろうナギは、二人を抱く腕に力

を入れる。

「すまなかったな、お前らには、なにもしてやれなくて」
「いいよ、今度会ったら殴るから」
「「ええ!?」」

ネギとナギの声が重なった。客も驚いたようで同じように「ええ!?」と言っている。当たり前だ。突然の父親を殴る宣言なのだから。

イリアは、今は殴らないと決めた。
次だ。今のナギは、アルだから……。次こそ、本物のナギに会って、殴ってやると。

「そうだ、エヴァにゃんも、呼んでいいかな」
「え……エヴァにゃん？　ああ、エヴァのことか」
「んっ。だって、エヴァにゃんだって、父さんに会いたがってた……」
「……そっか」

『エヴァンジェリン選手!?　ちょ、なにして!』

呼ぶまでもなく舞台に上がってきた。

「おいナギ」
「よっ、エヴァ」
「私のことも抱き締めろ」「嫌だ」
「即答か貴様!!　殺るぞ……」

エヴァは顔を赤くさせる。そのやり取りに、子供達二人は笑って

しまう。

「笑うなぁあ！」
「ふふ、ふふふ。だって……あはは」
「ははは、ご、ごめんなさ……ははは！」

エヴァは恨めし気に二人を睨む。

「まぁいい。なら、せめて頭を撫でろ」
「それでいいのか？」
「どうせこれくらいしか聞いてくれんだろ」

ナギは溜息めいた息を吐き、ネギを抱いていた方の手をエヴァの頭に乗せる。それからくしゃくしゃと撫でた。

「心をこめて撫でろよ」「あいよ」

エヴァを一通り撫でた後、ネギとイリアの頭も撫でる。
くしゃくしゃと。くしゃくしゃくしゃと。不器用で、少し痛いくらいの強さで。それでも、温かい手で。
イリアはナギの服に顔を擦る。涙があふれて仕方ないのだ。本物だと思ってしまって。これが本物のナギなんだと、勘違いしてしまう。これが、あと数分で消えてしまう幻覚なのだと、分かっているのだけれど……。その事実が、より一層に涙を流させた。

「さて、と。そろそろ時間だな。本当はあのジジィにも会ったりしたいんだけどなぁ。ほんっと、アルの能力は使えるんだか使えないんだか……。でもまぁ、お前らに会えたんだし、使える能力ってことにしといてやっか」

頭を撫でる手が離れた。それでも、頭に残った温もりは残っていて。

「おら、お前らもちっと顔見せろ」
「うう……」
「……」

おいおい、と。
ナギは困った顔になる。

「泣いてんじゃねえよ、二人して」「「あうあうあう～」」

ネギは左の、イリアは右の頬を抓られる。

「「痛いよ父さん！」」
「はは、また泣いた」

悪戯に成功した様な声調と言葉だった。

「ほら、もっと見せろ。今の俺は仮初の存在だが、それでも、自分の子供の顔は見ておきたいんだ」
「……うん」
「……にへへ」

ネギは涙を拭い、ナギの顔を見つめる。イリアは涙を拭うこともせず、ナギの顔を見て笑った。
ナギも、微笑んだ。

「なんだ、良い顔できんじゃねえか」

またくしゃくしゃと撫でる。
エヴァはその光景を微笑ましそうに見る。

「お前が、今までどんな生き方をしてきたのかは知らない。ああ、イリアの言うとおり、放ったらかしちまったからな。ほんっと、ヒーロー失格どころか父親失格じゃねえか……」

自虐的に言うその姿はしかし、やはり父親のそれだった。

「まぁ、なんだ。俺を追うのもそこそこにしろよ」
「え？」

ネギは疑問を問う
何故ですか、と。

「この若くして英雄となった偉大且つ超絶イケメンな上に天才&最強無敵なお父様に憧れるのも分かるが、俺の跡を追うのもそこそこにしないと、自分の道を見失うぞ――「ぷっ」……なんだよ」

途中で思わず笑ってしまったエヴァを見るが、エヴァもまた一笑してそれを受け流した。

「いいか」

ナギは、少しだけ真剣な顔になりながら、自分に抱きつく二人に言った。

「――お前らは、お前ら自身になりな」
「え……」
「……分かってるよ、お父さん」

「ふっ……それは良かった。ああ、そうだな。本当に良かった。心残りは、まぁ結構あるけど、まぁ、今の所はないってことにしといてやっか。元気に育てよ」

光がより一層強くなる。

その光りが、ナギを消してしまう物だと知っているから、怖かった。

そして、光がナギと一緒に二人まで包み込み、

「もうあんま、泣くんじゃねえぞ」

そんな声を聞くと同時に、ナギの匂いは消えていった。

上を見上げるとそこにはアルの笑顔があるわけで……。

「ぎゃー！　変態ー！」と、回し蹴りを放ってしまうのもしょうがないというわけで。

「ええ！？　イ、イリア！？」

「はっはっは、痛いですよイリアちゃん」

幻覚の癖になにが痛いのかを今一度問い正したい。

しかしこの場合、判定は一体どうなるのだろうか……。

『えー……タイムアップです。両者健在ですので、メール投票にて勝ち負けを決したいと思います』
「ああ、そっか。引き分けならメール投票で決めるんだっけ……」
「ふふ、私の負け、ですかね？」
「さぁ？」

～イリアＳｉｄｅ～

決勝戦が終わり数分後。メール投票の結果が決まったらしい。

『えーでは発表したいと思います。ネギ選手、五百七十六票！　クウネル選手、五千八百二十一票！　よって、この勝負、クウネル選手の勝ちです！』

うん、まぁなんとなくで予想はしてたよ。だってイケメンだったし、お父さん。女性からはイケメンで、男性からもイケメン。ムカつかないイケメンって得だよねコンチクショウ。

「おやおや……、私の勝ちですか」
『それでは授賞式に移りたいと思います――』

こうして大会は幕を閉じた。
あれ、これボク様なんの見せ場もなかったんじゃ……？
ま、いいか。父さんもどきには会えたわけだし。

麻帆良祭・武道大会　相対（後書き）

俺「こんな終わり方で大丈夫か？」
読者「大丈夫じゃない、大問題だ」

麻帆良祭・死亡

大会も終わってから一息つこうかな～というときに、仕事の連絡が来た。なんでも、本格的に超を捕獲。事情聴取と共に問題があればやはり記憶を消すと言うものだった。

超が未来人であるということが本当ならば、記憶を初めから消すということになるから怖い話だと思う。思い出が一切なくなると言うことと、同等だから。

龍宮神社内にいる超を発見。そこで包囲することになった。ちなみに今回、お兄ちゃんは仕事を知らされていない。タカミチは「ネギ君にもこういう仕事は体験させたい」と言っていたけど、この仕事は絶対お兄ちゃんを良い方向へは持っていかない。それどころか、精神的な苦痛にしかならないと判断した。

「待ちなさい、超君」

まずタカミチが引きとめる。それに足を止めた超を一気に包囲。ボクは背に背負う斬魄刀を抜刀し、超のすぐ後と動けないように首に宛がう。心痛ましいことこの上ないけれど。

「これはこれは……皆さんお仕事ご苦労様ネ。それにしてもイリア先生、教え子に刃物を向けるのはあまりよろしくないと違うアル？」

「ボクは今教師としてここにいるわけじゃないよ。仕事の切り替えくらい、ちゃんとできる。だから、気をつけないと首と同体がお別れを言うことになるから、ちゃんと言うこと聞いてね、超？」

ちなみに身長差は浮遊術でカバーだよ！

「職員室に来てもらおう。いろいろ聞きたいことがあるからね」
「なにを甘いこと言ってるんですか高畑先生！　この子は用意注意人物……世界に魔法を公表しようとしている、危険人物なんですよ！？」

ガンドルフィーニ先生とタカミチが睨みあう。ちょ、睨みあう相手間違ってますよ？

「ふふ……。古今東西に存在する幾つもの魔法使いが出てくる物語でも、その魔法使いたちは存在を隠す。何故隠す？　逆に問うヨ。何故隠すのだ魔法使い諸君？」
「魔法を知れば混乱する者もいる。それを悪用する者も増える。魔法は行使者によっては化物になる。だからこそ隠すんだよ。超君」

タカミチが冷静に言うけれど、正直言うと超はそんな回答を求めちゃいない。もっと根本的な回答を求めているんだと思う。

「そうか、まぁ、いいヨ。貴方達と話しても埒が明かないのはとっくの昔に分かり切ってることネ。では、イリア先生？　貴女はどうカナ」
「……答えは前にいったはずだよ。貴女には協力できない。（タカミチ、束縛した方が良い。許可を）」
「……（分かった。良いよ）」

タカミチは渋々許可を出してくれた。
それと同時、背にある鞘に刀を仕舞い、一度距離を置き、縛道を発動する。

「縛道の六十一　《六杖光牢》。縛道の六十三　《鎖条鎖縛》」

六十番代の縛道二つ。そう簡単には抜けだせない。
だけど、これも恐らく、意味はない。
ボクにタイムマシン『カシオペア』を渡したのは、超自身。なら、超が持っている可能性も否めない。

六つの光の帯が超の胴体を囲う様に突き刺さる。これだけでも本来は動きを失う。けれど偶に力尽くでこれを破壊する人がいる。だからこその鎖条鎖縛。力尽くでもなかなか切れない、大蛇の様な光の束縛。

「魔法じゃない……。これは何カナ？」
「残念だけど、自分の内蔵を曝け出す様な真似はしない主義なんだよね。このまま強制転送させてもらうけど、文句はないよね、超」
「大有りね。まぁ、なに。貴方達にも悪いことはしないヨ。では――」

じゃり、という音と共に懐中時計を出して――。

「消えた……」
「なんだ、今のは」
「すごいなー、なにをやったんだ？　あの子」

暢気な事を言う人もいたけど、とにかくカシオペアは危険だ。
時間跳躍。時空処理の問題まで超越して、分子の時空間移動なんて、ここにいる誰も思わないんだろうなー。教えても現実逃避するんだろうなー。説明めんどくさいからいいやー。

「はぁ……」
「お疲れ、イリアちゃん」
「んにゃ、瀬流彦……。ごめ、逃げられた」

「イリアちゃんの所為じゃないさ。それより、今はなんとかして超君の対策を練りましょう」

こうして緊急の魔法関係者を集めた対策思案が始まった。

「お～い、イリアちゃーん」
「お、その声、この感じ、あの亜子ちゃん」

対策思案は結局無駄に終わり、これからどうしようかという時、亜子に呼び止められた。

「これからバンドのライブがあるんよ、見に来ぃひん？　チケットならあるし」
「んにゃ、分かった。見に行くよ。何時から？」
「六時二十分から、世界樹広場でやるんよ」
「オーケイ、分かった」
「あ、そや。明日は一緒に学園祭廻ってええかな？」
「ううん、どうだろう。もしかすると時間がないかもしれない……」
「魔法関連の仕事？」
「うん……」
「そか、ならしゃあないな。じゃあ、振り替え休日は二人で出掛けよ」
「……そだね、うん。ごめんね亜子」
「謝らんといて。それじゃ、ウチはライブの準備あるから、そろそろ行くわ」
「うん、頑張ってね。応援してるから」
「ん！　イリアちゃんもな」

そう言って走っていく。実際明日は時間がないかもしれない。超の捜索。超の捕獲。カシオペアを持ってる超に対して、かなり難しい仕事。まぁ、とにかく今は会場にいこっか。もう五時五十分。あと三十分後にはライブが始まっちゃうからね。

ライブは成功。うん、かなり成功。でこぴんロケットってネーミングがちょっとアレだったけど、亜子がベース担当のバンドは成功に終わった。

二日目の夜を亜子と、途中で合流したエヴァにゃんとフェイト、それから木乃香も合流。学生が作ったとは思えないレストランで締め括った。明日には仕事で忙しくなると言うのだから、大変なことこの上ない。

そういえば、お兄ちゃんは今日かなり大変だったらしい。木乃香から聞いた話だけど、お兄ちゃんは三角関係に陥ったらしい。十歳の癖に。それからアスナも、今現在進行形でタカミチとデート中らしい。対策思案中に席を外したのはこういうことか、と少し納得。

麻帆良祭三日目。

やはり、朝から超の捜索が始まった。

しかしこれまたやはり。そう簡単に見つかることもない。そのまま夕方になってしまった。こんなことなら麻帆良屋台巡りでもしとけばよかったと思わざるを得ない。

そんな時だった。

「お久しぶり……という程でもないですが。取り敢えず、お久しぶ

りです、下種な吸血鬼」

リング。そう名乗った男が、目の前に現れた。

「……超はどこにいるのか、教えてくれないかな」

「無理ですね。そして貴方達ももう終わりです。ネギ君達は助けに来ませんし、ここに残った魔法使い共もやはり貧弱ばかり。――ふふ、これで貴女を殺せば、私の願いは叶い、そして超を裏切り魔法世界を崩落させれば……くっくっく」

やっぱり、超との協力関係は表だけだったんだね。予想はしてたけど、正直言って苛々する。超も、一応ボクの生徒だから。その生徒が騙されていたとすれば、心痛むのも当たり前なこと。

「ふふ、一曲、踊ってもらいますよ、吸血鬼」

「――残念。ボクは貴女何かと踊る気はない。一撃で終わらせる。――投影（トレース）、開始（オン）」

投影するのは干将・莫邪。中国に伝わる夫婦剣。

干将は莫耶に魅かれ、莫耶は干渉に魅かれる。この手に干将がある限り、莫耶は投擲してもブーメランのように戻ってくるし、干将もまた然り。

投影は幾つでもこの剣を作り出せる。この《私の能力》とこの《剣の能力》はかなり相性がいいと言える。

まずは跳躍。こんな人がいる場所で戦闘なんてできやしない。空中戦、或いは人気のない所で戦うのが最もだ。

だからこその跳躍。それから学園の認識阻害が働く上空での戦闘を試みる他にない。

「ふふ、ラシュ・タルク　ラブン・ゲルセルク　貴君は獣を喰らいし爆者《グラトニィー》」
「っ！？」

詠唱、聞いたこともない古代呪文。短すぎる……でも、この魔力って……。

「暴食、それは七つの大罪の内の一つ。私が使うこれは、不死殺しの魔法だ」

相手の、手が……小さな竜の頭に。

「さぁ、吐け《暴食火塵（ぼうしょくかじん）》」
「うっ……」

竜手を翳し、その口をがぱっと開ける。そして、そこからマグマの様な火炎が覗いた。
だから投擲した。干将も莫耶も、同時に。
だけどあんな剣だけじゃ防げない。だからこその、投擲だ。

「弾けろ《壊れた幻想（ブロークンファンタズム）》」
「ちっ……」

斬魄刀を抜刀。そのまま相手ともう一度対峙する。

「刀ですか？　貴女はまだそれを理解しきれていないのでは？　そんなので勝てるとでも！？　傑作だよ、吸血鬼！！」
「戯言を吐くな、雑種」
「おやおや、怖い」

怖いのはこっちの方だ。お前と戦っていると、自分が自分じゃなくなってしまいそうだ。
気が狂って鬼が狂って忌が狂って……、最っ高の気分だよ。

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　来れ闇の精王　百鬼を従えし地獄の覇者　自らの魂喰らいて光を払う闇を成し　雷纏う薙刀となれ　《雷之闇術（たけのやみずち）》！」
「ふん、その程度の魔法……。――《暴食》。食らってしまいなさい」

相手の手に着いている竜が、まるで意思があるかの様に吠え、その雷を、黒い雷を喰らった。
正直言って理解不能だ。そんなことをすれば体内から感電してしまうはず。なのに、その竜は食らった。何事もない様に、咀嚼し、飲みこんだ。

「暴食はあらゆるものを喰らう。代わりに、制御が困難でね……」

知らない。そんな説明は要らない。すぐ終わらせればいいだけの話だ。

「――投影、開始」

今度は一本の槍を作り出す。呪いの朱槍。因果の逆転。心の臓を潰す為にのみ存在しうる魔槍。

――ゲイ・ボルク。

「ほぅ、これはまた、久しく見ぬ槍だ……。なるほど？　それは本物ではない様ですねぇ……。贋作ですか」

「《突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）》！」

体を弓のように撓らせ、槍を矢のように投擲する。射出と言った方が正しいかもしれないそれは、音速を超えて相手の心臓を狙い、穿ちにかかる。

「《暴食》。これはなかなかに見れないものだ。良く味わえ」

――ガァアアアアアアア。

やはりそれは、意思がある様に、ゲイ・ボルクを食いにかかる。戯けているようにしか思えなかった。あの口ぶりではゲイボルクを知っている。なのに、食らう？　不可能だ。

そう思った。

「バリバリバキンゴキバリッ」

食った。本当に。食らった。

「嘘……」

「嘘なんかじゃありませんよぉ――。ええ、それが本物（オリジナル）なら、この竜の頭を突き破って私の心臓を穿ったでしょうねぇ」

概念の想定がもろかったのか……。

なら、今度は概念の想定を念入りに。

――不可能。

それをさせてくれる暇を与えてくれない。

斬魄刀は名を知らぬ今、ただの刀としか使えない。彼の《暴食》に喰われておしまいだろう。

ならば、できうる限りの魔法。それも、相手の暴食が喰い尽せないほどの、容量オーバーの魔法を使うしかない。

「ラスト・マイル・マイ・マジックスキル・マイスキル　唸れ壊人の一振り　全てを凪払う怒涛の剣撃　闇の精集い来たりて敵を貫け！　《魔法の剣　闇の百七十振り》！」

「ラシュ・タルク　ラブン・ゲルセルク　貴君は大空を統べる支配者！　《暴食》」

十七振りまでが限界だった魔法の剣が、百七十まで増えた。できるか不安だったが、どうやら成功したようだ。安心。

相手の詠唱が聞こえた気がする。でも、あんな詠唱なんか知らない。聞こえない。ただ放つ。

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　怒りの鉄槌　怒涛の吹雪　闇より来たる断罪の刀身　穿て！　《氷剣》！！」

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　来れ闇の精王　百鬼を従えし地獄の覇者　自らの魂喰らいて光を払う闇を成し　雷纏う薙刀となれ！　《雷之闇術（たけのやみずち）》！！」

「ラスト・マイル　マイ・マジックスキル　マイスキル　百重千重と重なりて走れよ稲妻！　《千の雷（キーリプルヲズー）》！！」

全身全霊全力全快の限界突破。自らの魔力量をマイナス値にまで下げる勢い。正に死力を尽くす勢い。更に残った魔力で同時投影（イメージ）の限界である千六百七本の剣。

――投影、終了。

空中待機。

全投影連続層写。

矢のように、空中に待機していた千六百七本の剣が放たれる。それら全てが相手に直撃したのを確認。それが分身体の可能性も否めないが、今のところ相手はそんなものを使っていない。ならば、分

身体である可能性の方が、まだ少ない。故に、刺さった後の始末として告げる。

「《壊れた幻想（ブロークンファンタズム）》」

あらぬ限りの魔力を注ぎ込んだ剣群が一斉に爆発する。とんでもない光と火炎が煙の中から見える。

一般人への対処はきっとおじいちゃんたちがやってくれるはず。

そう思った瞬間、花火が鳴った。

成程、それで誤魔化すのか。

「く、くく」

声が聞こえた。あり得ない。そんな感想が漏れる。だけどもどこか予想はしていた。

宝具レベルの魔力を持つ剣を千六百七本、更にそれらの爆発。魔法の剣を百七十。更に雷系最大規模にして最大威力を持つ対軍掃討魔法。信頼性はないけれどそれなりの威力はあると自負している氷剣、凡そ二十三本。更に威力は相当、切れ味もあり痺の攻撃性、更に純粋な破壊という特性を持つ武具構築魔法。

それら全てを受けて、傷一つないとは思えない。

倒せるとも思えなかったのも、また事実だった。

「《暴食》は、貴女如きに敗れはしない」

翼を。

大きな竜の翼を、盾にしているリングが。

そこにいた。

「貴女のターンは終わった様ですね。では、こちらから行かせてい

ただきましょうか？」

そう言って、リングは翼を広げる。

「ラシュ・タルク　ラブン・ゲルセルク　自然を統べる大精霊　全てを凪殺す大鬼神　汝、我に罰（ちから）を架すべし　されば汝等が代わりに我が全てに罪と罰を与えよう　我が殺し　我が生かし　我が傷つけ　我が癒す　汝こそ我なり」

知らない。

そんな長い詠唱知らない。

魔力が、練られる魔力が、あり得ない量まで到達している。

相手の量翼に二つの、紅い魔力エネルギーが集まっていく。

「《暴食・翼葬刃塵『放』》」

そして、それが放たれた。

紅い魔力エネルギーが一直線に、私に吸い込まれる様に放たれる。

だからこそ、最強の盾をここに為す。右手を翳し、その真名を名乗る。

「投影、開始。《熾天覆う七つの円環（ローアイアス）》！」

本来なら投擲武器にのみその力を発揮する、七つの花弁の盾。

遠距離砲撃なら、その概念である《投擲》に入るはず……。

「くっ……う……」

だけども、花弁はドンドン減っていく。一枚、二枚、三枚、四枚。

残すはあと三枚。

だが、その盾は十分に力を発揮してくれた。相手の攻撃が、止んだ。

「ふう……」

思わず息を吐く。翳してた右手が震える。怖かった。後三枚で、破られてた。

だけども、油断なんかするべきじゃなかった。

「ッ――――」

胸部に、感じたことがない程の痛みが走った。いいや、一度だけ、感じたことがある……。

心臓を、引き抜かれる痛み。

「がっ――はっ――？」

「ふふ、油断しましたねぇ？　いえいえ、最もです。あの魔砲を防がれたのは久しぶりですからねぇ……。あの盾、ローアイアスとか言いましたか？　成程、分かりました。貴女宝具使いでもあるんですねぇ――。いやぁ、これは惜しいことをした。生かしておけば、研究にくらい使えたかもしれないのに！　ああ、悔やまれます、ええ悔やまれますねぇ……。不死殺しの顎（アギト）で心臓を喰い破らなければ！　貴女を実験材料にできたはずなのに！」

声が遠い。いや、そもそも鼓膜が揺れていない。空気が伝わらない。

ぼやけつつある視界で、自分の胸部を眺める。

さっきまでの熾天覆う七つの円環の破片で、服は所々破れてるのが確認できた。それから、胸部への違和感。もう、感覚もない。麻

痺？　それとも、二度も心臓を取られて慣れたのか。痛みは最早無かった。
胸部に生えた、竜の頭。
それが見えた瞬間。どことなく体が軽くなった気がした。重力に縛られず、身体と言う皮袋から魂だけが摘出されたような、妙な爽快感。

そしてボクは、意識を手放した。

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

「ああ――。死んじゃいましたか。やはり、不死殺しの魔術武装なんてするんじゃありませんでしたねェ――。くふふ」

リングは竜の顎を模った手と翼を解除して、手の内にあるイリアの死体を眺める。

「む……。誰かきましたかな」

しかしリングは焦らない。
彼の認識では、魔法使い如き蟻に等しい。

そして、だからこそ、簡単に包囲される。

「貴様、何者――……なんだ……それは……」

リングの真正面に立つガンドルフィーニが驚愕を表す。当たり前だ。彼はイリアを吸血鬼だと思っていた。高音の報告もあって、断

定していた。だと言うのにこれだ。
心臓部からリングの手が生えていて、いや、生えているわけなどでは無い。胸部に開いた穴に手を通しているだけ。しかもその手でだけイリアを支えている。手が動く度に、ぐちゃりという酷くねっとりした音が聞こえる。

「そんな……イリアちゃん……」

瀬流彦はその悲惨な状況に、いつもは細い目を見開かせた。瀬流彦はどこか安心していたのだろう。吸血鬼という真実を知っていたから、イリアは死ぬことがないと。
その顔と、生気の灯らない虚ろな瞳と、より一層白くなった肌を見る。
だが、不死殺しの道具（アイテム）などこの世に百はある。そう、たかだか百。されど百なのだ。そして不死殺しの魔法は、誰でも使えるのだ。タカミチの様に魔法詠唱ができない身でないならの話だが。

「遅かった様ですねぇ、え？　貧弱な魔法使い諸君！」
「誰が貧弱だ！」

ローブを着た魔法生徒が憤怒を見せる。

「貧弱だろ？　こんな小さな吸血鬼でさえも守れぬ者を貧弱と呼ばず何と呼ぶ！」
「なっ……吸血鬼？」
「イリア先生が吸血鬼……」
「高音さんが言ってたことは本当だったんですか……」

騒ぎだす魔法生徒たちに対し、魔法先生達は酷く冷静。

（……やはり、吸血鬼だったのか）

そう考える者たちばかりだった。

死体を見て感情的になってるのはタカミチと瀬流彦等の少数だった。

「くっ……」

「高畑先生、冷静になってください……」

「ですが、瀬流彦先生……」

「僕だって、抑えてるんです。冷静になりましょう」

「……」

それでもタカミチはポケットの中に拳を入れる。瀬流彦も、魔法発動媒体である杖を強く握りしめる。

そこに、ねっとり、或いはねばねばしたという表現がよく似合う声が聞こえた。

「くっくっく。いやはや……怖いですねぇ魔法使いとは。こんな小さな女の子でも吸血鬼だったら見方が変わるんですからねぇ」

「君だって、今こうしてイリアちゃんを……」

「私のこの子への見方は始めから『化物』ですよ」

金髪の男は平然と言う。

「それにしても、呆気なかったですねぇ……。ええ、ええ。もっと手古摺るものと思ってましたが……」

貴族服の袖を赤く染めながら、平然と言っていく。

「彼女、かなり不安定でしたよ？　殺した本人である私が言うのも

変なものですが……、貴方達、この吸血鬼の環境、かなり悪かったんじゃないですか？」

「なにを――」

「彼女のことを思うことと、理解してあげることはまた違いますよ？　理解者は、果たしていたんでしょうかね？」

「……」

「吸血鬼として相談に乗ってくれるものなどいない。それどころか、吸血鬼だとばれた時の皆の反応が怖かったんじゃないですか？　彼女は……、全てを包み隠して生きてきたんじゃないですか？　だからこそ呆気なかった。だからこそ、手古摺らなかった」

魔法使いたちは声にできない。なにも言えない。言うことができない。今がそうじゃないか。イリアが吸血鬼だと分かった瞬間、死んでも当然だと。魔法先生は兎も角、魔法生徒は皆そう思った。

「まぁ、良いです。この死体はお土産にくれてやりますよ」

そう言ってリングはイリアを放り投げる。それを瀬流彦が抱きとめ、冷たくなったイリアを、抱きしめた。そして繰り返す。「ごめん、本当にごめん」と。繰り返して繰り返して……。

タカミチはそんな瀬流彦に肩を置く。その方が上下に動いている。泣いているのだという予想がつくのは容易かった。良く耳を澄ませば、嗚咽だって聞こえてくる。それにまじって、謝罪の声も。

「っふん。化物に涙するとは、怖い怖い……。まぁ、いいです。私はこれで……。超の方にも一応協力関係を結んでいますからねぇ……」

「なっ、超に協力だと!?」

「おや、そちらには反応するんですね。その子の死体を見たときはそんな反応しなかったのに……。ふふ、どうでもいいことですが……

…。では、御機嫌よう、魔法使い諸君」

リングは右手の指を振る。それと同時、空間に亀裂が走る。
そしてリングはどの空間に足を踏み入れ、その紅く染まった手の中からイリアの心臓を放り投げてから消えていった。

その心臓を、必死にタカミチは受け止める。まだ生温かく、心臓の筋肉は動いている。血は既に抜けているようだったが。

「……」

取り残された魔法使いたちはなにも言えず、ただどうすることもできなかった。
多くのロボットと、巨人が海方面から出てくるまでは――。

麻帆良祭・死亡（後書き）

あややや、イリア死んだ！？

てか、イリアこれまでに一度も勝って無くね？

少なくとも俺の記憶にイリアが勝った記憶が一切ない……。

そうそう、タカミチは魔法使えないんでしたね。この浮遊術は符の使用ということで。

麻帆良祭・再

（ネギとネギの仲間たちは別荘にて戦力の総計を取っていた。亜子も一応アーティファクトの確認をした。しかし、いつまで経ってもイリアが別荘の中に入ってこない。それを不審に思ったエヴァと亜子は別荘内で一日経つのを待ち、即座に別荘から出ていった。

だがそこは一週間後。超にはめられて、別荘内の時差をずらされていたのだった。そこで聞かされたのは超の手により魔法が全世界に公開されたと言う事実。それから、イリアの死。まだ死体も燃やされておらず、胸部に穴が開いたイリアを見てしまうのだった。

亜子は泣き、何故別荘に入っていたのかと悔み、エヴァもまた後悔と共にリングへの復讐を燃やしていた。仇を討つと誓って。

そんな時、ネギは『超に対する見込みの甘さ』と『超の責任逃避』から本国へ送り返された上、オコジョにされることになる。

それまでの間、監獄に閉じ込められることとなった。そしてそこで初めて、イリアの死を知らされる。ネギはなんとか監獄から脱出を試みようよ、頑張るも、上手くいかないのだった。そして後は亜子が共にいるということを除けば原作通り！　漫画を読もう！　そんな訳で、ネギ達が過去へ帰れた時から始まります）

～イリアＳｉｄｅ～

麻帆良祭三日目、午前九時。

あ～、なんだかな～。超がどこにもいね～。

もうホント、どうしたものかな～。屋台巡りでもしよっかな～。

「イ、イリア……」

「んにゃ？」

後ろから声を掛けられた。誰？　とか思ったらそこにいるのは何故か泣いてるお兄ちゃん。
泣いてるからか、いつもと微妙に声が違うよ？

「え？　え？　どしたのさお兄ちゃん」
「イリア！」
「うにゃ！」

抱きつかれた。それも地面に倒れる程に。
加減を知りなさいこの馬鹿兄。
あ。
突然のことで頭が回らないからか、言い忘れたから言っとくよ。
なんでさ？

「な、なんなのさお兄ちゃん～～」
「ごめん、でも本当に……良かった……」

むぅ、ダメだ。全然理解出来ないよ。なにがあったのさ～。

それからお兄ちゃんが落ち着くまで数分かかった。後から亜子もやってきてボクを見るやいなやお兄ちゃん以上に涙を流して抱きついてきた。いつもの様なおふざけ感などどこにも無く、本気で会えたことを喜んでいる様な……。
あ～もう訳分から～ん！　誰か台本教えろ～！

「それで、ボク様が死んでいたと……」
「うん……」

落ち着いたお兄ちゃんと亜子から事情を聞き終わった。いや、お兄ちゃんボクの膝で寝てるけど。ちなみにここ図書室っす。ちなみに魔法関係者皆勢揃いっす。

それにしても、なんというか、滅茶苦茶だよ……。ボクがあのリングに殺されるとか……。

超の罠にはめられ、一週間後に行っちゃったお兄ちゃん達は世界樹に残っていた魔力を使ってギリギリで帰って来られたらしい。そのまま倒れそうな体に鞭打ち、お兄ちゃんはボクを探したそうだ。死んだ時間は聞いたらしいけど、実際いつ死んだのか、お兄ちゃんにとっては不確定なのだから当たり前なのかもしれない。もしもう死んでいたら……。そう考えたらしい。馬鹿だな～。ボク様そう簡単に死なないよ……。

そして無茶をした結果がこれ。

カシオペアの大半の魔力はお兄ちゃんの魔力を使ったらしいからね。魔力が底を尽きたらしい。

「ところで千雨ちゃん。いつから魔法を？」

「え、ああ。私は麻帆良武道会で……」

「あー、やっぱそうなんだ」

「でもトドメはそのガキとの会話からでしたけど」

「……あはは」

お兄ちゃん、どんな会話したら魔法使いってばれるのさ？

それより気になるのは、未来で魔法先生たちが言っていた「ロボット」。それは完全に科学の領域。つまり、超。

「……」

なんにしろ、リングという男。ボクを殺したという男。向こうでボクの死体を見た亜子は、心臓を抜き取られていたらしいと言った。嫌だなぁ。また心臓取られるのかぁ。あれってすっっっごく痛いんだけど……。

……。しかもボクを殺した、ということは相手は『対吸血鬼用魔術』を使ってくるはず。

魔法……はどうだろう。気が狂わない限り、あの男相手に魔法で勝負は難しい。

かと言って、投影も難しい。概念や、それらの歴史、全てを完璧に投影するには時間がない。今投影したところで、オリジナルに近いものが相手に効くかも分からない。

斬魄刀……。これが一番相手に近いかもしれない。けれど所詮は復刻品。斬魄刀に必須の『意思』がない。そんな斬魄刀で勝てるとは思えない。

なら、ボク自身の斬魄刀は？

彼等の名前を知るのが、今できる最大限の行動なんじゃないかな……。

「……でも」

お兄ちゃんを放っておくわけにもいかない。ボクを殺させないために、とか、そういう理由でリングと戦いに行っちゃうかもしれない。それだけは、嫌だ……。自己犠牲の精神だけは、止めてほしい。

「ああ、そうか」

アスナに、ネギの様子を見ててもらえばいいんじゃね～？

「アスナ、お兄ちゃんのこと、お願いできるかな」
「うん、任せといて」
親指を立ててグッとして見せる。うん、この場面ではアスナが一番頼れるね。

よし、それじゃあ……。

「刹那、模擬戦お願いできる？」
「……は？」

そこにいるもの全員がポカンとする。まぁ、そりゃそうだよね。このタイミングだもの。でも、このタイミングだからこそ、だよ。

刹那とボクだけ森の中に入る。さすがに森の中まで麻帆良祭！というわけでもないらしく、いつも通りの至って静かな場所だった。

「えっと、それで……模擬戦、ですか……」
「ですですよ」背に背負っている刀を抜きながら言う。「ボク様の持つ刀はちょっと特殊でね？　ああ、いや。特別って言うべきかな～。ま、どっちでもいいんだけど。……意思を持つ刀って信じる？」
「意思を持つ刀……ですか。ええ、魂が宿る妖刀なら幾つか……」

うん、さすが神鳴流。魔を断つ者魔を知れってね。

「この刀は斬魄刀。斬魄刀にはそれぞれ名前があるんだよ。その名前を知るために、模擬戦をしてほしい」
「成程……まぁ、大方事情は分かりました。では、できうる限りで

お相手しましょう」

刹那も太刀『夕凪』を抜刀する。リーチの差は抜群。

「じゃ、行くよ」

「はい、どこからでも」

～ＳｉｄｅＯｕｔ～

鉄と鉄がぶつかり合う音がする。森を抜けた、少し広い場所。そこに、二人の少女が斬り合いをしていた。

一人は日本刀の形をした刀。もう一人は長い大太刀。一見すれば、本気の戦いに見えなくもない。いや、本気だ。二人とも。

本気でなければ、斬魄刀を本当の意味で得ることは不可能。だから、本気だ。

太刀「夕凪」を上段から袈裟懸けに振り下ろす。それをイリアはギリギリで防ぎ、刹那の剣を弾く。弾いた勢いで、今度は脇腹へと剣を横薙ぎ一閃。それを屈むようにしてかわし、イリアは下段からの逆袈裟懸けに振り上げる。刹那は即座に後退。距離を取る。

しかし、すぐに刹那は行動に出る。一度取った距離を瞬動で一気に縮め、イリアの真似をするかのように下段からの振り上げる様に切りつける。これもまた、ギリギリで防ぐものの勢いまでは殺し切れず宙にとばされた。

そして刹那は、真の力を発揮させる。

「神鳴流奥義、百烈桜華斬」

花弁に似た気剣がイリアを襲う。

「う、ああ……！」

目はつぶされないようにと腕をクロスさせて顔を守る。花弁が消えた頃を見つけ、イリアは宙に浮かんだ体を活かし、重力を上乗せした斬撃を繰り出す。刹那はそれを最小限の動きでかわし、イリアの胴を両断するとばかりに切り上げる。イリアは空中で体を曲げ、ギリギリでかわす。

見てる側からすれば、酷く心配させる模擬戦だった。
その内、体のどっかが両断されてしまうのではないか、と。

しかし、遂に終止符を打つような斬撃が刹那から繰り出される。

「斬岩剣！」

横薙ぎ一閃に岩をも切る斬撃をイリアは防ぐ。しかしやはり、勢いは殺し切れない。その小柄な体ごと、吹き飛ばされ、岩に激突した。

「っー……」

「イ、イリア先生……」

刹那は罪悪感に蝕まれる。
それでもイリアは本気で来いと言うのだから、仕方がない。

それから数分間、同じような動きを繰り返し、何回目となるかも

分からない、イリアは樹や岩に激突するのだった。
激突した際に服は破け、白い皮膚は所々割けている。いつの間にやら吸血鬼としての力を完全に封ずることに成功したイリアの怪我の治癒力は人並み。
怪我をすればすぐ治るのが普通となっていたイリアからすると、最早体力に限界が近くなっていた。腕の動きは鈍いし、防御の際の力が極端に弱くなっていた。

～イリアＳｉｄｅ～

今日十九回目の岩との激突。背中の皮が削れてるのが分かる。傷が残ると言うのは、とても懐かしい感覚で……だけどもやっぱり不便だった。

「ぅっ……」
「イリア先生、もう止めましょう。せめて休憩を――」
「ううん、ボクは、大丈夫。死ぬわけにはいかないんだよ……。お兄ちゃんとか、亜子とかエヴァにゃんとかフェイトとか、３－Ａの皆とかを置いて、死ぬのは絶対に嫌。だから、生き残る道として、ボクは――っ！」
『戯けが』
「……あれ、今刹那なんか言った？」
「え、いえ。なにも……」

あれー？　おかしいなー？　ボク様ちゃん頭ぶっ壊れたー？

『敵は一人で君も一人、何を恐れているのだ君は？』

いや、確かに聞こえる。心臓に直接轟かせるような声が。そう、

《彼》の声。

『良く周りを見ろ。そして考えろ。今の状況、彼女は一人だ。あの太刀に意思はない。それは一人と等しい。だが君はどうだね。三人で一人だ。一人で一人と三人で一人。常識的に考えて、勝てぬ道理などない』

……頭がクリアになっていく。心臓に響く声はどこか心を落ち着かせてくれる音色の様だった。

「……そっか、分かった」

「え？」

「ごめんね、貴方達は、ずっとボクの傍にいてくれたのに……。やっと分かったよ」

ボクの独り言に顔をしかめる刹那。

でも、良いと思った。誰に変に見られようとも。ボクは一人で、だけども一人じゃない。孤独じゃあ、ない。

「だから、名を呼ぶよ」

「貴方と」

「貴女と」

「そしてボクの名前だね」

「《我が氷の騎士となり、全てを熔かす光を成せ》」

『叫べ！』『イリア！』

『『我が名は！』』

「――氷月天臨（ひょうげつてんりん）」

氷月天臨。

その名を呼んだ瞬間に、魔力が膨れ上がり、爆破する様な勢いで麻帆良を包み込んでいく。あー、やば。魔法先生とかがきそうだなー……。

ま、それは良いとして。

ボクの手に握られるのは二刀一対の刀。白く、太刀の様に長い、柄に近い所には三つの穴が空いている二つの刀身。柄にはそれぞれに帯がついている。と言っても、二つの刀が繋がっていると言うわけでもないけれど。

右手に持つ刀を一振りしてみる。

ぶぉん、という風を斬る音と共に、ガラスが割れる様な音。見れば地面に氷塊が出現していた。酷く刺々しく、攻撃性を見せていた。

しかしその氷が出現した際の氷の小さな欠片が、太陽に照らされきらきらと輝く。その様は、とても――

「綺麗、ですね……」

そう、綺麗。

「これで、その刀の名前を……？」

「うん、そうだね。ありがと、刹那」

それにしても、氷雪系……だと思ってたけど、少し違う感じ。氷雪系は氷雪系なんだけど……。ふふ、これはなかなか、ボク様には似合わない斬魄刀って訳かな～。

「それじゃ、とりあえずボク様は少し斬魄刀……氷月臨天と対話してから図書室に向かうから、先帰っててくれるかな」

「はい、わかりました。気をつけてくださいね。もしリングと言う

男が来ても……」
「うに、分かってる。気遣いさんきゅー、刹那」
「いえ、では」

刹那は夕凪を鞘に納め、それから足早に森を抜けて言った。
さて、と。

「氷月天臨……か」

氷月天臨を元の一振りの形に戻し、目を瞑って心を落ち着ける。
氷月天臨に意識を傾ける。

「……おい、いつまで目を瞑っているつもりだ？」
「ふえ、あれ？」

なんかいつもと違う違和感。
目を開けると、いつものミルク色の海と漆黒の砂浜。変わった所はない。

「ああ、違和感ならあれね。氷が出現しなかったんじゃない？」
「……あ、確かに」

いつもなら氷が自分の周りに出現していた。その祭の音がまったく聞こえなかった。

「本来ならば、ここは君の心の中だからな。氷が出現する方が、おかしいと言えばおかしいのだろう」

心臓に轟く声。どこか落ち着かせてくれる。安心できる、二人の声。

「それにしても、まったく……」
「ん、どうかした？」
「イリア、君はなにを恐れているのだ？」
「ふえ……」
恐れてって……どゆことよ。

「あのネギとか言う坊主に未来で君が死んだと宣言された時から、心が揺らぎっぱなしだぞ」
「未来で死んだことに不安があるのは分かるけれど、私たちがいるのを忘れないで……」
「……うん、そうだね。ありがとっ、氷月天臨」
「「……」」
なに二人とも微妙ににやけてるのさ……。

「いや、こうして改めて名を呼ばれるのも……」
「なかなかに気恥かしいなーって」
あはは……。なんとなく分かるけどさ……。

「ところで、氷月天臨って、どっちのことを呼べばいいんだろ？」
「ああ、それなら心配は要らん。私が氷月で」「私が天臨よ。まぁ、リンって呼んでくれていいわよ」
氷月とリンか。
オッケイ。それにしても、始解はできた。後は卍解かぁ。

「卍解に関しては、まだまだ修練が必要だぞ。そう簡単に手に入る

とは思わないことだ」
「うにー、分かってるよぅ……」
卍解の力の大きさを知ってるからこそ、分かってる。あれは並大抵のことじゃ手に入らない。ま、ボク様吸血鬼だし。卍解を得るための時間なら五万どころか無限にあるからね。
とにかく、今はこの氷月天臨のことを知っていこう。うん、それがいい。

図書室に戻るとお兄ちゃんは汗を掻きながらも復活していた。しかもなにやら作戦を考えたらしい。この麻帆良祭というとんでもなく滅茶苦茶なイベントに便乗するらしい。
既にオコジョが学園長に頼みに行っているらしい。
初心者用魔法杖と魔法銃を大量に仕入れる様に、と。どれだけ大量に、と言えば……まぁ、軽く千は超えるんじゃないかな。

「もう皆準備に取り掛かってるよ。いいんちょさんにも協力してもらって、麻帆良最終日のゲリラ的特別イベントってことにしてもらってる。チラシも配ってるし、皆が怪我しない様に耐久性優れたローブも支給してもらってるよ」
「にしても、お兄ちゃん思い切ったね」
「え？」
「だって麻帆良全体の人まで利用するなんて、前までのお兄ちゃんなら考えないでしょ。ううん、考えても口には出さなかったね」
「……イリアが」お兄ちゃんは少し間を置いてから、ボクの顔を見て言った。「イリアが死ぬのは、本当に嫌、だから……」

……。

「うん、ありがと……お兄ちゃん」

お兄ちゃんの頬に軽く唇を宛がってから（つまり軽いキス）、無理矢理にソファに押し倒す。

「え、ちょ……イリア！？」

「まだ魔力溜まってないでしょ。ダメだよ、無茶しちゃ。だから、ちょっとだけ分けてあげる」

「イ、イリア！？　んん！！」

お兄ちゃんの唇に自分の唇を重ねる。アーティファクトを持たない人同士の魔力供給で最も効率的に供給できる方法だ。精霊を通して魔力を供給させるのは少し手間が掛かるからね。

でもお兄ちゃん、唇固く閉じすぎ……。これじゃあ魔力が少ししか供給されないよ。ううむ、不本意だけど、あれをやりますか～。

「ん――――！！！」

舌をぐいぐいっとぉ……入らない……。どんだけ固く閉じてるのさ……。そして騒ぎ過ぎ。

「ぷはっ、ちょっとお兄ちゃん、口開けてよ！」

「そ、そんなこと言われても！　突然なにしてるのさイリア！」

「なにって、魔力供給だよ……」

「え、ああ……そう、ですか……」何故敬語。

「とにかく口開けて！　魔力が供給できないよぅ！」

「え……でで、でも……」

「いいから口を開けなさーい！」

無理矢理に口を開かせてその口に自分の口を重ねる。今度こそ魔力供給。しっかりとお兄ちゃんに自分の魔力を蓄積させていく。

「な、なな……な……」

「んにゃ？」

「ぷはっ……」

口を話した瞬間お兄ちゃんがぶっ倒れた。なんか「兄妹なのに」とか「うあー……」とか言ってるけど気にしない。それよりも気にするべき図書室の外。さっきから誰かが覗いてる。誰だろ？

「……波動の一《衝》」

「「のわあ！？」」

あ、やっぱりいた♪

「なにすんだ！　殺す気かアンタ！」「そうっすよイリアの姐さん！　後少しずれてたらドアぶち抜いてオレたち死んでたっすよ！？」

いや、まず破道の一にドアをぶち抜く程の威力ないから……。あれはあくまで衝撃波だよ？

「ふぃーん、覗いてた千雨ちゃんとオコジョが悪いんだよ～ん。んで、なにしてたのさ？」

「それはこっちのセリフだー！」うがーって感じに千雨ちゃんがボクに言い寄ってきた。「唯一の常識人だったアンタが兄相手になにやってんだー！」

「いや、まず子供先生ってあたりで既に常識じゃないから」
「的確に突っ込まれた!?　しかも反論できねえええ!」

なんかもう発狂って感じだね～。
うん、なんていうか……ご愁傷さま。

「ってちょっとまて、なにその……なんていうだっけ？　アレだ。あのー、合掌！　そうだ合掌、ってなんで合掌してんだ！」
「いや、狂っちゃった人には合掌するのが日本の礼儀だと聞きましたので」
「そんな礼儀など存在するか！　どこの宗教だどこの！　日本には思想の自由ってのがあんだよ！」
「つまり狂ってる人を見たら合掌しただめと……？」
「合掌すんな！　変な人間を信仰してる馬鹿みたいに見てるぞ。てか狂ってる!?　私がか!?」

頭を抱えてうがーって嘆いている人はアニメで無い限り狂ってるようにしか見えないと思うよ？

「あーもういい。それより大事なのは今のお前ら二人の行動だ！子供な上に強大なアンタ等がキスを！　しかもディープキスをしてんだ!!」
「外国では常識デス」
「突然のカタコト!?」

いやー、千雨ちゃん良く突っ込んでくれるなー。喉潰れそうな勢いだなー。

「ああもうなんだかなー……」
「ここで正解を言うと単なる魔力供給だよ。ボク様が好きな異性は

……結構いるか。うん、愛してるのはフェイトだけだからね～」
「フェイトって誰だ……」

あ、ちょっと喋りすぎたかな？
ま、いいけどさ。

「だから、今のはふしだら且つえっちぃことではありません。オッケイ？」
「ノー！　全力で否定させてもらう！　魔力供給なら仮契約とかでも……ってあれはあれでキスするんだった！　だめだこりゃ！」

もうホントにアレだね。千雨ちゃん、ご愁傷さま。

「だから合掌するなあああああああ！！」

と言うわけでお兄ちゃんとオコジョ置き去りの漫才が行われた訳で……。

「なんで私がこんなガキと……」
「まぁまぁ姐さん。ネギの兄貴にぶちゅーっと」

いつの間にやら千雨ちゃんとお兄ちゃんが仮契約するという話になってた。

「千雨ちゃん、キスするときにはニョロッと舌を入れるのがコツだよ」
「オッケイ、分かった……って誰がこんなガキにディープキスをするか！」

千雨ちゃん、ノリ突っ込みもできるなんて、なんていい子なんでしょう。

んで、仮契約成立。お兄ちゃんって結構キスしてるくせに結構初々しいよね。なんでだろ。

「で、首尾はどうでした？」

「ん？　ああ、このエロオコジョが悪オコジョになって学園長を脅してなんとか信じて貰ったよ」

心底つまらなそうに言う。実際つまらないのだろうけどさ。

それにしても未だ実感湧かないな～。これからボク様が死んじゃうなんて。ま、今ではボクも死にはしないだろうけど。

あれ、でも向こうにいたボクも斬魄刀の名前を知ってたら……。

思考停止。

不安要素は取り除こう。じゃなきゃ心にムラができる。ムラムラ～。

「そういえば千雨ちゃんとオコジョが学園長に知らせたのは分かったけど、皆はどこに行ったの？」

「オレッち達は伝えただけじゃなくてこちらの戦力になる耐久性に優れたローブと魔法発動媒体も二千五百セット空輸してもらうようにお願いしたんだぜ！」

え、なにこのオコジョ。自己主張激しすぎ。

ま、いいか。偶には甘やかさないとね～。

「うんうん、良くやったよオコジョ～」千雨の肩に乗ってたオコジョを両手で抱えてから、抱く様にして右手で頭をな～でな～で。
「……あふ」

なにさ、その反応……。あ、でも目を細めてれば可愛いかも。普通の小動物じゃん。
これで性格がおっさんじゃなければ尚更ね……。

「で、後は……」
「今さっきまで大体の人がここにいたんだけど、今は皆チラシ配りしてるよ。長瀬さんとか刹那さんには護衛に務めてもらってるけど」

チラシって……。
ああ、そうか。ゲリラ的イベントってことになってんだっけ。確かにあのクラスのメンバーは良いチラシ配りになるよね。可愛いし美人だしで。

「あ、そうそう。イリアもこのイベントに参加してもらう手筈になってるよ。ヒーローユニットとしてね。他の魔法関連者の皆さんも参加することになってる。……それと、イリアはなるべく他の魔法先生の近くにいてほしい、かな。例えば瀬流彦先生とか」
「……うん、ありがとっ。お兄ちゃん」

恐らくお兄ちゃんなりに心配はしているのだろう。ボクがこのイベントに参加するのも不本意かもしれない。現にお兄ちゃんの顔は微妙に心配そうな……ボクの気の所為かな？　ま、いいけどさ。

「大変ですネギ先生！」

お兄ちゃんと見つめ合う形で沈黙してた時、突然夕映が図書室に

入ってきた。それはもう凄い勢いで。

「あ、イリア先生も帰ってきてたですか、良かったです」

「うにゃ、それよりなにかあったの？」

「はい、超さんが操ると思われるロボットの集団が海の方面から押し寄せてきたと！」

空気が重くなった気がした。

麻帆良祭・再（後書き）

っちゅーことでイリア復☆活。

イリアの斬魄刀の名前が判明しましたなー。

二刀一対の斬魄刀。能力はこれからだんだんと、徐々に明らかにしていきます。

手抜き乙とか言わないの。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6524v/

ネギま！　～イリア・スプリングフィールド～

2011年10月17日21時36分発行